

吾妻錦繪の考

東都第一の名産として他郷の者江戸より歸るには江戸繪と云て必ず是を求る事となれり世俗之を一枚繪といふ先に山東醒世翁曰延寶天和の比の一枚繪といふ物を藏せる人ありてみるに西の内といふ紙一枚ほどの大ききありておほくは武者繪にて丹緑青黄土をもてところまたらに色どり大津繪の今少し不手ぎはなる物なり畫はみな上古の土佐風にて甚よし畫者の名はしるさずもとより歌舞伎役者遊女の類ひの姿をかゝす元祿のはじめより役者の姿をかきはじむ丹と柿といふものにて色どれり江戸眞砂子六十帖に云元祿八九年の頃元祖團十郎鐘旭に扮すその容を畫き刻て街に賣る價錢五文是より役者一枚繪と稱するもの數種を刻すと云寶永正徳の比迄専らにあり享保のはじめ同朋町和泉屋權四郎といふ者紅彩色の繪を賣はじむ是を紅繪と云夫より色々々に工夫して墨の上にかわをぬり金泥などを用ひてうるし繪と云て大に行る寛延の比より彩色を板刻にする事をはじめて紅藍黃三遍摺なり明和のはじめ吾妻錦繪といふもの出

來始て今に至りますく花美を盡せり或人云寛文の比は板刻繪なし大津繪の如く種々の武者繪をかき畫にしてうりぬ板刻になりしは延寶の比がはじめなるよししかるやいなやをしらす享和壬戌冬十月記とあり(山東京傳が蜀山人所藏の浮世繪類考校訂の追考の卷末に於て送りしものなり)板刻の畫は寛延の比より起りて天保の今に至る迄八十餘年のものなりとおぼゆ亦摺込の彩色繪多くありしと云へり上方にては今も多し錦繪の精巧天明寛政の比迄は京大坂にては等閑のものなかりしに今は江戸にも勝れて佳製多くなりぬ寛政の始めより金銀銅粉雲母入の彩色摺りをはじめしより後正面摺きめ出し等の工風をなせり近比狂歌春興の摺物に美を盡し春毎に互におとらじとて寫眞摺無地金摺などを製しければ再應是を禁じられたり是より江戸賣買の錦繪に金摺りは止みたり

按ずるに寶曆明和の比は今切繪と云てみよし四ツ切りの三遍摺の繪有是等の類ひ成べし且は後大奉書摺となりし奉書二ツ切を大錦と云今は大奉書中奉書は不用イヨマサと云紙を用ひ合にしきも最上

紙を用ひ伊豫奉書二ツ切を合錦と云へりみよし二ツ切を小合錦と云大錦二ツ切は中錦合錦二切は中合と云伊豫奉書堅四ツ切をきめと云其外種々の紙數品國産の紙を(國紙と云)用ひて様々の唱へありといへり

草双紙も文化の比より錦繪の表紙となりて合巻といふものになりぬ正徳享保の頃赤本と云紙數五枚位綴たるは唐紙の表紙なりしを赤く染たる紙になりたり是を赤本と云夫より萌黄色の表紙となせしを青本と呼ぶ其後黄表紙となりしを青本といふなり天明寛政の比こんにやく本とてすきかへしのととき色の薄紙表紙を付半紙すりにて袋入にしたる草双紙ありし是より今の畫表紙の合巻を製本せしものなり(今吉原細見五葉の松の製本のみに其舛裁を改めず)

按ずるに赤本と云ひしは金平本と云紀逸が黄昏日記に曰元祿年間の板なり岡清兵衛は金平本の作者なりと有り夫より後西遊記を譯せし桃太郎宇治拾遺の物語より舌切雀花咲爺の一期榮えし昔晰しを作り童蒙の弄と變し赤本とはなりけん其後還魂紙五枚ツ、綴て價を六文に賣りし黄表紙となりし比

は三四へん摺の繪を切て表題に張しか享和の年間に價十文ツ、になりたり此比迄は昔晰又は目出度作りし草双紙なりしが京傳の滑稽行はれて年毎に奇をあらそひ童の目をよろこばせんとて徹討の物語となり前後篇を望しより一年二年と篇を次ぐことになりて染表紙のうへに錦繪を切抜て張りけり此頃より半紙摺となり或はスニコと云紙にて製す夫より表紙一面の繪をはりまた是を錦繪の摺付表紙となせしなり(板元江見屋の工風より繪表紙の合巻となれり文化のはじめなり)是よりいつとなく草双紙の名は廢れて合巻とのみ呼び來れり近世は道中双六もさまざまに工風し美を盡し千代紙白粉齒磨の袋まで錦繪摺にならぬはなし美麗を盡すの限りといふべきものなり

○岩佐又兵衛 土佐又兵衛

姓藤原 荒木氏 越前之産也 (一説ニ

攝津ニ住ル據有レハ姑ク越前ニ從フ) 父は荒木攝津守村重と云織田信長に仕て軍功あり公

賞して攝津を興ふ後公命に背て自殺す又兵衛時十二歳乳母懷て本願寺の子院に隠れ母方の氏を假て岩佐と稱す成人の後織田信雄に仕ふ畫圖を好て一家をなす能當時の風俗を寫すを以て世人呼て浮世又兵衛と云、世に又平と云は誤也畫所預家に畧傳あり好古目録秀吉信長の使として荒木村重か有園の城に來る河原林治冬秀吉を殺と云しとて秀吉脇差を引出物として是を稱す天正元年四月信玄卒し義照公信長と不和に成將軍家譜代の臣細川藤高茨木の城主荒木村重兩人佐久間信盛に寄て信長に降參す岐阜の城にて對面の時信長刀の切先に饅頭ニツツつらぬき我芳志なりと指出し給ふ村重大の口をあき切先の饅頭を一ツ口に以上類考に無之也くはんとす信長笑ひ給ひ其後攝津を興ふ藤貞幹の好古目録に見ゆ按するに是世にはゆる浮世繪のはじめなるべし又大津畫も此人の書いだせるなりといふ(杏花園藏以上浮世繪類考)鎌倉公方持氏時氏の比常陸國小栗の城主小栗判官兼氏譏者の爲に身を亡し浪々老老の後畫工となり小栗宗丹といふ五代目の小栗大六東照宮御在世の時仕へ奉る御使番を勤る秀康公へ御付人に相成領知二万石にて越前家家老相勤る小栗

美作守正矩是なり始め五郎左衛門と云
追考曰按るに一蝶か四季の畫の跋に越前の産としるしたるを見れば越前において成人せしと覺ゆ名字は知る人なかりしにやたしかにしるしたる物を見ず又兵衛が父荒木攝津守名は村重家士に重郷(姓氏不詳)といふ者あり俗稱久藏後に内膳と改め一翁と號す狩野松榮直信の長子兄祐雪宗信の養子門人にて畫をよくす一説に又兵衛はじめ此人を師として畫を學ぶ後に土佐光信の(明應の人)畫風に倣て一家をなせり世に光信の門人と云は誤なり時代同じくすと云しかるやいなやをしらず(以上追考山東京傳の考)
岩佐又兵衛は姓氏實に未詳といへり見聞せし處繪の土佐流の名手なり花鳥人物に彩色筆意の絶妙奇と云ふべし就中浮世人物に妙あり土佐流にて浮世の人物をさして雜人形雜人物浮世の人物或は武者人形大和人物なりとの唱へあり土佐守門弟なりと云(口口年間の人なり)故有て姑く勘氣を蒙り流浪して畫を以て渡世とす(今云町繪師の如くなるべし)從來名を好まず業をほこらず何くれとなく人の求むるに應じて

畫くといへども妙手なれば自ら世に唱用られしと云へり土佐流破門の弟子なればとて今に至る迄又兵衛の畫に土佐家より鑑定せず極メを不出添手紙のみなり是を折紙とす禁裏御所預りは土佐流なり將軍家にて狩野氏の畫を用給ふが如し故ありて爰にしるしがたし前後名流の遺話甚多かるべし姑く爰に闕くあらましを記すのみ

土佐流紀金若仁明帝比

相覽一弘高

公望

金高

隆信 正四位下 歌人

永承之頃狩野岡ト云者ア信實 從五位下 藤隆

親 中務少輔 行智

伊豫守

長隆 建治年中 從五位上

長章 越前權守 光忠

土佐氏祖

經隆 從五位下 土佐 行光 越前守 光重 行光子 廣周 土佐守 繪所

正忠 永享中

借實 末裔 光信ヨリ土佐氏ノ和書中興ス元信モ門文ヲ

人 光重子 大和 齋ノ衛法ヲ受光信ヨリ譜代土佐守ニ任ス明應年

間ノ光信 繪所中興 光茂 右近將監 刑部大輔

人 光信 刑部大輔 廣周子 光茂 土佐守 光信子 光持 慶長年中

光高 將監

女子 古右京繪所將監狩野光信妻

秀吉公仕慶長年中人

女子 古法眼 玉川狩野元信妻 善齋

古法眼 文明八年生 永祿二年卒

京部繪所預り代々土佐守ニ任シテ今土佐將監迄累代相續將軍

元名翁隨筆

百九十三

家ニテモ土佐流分家江戸ニ住ス住吉内記板谷桂舟是也
又兵衛が畫に名印有る物は究て少し遊女の畫などに墨肉にて字體分明ならぬ印有も多し世を送るたづきとせしのみなる生質是にてたしかなり當世の人虚名をむさぼり己れが未熟にて及がたきには代筆にても名を顯し唯花押の立派を第一として我物顔にほこる愚昧の輩に反する事おのづから名人の所爲備れる所の妙と云へし

○大津又平 大津畫一説 追分畫ト云 按るに元祿三年の板の東海道分間繪圖に大津大谷邊佛畫いろ／＼ありと記すむかし佛畫を専ら書きて今の如き戲畫は其傍飛州山中に毛坊主と云有り俗牀にて常には農業木樵し人死れば導師となりて是を葬と本尊は石地藏或は十三佛なりと本朝俗諺志に見ゆ予大津畫の閑麗并觀音を藏すとも古畫也
大津繪の筆のはしめや何佛 はせを
今も佛畫を彼地に賣れども大津繪の畫風にあらず常の佛畫を板刻し彩色したる物なり本朝文鑑に曰浮世又兵衛は大津繪の元祖と云此說普く人口にはあれどたしかなる證なし古き淨瑠璃に傾城反魂香と云に土

佐の末弟浮世又平重興と云者大津に住て書をかきたるよしをつくれり是よりしてますます虚説を傳ふ或説に大津又平と云者ありてかきはじむ享保の頃まで其子孫ありしと云々予大津の古畫奴の鎗を抱たる圖を藏す八十八歳又平久吉とかきて花押あり古雅なるものなり彼又平か子孫の畫か貞享四年板好色旅日記に大津追分やつこ鎗持の勢ひのなき書をうる大谷云々鎗持の畫もふるきものと見ゆ大津畫も浮世繪に類し且浮世又兵衛がことを辨へんが爲に之を記す

當世又兵衛 名を似せたるものなるべし
同 半兵衛 按るに吉田半兵衛なるべし

元祿五年板買物調方三合集覽に京にて當世繪かく九太町西洞院古又兵衛とあり是等も岩佐又兵衛が名を似せたる物なるべし又是にならばせて四條通御旅所のうしろ半兵衛とあり是等も京の浮世繪師也(以上浮世繪類考追考山東庵考證杏花園藏書)

○菱川師宣 正保ノ生レ慶安ハ明暦寛文運寶天和貞享元祿寶永正徳中没ス七十餘
姓藤原一説日本繪師菱川氏俗稱吉兵衛後剃髮して友竹と云安房國平群郡保田

町の産也
吉兵衛師宣は若年の時より江戸に移り居して縫箔師を業とす後書を 門に入て學び後一家をなせり浮世繪に妙手なり亦板下書を多くかけり浮世板下畫の始祖と云へし後剃髮して友竹と云村松町二丁目に住す(△土佐流と云は非なり其畫風に倣てかけり東西と云の類なり)
傾城遊女をよく寫せり彫刻の畫本多し(浮世繪類考山東庵追考也)

菱川師宣傳并系圖

菱川吉兵衛師宣剃髮して友竹と稱す初めて縫箔を以て業とし上繪と云ものより書を書きならひて後一家をなせり英一蝶と時を同うすといへとも十年ばかり前立て世に行る按るに師宣は土佐の畫風を好んで浮世又兵衛(岩佐氏)が筆意に倣て一家をなせり一蝶は狩野家の筆意を以て一家を成せり共に近世の名畫なり一蝶わかへりし時師宣が畫風をしたひしことは四季の畫跋(一蝶の部にし出せり)と云ものに岩佐菱川が上にたへん事を思ひてみづからかけるを以て證とすべし師宣もつばら印本の板下と云物を畫て板刻の繪

多し他國の人江戸繪と稱して板刻の繪を翫ふは此人に起れり
「みなし栗」に

山城の吉彌むすびも松にこそ 其角
菱川やうの吾妻係 嵐雪

みなし栗は天和三年の板なり此比さばかりに行たるを見るべし

菱川氏系圖

藤原姓 菱川七右衛門 房州平群郡保田町住

菱川吉左衛門道茂入道光竹 寛文二年二月十五日没ス 房州平群郡保田町住
家業縫箔其業精妙也

實子 菱川吉兵衛師宣入道友竹 浮世畫ノ祖始テ縫箔師後以畫名爲一家

房州平群郡保田町ノ産若年ノ時江戸ニ移リ居ス 正徳年中江戸ニオイテ没ス享年七十餘
居所ヲ考ルニ貞享四年板江戸鹿子ニ村松町二丁目元祿二年板江戸圖鑑及同五年板買物調方三合集覽ニ桶町トアリ一説堺町横町又大傳馬町二丁目ト云是等轉宅ノ處ナルヘシ

二男 同正之丞

町の産也

吉兵衛師宣は若年の時より江戸に移り居して縫箔師を業とす後書を 門に入て學び後一家をなせり浮世繪に妙手なり亦板下書を多くかけり浮世板下畫の始祖と云へし後剃髮して友竹と云村松町二丁目に住す(△土佐流と云は非なり其畫風に倣てかけり東西と云の類なり)
傾城遊女をよく寫せり彫刻の畫本多し(浮世繪類考山東庵追考也)

菱川師宣傳并系圖

菱川吉兵衛師宣剃髮して友竹と稱す初めて縫箔を以て業とし上繪と云ものより書を書きならひて後一家をなせり英一蝶と時を同うすといへとも十年ばかり前立て世に行る按るに師宣は土佐の畫風を好んで浮世又兵衛(岩佐氏)が筆意に倣て一家をなせり一蝶は狩野家の筆意を以て一家を成せり共に近世の名畫なり一蝶わかへりし時師宣が畫風をしたひしことは四季の畫跋(一蝶の部にし出せり)と云ものに岩佐菱川が上にたへん事を思ひてみづからかけるを以て證とすべし師宣もつばら印本の板下と云物を畫て板刻の繪

門人 菱川政信 字守節 畫風ハヨク師ニ似タリ

門人 菱川友房 畫風ハ似テ筆ヲトレリ

門人 古山太郎兵衛師重 江戸長谷川町ニ住ス元祿中ノ人 圖鑑ニ見ユ三合集覽ニ菱川太郎兵衛トアリ古山ハ本姓ナルヘシ

古山新九郎師政 享保中ノ人 江市屋長屋兩國米澤町ニ住ス 稱文誌
此人ニ至テ菱川ノ畫風ヲ失フト世事談ニ見ユ

實子 菱川吉兵衛師房 始吉左衛門ト稱ス鹿子及圖鑑三合集覽等ニ吉左衛門トアリ父師宣ト同居始畫師後縫箔ヲ業トス

二男 沖之丞師永 鹿子及圖鑑ニ作之丞トアリ一説ニ酒造之丞ト云

同 佐次兵衛重喜 家業縫箔

同 彌右衛門

師宣ノ血脈六代目ニ至リテ絶ス今養子ヲ以テ家ヲ續房州保田町ニ在リ是七代目ナリ女子他ニ嫁シ生ル血脈ノ者同所他家ニハ有ト云

房州保田村林海山別願院境内ニ在ル

周廻七尺厚二寸五分
洪鐘一口 口二尺二寸五分
長サ三尺五寸

寄進施主

菱川吉兵衛尉藤原師宣入道友竹

元祿七甲戌歲五月吉日 繪字如上、予打本一紙ヲ納ム

以上房州保田町醫師澁谷元龍に問て其實を記す

元龍は菱川の親族なり(以上京傳類考追考)

杏花園藏浮世繪類考曰菱川吉兵衛師宣大和繪師又日

本畫師とも稱す房州の人也

繪本師宣筆

勇士ちから草三冊 貞享二年板 大傳馬町三丁目

和國百女三冊 元祿八年板 鱗形屋開板

やまとの大寄一冊

畫本大和墨三冊

月次の遊び二冊 元祿四年板

戀のみなみ一冊 此頃の板刻數本あり

其外天和貞享の頃の板本多し貞享四年の板江戸鹿子

に 浮世繪師菱川吉兵衛

同 吉左衛門

元祿二巳年板江戸圖鑑に

浮世繪師

橋町菱川吉兵衛師宣

長谷川町古山太郎兵衛師重

通油 杉村治兵衛正高

同所同吉左衛門師房

淺草戸川伊左衛門俊之

橋町菱川作之丞師永

天保四年板まぐら大全に菱川吉兵衛師宣とあり

訓蒙圖彙原板は貞享三年吉田半兵衛畫再板は師宣畫

床談儀○艶書軌範○旅葛籠○色双子○近世大よ

せ共に師宣畫なりとしかるやいなや未見

貞享元祿の頃板元江戸大傳馬町二丁目鱗形屋(吉左

衛門彌兵衛)今馬喰町西村與八なり

元祿五年板買物調方集覽(横切本一冊)

江戸浮世繪師菱川吉兵衛 同吉左衛門 同太郎

兵衛

三馬曰元祿十年板國家万葉記(七ノ下に)

大和繪師菱川吉兵衛 同吉左衛門 同吉左衛門

同 作兵衛 村松町二丁目

如斯出たり

按るに井澤長秀が俗説辨に國史を引て大和繪師は倭

畫師と猥りに稱すべからざることを述べたり

俗説辨に曰俗間の畫師みだりに倭畫師とかく

者あり倭畫師は姓なり

續日本紀曰靈龜元乙巳年從六位下江見が姓を

更爲倭畫師とあるをみるべしみだりに書べか

らす

○英一蝶 一蝶ノ傳簡書ニ記スチ見ルニ誤リ多シ浮世繪師宣ガ繪風ニ出タル事モ見ユレバ暫ク浮世畫ニ列ス

姓藤原 多賀氏(一英氏ト云母ノ姓花

房ト云)攝州大坂の人也俗稱助之進父

ハ醫師也十五歳の時江戸に來り狩野安

信(古右京養子探幽尙信常信安信續慶

安正徳の人)門人となる名は信香一に

安雄始め多賀朝湖と云後に英一蝶と改

め一家をなす書畫ともに能す風流の秀

才子也

號翠裝翁(一裝翠ト云ハ誤ナリ)牛丸

(幼名ト云ハ非ナリ)曉雲(俳僧ノ名也

曉雲堂トモ云)舊草堂一峰閑人(後ニ門

人ニユヅル)隣樵庵鄰濤庵北窓翁等の

數號アリ

傳に曰一蝶は親に孝なりし人と云り俳諧は芭蕉翁の

門人にして其角嵐雪等と友なり名を曉雲和央二に作

和應と云しは花街に於て呼し名なりと云り元祿十二

年十二月(八年とするは誤なり)吳服町一丁目新道に

居住の時故有て謫せらる時に歲四十七歳謫居にある

事十二年寶永二年九月(四年とするは非なり)歸朝せ

り其後英(一説花房とす母の姓なりと云)一蝶と稱し

北窓翁と號す享保九年甲辰正月十三日歿す行年七十

三歳麻布二本板日蓮宗承教寺塔中顯乘院に葬る

辭世

まさらかすうき世の業の色とりも

ありとや月の薄墨の空 一蝶

一蝶に老母一人あり剃髮して妙壽と云一蝶八丈島に

配流せられて後一蝶が友宗珉が家にやしなはる宗珉

俗稱横谷次兵衛檜物町に住す正徳三巳年三月三十日

没す顯乘院に葬す(以上類考追考京傳が記)

一説に曰一蝶配流せられ老母を養ふ親族なし官舎

へ此事を願ひ謫居より畫を賣事を救せられて其價

を以母を養ふ島一蝶と云は是なりと云未詳(誤なら

んか横谷宗珉へ誦居の圖を母に見せ度送りしは私
のことなりひさぐべき畫の中へ入て送りたると思
へば是とするどころもあり)

嵐雪撰其袋(元祿三年板一蝶句あり)

花に來てあはせ羽折の盛かな

曉雲

朝寐して櫻にとまれ四日の雛

同

高橋谷藏

英一蝶 七十三 承應元年生ル明曆万治寛文延寶天和貞享
元祿寶永正徳享保元年歿ス

二代目實子

一蝶名信勝 一説二代目一蝶ハ八丈島ニテ出生ス故ニアフ

一蝶俗稱長八 時共ニ江戸ニ具シタリ之ヲ島一蝶ト云ト

二男 俗稱多賀百松

一蝶後 源門ト云

一舟

一舟男

一舟ハ門人ナリ養子トナリテ師家ヲ繼名信種號東齋翁
俗稱彌三郎明和五年(月ナ脱ス)廿七日歿ス顯乘院ニ葬ル

門人 一水 一蝶晩年ノ門人

門人 一蜂 號春窓翁

門人 一蝶 號一雄

門人 一蝶 號一雄

門人 一蝶 號一雄

門人 一蝶 號一雄

門人 一蝶 號一雄

高橋宣信

宣カ

一蝶の畫鑒定するに狩野安信の門人なれども狩野
氏にて是をせず骨董畫といやしめて不用町畫とな
りしゆゑなり土佐の又兵衛是に同じ

或書に曰元祿の比五代將軍綱吉公(常憲院殿ト申ス
寶永六年薨去)好色に耽らせ給ひ吹上御庭にて御遊
興に美を盡し給ふ第一の御寵愛にて五の丸お傳の方
と申君の御心に叶ひける(阿傳の方は至極小身の十
五俵一人扶持黒鍬組白須才兵衛娘なり后年に至り御
旗本に昇進して一度朝散大夫白須遠江守に任せられ
たり)此お傳の方小鼓の上手にて公御諸遊せば御側
にて一調を打つ或時は吹上御庭の池に舟を浮め公は
棹さし給へばお傳の方は鼓をしらべ公御諸遊しつゝ
棹さし御樂遊す是平日のことにて不知人はなし其比
多賀朝湖と云畫師百人女臚と云繪を書て貴賤の姿畫
を寫し其中に世上専ら風間故舟中に鼓を打棹し諸給
ふありさまをうつくしく書たり此事誰か公に訴奉り
けん立所に奉行所より召捕れ入牢す罪の表は朝湖御
制禁の殺生を好み鳥を取魚を釣ける御咎に遠流仰付
られける朝湖願に寄配處へ繪具持參御免被仰配所
にて一子を設けしを島一蝶と云后御赦免ありけり百

人女臚の内お傳の方舟遊びの躰至極の出來にて御咎

に逢しは其業に依て刑せらるゝ事本意にも近かるべ
しと憂ふる色もなかりしとなり百人女臚の繪は我心
にもいみしく出來しとおもひしが圖を書改めたり今
は十が七八は傳へず英一蝶と名を改淺妻船と云繪を
書り鼓を持舞裝束の白拍子船に乗たるは以前の圖を
やつせしものなり當時英一蝶など専ら此圖を畫く
一蝶淺草寺境内にて千幅繪を書し時人々是を好み
けるとかや

或書に於傳の方實父白砂才兵衛甲州士甲賀同心三十
俵二人扶持新地千石に召出さる甲賀與力小山田彌市
才兵衛にいこん有て討はたし行衛しれず五の丸様御
歎に付御威光を以て下總龍ヶ崎にて召捕江戸中引廻
しの上品川にて傑に掛られたり才兵衛改易となり五
の丸様御願にて美濃八幡の城主遠藤右松早世にて斷
絶す才兵衛實子御取立にて双方家名相立新地一万石
にて江州三上城主遠藤主膳正胤親と名乗る 窓のす
さみに曰山田彌七郎と有り(此書ニ寶曆七年トアリ)
讚に云あだしあだ波よせてはかへる浪淺妻船のあさ
からの嗚呼またの夜は誰に契りをかはせて色を枕は

づかしうらみがちなるわが床の山

後水尾院御製

今宵寐ぬ淺妻船のあさからぬ

契りをたれにまたかはすらん
讚の趣異り隆達が破れすげ笠しめ緒のかつら永く傳
り有る是から見ればあふみのやあだしあだなみよせ
てはかへすなみあゝまたの日はたれに契りをかはせ
て色を枕はづかしよしそれとも世の中うらみがち
なる我床の山と有り世にしる所なり

此英一蝶の百人女臚の繪をもとして後洛陽の西川
祐信と云浮世繪師百人女臚品さだめと云好色本を書
きけるとぞ以上
近代繪事之巧莫北窓翁若焉其氣象之豪放筆力之道勁
足以追蹤於古名人而新奇洒落其所獨得者也翁姓多賀
氏諱信香一名朝湖又有曉雲翠裝隣樵等之別號考曰白
庵諱某京師人也翁幼遊江戸某侯嘗愛其穎悟使之學畫
於牧心齋先生居久之盡得其筆法時又戲傲岩佐重起菱
川師信而畫時世風俗有春蠶吐絲雲行水流之姿而翁之
名籍甚元祿中坐事配流三宅島
因曰一蝶は小歌の作なども多く自畫贊の句枚擧す

べからず松の葉(元祿十六年の板行小唄を集たるものなり)しのゝめと云小唄は一蝶の作也洞房語園にはみじか夜の早唄(一名)かやつり草と號て是をのせたり淺妻舟の賛も其比節を付てうたひけるにや松の葉(後篇を松の落葉と云)の端歌の部に載たり寶永の比吉原つれく草と云物にかやつり草の朝潮が歌こそ又あはれなる事おほかめれ云々或説に一蝶聲よくて小唄をうたひけるよし老人になりても紀國や文左衛門などに付て廊中にのみ暮したるとなれば左も有べし三谷何某が藏する所一蝶八丈島(一本に三宅島)に在りて母の元へ謫居の趣をこまかに書き送り越したる物有り横谷宗珉の家にのこりしものなりとそ(以上追考説)

英一蝶四季之繪跋

夫大和書はそのかみ土佐刑部太輔光信がすさみに堂上のうやゝ敷より田家のふつかなるさま岩木のたゝすまひやり水のめいぼくこれにはじまりて末々にながれ予が如きのつたなきまで是をもとゝす近頃越前の産岩佐の某となんいふもの歌舞妓白拍子の時勢粧をおのづから寫しえたり世人浮世又平とあだ名

す久しく世に翫ぶに又房州の菱川師宣といふもの江府に出て梓におこしこぞつて風流の目をよろこばしむ此道予が學ぶところにあらずといへども若かりし時あだしあだ波のよるべにまよひ時雨朝がへりのまばゆきもいとほざるころほひ岩佐菱川が上にたゝん事を思ひてはかなきうき名のねざしのこりてはづかしの森のしげきこと草ともなれりさるが中に當りて謫居さすらへし事十とせあまり廿とせに近きをありがたき御惠のめでたきものと都に歸り來ぬある人むかしの筆の四時のたはむれ書をふたたび予にみす其頃は心たくましく眼すゝろに髮筋を千筋にわくることくさも事たらざりけらししかし今の世の有様にくらぶれば髪のはどゑりをこえずふり袖大路をすらすただあまさがる田舎をふなの姿書とも思ふべからず笠屋うつりかはりて此一巻をみるこゝと浦嶋が七世のうま子に逢へるためしにすきてかつようこびをそふるの心にすこれがために跋す英一蝶書(一蝶翁の作讚辭多しといへども諸書に出たれば爰に不載)

按るに多賀朝潮吳服町一丁目新道に住せしに元祿五寅年十二月三宅島に流るる時に歳四十六也寶永

六丑年九月御赦免深川に住す是謫居より歸りての文なり享保九辰年正月十三日歿(以上類考)(深川敷の内一蝶と云者)

湯原氏記云元祿七年四月二日從桂昌院様六角越前守へ被進之金屏風一双吉野龍田の圖多賀朝潮筆本願寺へ同一双大和耕作之圖同人筆新門へ以上

○西川祐信元祿、寶永、正徳、享保、元文、寛保、延享、寛延、慶年 居住

俗稱右京(初祐助)京師ノ人也

姓藤原西川氏號自得齋一號文華堂稱

大和畫師世ニ西川流ト云

京都に住始メ狩野永納門ニ入(法眼永眞延寶ノ頃安信門人縫殿助永納字伯受一陽齋梅岳堂西邑居翁ト號ス)て書を學び後一家をなして寶曆明和安永の比大に世に行る中興刻本仕女大和繪の祖と云へし上梓する繪本數百部あり古今比類なき妙手なり浮世繪師の名譽たるへきか春畫は此人より風俗大にひらけたり百人美女郎とて雲上高位の尊きより賤のいやしき迄各其時世の風俗を寫し書き分たり後又是を春畫にかきしかば罪せられしと云筆意骨法狩野土佐の二流をはなれず委く畫法にかなひし浮世繪

師は此人に限れり或人の藏書に祐信畫の事にて罪せられし事を書たるものを見たりしが書名を忘れたり西川の事委しくありしなを後にしるすへし(此頃書本テイサイ紺紫表紙ニ金泥書キアリ大本小本ヨコ切多シ箱入モ多シ近世文化頃迄ノ好色本ノ如クナリシ)

繪本百人美女 同倭比事 同

同 同 同

同好色玉簾(畫名西川祐信筆トアリ)

同好色百人美女(西川祐信筆) 同

其他枚擧すべからず亦彩色の妙手なり肉筆の繪卷物等世人専ら珍重す近世東都にては師宣よりも祐信の畫は價貴しと云

按るに板刻本は夥敷あり八文字屋本も祐信が初心の頃畫しとみゆるもの多し畫名は記さゞれども此人と見ゆ

或書に曰西川祐信は浮世繪枕繪好色本の達人と云れし或年百人女臚品定と云大内の隠し事を書き其後好色双ヶ岡と云雲上のすがたの枕繪を板刻す百人女臚

のつがひ繪はやん事なき方々の枕席密通の牀清涼殿の妻隠れ梨子壺の隠し妻萩の戸細の別れ路夜の殿の妻むかへなんと種々玉簾の中の隠し事を書し事公聽にもれて嚴敷御咎を受板行禁制せられ断絶しけるとかや世の人の知る所なり其比より以後好色本賣買を止め給ひしをひそかに商ふ事には成し祐信も一蝶が跡を踏て如斯成ことを云傳へしと云々

○橘守國

享保比ノ人
延享中歿ス

俗稱惣兵衛 浪花ノ産也 居住

姓橘口信 號後素軒

狩野探山の門に入て業を受(探山付信鶴澤氏探幽門人大坂ノ人ナリ)後一家の書法を以て世に雷名す狩野流の骨法を不失刻板の畫を得たり精密奇巧此人より起る刻する所數種天保の今に至る迄盛に世に行る書畫ともに善す文學博識の秀才也故に世の畫師の爲に廣く書法を傳へ繪本にもしからざる爲にせんとて精力を費し圖を巧傍に其意を誌して是を板刻せしむ書本の著述古今に比類なし名手世に知る處なり土佐を始倭繪の名家多しといへども其業を己に知るのみ守國は委く人の爲にせし故に板刻畫の汚

名を受たり畫道に志ざし有ども書籍を見ざる俗家の

者の爲には笠翁が畫傳をも委しく唐本を平假名にしるして其意を得さしむ倭漢一畫法の奥儀を極め其業に達して畫本をあらはし諸職の助となして是が爲に世上に其業の力を得る者幾ばくならん皆此精巧に仍れり尋常の浮世繪師に列する人にはあらずといへども板刻の繪に名を得たれば姑く爰に擧て畫者の釋尊とも云べき神傳の開手なるべし門人多し(守ノ一字ヲ名ノルモノハ狩野幽家免許ノ弟子ナリ)

門人に國雄皎天齋 俗稱醉屋平十郎

此人名を不好が故に以て世にしられず生涯を困窮して終り其落款して世に遺せる畫もなければ人其名を知らず古來かゝる類の後世に傳らざるもの多かるべし世人多くは目を賤しみ耳を貴へる事歎かはしき事ならずや

毛詩圖譜 (皎天齋國雄畫刻本世に行れたり)

守國筆繪本

繪本通寶志

同 寫寶袋

繪本直指寶

同 鴛宿梅

同 故事談

同 唐土訓蒙圖會

同

同

○雛屋立圃 立圃ノ傳畫書ニ載テ人ノ知ル所ナレド爰ニ出ス

野々口氏稱雛屋俗稱紅屋庄右衛門(京師人)初名親重(明曆ノ頃ノ人寛文中歿七十一)

立圃は書畫を能し俳諧に名あり風流の一奇人と云べし畫は土佐氏の門に入たり(元和、寛永、正保、慶安、承應、明曆、万治、寛文、没ス)醒世翁曰専ら浮世繪を書たり醫師中川喜雲の作草双紙のさしる多くは立圃なり許六が歴代滑稽傳に雛屋立圃は畫をよくす京童と云名所記自畫なり云々上り竹齋の畫も立圃也(類考追考)

○蔭繪師源三郎

元祿ノ人
頃ノ人

俗稱 居 號

醒世翁曰元祿三年の刻本に此名あり西鶴が作の讀本さしる名をあらはさずといへども多くは此人の畫なり(以上追考)

人倫訓蒙圖彙(源三郎畫)

○月岡丹下 天明六年ノ頃
没年七十七歳

俗稱 浪花人也(江州ノ産)

名昌信 號雪鼎一號信天翁

高田敬甫門人大坂の春畫の名人也又印本の畫本多し枚舉に遑あらず

按るに丹下彩色の春畫の大巻物を見たりしが妙手なり

○羽川珍重

享保中
江戸人

沖信 藤永(門人か羽川と有り)

谷中感應寺の天井に龍王人は珍重門人か羽川藤永と畫名あり享保の比の浮世繪師なり芝居繪本吉原細見記のさしる赤本の繪等多くかきぬ(以上類考追考)

三馬云珍重門人に羽川和元あり

○野々村治兵衛

刻板の繪本
世に多し

○下河邊拾水

天明ノ人
頃ノ人

俗稱 居 京師人也 號

此人狩野家の畫風を學びて近世の上手也板刻の畫本多し祐信守國が刻本の筆意に似たりといへども大同小異あり

増補頭書訓蒙圖彙 十冊

繪本やしなひ草(天明四年板洛西双丘書畫)下河

邊拾水子トアリ

繪本をしへ草
其他多し多年見聞の書名をわすれたり追て書加ふべし

○長谷川長春 天和貞享ノ頃ノ人
京師ノ人 號

京師の浮世畫師なり好色旅日記に今の長谷川吉田が筆にもなるまいと書たるは此人の事か同時大坂に長谷川典之丞と云あり是は雪舟の末孫と云(以上類考追考)

○吉田半兵衛 貞享中ノ人
俗稱 居 京都ノ人ナルカ 號 姓氏共ニ未詳

無色軒が序に云△いはでの山の岩つゝじ云ねど色に通りものは吉彌結びの永き契りをかかしあるはずげがさの深き思ひをしのすゝきはに出てより言よしなが染のそめ盡すとあれば師宣同時の人かとをまはる長谷川長春同時の浮世繪なるべし好色旅日記に長谷川吉田とかきしを見れば其の頃流行の人とおもはる

好色訓蒙圖彙(貞享三年ノ板畫師吉田半兵衛トアリ)

其後江戸にて再板せしは師宣の畫なり其後板刻せしは祐信也是を貞享訓蒙とはいへり
次篇に委しく記す畫名は數度見たれとも外題を失す

○近藤清春 正徳享保ノ比ノ人也
俗稱助五郎 居住 江戸産也

近藤助五郎清春と畫名を誌し金平本赤本に多く有り
三馬按に清春は吉原細見記并芝居狂言本等に自筆畫にてあまた開板せり委く別に記す

○鳥居清長 寶曆、明和、安永、天明、寛政、享和、文化年中歿ス行年
俗稱市兵衛(一説新助歿)關氏 江戸ノ産也(本材木町一丁目ニ住ス)

鳥居市兵衛清長は鳥居三代目清滿の門人也近世の名人なり江戸錦繪の祖と云べし始菱川のごとき昔畫の風俗なりしが中比より畫風を畫かへて一家をなせり師清滿の實子畫を學ばざれば姑く芝居看板畫を相續してかけり彩色摺畫本浮世美人錦繪世に行れて夥敷彫刻せり枚擧するに違あらず其一二を爰に誌す鳥居

相續第一の妙手なるべし

繪本物見が岡 三冊 繪本

同 同 同 同

悉く今世人の知る處なれば略す

鳥居氏

元祖清信 俗稱庄兵衛 住居難波町

元祿享保ノ頃ノ人

二代目 清信男イニ倍 俗稱 住居

兄早世

三代目 清滿 俗稱半二 芳町三味線師

弟早世

四代目門人 清長 俗稱關新助 近頃錦繪彩色ノ名手也

清長は江戸畫の祖といふべし始菱川の昔畫風俗なりしが中頃より畫風俗を替かへし也其後さまざまに變化せしかども江戸歌舞妓の畫看板は今猶鳥居風に畫こと也清滿清信清經とも

門人 清經 俗稱 住居

三馬云元祿十年板好色大福帳五冊畫師ノ名有り
庄兵衛ノ元祖清信ノ俗稱也鳥居庄兵衛清信ト書タル畫本多シ

元名翁隨筆

に二枚繪草紙をかけり

清滿實子 畫不學和泉町ニ住ス 縫箔屋渡世

五代目 清峯 後至天保今 清滿と改む清長門人也寛政より享和文化 文政今至天保住居和泉町

三代目清滿の實子は浮世畫を不畫して縫箔屋を業として和泉町に住す仍之姑く看板畫を相續せり其縫箔屋の仲有清長門人となり畫を學び清峯と名のる今二代目清滿と改て三芝居番附畫看板を畫く是則三代目清滿が爲には實の孫なり

清信門人 清重 市川海老蔵似顔畫之上手

清忠 米澤町角 彩色浮世畫カキ

清長門人 清勝 高砂町

清次 同

清久 小松町

- 清定 花房町
- 清廣 界町
- 清時
- 清政 幸四郎富十郎
宗十郎似面をよくす
- 清之
- 清元 イツヨ町

△清峯は文化の始より文政の始め迄凡八九年の間錦繪草双紙（合巻と云繪表紙の三十丁物文化三四年比より専ら流行す）の類浮世美人繪等多く板刻して世に知る處也歌川豊國の畫風に倣へり清長没故して芝居の看板番附畫を繼受てより清滿と改む板下畫は悉く止たり

△鳥居流の繪は江戸大芝居看板番付を畫きて一派とせり今猶畫風を不改古き草双紙等狂言を寫し言葉書きを加へしは鳥居流の繪なり俗に鳥居の瓢箪足と云て敵役の手足ひやうたんの如くに畫くを元祖清信の比より行れたるものなるべし芝居看板

畫にはさまく古實有る事なりとぞ追て別記にくわしく出さんとす

△此鳥居氏の系圖は類考并附録と大同小異あれば姑く三馬翁の意にもとづき附録の異同を不正

- 奥村政信 草保ノ頭
- 俗稱（本屋奥村源六）（江戸通鹽町ニ住ス一本ニ油町書肆也）號文角
おやは繪師とかたがき有り
芳日堂 丹鳥齋
- 奥村利信
- 奥村文志政房 一枚繪ノ草双紙ニ多ク有り
- 西村重長 草保ノ頭カ
- 俗稱 居通油町
- 石川豊信 寶曆頭

文角政信は自ら日本繪師とかけり朱にて瓢箪の印を用ゆ漆畫にも多し鍾馗の畫を能かきて眼に金箔をおきけり俗に浮繪と云て名所其外牧狩の圖會我十番切等遠景を奥深くみゆる圖を書板行にせしなり其比は大に流行す紅畫の始めなり淺草に出し志道軒の容を寫し畫くに妙なりと云々

俗稱糠屋七兵衛（旅人宿小傳馬町ニ住ス）西村重長門人也

寶曆の始め比紅繪に多し此人一生倡門酒樓に遊ばずしかるによく男女の風俗を寫せり一枚繪に多く畫本もあり

- 鈴木春信 明和頭
- 俗稱 居住兩國米澤町角
- 號湖龍齋（江戸産也）西村重長門人ト云

鈴木春信は浮世美人畫に名あり一時の聞へあり吾妻錦繪と稱する祖とす畫本小本の差畫等多し此頃の畫本はこまかき麻の葉の表紙に紅唐紙の外題をはり袋入なり○明和のはじめより吾妻錦繪を畫き出して今是を祖とす是は其頃初春略曆大小の摺物大に流行して五六度 摺はじめて出來しより工夫して今の錦畫とはなれり春信一生歌舞妓役者の畫をかゝずして云我は大和繪師なり何ぞ河原者の形を畫くに絶んやと其志かくの如し明和六年の比湯島天神に泉州石津笑姿開帳有し時二人の巫女美女のよきを撰みて舞しむ名をお浪おはつと云又谷中笠森稻荷の茶屋鍵屋

の娘おせん淺草揚枝店柳屋仁平次娘お藤の姿を錦畫にゑがきて出せしに世人大にもてはやせり（以上浮世繪類考）

- 小本畫本 春の雪 春の友 武の林（春信筆畫本也）△かさもりおせん△節賣土平も一時の者也△銀杏のおふじと云は淺草なり
- 繪本諸藝錦 同花かつら・同さゝれ石 同千代松 同八千代草 同浮世袋 同春の錦（右春信筆なり）

三馬按此門人某橋本町に住て二代目春信となる後年長崎に至り蘭畫を學びて再江戸に歸りて大に行る

鏡畫の事等別記にしるせり

- 懷月堂 淺草諏訪町居住ス
 - 俗稱源七 號安慶
- 寶永正徳四年の比三月奥女中江島殿一件にて生島新五郎遠流の時共に曹伊豆の大島に謫居すと云木挽町山村座欠所となりしは此時なり草保中の人世事談に見ゆ姓名つばらならずいまおりく其繪を見るに懷月堂とのみあり（以上類考追考）

○珉江 俗稱

寶曆明和の比元縫箔師後浮世繪師となる五文字點式おほく此人の畫なり職人盡の畫本に摺込の彩色を工風して大に世に行る(以上類考追考)

○川枝豊信 俗稱

享保中ノ人 京師ノ人也

享保十六年の板胡詠狂舞臺ト云本の畫者也

○阿りう

享保中の名畫なり山崎氏の娘なり略傳は△世事談に見ゆ

○富川房信 年間

俗稱山本九左衛門(大傳馬町二丁目ニ住す繪双紙問屋也)吟雪ト云

錦繪双紙などに出たり拙き方なり(類考)

醒世翁曰富川房信は大傳馬町二丁目山本九左衛門と云繪双紙問屋の主人なり家おとろへて後に畫師となれり房信の子を長兵衛と云板下を摺て業とす又娘二人あり兄弟三人共今存生す此山本九左衛門は古き本屋にて貞享板江戸鹿子にも見ゆ房信

か代に漸絶せり(摺職人に山本長兵衛あり本所横綱町)

○一筆齋文調 年中 俗稱

住居龜井町 狂歌師 頭光なり

文調は男女風俗の流行を畫きあるひは役者畫もかけり拙き方なれども板下畫に出たり(類考)

類考附録に曰文調は役者畫の上手二代目八百藏の顔をよく似せたとあり

按るに

○柳文朝 年中 俗稱

住居通油町南新道

文朝は狩野流の畫を學び浮世畫をかけり儀太夫節を好て朝太夫門弟なり二代目大谷十丁の似顔の上手なり

三馬按柳文朝の門人に文康あり俗稱安五郎人呼て文康安といふ老人にして今尙存す(文政元戊亥年三馬か書入なり)

深川靈巖寺に碑有り今二代目柳文朝は尾張町の邊に居住すと云り吳服屋の仕入物などに畫名見ゆ文化文

政の頃也

○鳥山石燕 年中 俗稱

住居 號 豊房

鳥山石燕は一時の聞人なり繪本あまた出せり委き傳追て考べし

繪本百鬼夜行 三篇迄十五冊

水湖畫傳 三冊

○細田榮之 年中 俗稱

住居 號 龍齋 姓藤原 時富 號治部卿鳥文齋

天明より寛政の間浮世繪の風俗を能寫して繪畫に美人傾城畫多し専ら世に行る故有て姑く筆を止む狩野流の筆意を學んで今猶彩色繪多し 門人榮理榮昌其外多くあり

○湖龍齋

俗稱 磯田庄兵衛 住居兩國藥研堀 後法橋となる

浮世繪を能す東都藥研堀の隠士と畫名を誌せり法橋

となりてより板下繪をかゝす小川町土屋家の浪人なり

按るに錦繪を細長くつぎ吉原遊女畫などをゑがき表具し俗に柱かくしと云れんの如くにしたる繪多し此頃専ら流行せしものなるべし

○寫樂 年中 俗稱

號東洲齋 住居八丁堀

歌舞妓役者の似顔を寫せしにあまりに眞を畫んとてあらぬさまに畫なせしかば長く世に行れず一兩年にして止む(類考)

三馬云僅に半年餘行るのみ

五代目白猿幸四郎(後京十郎と改)半四郎菊之丞富十郎廣治助五郎鬼治仲藏の顔を半身に畫きたるを出せし也

○戀川春町 年中 俗稱

倉橋壽平 住居小石川春日町

春町は鳥山石燕の門人也自畫作の青本有り(草双紙の事也五枚ツ、綴)小石川春日町に居れる故勝川春草が名を戯れにかけたるなり(以上類考)

三馬按二代目戀川春町と唱たる畫工ありしが近年

改めて二代歌麿となる春町哥麿共に石燕の門人なり

○窪俊満 年中没ス

俗稱 居住龜井町

尙左堂と云

俊満は狂歌を能す書を北尾重政に學び後春草に學ぶ狂歌摺物繪寫眞摺の畫に妙なり左筆にてかけり

三馬云俊満戲作あり南陀伽紫蘭と號す

青樓油汚 玉菊燈籠の辨と名る小冊其他草双紙四五種あり

○春潮 明和安永天明寛政享和文化文政年人

俗稱 吉左衛門

後俊朝と改 號吉左堂

鳥居清長の筆意をよく膾たり錦繪また草双紙に多し(類考)

三馬云春潮浮世繪を廢して俊潮と改む吉左堂と號す文政四辛巳年今尙存す長壽の人也傳は別記に錄す

○珠雀齋 年居姓氏未詳

俗稱 居

○歌舞妓堂 年中人

俗稱 居住

役者似顔のみ畫たれども拙ければ半年ばかりにしておこなはれず

○宮川正春 正徳頃ノ人享保中

俗稱 江戸産也

號 菱川流の畫也

宮川雪溪曰尾張國宮川村人正徳年間江戸兩國廣小路住土佐家門人慕菱川氏之風○長春は狩野家の下請にて日光御用を勤む狩野某甚よからぬ人にて手間料を一向わたさず宮川氏立腹度々催促におよび遂に口論となり宮川氏を多勢にて打擲いたし其上荒繩にていましめ芥溜にいれおく宮川宅にては歸宅せざる故に其子尋に出て父を芥溜よりたすけ歸る生命別條なしといへども老人の事故足腰をいため難澁に及ぶ其子大にいかり一刀を抜放し狩野氏へきりこみ當人はもちろん外門人三人きりころす依之其子は死罪長春は流罪狩野某は欠所なり其後年を経て寶曆明和の頃宮川春水といふ門人あれども宮川は上に憚る氏なれば勝宮川と號す

○宮川春水 俗稱 大和繪師ト云リ芳町住

姓勝宮川ト改享保頃ノ人

勝川 俗稱藤四郎 深川 春水 後芳町住

門 薪水

門 春章

春重 門人ト云

○勝川春章 又勝宮川氏トモ

是は明和の頃歌舞妓役者の似顔を畫きて大に行はる五人男の畫をはじめとすそのころ人形町林屋七右衛門と云へるものゝ方に寓居して畫名もなかりしかば林屋の請取判に壺のうちに林といへる文字ありしを押てやりたり故に人呼て壺屋と云ひ弟子春好を小壺といひき武者繪をもよく畫し

三馬按春章號旭朗齋一號西爾俗稱祐助書畫をよくす門人數多あり傳及系圖等委く別記にあり(寛政四年十二月八日死ス淺草西福寺ニ葬ル)

○小松屋 俗名三右衛門 後百龜といふ

明和の頃大小の摺ものゝ畫多く小松屋のかけるなり西川氏の筆意を學びて春畫をまかけり肉ぶとんぬく

元名翁隨筆

二百十一

め夜具等の本あり元飯田町の藥舖なり 活東子云此二人本籍にもれたれば類考より抄出して書加へつ

○勝川春英 年中没ス

俗稱 居新和泉町新道

號 九德齋

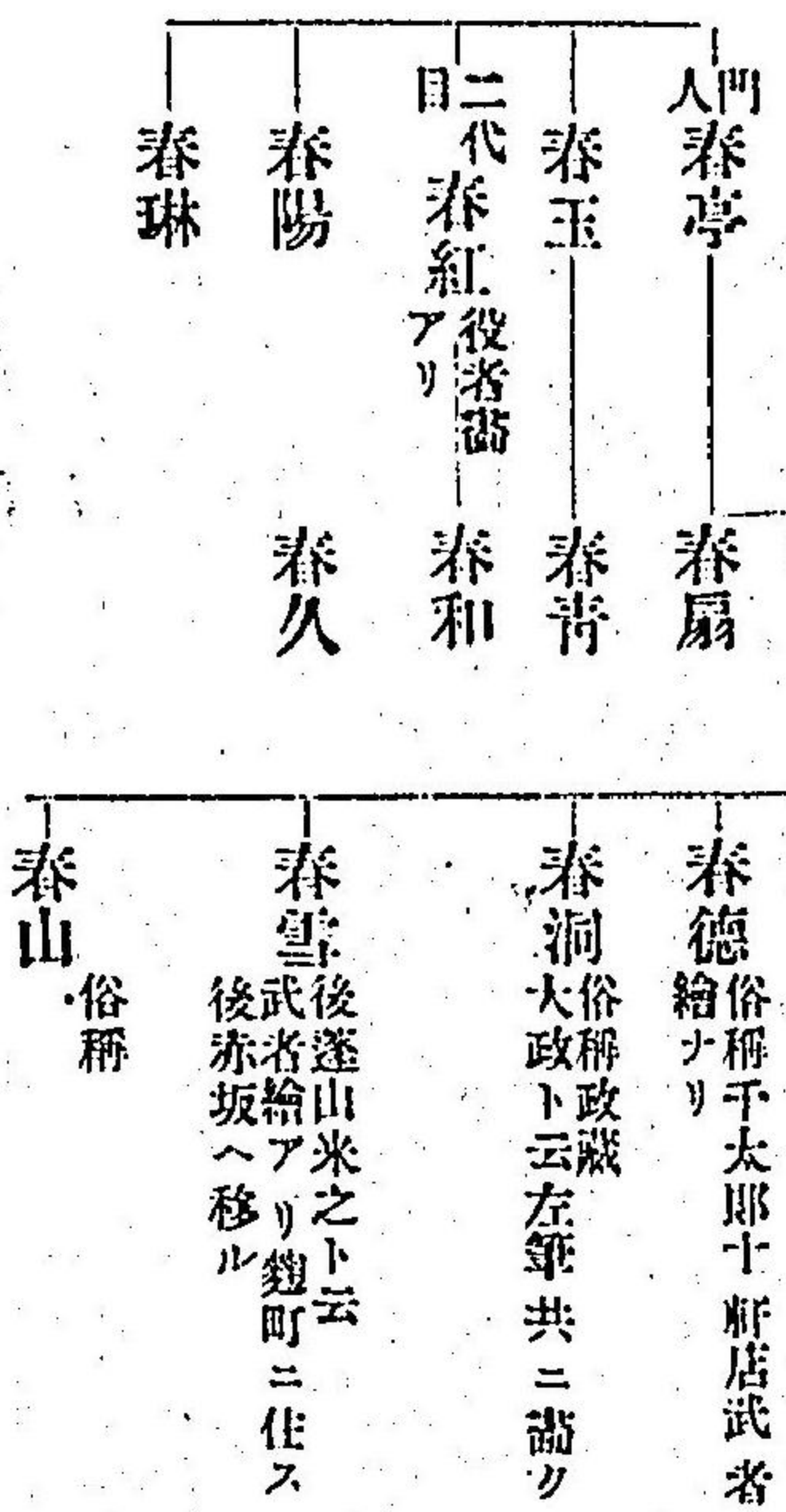
始め春章門人なり後一家をなせり武者繪に妙を得たり寛政享和の比専ら錦繪多く發市せり操芝居の看板畫をかけり世に知る處なり自然一家の筆意をあらはせしに畫道の妙を得たり一蝶嵩谷に比觀すべし士佐狩野の筆意に倣て其妙處を天然に書き出せり生涯浮世繪に終るはおしむべき者也一流の筆意を顯せし狂畫をかけり九德風と云彩色摺畫本武者繪手本繪草紙數種あり枚舉すべからず近世の名人也春章歌麿も不及處多し初代豊國は此畫風を學びたり

繪本弓袋

同 繪本

忠臣藏十一段續の屏風火事場火消はたらきの畫卷物 其他人の畫かざるものを多くかけり 因云九德齋は義太夫節をよく語り三味線に妙なり

麴町なる山田某に逗留して屏風繪巻物を書けり奇絶とする事多し委くは別に記す書法に奇巧ありし人にて古きをたづねて新き圖を工むの名手なり又義太夫節をよく語り三味線をもよくひけり



○勝川春好 年中ノ人
 俗稱 住居長谷川町
 春章門人にて小壺と云り浮世書役者書多し
 三馬云春好早世にあらず四十五六歳の比中風を患て業を廢す後年麻布善福寺に遁世して在しが馬馬翁の需に應じて市川白猿の肖像を左筆にて畫たる

事あり其圖今日歌白猿一首に見ゆ(以上)△二代目勝川春好は春扇也別に記す(活東子云 類考に早世とあり故に三馬が如是云へるなり)
 ○勝川春亭 寛政寧和文ノ間ノ人
 俗稱 居和泉町
 春英の門人也武者繪を善す浮世繪役者繪一時に行る草双紙を多く畫く繪本も二三種ありし壯年にして病の爲に業を廢して其居を不知可惜
 按るに春亭は春英が高弟なるべし世に發市する處の草双紙にしき繪同時の物多し後に豊國の畫風を畫きて役者錦繪も歌川風にかきし也
 ○勝川春扇 享和ヨリ文化文政ニシテ歿ス
 俗稱 清治郎 居始麴町貝坂後芝仲門前又神明町へ移ル
 號始春琳ト云(等琳門人)春扇ト改メ又二代目春好ト改ム
 始め雪山堤等琳門弟なりしが後春英に學び春扇と改む文化の始め東西葦南北と云作者源五郎鮎と題せし双紙を始て作り春扇始て草双紙板下畫をかけり(板

元芝神明前山田屋三四郎初テノ板元ナリ)大に行る是よりして一時に浮世繪役者繪草双紙を畫り此比芝神明前の繪双紙問屋委く彼れを取立ん事を挑あらそひ新板日々に多く發市す向町組に寄らず僅の間なれども豊國大ひに廢せられし事ありし讀本も一二種畫り後年故ありて住居を改め二代目春好と改名し板下畫を止めて芝神明町に在りし妻は風流の者にて草双紙の作を年々發市す作名月光亭笑壽と云り
 按るに繡像讀本は東里山人作源平染分草と云し五冊縫山翁作橋供養二編五冊なり
 後陶器の焼付畫をかきて板刻畫をば畫す其頃は酒杯繪猪口と云しもの流行の始にて専ら是をのみ業とせり門人に扇里と云ものありし

○春川榮山
 俗稱 居
 ○春川五七 江戸小石川ノ人也
 文化の末より京師に住す榮山の門人なるべきが未詳京小原八坂の邊りに住けるにや江戸に在し比は役者の小まかき繪を畫き板刻せしと見えたり一二種に不

過其後畫名を見ず
 ○北尾重政 年中歿ス
 俗稱 左助 居住初大傳馬町二丁目
 后根岸大塚村
 本姓北島 江戸ノ産也
 號紅翠齋 一號花藍齋
 北尾重政は書畫ともに善す就中板下に妙なり武者畫花鳥等に委し(壯年の頃は鳥居風の畫をかけり其時代はすべて鳥居風を慕ひしなり)近來江戸書肆繪双紙問屋藏板の庭訓或は往來物百人一首法帖の類委く書畫ともかけり又曆の板下は重政老年迄も書きし也板下の筆耕は其比三都に右に出るものなかりし花鳥の寫眞武者畫軍談數百部筆す錦畫双紙の繪尤多し名手の一人と云べし
 繪本 繪本子育草 小本三冊
 同 譽の魁
 同 同
 同 同
 同 同
 同 同

後年二代目北尾重政と名を稱するものは美九と云し人也(新乗物町の川岸俗稱)

○北尾政演 重政門弟文 化中歿す

俗稱 京屋傳藏 住居京橋南傳馬町二

丁目 姓岩瀬 本姓拜田 名傳藏

字伯慶 號菴齋 又號醒世老人 作名

山東庵京傳 戲作の名なり

幼名甚太郎 江戸深川木場之産

兩國回向院に墓碑あり

淺草寺なる筆塚の碑名は家弟京山人撰

文

山東京傳は書畫ともに善す戲作に高名なるは世に知る所なれば爰にしるさす

○北尾政美 重政門弟 文化中歿す

俗稱 三次郎 居初小網町後住吉町裏

川岸後於玉池ニ住ス

姓鐵形氏 號杉岸

後號菴齋 紹眞ト改

政美近世の名人なり狩野家の筆意を好て一家をなす東都の繪圖を委敷一ト眼に見る畫を書事を工風して

大に世人もてはやせり神田明神に其江戸繪圖の額を奉納せり諸職の爲に多く繪手本となるべき物あまた畫けり近來繪手本は此人の筆多し是より世に薄彩色摺の畫手本大に流行す一時の聞人なり

略畫式(人物鳥獸山水花鳥草木の六冊)

略畫苑

菴齋略畫

諸職畫鑑

諸職雜形繪手本 此外刻本多くあり

後松平越前侯の藩中に在りて板行發市の繪を止め鐵形紹眞と改め落髮す實子赤子と呼ふ今猶越前侯の藩

たり門人に美九と云ものありし故ありて政美が師重政が名跡をつがしむ畫風は大に異なり豊國か流なり

名を相續して反て絶るにおとれり

○喜多川歌麿 年中歿す

俗稱 勇助 居始辨慶橋又久右衛門町

後馬喰町三丁目に住す

號 紫屋 江戸の産也

はじめは石燕豊房の門に入て狩野家の畫を學ぶ後一家をなして浮世繪中興始祖の名人と呼ばれしなり男女

の風俗流行を寫す事近世此人より錦繪の華美を極めたり自云生涯役者繪をかす戲場繁昌なるゆへ老若

男女量負の役者あり是を畫きて名を弘るは拙き業なり何ぞ俳優の餘光を假ん哉我は日本繪師なり浮世

繪一派を以て世に名を轟すべしと云しとなり其意に違はず其名海内に聞ゆ一豪傑と云べし

因に云長崎の人へ清朝の商艘より歌麿が名を知て

多く錦繪を求たり唐までも聞へし浮世繪の名人なり殊に春畫に妙を得たり此人淺草の水茶屋難波屋

おきくの姿繪を出せりかさもりおせんおくらやお

ふじなにはやおきく三人狐けんの繪あり繪本太閤

記の圖を出して姑く咎めを受たり其後咎の事ありて獄屋に入しが出て間もなく病死すおしむべ

し

文化年間中奥州岩城より來れるものあり此人浮世

繪を好む一癖あり元江戸の産なりしが業ひを旅中

にのみす南部出羽加賀能登に往來す其比江戸にて

は一陽齋豊國の役者畫専ら行る此人云遠國他郷に

往ては江戸繪名人は歌麿とのみ云て豊國の名を知る人は稀にもなかりしと云り流行の役者繪は白雨

の降が如し其用る處のみなりし歌麿が高名なる是にて知るべし

役者繪に市川八百藏一世一代おはん長右衛門の狂

言をせし時桂川の繪評判して求めざる人なかりし

歌麿は美人繪にておはん長右衛門の道行の繪を出

し是に讚を書り近頃浮世繪かき蟻の如くに這ひ出

しむらがる趣を悉く嘲りて書たり今藏る人多く

有べし

歌麿に門人多し浮世繪のみにあらず花鳥虫魚寫眞等

精巧細密の彩色摺畫本等多し此人傳奇説多しといへ

ども委しくは別記に追てしるす姑くこゝに云はず

浮世繪類考曰始め歌麿通油町葛屋重三郎と云繪双紙

問屋に寓居せしとあり

吉原年中行事 彩色摺二冊十返舎一九狂文入

繪本百千鳥 極彩色狂文入

同 虫 撰 極彩色狂歌入

同

同

同

其他枚擧するにいとまあらず世に知所なり

歌麿門人

菊麿 寛政ヨリ文化文政ノ人後月隠ト改ム
一流ヲ書キ板下繪多シ草双紙アリ馬喰町ニ住ス
後年浮世繪ヲ書キ改ム

門雪麿 畫ヲ止メ作者ト
門美麿 後北尾重政トナル
人美麿 小川ト改ム
北尾ト改ム

式麿 俗稱 小石川水道端ニ住
ス文化中破ス錦繪アリ

秀麿 俗稱 下谷柳稻荷
前ニ住ス錦繪アリ

二代 歌麿 俗稱 馬喰町ニ住ス 文化ヨリ天保ノ頃ノ人ニ
世懸川春町ト云シ人ナリ書キ善ク故歌麿ガ妻ニ入
夫セシナリ

歌麿云吉原年中行事は大に流行す作者十返舎一九が
云吉原の事を委しく書し文章故に行れしと云けれど
も歌麿は繪組ゆへに行れしと互にあらそひ大いに取
合となりし事ありしとぞ是以て其氣質を察するに大
にはこりし人なりと見ゆ歿以前繪双紙問屋云あは
せ歌麿必ず病死すべしとて各錦繪板下を頼み込夥
敷く書物多かりしとぞ其比は外に畫者なきが如く錦
繪をさせず是末なるべし或畫双紙問屋の老人のもの
がたりし

○歌川豊春 安永ヨリ天明寛政享和文化
ノ間享年七十餘歳ニテ歿ス

俗稱 庄三郎但馬産ト云 居始芝三島
町後日本橋落髮シテ赤坂田町ニ住ス
號 一龍齋 江戸ノ産也

豊春は始め 門人なり後流行の風俗を畫き一家
をなせり操芝居の看板畫をかけり彩色に委し寛政の
比日光山御修復の節彼地職人頭を勤めしとぞ此人浮
世繪妙手なり浮世繪とて横にかきし錦繪など多し類
考に云近來浮世繪を錦繪に多くかき出せり寶曆の比
のうき世繪を勝れりと云々草双紙の類は多くかゝす
弟子に高名の者多し

門人 後年豊春ト名ノリシモノアリ血脈ノモノカ文政ノ始メ
ナリシ其後ナシ京橋銀座二丁目新道ニ住ス

豊廣 芝片門前ニ住ス
門人右別ニシル

七右衛門 畫カレズ
本所御藏前ニ住ス

豊國 中橋町川岸ニ住ス
門人多シ別ニシル

豊久 堺町ニ住ス 芝居在言本チカク錦畫アリ粗上ケ燈
籠ノ畫ニ妙チ得タリ

豊丸 錦畫アリ

按るに土佐結構の操座の看板は此人の筆にて度々
評判せられし珍敷圖取をかきしと云り其後春英も
是に次て劣らず有しものなるべし今は春徳が筆な
り春亭も一兩度有りし事あり

○歌川豊廣 寛政ノ末ヨリ文政
十一年ノ頃歿ス

俗稱 藤次郎 居芝片門前町
號 一龍齋 江戸ノ産也

始め豊春の門人なり常に義太夫節を好て三味線を樂
む尤妙手なり後一家の畫風をなし筆意雪舟或は明畫
の趣あれども元より土佐狩野の畫風を學ぶ草筆の
墨繪を板行して張交畫とす尤妙也草双紙敵討續物此
人より始り初代南仙笑楚滿人作也世に行る讀本數十
部を畫く畫の筆力奇巧は近來同時の畫工に並ぶ者な
し彩色畫も妙手也門人多し

歌川豊廣 生涯役者畫ナカ、ス浮世繪師ト云ヘシ
彩色摺江戸名所編茶番

實豊清 俗稱金藏號 豐清ハ畫ヲ善ク錦繪草双紙讀本ニ
子 豊清アリ早世ノ可惜

女子 他ニ嫁ス

婿實 豐熊 俗稱熊吉
豐廣ノ爲ニハ實ノ孫ナリ

門人 駿州沼津宿大平某
廣昌 錦繪二三種アリ

廣重 八代洲川岸住文政ノ末ヨリ天保ノ今專畫ク 武士近藤
徳太郎錦畫草双紙多シ

廣恒

廣政

○歌川豊國 寛政享和文化
文政中歿ス

俗稱 熊吉 居 始芝三島町芳町堀江
町上横町川岸油座住ス
號 一陽齋 江戸芝三島町ノ産也
人形師ヲ業トスル人ノ男

始め豊春の門人なり後英一蝶の畫風を學び狩野家の
筆意を旨とす浮世繪は玉山九德齋が畫法を慕ひ一家
の筆法をなす豊廣と一時行る當世の風俗を寫す事に
妙を得たり豊國の畫の始めての板元は神明前問屋和
泉屋市兵衛也(泉市)と云役者切畫也美人繪并役者似
顔此人より行る中興の祖と云べし草双紙合卷讀本錦
畫數百部世にもてはやせり一流の畫風を以て江戸に
雷名す門人夥し文政中歿す年五十三

一陽齋豐國

實直次郎不學書板木師

二代一龍齋豐國名國 豐國養子トナル本郷春木町ニ住ス初

初代豐國門弟

二代目豐國門弟

國政 俗稱別記ニユヅル

國富 錦畫アリ

一翁 國滿 俗稱熊藏カラケ町ヒ

國兼 錦畫双紙有ニ三

町錦繪双紙有

國景

國長 俗稱別記ニユヅル

國誌

一 國次 俗稱幸藏銀座四丁目

國安 俗稱別記ニユヅル

國貞 俗稱別記ニユヅル

國直 俗稱別記ニユヅル

國信 俗稱 作名志満山人ト云

國芳 俗稱別記ニユヅル

國周 俗稱 繪アリ

國虎 俗稱象藏 草双紙錦畫アリ多ク出ス

國宗 國長門人俗稱 錦繪二三種アリ

國照 俗稱惣右衛門 錦畫二三種アリ

國房 俗稱 錦畫二三種アリヨミ本モアリ

國登 女 俗稱 錦畫アリ

此餘多しといへども板下書不出者略之

一陽齋筆書本彩色摺

年玉筆

役者 合鏡 同 此手柏

似顔獨稽古

役者 三階興

時世姿

此人の傳多しと云へども姑く爰に略す別記に出す文化文政の間此人の似顔畫大に行る爰に於て豐國筆塚碑(柳島妙見境内ニアリ門弟ヨリ建之山東京山撰文并筆)

或人曰豐國畫ハ其骨法豐廣ニ不及事遠し書法劣ルト云ヘドモ流俗ノ眼ヲヨロコボシムル一妙ヲ得タリ戲場流行ノ時ニ逢シモノナリ後年迄春書ハ不書シガ致故二三年前ヨリ數部ノ春書ヲ出セリ

○歌川國政

寛政ノ末ヨリ享和 文化ノ始メノ人

俗稱 甚助 奥會津ノ産

號 一壽齋 居 始芳町堀江町後市

ケ谷左内坂ニ住

豐國の門人なり豐國の高弟にて二代目國政と云ふ畫はるか後に見へたれ共板下を不見何人か不知始め紺屋を業とす生質芝居を好の一癖あり僅のいとまあれは狂言を見物す元より畫を書り俳優の面を似せて畫く甚妙なり紺屋の主豐國と交り深かりしかば其故を物語りす豐國傍に招きてかゝしむ其似するを見るに面林の癖を似する事豐國の不及事多し則需に應して門人となす或時中山富三郎(世にグニヤ富と異名す)の似顔を畫く其人側に在が如く目前に見るが如し其頃専ら似顔半身の團扇繪流行す團扇間屋是を見板下にかゝしむ市中に賣る世人始めて面部の似たる事奇なるをもてはやし不計の利潤を得たりしかば夫よりして多く團扇畫を書しむ師豐國是に及ざりしかば國政が畫くところを以て規矩とすしかれども一時風説夥しかりし故國政が名大に世に行れたり師豐國専ら役者を國政に似せてかきけりゆへに世人反て國政

が門人ならんと云しとぞ後錦畫にも多く出しが畫道に深く不入學所拙ければ人物全く不備僅三四年にして止む終に豐國が筆力を以て永く世に行れしなり草双紙繪本は不畫して廢せり後似顔の面を作りて童子の爲に賣りけり歿ところを不知

○法橋玉山 天明寛政享和 文化ノ人歿年

俗稱 大坂ノ人也

別號修徳 姓岡田 叙法橋

近世板刻密畫の開祖たり始め 門人にて後一家

の畫風をなす著述の畫尤多し書法筆力の秀才なる事古人に比類なし神傳開手の妙筆奇功三都に右に出るものなし名所圖會繪像讀本數百部を畫く京大阪の板刻畫は悉く此人也一時の高名妙手と云へし

繪本太閤記 自初編至七編大ニ世ニ行レタリ

唐土名所圖會 兼葭堂藏板勝レテ妙也

三國妖狐傳

繪本玉藻傳

同

同

同

其他枚擧すべからず世に知る處なり門人多し
二代目玉山修徳文化文政の比江戸神田に住せし事あり
板行の畫はかゞざりし神田明神に爲朝の圖を畫きし額あり初代玉山の畫を能學び得たるものなり

○法橋關月 天明寛政 享和年中

俗稱 大坂ノ人也 姓 蔀

號 叙法橋

始め月岡丹下の門人也玉山が筆意畫法を學び名勝圖繪を板行せり壯年にして歿せしと云

伊勢名所圖會

山海名産圖會

關月の實子蔀關牛天保中大坂に住す

○法橋中和 京師ノ人保元平治又前太平記 源平盛衰記等名所圖會ヲ畫ク

○東野 姓大原 此頃同時ノ人ト 見ユ大坂ノ人後奈真ニ住

○春曉齋 年中ノ人

俗稱 大坂ノ人

號 姓速見

刻板の繪入讀本を多く畫り能く法橋玉山の畫風を學びたり

書入平泉實記

拾冊

同

○二代目春曉齋

俗稱 大坂ノ人 號

後春曉齋の跡を繼し

○竹原春朝齋

俗稱 京都ノ人

秋里離嵩と交り深く五畿内及諸國の名勝圖會の刻本多く出せり

三馬按春朝齋ノ男ニ春泉齋有繼テ名所圖會ヲ畫ク

杏花園藏浮世繪類考ノ附録ハ本白銀町一丁目縫箔屋

笹屋新七邦教書トアリ甚ヅザンノ物ナリ只畫道ニ熱

心ノ人ニテ心オボエニ見聞セシコトヲシルシタルモノト見ユ

○歌川國貞

文化二年頃ヨリ 天保ノ今ニ至ル 俗稱 庄五郎 居 本所五ツ目後龜井

戸ニ住

姓 武州葛飾郡西葛西領産

號 一雄齋 一二五渡亭 樹園

數號アリ 天保四年ヨリ英一蝶

の名字と云べし門人多し委き傳は別記に誌す

繪本役者夏の富士

役者似顔早稽古

同

同

同

其他枚擧するに遑あらず

一雄齋國貞

實子

女子

同實子

五風 貞虎 俗稱興之助 双紙錦繪多ク出セリ

貞繁 俗稱 草双紙ヲ出セリ

五雲 貞秀 俗稱兼吉 双紙錦繪等多ク出セリ

貞幸 錦畫アリ

貞房 俗稱 草双紙ヲ出セリ

五湖 貞景 俗稱 双紙錦繪ヲ出セリ

國貞は本所五ツ目渡し場に住り依て五渡亭の號有り
(蜀山人此號ヲ贈リシト云)自ら若年の頃より浮世畫を好みて師なくして役者繪を畫り豐國門人と成始て
監本をあたへしに淨書を見て豐國驚しと云り豐國が門に入り程なくして文化の始め(二三年ノ比)草双紙の板下を畫けり(山東京山作始メテノ作ナリ國貞始テノ畫ナリ妹春山ト云江戸屋ノ板)其より年毎に畫く錦繪は中村歌右衛門大坂より下りし比(在原系圖梅若狂言切狂言於旬傳兵衛猿廻シ堀川ノ段ヲ勤ム二番目狂言富岡志山開出村玉屋新兵衛ノ狂言是歌右衛門カ目見ヘ狂言ニテカハリ千本櫻古今マレナルアタリナリ)數品を畫て發市す(馬喰町西村與八板元)團扇繪(歌右衛門猿廻シ與次郎ウチハ繪ヲ初テ畫シ也)草双紙大いに行れておさく師豐國におとらず一時聞人となり今一家をなせり畫風はよく豐國の骨法を學得たり後に一流の筆意を以て一蝶嵩谷が筆法を慕へり師没して後いよく自立して浮世繪役者似顔畫に名高く數百部の合巻草双紙を出せり讀本は二三部に過ず畫手本の類は未出す當世の風俗を寫すに妙ある事よく豐國の畫則を學び得たり當時

○歌川國長

文化ノ末ヨリ文
政ニ歿ス四十餘

俗稱 梅干之助 居芝口三丁目後新橋
金六町

號 一雲齋 江戸ノ産也

書を豊國に學び浮世繪を能す草双紙二三種有組上燈籠或は細き細工物に組立る錦繪多く出せり其工風に妙を得たり漢畫と號し名所の繪多く有り門人國宗其餘多くあるべし板下畫を不見此人常に遊藝を樂みとして音曲に妙也酒席に興を添る事を能す一奇人と云べし櫻川善孝甚幸など一時の友人なり

○歌川國丸

文化ヨリ文政ノ末
ニ歿ス年三十餘

俗稱 居始本町二丁目ニ住シ後浮
世小路ニ住ス

號 一圓齋 江戸ノ産也

五彩樓 翻蝶庵 龍尾(俳諧ノ名ナリ)

此人書畫を善す頗る才あり豊國の門人となり國安と並び行はる浮世繪役者繪ともにし草双紙合卷錦畫世に多く人知る所也畫法師の風意をよく守れり亦風流に遊び諸名家の交り深く俳諧をたのしみとす簞笠の門葉なり

○歌川國安

文化ノ始ヨリ天保
ニ至テ歿ス三十餘

俗稱 安五郎 居大門通村松町又本所
扇橋ニ住ス

號 一風齋 江戸ノ産也

幼年より豊國の門人となり師の傍に塾生す文化の始め錦繪を出せり(中村歌右衛門千本櫻忠信道行ノ畫アリ)其後故ありて西川安信と改めしが國安とす草双紙錦畫世に多し畫法能師豊國の筆意を學べり浮世役者畫かきの一人なり門人多し

門安信 安多吉

按るに二代目の國安と稱する者有とみゆ板刻者出せり

○歌川國直

文化ノ比ヨリ天
保ノ間ニ至ル

俗稱 鯛藏 居始桃町ヨリ所々ニ移ル
後田所町ニ住ス

號 一烟齋 信濃ノ産也

一ニ浮世庵 柳烟樓

始め明畫を學びしが北齋の畫風をも好しが若年の頃豊國の門人となる文化の末より草双紙を出せり(式亭三馬推舉して取立たり三馬作の畫多し)其後錦畫

讀本多く出せり國貞に比觀せり豊國の畫法を能せしが從來明畫を好み畫力筆力ある人なれば一派の畫風を立んとして暫く廢せり後天保の始めより草双紙中本などを多く出せり浮世繪一家の上手也門人多し畫

物板刻に出ざれば爰に不載
因に云門人に竹齋庵龍子と云しものあり粕壁宿の産也草双紙役者畫など出せしことあり文化年中也其頃は國芳なども國直が家に塾生の如く居て板刻を學びたりし近頃國芳が畫風は總て取合せの器財草木なども國直が筆意にのみよりて畫しが當時は紅毛繪の趣を基として畫くと見ゆ北齋の畫風を慕ふは國直が畫風によりて學びしゆへなり

○歌川國芳

文政ヨリ天保
ノ今ニ至ル

俗稱 孫三郎 居始白銀町二丁目後ニ
兩國米澤町ニ住ス

號 一勇齋 江戸ノ産也

豊國の門人なり文化の頃錦畫一二種出しが暫く止む文政の末より水滸傳百八人の錦畫を出し(板元兩國加賀屋吉右衛門)大に行れ錦繪草双紙年々發市す能九德齋が畫風を學び一派の筆法あり門人多し

按るに北齋が畫風をも慕ひし故に近世蘭畫の銅板畫の趣意を基とす見ゆ

○萬飾爲一

明和ノ生レ寛政ヨリ享和
文化文政天保ノ今ニ至ル

俗稱 幼名時太郎後鐵二郎 居始本所
横網町數十ヶ所ニ轉居ス今淺草寺前ニ
住ス

姓氏 江戸本所ノ産也

數號アリ改名左ニ記ス

始めは業を勝川春章に受く勝川春明と畫名す故ありて破門せられ叢春朗と云り古俵屋宗理の跡を續で二代目菱川宗理となり其比畫風をかへて(宗理ノ頃ハ狂歌ノ摺物多シ錦畫ハカ、ズ)一派をなさず(堤等琳孫ニノ風ヲ慕フ)亦門人宗二に宗理を譲り(三代目宗理トス)名を家元へ歸せり于時寛政戊午の末年爰に至り一派の畫風を立て北齋辰政雷斗と改む(一説北辰妙見ヲ信ズ故ニ北齋ト改シト云其頃ハ東都ニ明畫ノ風大イニ行レ畫心有モノハ唐畫ヲ學ブ事專ラ流行ス俗ニ從ヒテ畫風ヲ立シハ世ニ出ルノ時ナリ雷斗ノ畫名ハ重信ニユル)北齋流と號し明畫の筆法を以て浮世繪をなす古今唐畫の筆意を以て畫

を工夫せしは北翁を以開祖とす爰に於て世上の畫家(俗ニ云本畫師)其畫風を奇として世俗に至る迄大にもてはやせり一時に行れて門人多く高名の妙手となれり從來書を讀み學才あれば戲作の繪双紙多く草双紙の畫作を板行す作名を時太郎可候と云り(叢春朝ノ頃ハ役者ノ錦繪を出せり北齋ニ至リテ錦畫ノ板下ヲ畫カズ狂言摺物畫ヲ多クカケリ錦畫風アラヌヲ以テコトゴトク北齋ノ畫風ヲ用ユ摺テ奇巧ナリシ△畫狂人ノ號ハ門人北黃ニ讓ル北黃ハ板下ヲカ、ズ専ら畫狂人葛飾北齋と畫名して雷鳴す畫風錦畫草双紙等の尋常にあらず繡像讀本の挿畫を多くかきて世に行れ繪入讀本此人より大いにひらけり(此頃畫入讀本世ニ流行ス畫法草双紙ニ似ヨラヌヲ以テ貴トス亦時ニアヘリ讀本畫トテ別ニス杏花園藏書浮世繪類考ニ云北齋宗理ハ狂言摺物ノ畫ニ名高シ淺草ニ住ススベテ摺物畫ハ錦畫ニ似サルヲ貴トスト云)京師大坂より雷名を慕ひ門人多く學ぶ者有し故尾州名古屋を始として京大坂に至れども必觀する畫家絶てなし板刻の密畫に妙を得て當世に獨歩す數萬部の刊本枚舉すべからず漫畫と題して畫手本を發市す大に

世に行る數篇を出せり(始板元江戸麴町角丸屋甚助なりしが故有て後尾張名古屋永樂屋東四郎藏板となれり)再名を門人に譲りて錦袋舎戴斗と改たり前北齋戴斗と云(二代目北齋は本所ノ産ナリシガ後吉原仲ノ町龜屋ト云茶屋ナリ△兩國回向院ニテ大畫錦袋ヲカケリ錦袋舎名弘メ畫會アリ大畫ハ十六間四方十八間四方名古屋ニテハ釋迦出山ノ圖ヲカケリ)是をも文化の末門人北泉に譲り與へて前北齋爲一と改名す門人に臨本を與ふる違あらず畫手本を是が爲に板刻して數十冊を世に行しむ生涯の面目は畫風公聽に達して御成先に於て席畫上覽度々あり稀代の畫法妙手と云べし

- 板刻畫手本標目
- 北齋漫畫 自初編 至十三編 節口雛形
 - 戴斗畫譜 地文雛形
 - 北齋畫鏡 畫本獨稽古
 - 同 畫叢 畫本早引
 - 一筆畫譜 三体畫譜
 - 爲一畫譜 北齋寫真畫譜
- 畫手本數部枚舉すべからず僅に其一二を爰にしる

すのみ世以て知る處なり委くは別記に譲る

葛飾爲一 二代北齋 二代戴斗門人

女子 門人柳川重信雷斗ノ妻
早世男アリ爲一實孫也

女子 他へ嫁ス畫工ニアラズ
早世御鏡御川ノ家ニ嫁ス

女子 榮女 畫ヲ善ス父ニ隨テ今專
畫師ヲナス名手ナリ

辰政ト云シ頃ノ門人

辰齋 雷斗 柳川重信 雷洲 青山ニ住スヨミ
本アリ銅板ノ紅毛畫ヲヨクス

北齋ト號シテノ門人

北馬 狂歌摺物多シ別記アリ
畫入ヨミ本數十冊チカケリ後一家ノ畫風ヲナス 臨齋

昇北齋 兩國ヤゲンホリニ住ス
錦繪山水ノ遠景多シ

拱北溪 別記アリ赤坂ニ住ス
寫スリ物ヨミ本多シ

北岱 淺草ニ住ス
寫スリ物ヨミ本多シ

北鷲 スリ物多シヨミ本アリ

關北嵩 本郷ニ住ス
ヨミ本草双紙多シ後唐畫師トナル

東南北雲 大工久五郎トアリ
スリ物錦畫一二種アリ畫本アリ

北 大坂ノ人
畫譜アリ

斗 墨 櫻 名古屋ノ産
畫本ヲ出ス

北洲 大坂ノ産
錦畫ヨミ本アリ

其他數百人板刻の畫をかゝるものは爰に載せずしかれども僅に刻本を畫し人は洩たるものあるべし(北齋ハ俳諧ヲ好ミ川柳狂句ヲヨクス)傳に曰爲一翁は曲畫を善す(升玉子德利宮スベテ器財ニ墨ヲツケテ畫ヲナス左筆モ妙ナリ下ヨリ上ヘ書キ上グル逆畫ヲカケリ中ニモ爪ニテ墨ヲスクヒカク畫ハスグレテ妙也筆ニテ畫タル如シ畫ク處ヲミザレバ其實ヲシルベカラズ△刻本ノ春畫ヲヨクカケリ一派ノ風アリテ情深シ)彩色に一家の工風をこらして一派の妙を極めたり總て總身に畫法充滿したる人にて一點の戲墨も書をなさずと云事なし稀代の名人なり倭漢の畫法に委し骨法自ら宋明の筆意あり

て尋常の書風にひとしからず真を寫すに一家の筆法
 畫體悉く異るといへども能其真に似たり(狩野流ニ
 テモ似テ似ザルヲ書法ノ第一トス畫中不全シテ畫ヲ
 ナスヲ以テ善トス)自ら云數年諸流の畫家に入其骨
 法を得て一派の筆法畫道の業に於て筆をこゝろみ得
 ずとせざる事はなしと云り香具師の看板畫より戲場
 操の看板油畫蘭畫に至る迄往々新規の工風を畫き刻
 本の細密定規引きの奇巧なる一家の書法を起せしは
 尤妙なり他郷に至るも畫者皆門に入て業を學ぶ京師
 浪花は悉く翁の書風を學びて名を改すといへども門
 弟にならぬはなし(爲一翁轉宅スル事一癖アリ數十
 ケ所ニ住ヲカヘル)浪花發市の繪本を見て世にする
 ところなり紅毛よりも畫を需に應じて二三年の間數
 百枚を送りしかば蘭人も大いに珍重す故有て是を禁
 せられたり天保の今に至るまで六十餘歳筆法少も衰
 へずいよゝ老年に及び筆に潤あり近年錦畫を多く
 出せり(諸國の山水、花鳥盡し、三十六富士、百鬼夜
 行、流球八景、瀧盡し)肉筆彩色は他に勝れて見事な
 り珍敷畫法多く世にしるところなり別に爲一翁が畫
 傳を誌す委しくは其書を見るべし

○辰齋
 俗稱 居
 號

摺物中本の讀本等を畫たり北齋辰政と云し頃の門人
 なり狂歌摺物并月並の詠草挿畫等多し此人の筆なり
 錦畫讀本は不畫

○戴斗
 文化文政
 ノ人

俗稱 伴右衛門 遠藤氏(小笠原家浪
 人也)
 始メ北泉 居住麴町平川町天神前ニア
 リシカ後不知

北齋の門人なり名を譲り受て二代目戴斗なり畫風師
 の筆法を能く學び得たり眞偽やゝもすれば不知浪花
 の刻本を多く畫り(犬北齋ト云カクトコロノモノヨ
 ク似スルヲ以テナリ)

武者鏡(板元浪花) 繪本(同上)

二代目
 戴斗畫譜

小紋雛形

其他讀本類七八種あり枚舉すべからず

○蹄齋北馬
 文化文政
 頃ノ人

俗稱 有坂氏 居始神田後下谷三筋町
 號 江戸ノ産

北齋に書法の業を受けて狂歌摺物畫を多くかけり讀本
 の密畫に妙を得て數十部の板刻本世に行れて人の知
 る處也左筆の曲畫をよくす後落髮す(川柳風の狂句
 もよくす)繪本三國妖婦傳は玉山が繪の大本よりも
 二三年先に賣出せり平家物語鎌倉見聞誌(星月夜顯
 晦録)の類軍書の畫入もの多し(高井蘭山編)新著の
 讀本は枚舉するにいとまわらず(門人逸齋遊齋等
 多クアリシナリ)畫風に一派の筆意ありて後には土
 佐の繪を慕ふ趣など多く畫り師の畫風とは大に異な
 り

○魚屋北溪
 文化文政ヨリ天
 保ノ今ニ至ル

俗稱 初五郎 居始四谷鮫ヶ橋後赤坂

永井町代地

號 拱齋 葵岡(姓氏ノ如ク用フ)江戸

ノ人也

始めは狩野養川院門人にて畫を學び後北齋の弟子と
 なりて浮世繪師となる四ッ谷の魚屋なり仍て畫名の
 傍に誌したり摺物畫は勝れて妙手なり北齋の高弟に

て畫法能く師の則を得たり讀本張交の錦繪等有り役
 者美人畫はかゝる彩色の密畫は名手也門人多し(彫
 刻の畫になければ名不知)

筆の花(鬼武作) 三冊 美少年録二編より(馬
 琴作) 吉原十二時畫(六樹園作)彩色摺江戸名所

附

○岳亭春信

俗稱 斧吉 江戸青山ノ人(狂歌ヲヨ

クス窓村竹ノ門人也堀川太郎春信ト云

リ)

號 八島定岡ト云

北溪の門人となり狂歌摺物草双紙讀本等を畫けり

○柳川重信
 文化文政ヨリ天保
 三年歿ス年二十餘

俗稱 本姓鈴木氏ノ男 江戸ノ人也

號 雷斗 居始本所柳川町後根岸大塚

村

北齋の門に入て畫法を受けて北齋の娘を妻とし聲とな
 り雷斗の名を續て(始メ居ヲ本所柳川町ニ在シユヘ
 柳川ヲ以テ姓氏ノ如クニセリ)板刻の密畫に妙手な
 り師の畫法をよくせしが一派の風意を畫り彩色畫は

畫風大に異り浪花の玉山か筆法を慕ひ亦國貞の浮世繪を似せたり草双紙を多く書り(柳亭種彦初テノ作重信初テノ畫京一番娘羽板西村與八板文化四五年ノ比ナリ)讀本も書けり(柳亭始テノ作奴ノ小まん)中本「文字手摺」大本「山崎平八ト云書林板元昔人形」草双紙讀本ともに大に世に行れて數十部を發市す一家をなして世に重信風と云ふ浪花に至て用られしが僅にして歸郷す常に人形細工上等製作に奇巧ありまた南嶺が草畫の筆法を書り天保三年十一月歿す門人重山續て其業をなせり

按るに重山は師重信の聲となれり馬琴作の俠客傳二篇五ノ卷の末二丁重信病おもりし其時重山續て畫しものなり(初篇は英泉畫ナリ八犬傳重信英泉兩畫ナリ)其他讀本あり彩色摺にて藤ばかりと云畫本あり(麴町衆星閣角丸屋甚助板小枝繁翁作ナリ)

○菊川英山 文化文政ノ比

俗稱 爲五郎 市谷ノ産 居麴町ニ住 號 重九齋 名俊信 始め父英二に業を學びたり(英二ハ狩野流ノ門人東

舎ト云人ノ門人ナリ板刻ノ畫ハガ、ズ菊川一家ノ浮世繪師也造り花ヲ業トス近江屋ト云)北溪は幼年よりの友なりしかば其畫法を慕ひ北齋流の畫をかり古歌磨歿後して後自立して歌磨の畫風に似せて一家をなし板刻の美人畫を出せり大に世に行れたり豊國春扇と並び行れて浮世美人繪中興一家の祖となり始めは役者繪も書けり(文化三四年ノ頃堀江町ノ團扇問屋故有テ悉ク豊國ノ新板繪ヲ不出一年英山ノ役者畫ノ團扇バガリ出セシ事アリ其翌年ノ頃ヨリ國貞モハジメテ歌右衛門ガ猿廻シノ與次郎ク畫ノウチハヲカキシナリ夫ヨリウチハ畫年々口英山ハ役者畫ヲヤメテカ、ズ美人繪ヲ多ク出セリ國貞ヨリ二三年モ早ク世ニ行レタリ錦畫麴町三河屋傳左衛門ト云繪双紙問屋板元ニテ始メテ英山ノ畫ヲ出シ大ニ賣レシト云歌磨歿シテ美人畫絶タリ時ニ逢シモノナリ)役者畫は豊國美人畫は英山と並び行れ(豊國ノ役者畫ノ上表紙ニ一陽齋ノ畫像ヲ英山畫シ英山ノ畫ニ豊國寄合書キ等アリ交深クタガヒニ懇意ナリシカバ諸侯方ヘモ二人ツ、席畫ニモ出絹地彩色畫モ兩人ヘ命ゼラレタリ年ノ字年菊の字菊織物烟草入ナ

ドヘチラシニ付タルヲ持リ現ニ在リ英山ハ南嶺ノ門人ナリ能ク寫意ヲ學ベリ)草双紙四五種あり(竹塚東子作三馬作大雞塚板元西村是ハジメナリ橋本徳瓶作二三年續テ出たり)讀本は不畫美人浮世風俗は狂言振と不似やはらかに當時の風俗をかき遠國迄も名高き一時の妙手なり錦繪は夥敷開板せり世に知る處也文政の末より業に廢せられて多く板下を不畫門人多し菊川流と改む

菊川英山門人

- 英章 錦畫淺野氏 英泉別ニ
- 英里 錦畫アリ 冬木氏
- 英信 スリモノ畫 多シ安五郎
- 光一 英章 春畫本アリ狂言作者ナリ名章三
- 英蝶 スリモノ畫アリ

其外數十人あれども板刻の畫をかゝざるものは爰にのせず 因に云英山は畫才あれども讀本草双紙を畫く事には甚疎し十返舎一九作の貧福論のさしるは此人の畫なり草双紙も徳瓶が作の姉川頭巾と云し

双紙の畫は豊國の人物の中に自己が女畫を書加へしゆへ其頃評判もよかりしゆへ北齋も是に倣て畫し草双紙よみ本多くありしなり

○英泉 文化文政ヨリ天保ニイタル

俗稱 善次郎後里介 居住江戸數ヶ所ニ 轉宅シテ住所不定始番町後根岸新田村 姓 藤原本姓池田氏 江戸産池田氏男也 名 義信一ニ茂義 號 溪齋 一號一筆庵 別號无名翁 可候 戲作ノ名ナリ戲作ノ草双紙中本 春畫本等アリ

始め幼年の頃狩野白桂齋の門人となりて畫を學ぶ(白桂齋ハ赤松某侯ト云ヘリ狩野榮川法印ノ高弟也)後獨立して浮世繪をかけり(國春樓又北亭ト云リ)青雲の志ありて仕官に在りしが壯年にして流浪す從來宋明の唐畫を好み書を讀の一癖あり通宵眠る事を忘る戲作を樂みとして近世草双紙中本春畫好色本を多く出せり(薄彩色摺ノ春畫ニ工風セリ畫作ノ枕文庫勝レテ行レタリ)當時流行の繪風に倣て浮世美人繪

を多く書き一時大ひに世に行れたり北齋翁の畫風を慕ひ畫則骨法を受けて後一家をなす青樓(新吉原を云)遊女の姿を寫すに委く其家々の風俗視姿を畫くに役者の狂言振に似せず時世の形骸を新たに畫しは此人に起れり近頃國貞も傾城畫は英泉の寫意に似せて畫し者也役者畫はかゝす浮世繪師の見識を慕しと見ゆ草双紙合卷中本繡像讀本數十部を畫く此人僅文化の末より文政の間大いに行れたれども筆する處の讀本錦畫彫敷板刻せり(團扇畫モ多シ近世藍摺ノ錦畫ハ此人ノ工風ヨリ流行ス)京大坂の書肆より讀本多く出版す三都の刻本を江戸に在住して畫しは北齋と此人のみ也門人も多くありし

浮世畫譜書手 自初編至十篇 尾州名古屋本町

一丁目書林東壁堂永樂屋東四郎板

容艶畫史美人畫ノ畫則也 江戸書肆合刻

錦袋畫叢諸職ノ畫手本 大坂心齋橋博郎町北へ入群玉堂

河内屋茂兵衛板

繪本初心畫譜 馬喰町二丁目西村屋與八永壽堂

書本 芝神明前甘泉堂和泉屋市兵衛板

此他數本あるべし枚擧するに遑あらず別記に出す
溪齋 英泉門人

英春(俗稱大木氏) 小石川 春畫錦畫多し)

初メ春川英笑(京ノ人也在江戸歿ス草双紙錦畫ナリ)

米花 英之(俗稱源次郎) 麴町 中本讀本

ニ多ク出セリ)

英泉壽(俗稱伊三郎) 錦畫中本ヨミ本多ク

アリ浪花ニ在住シテ名ヲ改ム)

真泉晁(俗稱吉藏) 靈岸島 草双紙錦畫多

クアリ)

紫領 泉橋(俗稱仙吉) 向島 中本多ク畫作ヲ

出セリ筆耕ヲ業トス)

泉隣(俗稱井村氏) 櫻田 中本サシエアリ)

齋 泉里(俗稱彌吉) 麴町 中本サシエアリ)

板刻の畫を見ざるは爰にのせず英の字を畫名とする

浮世繪彫敷あり英山門人と混同す一時の人なれば也

是より漢文

略傳に云一筆庵英泉は星岡の産也父母存在の中は

遠不出(父ハ池田茂晴拔山不言齋ノ門人ニテ書ヲ

能ス讀書ヲ好ミ俳諧ヲ嗜ミ千家ノ茶ノ湯ヲ樂シム
不白杯ト友ナリ)母は泉六歳の時没す繼母なりし
が更に其心なく双親に仕て至孝なり尤家貧しかり
けり文化の始め父は夏歿し母は冬歿す幼き妹三人
を養育せしに讒者の舌頭にかゝり流浪の人となる
水野家に血脈多くして撫育せられしが世のなりゆ
きを歎じ志を廢して浮世繪師となれり戲場狂言作
者初代篠田金治(後並木五瓶也)の門に入千代田才
市の名を續て作者となりしが再畫工菊川英二が家
に寓居す(英二ハ英山ノ實父也△其頃英山行レテ
諸侯ノ召ニ應ジ彩色畫多クアリシガ肥州侯命セラ
レ門人不殘ノ畫ヲ集給フ其列ニ入テ英泉ト畫名ヲ
シルシ出セシヨリ是ヲ名トス英山門人ト云フ始
メナリ)元より名を不好飄々として住所を不定醉
るが如く風を畫き羽子板幟繪を彩り需に従て辭す
ることなし(此頃風ヲ畫クモノハ一日二百文ナリ
シヲ英泉七夕五分ツ、取シナリ是ヨリ以後他人モ
今ニ至テ三夕ト定リシト云職分筆ノ達者ノ人ハ二
人分ヲナス)板刻の畫を半かきて行所を知らず
發客迷惑して行所を尋れば娼門酒樓に酔て死せる

が如し漸に其後を畫て是を與ふ芝金杉の濱に碓屋
六兵衛と云し魚問屋有(是後ニ巴屋仁兵衛ト云ル
板元ナリ)此人從來錦繪其外の板元を業とする
事を好むが故に泉を携て家に養ふ泉衣類を供見し
て出て不歸主人漸に行所を知て尋れば人の衣類を
酒食に換て酔て本性なし虎腹を生ながら蝶蝶カと共
に煎て是を喰ひ猪を好て喰し羽のを憂し下駄をは
き近邊に出しと思へば夜船に乗じて上總木更津に
至る(木更津ヨリ五里程入周准郡ニ池田氏ノ苗家
アレバナルベシ)かゝる放蕩無頼の人といへど
も更にはを不惡人衆の板元のすゝめにより居を新
橋宗十郎町に定めたり食客を集て晝夜門に錠を不
用家主後難を恐れて大いに迷惑す如此の行狀なれ
ども親族他人に金銀を少しも不借只己が業により
其あたへを取て捨る如くに遣ふのみ其後妻をむか
へ子無がゆへに一女子を養ふ是より後人に歸りて
板刻の繪に精を抽て夜を不寢晝夜門外に不出拾有
餘年の間彫刻發市の繪本錦繪衆人に勝れて筆する
事夥く世に發市す爰にをいて一家をなし門人を多
く置て業とするに苦心して志をとげず遺憾と云

べし因に是に記す

彫物大工
○後藤茂右衛門 文化文政天保
ノ今ニ至ル

雪旦ノ子 聖旦 神田
俳名 五樂 江戸ノ人也

始め狩野家の門人なり雪舟の畫風を學びて一家をなす浮世繪にあらずと云へども一蝶の畫風をかき或は唐畫の筆意も能す故に長谷川等伯(始久六叙法眼能州七尾ノ人始狩野氏門人也后自立シテ雪舟五代ト書ス慶長中歿ス)久藏等伯信春子等伯宗也子等的 等林 等院 宗宅 等作(等伯ノ門人ナレドモ畫風各異リ因テ云雪舟ハ僧ニシテ姓氏ナシ雲谷ハ寺ノ名ナリ是ヨリ稱號トシテ門人ニ與ヘシナリ長谷川モ畫法筆意似タルユヘ雲谷トモニ雪舟ノ裔ナリト混同シテ後世ニ誤ルモノナリ)是等の畫裔を續しものなるべし畫法一家をなして板刻の繪本多し
江戸名所圖會勝れて能く畫けり摺物繪に草筆の物等多く畫り一派の名手なり

雪旦 男ニ雪堤アリ

按るに東都に雪舟の畫裔と稱るもの多し川島雪亭(田安侯ノ畫師ナリ雪舟畫孫ナリ雪舟ト少シ異ナ

レトモ名手也寛政頃ヨリ天保ノ今ニ至テ存ス市ヶ谷(三住ス)亦櫻川秋山と云人ありし(天明寛政の頃ノ人也雪舟ノ畫孫ト稱ス)本郷に住す(畫則モ冊ヲ板刻シテ畫論ヲ出セリ)長州侯の藩中に雲谷の畫裔あり當代は不畫學といへり町繪師に堤等琳と云ものあり雪舟十三世の畫裔と稱す畫法大いに異り別に記す各混同して誤傳ふ其他諸國に雪舟流の畫を慕ふもの有り自立して其畫裔と稱す元祖雪舟(雲谷軒等揚)稀代の名畫なれば其英名を慕ふ故に類族多きものなるべし(佛家ニヤ、モスレバ空海ノ作佛惠心ノ作佛ト云フガ如シ佛師ヲ業トセザレバサマデ世ニ多カルベキイハレハナカラン名所古跡ニ義家ガ守本尊手植ノ松頼朝ガ腰掛石ナド人ノ知ル高名人ヲ以テナヅクルガ如キ類ナラン)此雪旦翁は一派の妙手なり俵屋宗達光琳の筆意に倣て畫しものあり明畫躰に寫し山水なども見ゆ其善きを採て畫くは名人の所爲なり浮世畫に列するものにあらずといへども板刻の畫多くあれば姑く爰に載す法橋玉山杯の類なりと云ふべし

○泉 守一 寛政享和文化
中歿五十餘歳

俗稱 吉兵衛 泉氏 居本郷一丁目

號 壽香亭 江戸ノ産也

目吉ト稱ス 俗中ノ渾名也

始めは古等琳の門人也後狩野探信門人とりなり守の字をゆるさる町畫には可惜の名筆なり武者畫をよくかけり父は泉義信と云し狩野流の門人にて畫工なりし俗稱の目吉を以て畫名とす本郷の一俠客たり能狩野流の畫法を學び墨繪の雲龍鐘馗の繪に妙を得たり戯れに摺物畫花鳥の團扇繪等を出せり泉吉兵衛は諸社御普請の修葺彩色御用を勤む(日光久能山江戸兩山ノ類)町繪職人の頭なり(齋藤源左衛門請負ナリ)親吉兵衛より二代勤む(三代目吉兵衛ハ門人林之助ト云シ者也實子智女ニテ相續キ業ヲ勤ム)生涯名を不好畫し額王子權現爲朝の圖あり本郷弓町天神の社頭に五郎時宗の額あり湯島天神には童子遊びの圖ありし是も額なり其他多し門弟に泉鐵あり號壽川齋と云能師の畫風を學びたり

○堤 等琳

號 深川齋 江戸ノ産也 叙法橋

二代目等琳の門人なり雪舟十三世の畫裔と稱す一家

元名翁隨筆

の畫風骨法を自立して雪舟流の町畫工を興せしは元祖等琳を以て祖とす安永天明の比より此畫風市中に行れて幟畫祭禮の繪燈籠は此畫風をよしとす當時の等琳は畫風筆力勝れて妙手なり摺物團扇交張の板刻あり仍て此に列す筆の達者尋常の板刻畫師と時を同じて論じがたし
淺草寺に韓信の額あり秋月と云し比三代目等琳に改名せし時の筆なり今猶存す雪舟の畫法には不似異りといへども彩色骨法一派の筆力を以て三代とも名高し畫く所の筆意墨色の濃淡絶妙比類なき畫法なり未京大坂に此畫風を學ぶものなし門人あまたあり繪馬屋職人幟畫職人提灯屋職人總て畫を用る職分の者皆此門人となりて畫法を學ぶ者多し門人深遠幽微の畫法を得てせず筆の達者を見せんとして師の筆意の妙處を失ふ者多く其流儀を亂せり世に此畫風をのみ町繪と賤めて職畫と云は歎かはしき事なり雪山は貝細工等種々の奇巧を造りて見物させし事有(大坂下り中川五兵衛籠細工ノ後ナリ)諸堂社の彩色も多く此人の請負にて出來せし所有(堀ノ内妙法寺ドブ店祖師堂玉姫稻荷其他多ク見ユ)近世の一豪傑なり

○サクラ三光櫻井秋山の父

堤等琳 元祖俗稱孫二 堤流元祖

堤等琳 二代目俗稱吟二本姓月岡ハンウ

門人孫二 雪峯俗稱雄子定 二代孫二 俗稱筆安

目吉 等舟 霞山日本橋中通リ 派テ書ク妙手也

秋月

等琳 三代目別記アリ 法橋雪山深川路

等川 等ケイ

秋琳 春扇也 等明 秋月 始等船 等榮 茅場町

月榮山 淺草 等場廻 雪櫻 本町一丁目日本宅

无名翁隨筆終

新吉原略説附玉菊考

今の吉原を新吉原といへるは元吉原に向へてよべる稱也此地の古名は千束村也(上千束は今の龍泉寺町也)中千束は吉原是也下千束は田圃の慶印寺邊也)元吉原は元和三年丁巳三月より始まりて全くなれるは寛永三年丙寅十月なり其後明暦二年丙申の初めに至りて(元和三年より是まで凡四十年なり)大江戸の繁榮いふばかりなく日々月々にいとにぎはしくなれるまに(一)かゝる遊女町の市中にあらんこといかくなるべきとの仰せありて同年十月所替仰出され其代りとして淺草寺のうしろなる日本堤の邊りにて地を給はり引料金壹萬五千兩下し給はる(ひと小間に金十四兩ならしな)元吉原は廓二丁四方なりしを此度は其五割増にて二町に三町の地を下されたりされど田井あらたに築立家居造るべき事始めせしかど同三年丁酉正月十八日のことなるに大風しきりに吹起り未の刻計りのことなるに本郷丸山なる本妙寺より火もえ出ひたぶるに焼ひろごりて江戸市中大か

たに焼たりしが元吉原も此火にてなごりなく焼亡せりよりて日本堤へ引移りのことも姑く其沙汰やみにき同年六月の初に急ぎ代地へ悉く引移るべき由仰せありまかれども其家作なり終へん中其邊今戸村山の宿村鳥越のあたりにて百姓の家に相對にて借屋いたし商賣は己がまに(一)せよと有ければ元吉原の遊女屋残らず山谷に引うつれり(此時山谷にて借家したるが今の假宅の權輿なり其由委しく下にいふべし)是れまでは晝のみ商賣せしを此山谷の假宅より新吉原へ移りて後も晝夜御免し有りけり(今遊女の片仕まひといへることもむかしよりありし此里の定め也)かつ其頃江戸町中に二百軒餘ありし風呂屋(風呂屋といふもの始めを思ふに天正十九年の頃伊勢與市といひしもの錢瓶橋のほとりにせんとう風呂を一つ立る風呂錢は永樂一錢也みな珍らしきものかなと入たるよし今は町毎に風呂ありとそゝる物語に見へたり是れや風呂屋の起原なるべし)を悉く禁止せられたりとなりさて此山谷の地へ遊興に來るを山谷通ひといへりいづれもみな編笠をかたむけ扇を鼻にあてなどしてぞめきけり其後も猶まかぞ有しされば

田町又は五十間道の茶屋(明和の火災以前までは五十間道の片側に十軒づゝ左右にては廿軒ありし今も細見記に編笠茶屋の部あり)に編笠を釣り置遊客是をかぶりて廊中へ入る事なりし(其頃貸編笠と云は茶屋にて焼印を押たる編笠を貸たる也是はひたすら客の面をかくす爲めのみならず夜の客は茶屋船宿より挑灯を提て案内すればその挑灯を印とすれどもひるの客は挑灯なき故編笠も何れの茶屋の客也といふ目じるしとしたるなり元より大盡のきるものにあらず明和のころよりひるの客まれになりて貸あみ笠も廢せしなり)若人等は白柄の刀白革の袴白き馬にのりて往かふを風流のこととせり當時所々より山谷への駄賃附に日本橋より大門まで並み駄賃二百文馬奴二人こむろぶしうたふかさり白馬駄賃三百四十八文なりとしるしたり又明暦の小歌に春の日のいとゆふわけて柳たをるはたれくそ白き馬にめしたるとのごよとうたひけるよし白馬を好みし證とすべし(此小うたは白馬驕不行章臺折楊柳と云唐詩の意なるべし)今淺草寺の境内に馬道といふ名あるも山谷へ馬にて通ひたる名殘也とかかくて同年八月の

初新吉原の家作出てきにければ何れも廊中に引移り己が家々にてを商賣をいとみけり江戸町一丁目同二丁目京町一丁目同二丁目角町この五町は元吉原より有し町々なりまかるを其町々の中こゝかしこに二軒づゝありし揚屋のつを同し所に移して別に揚屋町といふを取立たり堺町といふは寛文八年戊申三月江戸端々に有し茶屋遊女持七十餘人のもの來り住めるなり伏見町は堺町出來りし時新たに新道を作りて伏見町と名つく其故は此所の年寄たち多くは生國伏見のものなるをもつてなり新町といふは京町二丁目のこと也後にまか名附たり此外中の町(大門口より水道尻までの大通りなり)西河岸(揚屋町の河岸をいふ)羅城門河岸(新町角町のかしをいへり)天神河岸(水道尻をいふ)待合の辻(江戸町二丁目二丁目の角をいふ)昔遊女の此所にて客を出迎へ待居し所なるをもつてなり)肴市場(角町のかどをいふ)水道尻(世に袋町とも云此水道尻に紀文か事をいへるものは附會にてひがごととなり元吉原より有し地名なり)昔大門口の傍に一株の松ありこれをかごづけの松といへり思ふに遊客の此松の木の本までかごにのり

來りてこゝにをりしをもて其松をやがてまか名附しなるべし(大門より内醫師の外は駕籠にて乗入るをゆるさざる掟昔より今にしかなり)今は此松のあとかただにしろものなしそは度々の焼亡によれるものにやあらん昔の家作りのさまを思ふに明和五年戊子四月五日の焼亡のまへまでは江戸町に巴屋といへる遊女屋ありしよし(寶暦の初年十二灯燈といふ小歌はやりしがその文句にめぐる紋日の巴屋ともへ豊山といへるは即此巴屋の事也明和の始に家斷絶したりとぞ)此家のみは外の遊女屋と異にして至て能相なる見世つきにて有し其頃より大上總屋天満屋などばかりは見世のうしろ格天井のごとく光りて美しかりしが巴屋は長押をも付けず見世のうしろも常体の障子を切ぬき格子の外の方に三尺の格子戸のひらき有て其中に及一人居たり入口もせまく奥へ長くはるか奥に紋もなき短き暖簾かけてあり見世の正面に差徑し六七寸ばかりの黒き三つ巴の紋を額のやうに掛置きたりといふ古風なる見せなりとみな人云しとか昔はすべてかくの如くなりしなるべし中の町の茶屋の二階も明和焼亡まへまでは惣格子なりし二

階を取拂ひたるは揚屋にのみ限れることとぞまかるを明和以後たびゝの大災にて次第に家作も花美になりしなるべし(按するに掟證文に家作之儀普請等美麗に不可致段前々被仰渡れ有之候間急度相守別て三階体の家作不仕金銀之張附同減金かな物等無用に致可申事但家作三階体之儀は此節早々相直軒高さ壹丈八尺に限其餘高き分追々修復之節相直し可申と見へたれば故らに美麗且高大に作りまうけし家もありけるとしられたりこれは今の御定めなりける)さて今焼亡の度毎に假宅とて他所に借屋して商賣することとは山谷の假宅に始るといへども其後過半の焼亡も有けれども他所に出ることを見ずそのよしは延寶四年丙辰十二月七日焼亡に過半焼にけれど假宅の事なし同六年にも焼亡したれど此時は廊中へ假宅をまうけて遊客を迎へし也(洞房語園のきてう物語にころは延寶六年吉原類焼のみぎりにて家作もいまだ出來不揃桐屋が家もひと家にて客あれば局にてもてなしたりと見えたり)まかるに明和の焼亡には廊中残りなく焼たり此時山谷今戸並木橋場邊に假宅をかまへたり(思ふにこれまでの焼亡は不殘やけざ

りしがゆへにやありけん)これを今の假宅の始めともいふべし此後は焼亡毎に必しも他所の假宅を願ふことにはありけりまかはあれど他所の假宅は元私願にて公の御定めにはあらざりしなり(控證文に假宅の事をいへる條に吉原内にて渡世致し可成丈外町假宅渡世の義は御願不申上様可致候事と見えたりかへれば焼亡毎に假宅すべき掟にはあらざる事をしるべし去文政七年甲申四月三日京町二丁目より火出て焼亡せし時に江戸町一丁目扇屋宇右衛門同二丁目丁子屋とみ此二軒のみ焼跡に假宅をしつらひ商賣したりしをいとめづらかに云へる者も有しが元よりまか有べき事にこそ)廊中に遊女見世をはり居けるに今もすがゝきとて三弦ひきけるが昔は小唄などうたひつれたり(大盡舞になん／＼たるすがゝきにかんかんたるかひて衆か云々いづれとんとや驚の首をりを長くしてぞめくなり太夫格子もはん昌に散茶うめ茶も賑かにもんし／＼とよぶ鳥といへるをもて其頃のありさま思ひやるべし此うたひものは二朱判吉兵衛作にて享保元文のころのあかしとするにたれり)第一の遊女を太夫といへり(太夫といふ稱は元吉

原よりありし稱呼なりし)一會の價銀八十四匁なりまかるに文金行はれしより九拾匁にのぼしたり(此太夫ありしほどは揚屋もあり太夫は必ず揚屋へよびてあふべきものなればなり享保の頃より太夫すくなくなりて揚屋も亦減せり)此後太夫やうやくに行はれずして寶曆明和に至りて絶たり太夫の次を格子と云夫より下りて局といへるあり(この後局の品をわかつて五寸二寸一寸など云りこれは切れを賣るといふ心なり)散茶うめ茶といへるは寛文以後に始まり江戸はし／＼の茶屋に遊女あまたかくれありしをこと／＼く此里にうつしあつめて其品をわかつたん爲に名づけて散茶といへり其後(貞享の末元祿の始め)五寸局をひと所にあつめさん茶になぞらへて埋茶といふもの起れり(其始は散茶うめ茶各つとめの品ことなりしかども近年はそのきたに及はず)昔の風俗を思ふに遊女はすべて紅粉おしろいといふものをむさきこととし揚屋女郎の薄化粧だにあげやふうとは云ながらいやしきことにいひなしたり髪は兵庫に引結びあらくしにてすきあげ爪紅つのかへしの草履地女と違ひきれいなるを女郎とせし也まかる

を享保のころは木の塗櫛をさし其後いく程もなく朝鮮鼈甲の櫛笄をさしけるが寛延の頃より象牙に蒔繪したる櫛笄行はれたり寛政中に至りてはみな眞の玳瑁さゝぬはなかりしとぞもと櫛一枚笄一本簪四本耳搔二本の外多くはさゝせまじき定めなりけるを後にはみだりに夥しくさしよそほふことになりて又々櫛二枚笄かんざし耳搔とも七八本にかざれる由(大黒舞にうたひ初めにさしたり)女郎衆のかんざしといへり(定られし也衣服も昔は(享保以前)今の如くいかめしきものをのみ好まず常の女はぬひ箔光る小袖をきたるゆへに遊女は無地もの縞類をきたり又家に居る時は打かけをもきれど外へ出るには帯をのみしめたり是れ常の女と風俗かはるべき爲也享保寛延の頃までも猶縮緬羽二重などを多くきたりといへりこの後錦繡をもて粧ふことゝなりしは近頃の掟にも古來の通りいづれの品にまれ紺屋染のみ用ひ金銀の糸入たるはさらなり摺箔やうのものもいましめられたり扱此郭の中一とせの中何くれのわざありていとこと繁きものから其昔しと今はいたく異なり今其一二をいはず正月はことに賑はひて松の

内のありさま筆にも及びがたしといへり早春には家ごとの遊女年始のことぶきを賀し禮にいづそのさまいとしどけなく衣服にはまつけ糸のかゝりしまゝ着する事昔より今にまかなり(蜀山翁の松の内を評して曲中妓者新衣以麻縁縁者今猶如此といへり)大黒舞大神樂人形回し等引もきらず行かふとなり三月中櫻を植ることは寛保元年辛酉三月廊中より願ひ出たりしは中の町茶屋軒なみにせき臺植の櫻を出し置きたきよし願ひたるに其事叶ひさて翌年より初る中の町へ植ることはなかりし七月中の町へ燈籠をとすことは享保十三年戊申七月中万字屋の遊女玉菊が追善に始めて挑灯を出したりしが年を追ひ美を盡して今の如くにはなりし也(玉菊は享保十一年三月廿九日身まかり墓所は淺草光感寺に有りといへど今は尋ねれどもしれず)八朔に白小袖をきることは古來より五月五日は染地の拾八朔には白き袴をきたりまかるを寛文の始め新町に宗玉といへる娼家の夕霧といふ太夫のひと、せ八朔にことの外寒かりし時かねて用意や有けん白き綿入の小袖をきたりしにとりなりもすぐれて能見えければ翌年より夫に

ならひて家ごとの遊女みな綿入小袖をきたりとぞ今に改めずと也同月廊中ねりものを出し仲の町をねり行これを今俄といふ其始は享保十九年甲寅のとし九郎稻荷正一位大明神と官階ありし時の八月祭禮の願にてこの事起れり(近頃までも俄の中は大門口に葉附の竹二本左右に立てしめ繩引はへてありしこれ祭禮の意なるをもてなりと云かるに今日さる事もなしといへり)さて今の有様の一班を窺ふべきものは喜多川歌麿がゑがける年中行事に六樹園が吉原十二時など併せても思ひやるべし廊中の遊女いかばかりかあらん昔は知らず(享保五年の丸鑑にさん茶計にて二千人になんくとあればこれに太夫格子新造禿局女郎を加へなばいと夥しき事なるべし)天明六年丙午に遊女禿を合せて二千二百七十四人あり享和の初めに三千三百七十七人今茲三千六百人とぞ記したる(今茲男藝者二十人程女藝者百六十人ほど有りとぞ)これらにても其彌榮へにさかへ日にましこの里の盛り行を思ひはかるべきこと也かしかくれば今のまのあたりの有様をつばらにしるし盡さば棟に充牛に汗すとも元足るまじくや拙き筆にはなかくくに

及ぶまじきわざ也けり云かるを幸に巻首に良工の畫圖あれば速くさとしあきらめんことこれにまきはあらじされば予か紀したる此畫圖を併せて新吉原の沿革はいと明らかにあらぬべし(圖本)
予一日牛嶋の佛庵翁を訪ひしに翁元吉原の圖を出しにいふ圖説(後)すでに成れり然るに再び思ふにこれに添へる今の吉原の光景をゑがせかつ昔し今の大むねをも記して併せ見ば古今の事一覽瞭然たらん新吉原の事跡を請予が爲にこれをしるせといへり予答けるはおのれもとよりさることをむねとたづねもとむる事なしかつは其地を踏ます其さまを見ず物にまゐるしおけるをのみこれかれ考へわたして少しく其の趣をしりたるまで也聞百は一見にしかず只恐らくは誤謬多からんことを思ふといへども翁猶乞ふて止すこゝに於て固辭すれども得ず終に寓目する所の書に見えたるまゝを参考してまゐるしつけぬ元よりおのれが説とてはつゆだもあらじさかしらあらんことを思へば也畫者有言犬馬最難鬼魅最易と今世人のまさしく行通ふくるわのこをりも書籍のうへにのみつきて記さんはいと嗚呼なるわざ也見ん人をわき

まへてよかし

文政八年乙酉晩夏十三日

北峰 山崎美成識

引用書目

略説の中引用の書名を悉く記さんは見るといともづらはしからんことをおもへば今こゝに統ておく

吉原由緒書

新吉原掟證文

寫本洞房語園

洞房語園

吉原雜記

青樓雜話

古今吉原大全

山口心中筆記

そいろ物語

小歌惣まくり

袖草紙

大盡舞

鴉鳥集

吉原丸鑑

櫻鏡

金龍山淺草寺千本櫻

讚嘲記

青樓年中行事

色音論

江戸名所記

江戸鹿子

江戸惣鹿子大全

増補江戸咄

繪本江戸土産

温故名跡志

再版温故名跡誌

江戸志

淺草志

むさしあふみ

南北燒亡記

玉露叢

事跡合考

むかし物語

塵塚はなし

後昔物語

芋野茗談

俗耳鼓吹

我衣

近世奇跡考

瓦礫雜考

江戸浅草

浅草

遊女玉菊之墳記

是は新吉原角町中万字屋に有し遊女玉菊が墓也此妓節操ありて世を早くせし事跡は普く人のまねることなれば茲にいはずまかはあれど今の世吉原にて盂蘭盆の燈籠は玉菊のひとり輝くものから彼しるしの墓所とふものだにあらぬを憐ひてこたび石をつくるひ鬘の法名幼波といひしをも配してかくものするにぞありけるこの淺草光感寺現往上人を泰譽といひ兆域つくるひ補ひしものを玉地の千里といひ石としら

碑陰

梅塙嘗探玉菊墓得

諸木院龜頭捨財購

石刻字頗有應募人

今録所由以結西遊

新吉原角町中屋の遊女玉菊といひしは寶永の初情

事によりながら頗節操の聞えありて自盡せしを人もあわれびて中元の燈を家々にかゝげ水調子といふ淨瑠璃を竹夫人が作りて追薦せしにまばら靈あらわし、ことありとおのれがは、のおはし、日は人も中万字やの樓上にてかの追薦の淨るりを物すされば必怪異の有となん深く忌む事也しをおのれ幼き時母のかくものがたり給ひしを耳にき、はさみ居しが今はかゝることだにしらぬは世の四相のさまと思へりしもいつか忘れたるがごとしむ月の末隅田川の雪見んとて舟出せしかへるさかの万字屋に遊びし後朝雪もはれ春のけしきもや、催せる折から卯時の飲など人々となすにとなといへる河東の淨るりに熟したるをむかへて何おもはず中万字屋といふ名のみ

なる事さへたすねものして村岡といへるが石を購求し字を刻し生野生はか所石をたゝみ芝草植て莊嚴し其忌辰には現住の僧侶泰譽上人ならびにさきに淨るり弄せしとな又蘿月といへるもの玉菊が三弦をもち傳へたればそれら携へてまつさきなる八百屋善四郎が家につどひ伊蒲塞の供を設けありし三弦にて又水調子を鼓せしに居まの月いづるまでこれかれ物語し梅塙ははじめよりの發起といひ石碑にことかきつくりしかばけふは文字かきし佛庵老人を待けるによべよりの風あれしかば來らぬにこそなとかたみにかたりあひつゝ泰譽上人の歸らんとする時梅塙

たまゝにきくさへゆかし川竹の

年前までは異怪の事ありし事がたりいだし子のふたつ頃に眠につぐに卒厥とかいふ病ひ起りて息もたえだえ也しかどくすしのまゝにややがて復しつるが能々思ふにはたして夫なりけりとうめかるゝに一月餘り伏枕し佛の御いましめすらもちひるぬ杯中の物もいつとなくうとくたゞ例の念佛のみことゝするに三月廿八日退朝より外へまかりある人の校正せし江戸砂子を見たるに淺草の條下光感寺といふ寺の所に玉菊の墓をしるし京傳などの考をあげて寶永元年甲申三月廿九日死す法名光岸明秀信女とあるに此程の所勞といひ忌辰はそのあくる日にあたるも因縁あるに似たると思ひあすの日廿九日正忌とおもへるものから光感寺に参りて墳墓をはらふにつゆたがはねばおのれいつか此懐をはたして兆域なりともつゝありあらたにせんと思ふに醫官生野生は齡だに三十にたらぬ人なりしがかゝる故事好める癖あるものから物語とひとしく彼寺に往て青苔薜衣よくくはらひくわしく見るに五月十九日にこそあれ三月廿九日はかたへにある玉菊が母といひ傳ふるものゝ忌日也けり又了鬘の幼波童女とおもひしを波は渡の謬

妓の追福とてかの淨なり弄したるに樹林水鳥すら法音をのぶる涼しき御國のはちすいまはひらけぬべければ癡冥執着の妄心かへりて清涼微妙の三昧となることさらに疑ひなかるべしと思ひつゝ日課念佛のいとまにかくかきつゝくるは蛇山にすめる梅塙居士也

遊女玉菊傳

好問堂主人戲編

新吉原角町中万字屋勘兵衛抱の遊女に玉菊といふ有り禿をしけみしのおといへり此玉菊容儀うるはしく其性まことありて情ふかゝりしかば其頃全盛ならぶ方なくことさら愛敬ありて藝者若いものはさらなり茶屋船宿に至るまで常にこゝろくばりのゆきとやかぬくまもなくいとねんごろに詞などかわせしかば知るもまらぬもこの玉菊をほめ心ひかぬかたはなかりしさて明けくれ琴三味線をもてあそびことに江戸節をふかく好み河東節の三弦に堪たりとぞまかるに二十の年心地例ならずしてわづらひしが享保十一

年三月のはじめより再び枕に伏して同月廿九日に享年廿五歳にして(これによりて推すときは元禄十五年の生れなり)竟に身まかりぬ(玉菊傳江戸節根元集近世奇跡考)
按ずるに古今吉原大全云正徳年中角町中万字屋に玉菊とて全盛の女郎あり云々七月の始終に身まかりぬ(北女閨紀原にもおなじおもむきに記したり)まかれどもこれは謬なり奇跡考云享保十三年印本袖草紙(玉菊追善句集)といふものを按ずるに享保十一年三月廿九日身まかりぬ光感寺といふに葬るよし尋ね見るにまかとしれがたしといへり此説是なりしかはあれど猶いは袖草紙は十三年の印本にして水調子といふ河東節の淨るりも此時の追薦に作りまうけしもの也其文句に目もとでひろふのべ紙のふたをり三をり年をへてといへるは三周の忌辰にあたるをもて也されば享保十一年なること疑ふべからず又袖草紙の序に其年の三月廿九日此日いかなるとうよくの日ぞやとあり同書追善の發句に「三月もこれまでぞ花もちりてのけ一漁」といへるをもて三月廿九日忌日なる事證とすべし

おほひし拳まはしといふものを今に藏む甲かけといふものゝ如く黒天鵝絨にてつくり金糸にてかくの如き紋をぬいたり是かの拳相撲に用ひたる手おほひなりとぞ

又水調子の文句に廿五げんのあかつきくだけてきゆる玉菊のといへるは廿五歳にて身まかりたるをいへる也江戸節根元集云玉菊は廿歳の時病氣付けるが神社佛閣へ千度百度祈禱祈念所々への代参上を下へとして醫師は名あるものをかけ少も手透もなく療治をしける時漸病氣平癒ありけるに四花くわんもんの灸事を致すべしと醫師申けるに玉菊申には灸事の内半太夫河東兩人に隔明に淨るり聞ながらすへ度よしこれによりて内證にても此由承知にて日限をきめ摺もの致出せし也此時家内女郎惣仕舞にて仕切不殘打抜ける上るり間に來る人へ吸物酒肴本膳等までも出し馳走ありし也貴賤群集して賑々敷言語にも盡しがたく夫よりのち廿五歳の時又煩付終に草葉の露と消うせぬ(此説による時は勞症などの病にてや死たりけん自盡したりと云事世に傳ふれどまか記せし物なければ信じがたし)

享保年間酒の座興に拳相撲と云ふこと行はれしが此玉菊ことにそのわざにたけたり(奇跡考)
按ずるに此奇跡考云新吉原小田原某玉菊が手に

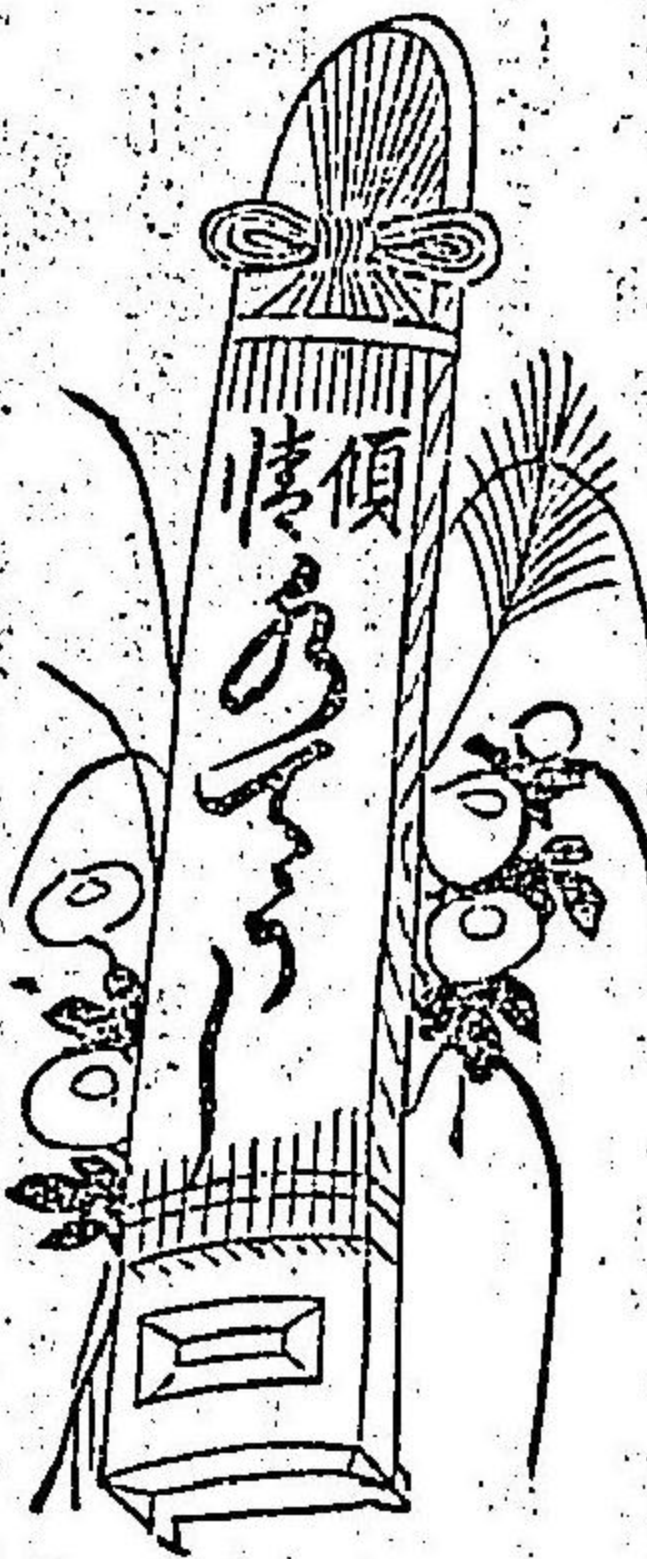
おほひし拳まはしといふものを今に藏む甲かけといふものゝ如く黒天鵝絨にてつくり金糸にてかくの如き紋をぬいたり是かの拳相撲に用ひたる手おほひなりとぞ
享保十三年七月孟蘭盆に廊中のもども玉菊が三周忌の盆なれば其追善をいとまんとて仲の町の家ごとにてうちんを軒に出したり此時十寸見蘭洲の水調子といふ河東節の唄ひものを竹夫人に作りまうけさせ揚屋町なる三絃ひき河榮といふものゝ家にて追善のわざをなしたりそのころ遊女等を始め其外の人人も來りこれが爲に追善の發句を手向などしたるをとりすべて水調子をもくわへ序跋をそへ冊子となし上木して袖草紙と題せり今まれに存すさて此時にてうちんを出したりしが今の燈籠の權輿にてぞ有りける(袖草紙青樓雜話)

中の町茶屋の家々の軒へ箱でうちのすそへ左り巻に青黒の筋を附たるを附ならべける云々



翌年よりきりこ燈籠となり又はまはり燈籠となり次第に潤色して今は大からくりなどにもなりける云々又北女閩紀原に破笠といふ細工人からくり燈籠を又々出せしより年々金玉を鏤め人を感歎さずる事と也たり大門口の茶屋松屋庄兵衛花礫と云もの見物の群來るを見て門へ罽を竹にて結びたりし是又その始めなりといへり世に云傳ふる發句にとらうになき玉菊が來る也といへるは明和五年の刊本俳諧體にいで、東條萬立といふ點者の聞句にて平句なりこの因に記し出でつさて水調子といふ淨るりを作らせし蘭洲と云者は江戸町三丁目つる萬屋庄三郎といへるものなり淨るり作りし竹夫人は岩本乾什といふ俳諧師にて竹夫人は其號也(此乾什が傳は近世奇跡考にのせたり河東節

の文のまた作れり十寸見河東と親しく交りしとぞ)そのことのもとおもふにさきに引用したる江戸節根元集にもいへるごとく此江戸節にふかくこゝろをこめしかばその追善のとむらひにも水調子を作りまうけしなるべし水調子摺物は筆者つる萬屋蘭洲(河東節の鴉鳥集といふ半切本も此蘭洲が筆也)表紙の菊の繪は中村少長(七三郎)なり



菩提所は淺草堂前白龍山光感寺(増上寺末浄土宗)なり法名つまびらかならず(袖草紙玉菊傳)按ずるに光感寺に法名光岸明秀信女寶永元年五月

十九日とある墓碑を玉菊が事なりと本寺にいひつたふれども信じがたしそのよしは初にもいへるごとく年號月日ともいたく違へり奇跡考に已に尋見るにまかとしれがたしといひしを正しといふべきさて此寶永元年の石碑を玉菊なりといひ出し初めはすぎしころ新吉原の桐屋某(梧桐亭などいひて好事のものなり)光感寺へ再三行て玉菊が墓所をたすねけるにかつてまればざりければ住僧にこの趣頼み來りけるに後日彼寺より使僧を以て申おこせしはかの玉菊が墓所見出したりとて光岸明秀信女(寶永元年五月十九日)かたはらに禿の墓とて幼渡童女とまであるを書面にて告來るされど其年月等の相違あるをもてそのまゝに打過したりときいしまかるを今に彼寺にては右の墓じるしを玉菊也といひ傳ふと見えたりおもふに明和九年の火災にあとかたもなくなどやなりけんを寺にもまらで過しを香花手向るものもあらざれば終にその所を失ひしなるべし

今茲さ月友人梅鳩ぬし遊女玉菊が墓をるし再興ありて佛庵翁の筆を染其事石にるり付られし頃さる事有

るとも知らでゆくりなく牛嶋の庵訪ひ侍りしに翁のがゝる事なんあるとて其碑文の摺本を示さる予此時にいへらくかつて玉菊が事跡をこれかれ集め記しおけるもの有しがといへば翁その事跡なんせちに見まほしと促さるゝほどに頼て搜り出て贈りぬ今此記事に附して參考に備ふと云

乙酉五月廿三日

好問堂主人識

遊女玉菊考

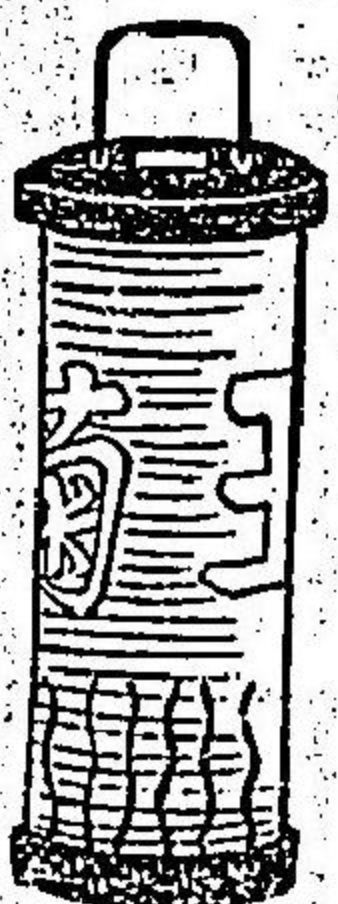
新吉原角町中万字屋勘兵衛抱の遊女に玉菊といへるあり容顏いとうるはしく其性質ま事有て情けふかく其ころ全盛ならぶかたなく殊さら愛敬ありて藝者若者はいふもさらなり茶屋船宿に至るまで常に心くばりの行届かぬくまもなくねんごろに詞などかはししかば知るもまらぬも此玉菊が愛情にめでこゝろひかぬかたぞなかりしさて明くれ琴三絃をもて遊び殊に江戸節を深く好みかつ河東ぶしの三絃に堪たりとぞまかるに年二十ばかりの頃こゝち例ならず煩ひ

しが享保十一年三月のはじめより再び枕に伏して同
月廿九日に享年二十五歳にして竟に身まかりぬ(玉
菊傳江戸節根元集近世奇跡考)

吉原大全北女間紀原等に正徳年中玉菊身まかりし
よしを記すは甚謬なり袖草紙を證とすべし
袖草紙序(竹婦人)云身の上の秋風をはや玉祭る頃に
もなりぬと光陰の挑灯に數句の追善を題しなきあ
までも茶屋の軒をかゝやかすは三子が執慕のつと
めたるべし其年の三月廿九日此日いかなるどうよ
くの日ぞや云々

按ずるに挑灯に數句の追善を題しなき跡までも茶
店の軒にかゝやかすといへるは今茲三回忌なるを
もて發句を題せし挑灯をとせし也玉菊傳に云
揚屋町松屋八兵衛方に青色の挑灯に白く發句をか
き馴染の遊君白むくさげ髪にて此追善に来るとい
へりこれ今の燈籠の權輿にて有りけるそのころ遊
女をはじめちなみある人々手向の發句多かるを
りすべて水調子の上るりをも加へ序跋を添へて冊
子となしたるが此袖草紙なりさて燈籠の次第に今
の如くなりしよしは青樓雜話といへるものに享保

十三年七月孟蘭盆に廊中のものども玉菊が三周忌
の追善いとなまんとて仲の町の家ごとに挑灯を軒
に出したりその時十寸見蘭洲(つる葛屋庄三郎)の
水調子といふ河東ぶしの唄ひものを竹婦人(竹婦
人は俳諧點者若本乾付といへるもの、號也此人
の作れる河東ぶしあき有傳は奇跡考に見えたり)
に作らしめ揚屋町に住める三味線ひき河榮といふ
ものゝ家にて追善のわざをなしたりその時茶屋
茶屋にも玉菊をいとをしみければいひあわすとも
なく家々にて挑灯をともしけるとぞ其後元文元年
には箱でうちんにてすそへ青黒の筋を付たるをか
けつらねしとなり翌年よりきりこ燈籠まはり燈籠
など作り出し次第に潤色して華美になれるといへ
り(以上青樓雜話にこれかれ見えたる趣をあつめ
記)



青樓雜話所載

北女間紀原云燈籠の權輿は云々玉菊が追善より起る
こと世の能くまる所なり玉菊の世にあるころ中の町

の茶屋のものどもにも懇意にて志ふかゝりし故死後
の翌秋の盆にそれが追善とて茶屋に挑灯をともし
軒にかけたり其挑灯赤と青との立筋を付たる箱挑
灯にてありけるとぞ子細ありてその翌年の秋より茶
屋廊ごとに燭臺に作り花をして佛法となす夫より云
々破笠といふ細工人からくり燈籠を又々出せしより
年玉を鏤め人を感歎さすることゝなりたり大門口の
茶屋松屋庄兵衛花礫といふもの見物の群來るを見
て門へ塚を竹にて結たりし是また其始なり俳諧體
(明和五年刊本)東條萬立と云點者の聞句に
とうろうになき玉菊がくる夜かな

又三月廿九日此日いかなるどうよの目ぞやとある
は玉菊が忌日也同書の發句につねにあれとほんのわ
かれち春のはて(ひしやをのささ)

春雨もけふ一日の別れかな 文之
三月もこれまでぞ花も散りてのけ(一漁)などある
をもて三月廿九日身まかりし證とすべし

同書香供養(和專)云願我真淨如香爐たひひとたきの
花がたみをくゆらし墓の邊りの紅麴をはらふに東大
寺法隆寺に尋ずして光感寺と云香はなかりき

按ずるにこゝに光感寺とあるは淺草堂前白龍山光
感寺をいへる也玉菊を此寺に葬りしなり此寺は増
上寺末寺にて淨土宗なるをもて願我真淨の文をと
引用せしなるべしまかれども今玉菊が石塔なしお
もふに明和九年などの火災にあとかたもなくなり
しにや奇跡考玉菊傳等にも尋ぬれどしがたき由
を記したり今光岸明秀信女(寶永元年五月十九日)
とある石碑を玉菊が墓也と寺僧のいひ傳ふるれど
たへてねかたもなき誤にて此墓を玉菊と定めし
はいと近き事也新吉原の茶屋桐屋五兵衛といふも
のは玉菊に恩を請し事有りけるをもて今その無縁
となりたる事をかなしみ光感寺に來りて墓所を尋
るにそれと覺しき墓もなければ住僧へ頼みける
は法名墓碑等此上尋ねくれ候へと申歸りけるに寺
僧もたすねわびて大神宮に闇をうかひ一の碑を
玉菊が墓と定むといふて傍なる一碑を禿の墓とし
て桐屋へ先おこしたれど年月の相違せしをもて其
儘に打過したりとぞされば墓所はさら也法名だ
に傳はらざるはいとはいなきことぞかし又ある人
の考とてきけるは香供養の文に覺樹妙雲の四字こ

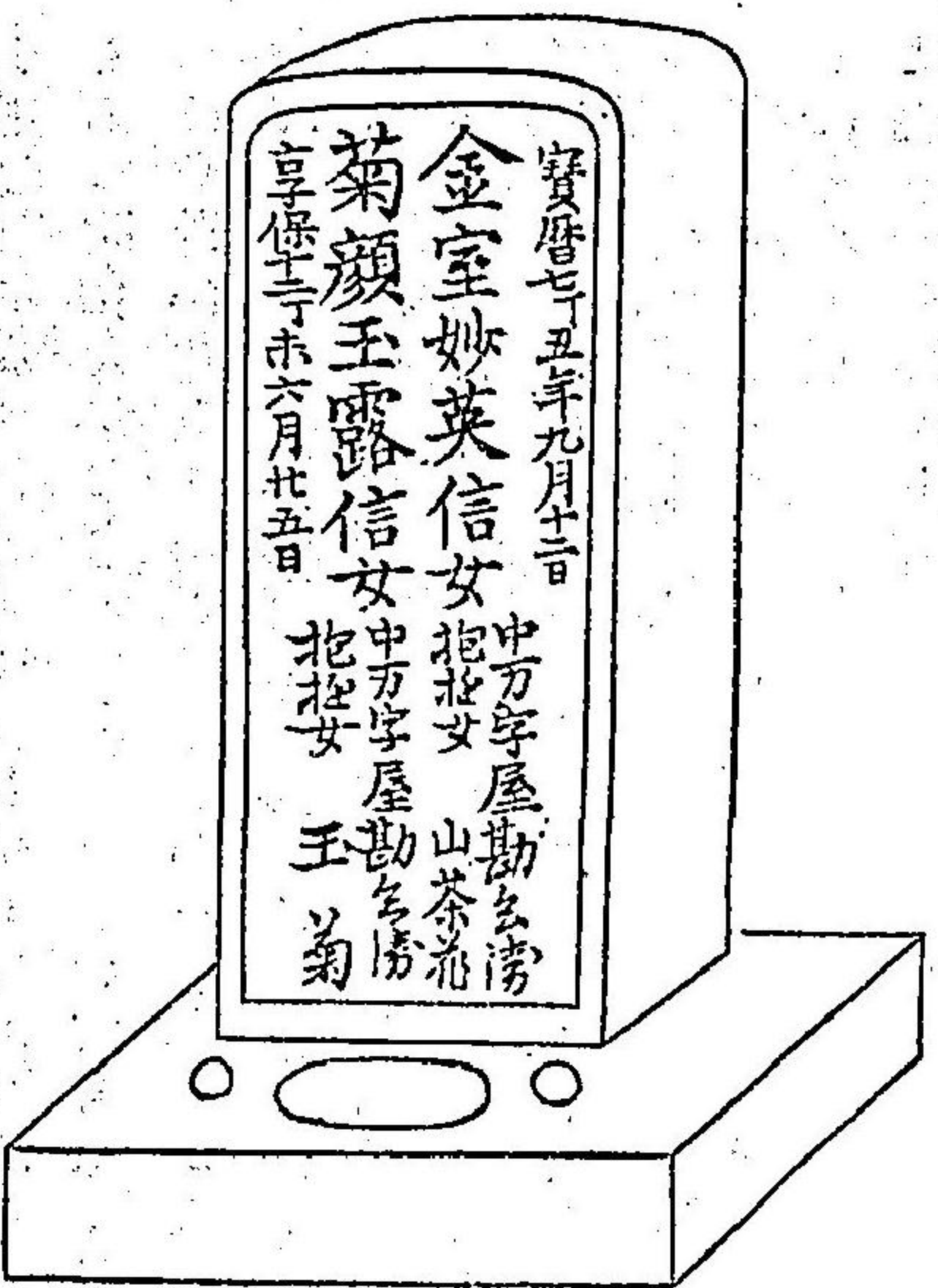
とに大く書たるは玉菊が法名の文字をもて文をなせるものにやといへりこれもゆかしき説にて捨がたくこそおほゆれば左にその文を摹寫す

のかたちをちりすて、はやく覺樹の古木になし果よ一切空無我と去らすや美橘の袖の薫りをふるふてそめいろの妙なる模様をむらさきの雲に行かへ候へしかりの宿をやみせの中川にすはりし姿を忘れて九品蓮臺に手枕せんことをおもへ

なほ思ふに此香供養の書体こゝかしこ大きな文字あるを見れば子母體などいへるものゝおもむき書けるにはあらぬかともおもはれたり

淺草新堀はた桃雲山永見寺(禪寺)に玉菊が墓あり今茲百回忌のよしにて新吉原にても追善有て年ごとに茶屋の軒にのみともせしを今茲の娼家までも細工の燈籠を掛たりさてまた手向の發句あまた有りしを袖草紙を再刻しその末にそへて上木しも、羽がきと題しちなみある人々のもとに贈りしこはもと誰が思ひ起せしわざにや已にいへるごとく袖草紙に忌日墓所まで分明なるを永見寺に葬りしあらぬ玉菊が追

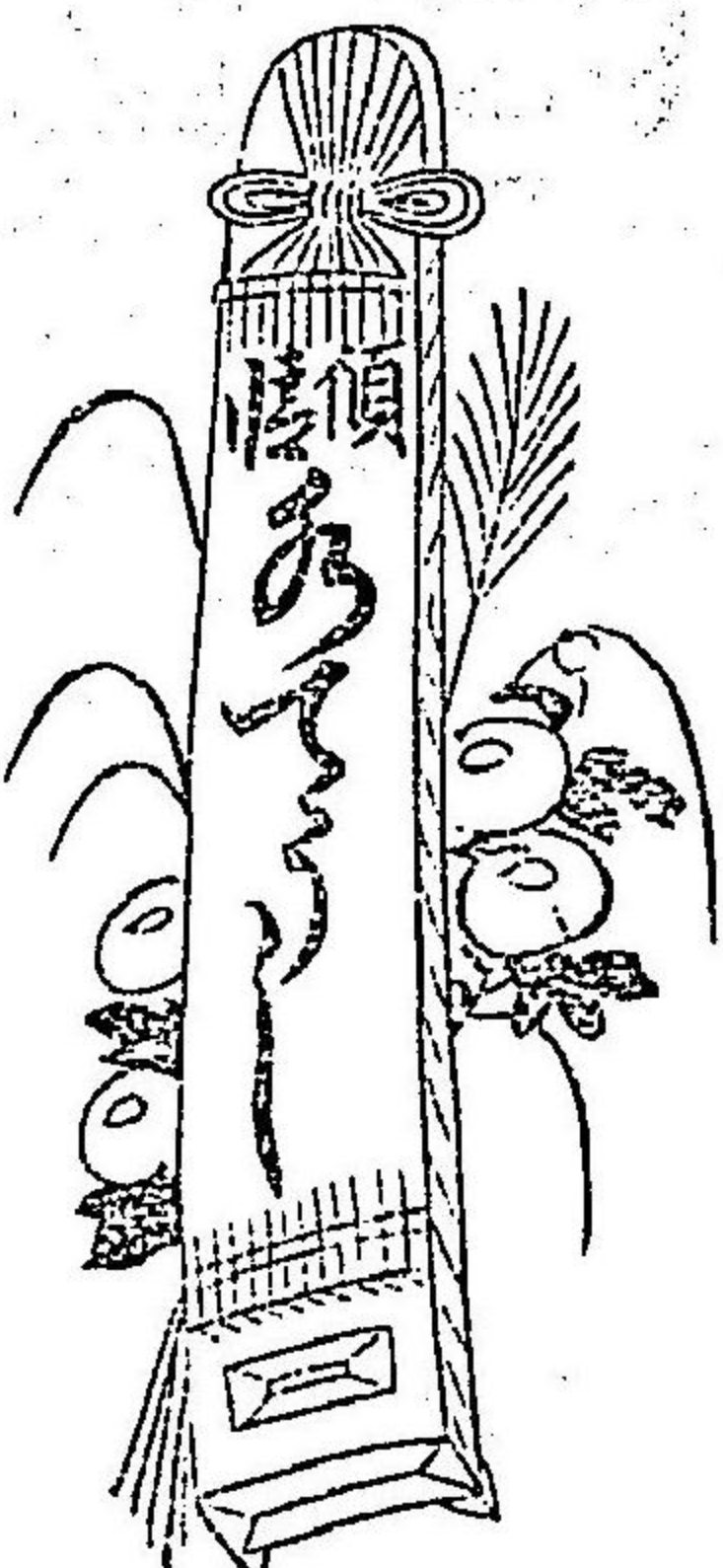
善に再刻したるはいかにぞやまかれども玉菊が名を繼し遊女の年忌にならば似つかはしからぬにもあらねどひとわたりそのよしいわでやみぬべきことかはいかにまれ年號葬地の異なるからは袖草紙の玉菊ならぬは論ずるに及ばず
永見寺墓碑圖



此墓碑は去る年の火災にていたみぬるを新に立てるものゝよしも、羽がきに見えたり文化三年の火災なとにてありしが石碑いとあたらしく見ゆ

蘭洲自筆にて板下を書たりとぞ

世に傳ふ鴉鳥集といふ河東ぶしの本も蘭洲が畫なり



此水調子印本の表紙なり筆者つる葛屋蘭洲(江戸町二丁目にすめり)表紙の繪は中村少長(七三郎)なり玉菊が追善にことさらに河東ぶしの上るりを作りまふけて手向しは玉菊が常々河東ぶしをめで好み三弦をもことに能くせしをもてなり江戸節根元集云玉菊二十歳の時病氣つきけるが神社佛閣へ千度百度の

水調子(竹婦人作の玉菊追善の淨るり也)の文句につばさやすめよかぶろ松しげみにからむしのぶ草しめちからなきこゝろにふたりがむすぶしら露を目もとひろうのべがみのふたをりみをり年をへていふた言葉をしらぶればなくより外のことのねも廿五げんのあかつきにうだけてきゆる玉菊の光りはかりのものながら本來空の唱りにはけふともすべき挑灯もとうろもいらすかきたてすあかしよみせをそのまゝに云々

按ずるにまげみにからむしのぶ草といへるは玉菊がふたりの禿をしげみしのおといひし故なり袖草紙の句に

菊さくにつけて日にまじしけみかなかぶろとふたをり三をり年を経てとあるは玉菊が身まかりし年の新盆ならで三週忌なればなり廿五げんの曉にくだけて消るとあるは享年二十五歳にて終りしをいへる也

本來空のあかりにはともすべき挑灯もとうろもいらすかきたてすといへる文句はこの追善にあづからぬ人々へのあて言也といへり此淨るり摺ものにせし時

祈禱祈念所々への代参うへを下へとて醫師は名あるものをかけ少も手透もなく療治をしけるとき漸く病氣平癒ありける時四花くわんもんの灸治を致すべしと醫師もふしけるに玉菊申には灸治の内半太夫河東兩人に隔段に淨るり聞ながらすへ度よし依て内證にて此よし承知にて日限を極め摺ものいたし出せしなり此時家内女郎惣仕舞にて仕切く不殘抜ける淨るり聞に来る人へ吸もの酒肴本膳等までも出し馳走ありしなり貴賤群集して賑々しさ言語にも盡しがたし夫よりのち二十五歳の時又煩つき終には草葉の露と消えうせぬこのとき嘆かざりし者はなくみな袖をぞしぼりけるとかや

此説によるときは勞症などの病にてや死しけん世に自盡せしといふ事いひ傳ふれど信じがたしかく江戸節を好めるをもて同好のものことにめであはれみしなるべし

享保十三年申三月

角町分左りかわ



玉きく 長さん 玉かしは
くわさん 玉のい
たち花 とこくら 花すみ
清くら 花さく
玉かつら けし山
かうはひ しげ山
やくも 清ふし
花紫 かわてう
玉さし 玉しま

あづまぢ
みほさき

中万字や勘兵衛

享保十八年

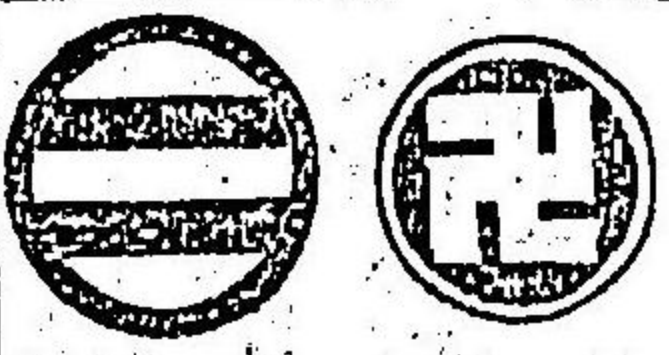


くわさん たいしん けし山
秀小さん 玉しま 初花
れんさん 玉しま 村瀬
同いし時
つみ出し
たまさく ところら はなさと
たまさく 小よし
同いし時 ながはし

寛延三年

瀧澤笠翁所藏

まんし屋おそよ



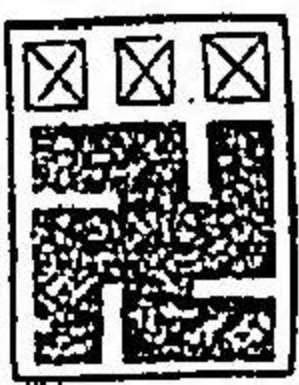
玉さし 玉かしわ
たち花 やまし
やくも しました
そめきぬ
花むらさき
大かく
へうんしう

中万字や勘兵衛

此細見過し頃一友人より得たり卷末半きれて年號欠たりまかれども享保癸丑の兩巴扨言に抜するに玉菊のつき出し及び遊女の名ことくく符合せりよつて今十八年のものと定む

年號しれず

瀧澤笠翁所藏



たまさく 花まつ つまなり
もみち かわてう とよさき
とよら けわさん はなのへ
庄大夫 夕なき まんゆう
吉ち まこと このまぢ
かわせ 山しな
せきぢ かよひち
夕きり 花かつら やりて
うたの介 へきてう かつ

まんし屋とめ

新吉原略説

享保十九寅年

瀧澤笠翁所藏

中万字や勘兵衛



れんさん たいしん けし山
秀たけし 大かく けわさん
玉さく 夕なき まんゆう
同いし時
いなし 山しな
玉きく 玉かしは
花村崎 山の井
たち花 しまぢ
たかまぢ

新 中万字や勘兵衛

二百五十三

屋浦里になじみて請出して名をおゑんとよぶ部屋持也(此茂左衛門弟安左衛門おごりものにしてさかひ町清水屋の二階にて名月の儘又日待の事其外くわしく同書に見ゆ)

按に此奈良茂が馴染し玉菊は何代目の玉菊にや光感寺に葬し玉菊初代ならばこれは二代目ならんか奈良茂は大盡舞にも其名見えて紀文(享保十九年四月廿四日死去法名歸性融相)とかたをならべて全盛をはりやひしものなれば享保の中年に當れり且浮瀬といふ上りも竹婦人(淺草寺境内の辭世の碑に 雪解や八十年の作りもの寶曆九年二月十七日没す)作にて元祖の河東(享保二年に始めて一派をたてたりそのまへは半太夫ワキなり)いつも享保の証とすべし然る時は永見寺の玉菊は奈良茂が馴染し玉菊なるべし兩巴扨言(享保十八年)につき出しかた書せし玉菊にやとも思へど奈良茂が卒年はえらねど紀文没年の前年なればかの紀文とはりやひ遊びし奈良茂といひ大盡舞にさへ(その頃の大盡は奈良茂の君てといめたり新町々にかくれなき加賀屋の名とり浦里の君さまを初め

て是を身請する)已に浦里が客のよし見ゆればかたぐし享保十八年につき出しなりし玉菊にあらざる事といちぢるしもし光感寺玉菊が前に猶玉菊といふ遊女あらばそれとも定つべけれどかれ初代なる時は永見寺の玉菊より外奈良茂が馴染し玉菊にあつべきなし且うかむ瀬の上りの文句大盃の名をいれて無常の趣きをのみむね作りたれば真砂にいふ所さもあるべし猶廓通の者をまつ

丁亥六月廿二日

新吉原略説玉菊考終

劇場新話

目録

- 一 芝居始之事
- 一 役者始之事
- 一 歌舞妓世界定之事附手附證文之事
- 一 嘶初之事
- 一 本讀立稽古惣浚次第之事
- 一 顔見世之事附翁三番叟式之事
- 一 仕初春狂言之事
- 一 芝居年中行事之事
- 一 鳴物合方名目大概之事
- 一 三階稽古塲座并鬘師之事附鬘名目之事
- 一 樂屋惣体之事
- 一 樂屋法度書衣裝藏之事
- 一 本舞臺惣体之事
- 一 棧敷名目大概之事
- 一 表方惣体之事
- 一 芝居割符并殺陣太刀打名目之事

- 一 茶屋の大概并方言の事
- 一 役者給金渡方之事附芝居興行金高之事
- 一 帳元大役なる事附平田初丸が事
- 一 仕切塲の事
- 一 芝居口々差別ある事
- 一 樂屋頭取之事
- 一 千兩役者之事
- 一 女形之事附古人役者氣性色々之事
- 一 狂言作者心持之事附津折治兵衛篤實の事
- 一 座頭之事附柏筵秀鶴の事
- 一 役者昔今流行之事附名人の心得當り狂言之事
- 一 三芝居系圖之事附年數休座等之事

劇場新話上卷

芝居始

大昔の事にやありけん南都南圓堂の前に大きな穴出来て其中より烟夥しく起り天下に覆ひ其氣にあたる者ことごとく疫癘におかされける依之南都の芝の上にて翁三番を舞せ其邪氣を拂ひ退しより芝居といふ名は始りたり今に至りて南都薪の能は故實に任せ芝の上にて行ふ名古屋三左衛門お國歌舞妓の始りは北野の芝原にて興行し又出雲のお國織田信長公の免許を蒙りて則北野にありし人升(人升とは陣立稽古の場所なりといへり)を拜領して興行せしより芝居といふ也甲陽軍艦に曰仕場居は勝軍ならでは踏留られぬものなりと高坂彈正申されたりいづれも芝に居るの心也其後祇園の南林にて執行ひまた其後五條河原橋の南にて興行しけるに秀吉公伏見より上洛の時必此橋を通り給ふに見物群集し妨に成しにより四條へ移されしと也男女打交りの狂言猥りがはしく相聞へしゆゑ御停止と也それより京都にて村山又兵衛といふ役者數度御願奉申上承應二癸巳年三月かぶき物まねづくし若衆交り之儀御高免被成下明歴二丙申年四條河原中橋にて興行今文化の年迄百五十餘年に及ぶすれば上方芝居役者たるべきもの此村山氏の丹精を尊むべき事なるべし又大坂の芝居は寛永の始より若衆歌舞妓とてあり來りしに道頓堀九郎右衛門町の裏下難波領に其頃は傾城町ありけるが此所の傾城どもを多く集め舞臺へ出し踊らせ杯して是をお國かぶきと申たる事也

按するに大坂の芝居今二の替り狂言の大名題いつにても傾城と字を名題の上に置事江戸の春狂言に會我と下に置が如し是は本文の如く寛永のむかし傾城に狂言させたる古風の残りたるなるべし大坂の二の替りといふは江戸の春狂言也顔見世も當年子の年なれば丑の年顔見世といふ顔見世は役者坐付口上計りにて手打連中の手うちあり大手組笹瀬組藤石さくら連四組の手打連中替りく手に打あり衣装など至極立派なる事也顔見世十日の間夜五つ過より始め坐付口上済て思ひ付の狂言二幕か三まくもする其内夜明になる故打出し也夫れ

より霜月廿日過比間の替りとして狂言を出す也夫ゆゑ春狂言を二のかはりとして申習したり

扱此芝居は則鹽屋九郎右衛門芝居なりしが女かぶきの事長く御停止となりける故其後度々御願申上前々の通若衆かぶきの芝居再興相叶ひ今に興行いたす也今の角の芝居は大坂太右衛門といひしが福永屋新十郎是也又大和屋甚兵衛といふ名題ありしが元は鹽屋名題故元へかへる今の中の芝居也斯の如く京大坂の芝居は有來る芝居名題をかり請いづれの役者にても金主方よろしき輩座元を勤る事也依て名題は誰座元誰と記す也江戸三芝居は又格別の違ひにて三座とも元祖より大夫元一名にして惣役者迄も主人と稱す江戸三芝居の事は末にくわしくしるす

役者始り

淡に趙飛燕が名曲あり唐に至て散樂數十種皆以て奏覽す其部に劇優ありて古今の治亂を狂言綺語におやつりて其發頭を孟優と號し明の代清の代に至りても狂言を催せばこそ繪番附も折節は渡れり我朝の昔神代にては火の酢芹の命の弟彦火々出見の命と御位を争ひ海上になやまされて様々に苦しみ給ひし体を

舞にこしらへ其子孫の人だ隅薩摩より都へ登りて禁庭にて舞かなでたるを續日本紀第七三十四に風俗の歌舞とも又は俗妓とも述たり猿樂方の能には面は著れともすぐに白粉丹を顔にぬる事なし火の酢芹の命緒を(赤土の事)掌にぬりてと神代の巻に見えたり今の役者の濫觴なるべし中古もふるき合戦など取組狂言に仕たる考へあれとも是等は士林をなぐさめ時斯波殿において天竺左衛門といふもの六七人の能者を集て弘廂にて狂言盡し仕たる番組今に傳れり近くは永祿の頃に當りて江州の住人名古屋三左衛門といふ人京都北野に於て小舞を覺えたる女を集め説教に合せ舞せけるが出雲のお國といふ風流女と夫婦と成歌舞妓と名付て男女立會の狂言を初め其子孫お國といふを大夫にして五條の西にて興行難波にては大夫藏人といふもの是も男女入交りにての狂言也抑此お國といふは出雲の神子にて女踊りを始め其後嶋田萬吉といふ女名題を始又六條の遊女も芝居能とて興行しける由山城名跡志に見えたり此遊女に教へける家筋を佐渡島と號す然るに男女入交りの狂言み

たりに成しに付御停止と成其後御免許の事前に記す御當地歌舞妓芝居の始りは猿若勘三郎也元祖勘三郎といふものは生國山城にて幼年より此道を修行し御當地御繁昌に付元和中御當地へ下りかぶき芝居を御願ひ申上候處寛永元甲子年二月十五日忝も天下泰平國家長久の御吉例として中橋に於て初て歌舞妓芝居太鼓櫓御高免あり其後中橋は御城近くに依て引地を被下置芝居引移りしなり其節の地所は禰宜町といふ所也

禰宜町は長谷川町横町也といふ一説に今の入形町なり共いへり

又堺町へ移る上堺町といふは今の葺屋町の事也昔は上下と二町ありし下堺町は今の堺町也上堺町は猿若勘三郎村山又三郎と芝居二軒兩側にありて下堺町には彌之助操又は小芝居のみにて上堺町程は賑ひ兼しにより兩町ともに同支配の事故町内相談の上大芝居一軒つゝ上下へわけ度旨御願申上猿若と村山と圖取にて勘三郎下堺町の圖に取當り今の所へ引移る此時堺町名主は帶刀にて近藤喜兵衛といひし由此節勘三郎といふは元祖勘三郎猿若の名人故さるわ

かゝると呼習はしたる故猿若を名乗る也中村といふは藝名にして本名は三間氏にて家の紋所抱澤濁也然るを用ひずして角切角に銀杏を附る事は元祖勘三郎歌舞妓芝居願中或夜の夢に木具の上に銀杏の葉をのせ鶴是をくはへて富士の峰より勘三郎が家へ舞入しと夢見て願成就す依て中橋にて芝居を建し時櫓幕に舞鶴を木戸幕には角切角に銀杏を附しが上様御名の憚りありて舞鶴の紋所を止め櫓へも角切角に銀杏を付る事となりぬ元祖勘三郎より當勘三郎まで十一代也寛永年中御城へ被爲召猿若を御上覽其節金入の装束を頂戴被仰付今に傳ふる也同く寛永九壬申年伊豆國より阿武丸の御船入津の折から元祖勘三郎へ金の廳を被下置則御船の舳先に立て艦拍子舟唄の音頭せし也此廳持傳へ寶とするとかや其節御船手御奉行向井將監様御差圖を以て町御奉行様へ御禮に罷上る此例を以今に於て年始五節句等に御禮に罷出る也但市村森田兩座とも勘三郎願に依て年頭相勤る也慶安四年卯年正月より四月迄之内御城へ被爲召諸藝相勤鳥目六百貫文并青地金入猿若の衣装を頂戴是又此家に傳る也扱明曆三丁酉正月十八日江戸大火之

砌芝居類焼に依て普請の内五月中忝を召連久々打絶し生國の親類を訪んと山城國へ罷上り京都にて暫逗留の内忝も吾妻の猿若在京の趣勅聞に達しおそれ多くも内裡へ被爲召寄りの日の御樂屋は日野大納言様御取持にて既に猿若の所作事奉入欲折節猿若の上帯を忘れたりしに日野様聞し召れ此事なるかと御簾の總角取て被下し故則これにて相勤寂慮殊にうるはしきあまり黒びろうどに三つ柏葉の紋付たる羽織紫すそごの衣裳金糸と銀糸にて薄に露の玉縫たるを下し給はり又勘三郎一子は新發知大鼓といふ所作事十二歳にて勤る幼年にて興がる舞を舞ふこと猶更天機うるはしく見るにあかぬとの御心にや明石といふ名を勅宣下されし誠に難有こと共なり右下し置れし衣装總角ともに代々傳ふるとかやさればこそ此家に

て一子出生し惣領に限り明石と名付る事を規模とす又被下置たる衣装に三柏葉の紋所を則家の紋とすべきが餘り恐多き故家に秘して是より家名を柏屋といふ也扱京都首尾よく同年九月歸府して不相替大夫役三十四年相勤萬治元戊戌年死去す此段役者の始を記すに付勘三郎は三芝居の始なれ

は元祖一人を爰に顯す三芝居系圖并休坐一人巨細の事は末にくはし

歌舞妓世界定之事

此世界定といへる事は顔見世狂言の發端なれば最初に記す抑世界定は三芝居ともに同日毎年九月十二日の夜也むかし寛永年中猿若勘三郎江戸にて歌舞妓御免有て中橋にて初て芝居を建狂言の相談を極めしは九月十三日也夫よりして此日を吉例とし外座にても定日と成し也扱此夜其年の顔見世に抱置たる立役の坐頭女形の立者立作りの作者樂屋頭取表帳元此人數計りを大夫元へ招き當顔見世の狂言太平記平家物語伊豆日記又は鉢の木など狂言の躰を極め或は誰誰を抱へ然るべしやと相談する事也但餘人を交る事なし是を嘶初と心得へたる人あり誤り也勿論坐頭役女形立ものは春狂言の半比より來年の極めありて手附金を渡し置事也此夜出席の座頭女形作者は兼て來年の手附金を渡し置たる者也其外の役者は此夜相談の上極る甚密なる事也然るを近來は金主方の存寄を立る事故此夜金主方立合ふ事に成たるよし此夜座元の宅芝居樂屋口へ挑灯を出す茶屋も同じ扱相

談極たる役者へ手附金を渡す證文は其座によりて少しの相違あれともあらず左之通

手附證文の事

一金何程

右金子之義は當何の十一月より來ル何の十月迄貴殿御芝居え相勤め可申儀定仕候に付爲手附金體に請取申候所實正也然上は無違變相勤可申候尤一ヶ年給金之儀は別紙極書之通相定申候上は外芝居は不及申田舎芝居等決而相勤中間敷候爲後日手附證文仍如件

年號月日

帳元 誰 殿 誰 印

右之趣にて年々相定也但此比に來年外座へ極たる立者女形杯其座の名残に所作事など勤る事あり尤上京の役者も同様也扱惣役者其外離子方淨瑠璃太夫など入替り相定りて役者附の下繪にかゝり出來上りて板行急ぐ事也此役者附は至て六ヶ敷古來は座元帳元狂言作者にて下繪等定し事也近年は時の座頭たるもの彼是と差圖して猶更にむつかしく成たり全体此役者附の事は依怙ひるなき様にすべき事也十月十

日前後に役者附を出す事なりしが今は定りたる日限もなく十五六日に成事もあり先最初に初摺出來の上板元より大夫元帳元へ内々にて差出す是を大夫元より役者中へ配り扱茶屋へより客人へくばりて其翌日町中へ賣出す也此日何方へも一ツ時に出す事に板元殊の外いそがしく配り歩行ものも此日四方へ走り廻り甚闊敷事也尤此役者附をば町御奉行所諸懸り御役人方町年寄組合名主肝煎方へは坐元より差出也依て千枚程は板元にて役摺とて大夫元へ運上に出すよし又是を配り出るもの江戸橋を通る時若衆中に無理に取らるゝ事故甚用心して出るとぞ尤芝居懸りのものは役者附の出來上らぬ前より敷を極め板元へ誂へ置也扱惣役者附出て後入替り役者紋看板芝居表へかゝる近年十月廿日頃に成たる故下にするす

晰初の事

はなしぞめといふは十月十七日也本名寄初といふ三座ともに同日也座頭の立役女形の座頭を始立者分のみ也役者は此寄初に出席する様に成は出世也皆此席へ出るを希ふ事也

但狂言作者筆役は初心のもの迄も出席す其外は中

役者の頭一人稻荷町の頭一人離子町の頭一人其餘は出さる也

此夜役者の迎として仕切場の者袴羽織にて芝居定紋合印の付たる箱提灯を持せて所々役者の宅へ迎にゆく役者の宅にて吸物酒肴を出す此迎ひ仕切場の者計にては不足ゆる棧敷番なども袴にて出る立もの、分は留場の若衆も附添提灯は半燈火繩賣のもの出る也さて右の酒呑居る内に役者は支度をし銘々の紋付箱提灯を供に持せ迎のもの一所に立役は座頭の宅女形は女形の座頭の宅へ寄る也但し役者残らす麻上下女形は狂言立作り同二枚目は裏付上下也筆役は羽織袴にて大概夜四ツ時比に集る也

私曰金の渡り方遅き時は夜半に至る事もあり金渡りの事は末にしるす

扱芝居より雙方へしらせ有て座頭を先に立雙方芝居の櫓下にて出會々釋ありて一同に櫓を拜して鼠木戸より入る木戸の内に帳元金主方並居て銘々に手を打也夫より役者舞臺へ上る頭取案内にて三階へ上る也向ふに鳥臺露の臺三方に三組盃熨斗昆布等の式肴別に白臺に密柑を盛上ヶ飾付大夫元并若大夫側に座

頭兩人とも羽織袴也座頭の立役古參は袴羽織新參は麻上下扱座頭を始列坐女形も同斷此坐並差別ある事にて頭取甚以て心配する也但狂言立作りは櫓三枚目の女形の次に居る二枚目の作者も立役四五枚めの内に居る此夜の上客ゆるなるへし大夫元惣役者と盃事あり蛤の吸物雑煮を出す酌は頭取上下着して勤る也先大夫元立役の座頭へ盃をさし來年中萬事相頼由の扱扱あり夫より一人一人の盃の内離子町の頭末坐に出て小謠ひを唄ふ也此盃事新參の役者先にする尤夜の遅刻に寄て古參のものは順盃にて仕舞ふ事もあり坐頭の差略次第也盃濟て狂言立作り真中に出其跡より狂言方のもの袴羽織にて白木の三方へ顔見世の大名題を載せてうやうやしく持出る立作り大夫元座頭へ挨拶して明年の惠方に向て右の大名題を讀上る小書より大名題小名題まで讀終ると二枚目の作者惣役者の役割を讀むかしは此所にて頭取を相手にして作者狂言の筋を晰す是を惣役者謹て聞たる事也依て此夜をはなしぞめといふ近來は兎角寄合遅く今は畧して役者々々へ役がらと衣裳の事を作者より晰合ふまで也此事濟て皆々袴羽織に成皆列坐して本

膳出る棧敷番のもの給仕をする帳元仕切場挨拶に出る饗應終て後座元若大夫臺の密柑を打て坐中へ投る是を當りみかんといふ銘々拾ひ手を打て退散する也是を顔見世狂言の始ての咄しそめて此夜迄は役者芝居かゝりの者迄一向に狂言の趣向をしらさぬ事作者の法也されは名題看板番附なども是より後の事也夫より十月廿日恵比壽講也此日入替り新役者の分狂言作者下立役はやし方に至る迄紋看板を出す也勿論重年の役者は出さず尤看板にも三尺二尺五寸の高下紋所にも紺濃朱緑青等の品々あり紺濃を最上とする事也とぞ

本讀立稽古惣ざらひ

前にいへる紋看板出る頃本讀にかゝる本よみとは三階にて顔見世春狂言に限らず狂言の替り目／＼にあり但一日の狂言を通して讀事もあり又追々日をつぎてよむ事もある也座頭始惣役者不殘並居る

但顔見世は袴羽織其餘は平服也

狂言作者正本を持出る筆役の者跡に續き出る作者銘々作たる幕を自身に讀也此時は其幕に出勤の役者は勿論衣裳方道具方小道具方のかゝりのもの迄本讀

を聞事也座頭より二三枚目迄の役者所存あればいささか好む事もあり然れども多くはいはぬ事也まして夫より末の役者は役不足いふ事はなき事也狂言讀仕舞ふて一幕／＼に手を打時筆役の者書拔を銘々に渡す事也

但書拔の表紙に立者は俳名を書く其外は實名也所存ある幕は書入て跡より書拔を渡す也

直に稽古にかゝることもあり本讀次第にて夜遅くなる時は翌日稽古にかゝる也筆役のもの正本を相居て其次は誰々といひ又仕打出端入のト書をよむ其幕に出る役者書拔を見て銘々のせりふをいひ合する也道具付衣裳付小道具附離子付皆狂言方より書拔て渡す但詠の鳴ものあり是は定の外に離子方と相談にてあつらへるなり其外大小道具にもしかけものあり衣裳にも早拵へこはせ懸引拔ものなど皆作者と役者掛合て衣裳方へ詠る也淨瑠璃の文句獨吟のめりやす狂言作者より作り渡す長うた所作の文句は離子町の立三味線作之しかれども狂言にかゝりたる所作又は拍子舞等は作者作之淨瑠璃連中來りてかたる淨瑠璃に出る役者より付作者聞之振付はふりを拵へて役者へ教

へる所作事も同様也殺陣は中役者の内に殺陣師といふものありて立物同士たててても或は四人詰六人詰の仕のぎの殺陣にても拵へて立者へ渡す也但太刀打ひき詰烈敷手合或はつかみ合其外しつかなるもするどなるも望次第拵へる也依て眞になる立ものより四人詰六人詰にても紅絹緋など拵て出す事也又追善の所作或は大所作出離子にてもする時は着付の表と麻上下を離子の人数ヘシテの役者より拵へ遣す也拵是より立稽古といふになる是迄はすはりてせりふ計をいひ合せ立稽古には舞臺の坐並にして思入も仕打も殺陣もする也又其次に付立といふ時は一人に衣装は何小道具は何出端入の鳴ものは何と作者正本を拵へていふ衣裳方小道具方手帳を以て是を付立其役役へ好を聞合する也鳴物も離子町の頭付たてなるなり此時より狂言方にて拍子木を入る也さて此次に惣ざらひ也是は初日の前日に稽古皆揃ひての事也明日舞臺にてする通り鳴物も入れ調子も張て唯かつら

をかけぬと衣装を着さると小道具をもたぬ計也舞臺にて書物は筆役のもの書て出す又仕掛の小道具は取寄て仕て見る事もありしばらく對面朝比奈其外なが

きつらね拵は獨りにても拵合にても別に稽古して惣ざらひの時はいはぬ事也

但此時ひきのあるものは三階へ見物にゆかるゝなり近來諸人これを見たがりて所々のひきよりはひ込是に行故三階甚込あふ事也

顔見世の事附翁三番叟式の事

十月廿日比顔見世狂言番附を出す但入替り役者付の時に替る事なし尤番付は常にも町奉行所へ差上る事也同廿五日頃大名題看板を出す但顔見世の看板には作りものなど花やかにする事也追々櫓看板残らす出是は日限に不同あるへし廿日比よりは殊の外いそがしく大道具方は舞臺にかゝりて大道具立をこしらへ看板方は繪師へ走り小道具方は夜を日に繼て小細工する衣裳方は染もの、詠へ幕廻り子役の衣裳加役の聞合せ色々日限に間なき故中々少しのひまもなき事共也尤衣裳の事は一体に立者はいふに不及中通りとして三階に居る役者の分は衣装に構ひなく稻荷町として下立役の者へは座元より衣装を渡す事也又三階の役者立役敵役にても女形を勤る役あるか又婆々形を勤る時又は化身もの變化もの其外片袖切り落すか血

に染り打たゝきされて着類を破る事あれば引抜として
此類は衣装方より渡す右の外に藏衣装として品々あり
末にくはし程なく十月晦日になれば芝居其外茶屋役
者の家々挑灯を出す其外表通新道迄茶屋の軒
にかざりものあり或は若衆より積物樽蒸籠引幕等甚
はなやかなる事筆に盡しがたし役者の家々には今度
の狂言に着る衣装を残らす座敷へかざり燭臺をつら
ね神酒鏡餅を備へ酒肴を設けて客人を饗應す翌朝は
芝居掛りのものゝ家不殘難煮餅を祝ふ事元日の如し
此夜若衆中役者の門々に來りて手を打也是を手打連
中といふ口論など防くため留場のもの銘々かゝりに
て役者の門口に待請る此手打連中夜更けて皆々芝
居切落へ入込聲色を遣ふ木戸前には群集の人々山の
如く押合晝七つ時比より木戸前にて言立の聲を上げ
狂言の名題役人替名を讀立終て聲色を遣ふ仕切場
には青籬を掛渡し臺の物の花時ならぬ春色をあらは
し樂屋は稽古鳴もの入の大ざらい江戸ものが膽をつ
ぶすも誠に顔見世の賑ひなるへし一番太鼓は夜八ッ
時比也

顔見世や一番太鼓二番鶏 古入常 仙

二番太鼓を打て聲色など遣ひ居る人々を追出し舞臺
幕を引明け拂ひ清め真中に三寶へ神酒備餅をかざり
左右の大柱へ大きな行燈(角形なり)を掛る是を翁
行燈といふ此時表にて切落し札を賣出し木戸にて
聲を上げ見物を呼込也扱式三番十一月朔日曉也是を
翁渡しといふ大夫元若大夫三ヶ日の間別火物忌して
勤る三日過れば稻荷町の若衆是を勤る芝居木戸前
へ立者役者の紋付たる大提灯を大込に掛並へ切落し
の上にも惣役者の紋と名を書たる提灯をならへ掛る
是は役者の方より芝居へ遣す事也兩側の上下棧敷へ
も茶屋のより丸提灯を懸る 此事顔見世計也扱機
三枚目の立女形より木戸のものへ綿入羽織とほうか
ふりの手拭を出すなり扇も出す尤面々の紋付にして
はでなる染也ほうかふりは六七尺の長さ也頭を包み
あたまたの上にて結ふ此外送り迎の留場のものへ仕着
せ草足袋等を遣す此留場は表方より差圖にて誰々は
誰へと二人つゝ付る也又舞臺の後見をする若衆に紋
付の小袖麻上下樂屋番道具衣装方杯へも紋付の仕着
せを出す也下り役者の女形などは隣町の髪結床など
へも紋付のうれんを遣す事あり定りなし尤是は顔

見世のみにかざらす追善所作大所作などの時は常に
もある事ながら先表立たるは顔見世也惣じて顔見世
は大夫元帳元役者中其外其組々にて互に肴か鯉節
等の音信を取遣りする事也扱霜月朔日初日大概一番
目迄する二番目は一日二日も過て出す初日は町内よ
りも皆見物する也金の渡り方次第にて初りはやし初
日狂言一幕一幕に仕切場大勢つれ立て樂屋へ祝儀に
行手を打なり二番目の出たる日も其幕毎に右のごと
し但顔見世初日上下棧敷に大夫元立ものゝ役者帳元
大茶屋或は表立たる金主の名字を書たる札を下る是
は芝居より馳走に出す必夫に限りたる事に非ず初日
二日の内は町内或は役者の妻など棧敷を貰て見物
する也夫過ては仕切場へも樂屋へも客留といふ札を
出す霜月十二日の芝居打出して後座元の宅にて春狂
言の世界定あり出席するもの顔見世世界定の通り也
また當り振舞といふ事あり樂屋にて惣役者狂言方囃
子町淨瑠璃大夫皆々夫々の出し合にて大振舞有打出
し後也是は顔見世半比の事にて中役者の頭世話を
して萬事取行ふなり客は大夫元若大夫帳元仕切場の
奥役の者など呼ぶなり仕切場よりも酒樽蒸籠に鯉節

など樂屋へ進物するさて顔見世舞納の日をとりとて
茶屋の亭主仕切場の若者ども又ははやし町の者など
役者の衣装かつらを借顔を拵へその狂言の内を二
幕三幕はと素人狂言をする也せりふなど間違却て興
ありておかしく面白き事也右終て惣役者袴羽織にて
座付大夫元若大夫出席座頭舞納の口上有て打出す此
日直に役者中大夫元帳元茶屋等座頭の宅へ祝儀に廻
り銘々互に歡びにゆきかふ事也顔見世の事あらはしけ
斯の如し此外細かなる事どもあれどもわづらはしけ
れば是を省きぬ

仕初春狂言の事

正月朔日仕初晝過比三番更あり大夫元若大夫勤也顔
見世の如し右濟て舞臺へ毛氈薄縁を敷て毛氈の上へ
大夫元若大夫薄縁の上へ惣役者並居る座頭前へ進み
出年頭祝儀口上を述頭取春狂言の大名題小名題役人
替名を三寶に載持出て座頭の前へ置座頭大名題小名
題を讀次に役割をよむ時たとへば曾我十郎に誰とよ
めば其役者頭を下る皆斯のごとし讀終て子供制外子
などの踊三五番もあり

制外子只制外ともいふ俗に色子小詰のたぐひにて

町内の子供屋より三人づゝ御役にて舞臺へ出す腰元など多く入用の時は是を遣ふ役者の下地なれども頭取座頭の制の外なれば斯は名付し也青海子と書は誤也衣装も子供屋より出すこの子供踊の事は十月十七日晰初の日晝の内にも踊初とてある事も其外若き役者など何か頓作なる藝を一寸する事もありて終日但舞臺に大きな鏡餅をかざり置三番更前に是を引事も扱表鼠木戸へ狂言名題と役割を書たる行燈を出す櫓下へ来る十五日よりとかいふ札を出すむかしは正月二日より始たりしが今は大かた十五日也續て春狂言大名題看板を出す此日役者ども年禮に廻る春狂言より辻看板一枚摺を所々辻々髪結床などへ芝居よりくばる但初日より五日目迄の客札四五枚づゝ付て配る

顔見世には役者附を辻配りにする也
直に辻看板賣出す顔見世役者付の通りなり

芝居年中行事

正月元日仕初の事は前に記す同十五日近年の初日也二月初午跡狂言の初日也京大坂にては初午芝居として江戸の舞納め狂言の如く素人交りの狂言あるよし江

戸にも操芝居の薩摩座土佐座などにはあれども大芝居には此事なし借樂屋中寄て稻荷祭り甚賑し此日樂屋にて田樂を焼醬油の付焼也是味噌を付るといふ事を忘て也二月十五日は中村座にては芝居根元興行の日也とて一座中壽き祝ふ事也三月三日新狂言に替る尤曾我狂言二番目也是を三の替りといふ顔見世狂言を始として春狂言は二の替り也夫故此替りを三の替りと云也四月朔日新狂言初日也五月五日新狂言替り目也五月二十八日曾我祭り也此始りは春狂言評判宜しく打續て大當りの時は中古迄樂屋に於て祭禮を取行ひ總座中酒宴を催し祝ひたるが今は曾我狂言を舞納て後樂屋にて祭るを影祭りと云又格別の大當りにて打續きたる時は例年曾我の兩社の神興仕切場に鎮護して四方に注連繩を引き神前には數々の供物を備へ甚花麗なる事にて仕切場の入口には御祭禮の大幟を建かざり物の燈籠口合の繪行燈表裏にしげし神興を留場口より本舞臺へかき出し芝居に拘りたる人々は役者に限らず思ひくゝの伊達衣装に蝶と千鳥を染出したるが或は縫にしたる揃ひの手拭を頭又は肩に打掛けて花出しねり物離立て東西の花道より本舞臺へ

ねり込長唄にて雀踊り花笠踊り等の大踊り有尤立役女形とも皆一樣のはでなる姿にて幾組となく出る終て後大勢交り様々の見立狂言俄茶番物まね藝盡し等數々ありて其面白き事たとへるに物なし抑此曾我祭りを舞臺にて執行ふ始りは寶曆六年市村座に於て春狂言大名題梅若菜二葉曾我并大踊り三日酒盛附り男色吉原踊り二番目には菊次郎龜藏二日替りにてをちよ半兵衛夢路の浮橋大當り打續て五人男狩場の首途といふ跡を出し市松龜藏菊五郎助五郎廣治の五人大評判廣治鮫鱈の釣し切無間菊五郎鯉の掛物抜出て水仕合に中役者大勢の大殺陣殊の外大評判にて右の二葉曾我の狂言其年の十月迄通して興行せり誠に前代未聞の大當り是ひとへに荒人神の神慮に叶ひたる事有がたしとて今迄樂屋に於て執行たる神事を改め此時始めて舞臺にて神すゝめの大踊り諸藝盡しを始めてより此方當時に至りても舞臺に於て神事を行ふ事とはなりぬ三座少しの替りあれども先同し趣也五月廿八日は別て祭日也大踊りは毎日に執行ふ事人の知る所也然るに過し都傳内座の砌にや曾我祭りを大造に取組役者の外芝居掛りの者迄美々敷衣装にて本祭同様

に芝居内表裏を囃子歩き大形の致し方に付御答を蒙り今は其事相止しかし芝居内の曾我祭り其模様にて御構ひなしとん六月中旬より土用休也古來は役者一ヶ年極の事ゆる六月休といふ事なし勿論古人市川柏庭に限り土用中相休しが今は一体の休となる近來又土用芝居といふ事あり重立し役者は休みて若手中立もの小詰交り興行す尤直段を安札にして殊の外はやる事也七月十五日盆狂言の初日也九月九日上方登り役者名殘狂言などにて跡を出す夫より舞納めの日を千秋樂といふ定りなりしそゝり狂言(前にいふ)すみて座頭口上にて打出す其後樂屋にて重年の役者其次に他へ出る役者各大夫元と一禮の益事あるよし也九月十二日顔見世の世界定也(前に委し)十月十六日此日翌日十七日寄初の廻状を持廻る仕切場留場棧敷番の人々羽織袴にて廻る十月十七日晰初(前に委し)十八日番附板下にかゝる廿日三座惣座組紋看板出る廿五日大名題看板出る續て櫓下袖招き小名題式三番の額同看板役割其外出る中村座にては猿若狂言の人形を仕切場にかざりおく外二座は三番更の人形也廿九日新狂言番附茶屋配り晦日夜深き内よ

り江戸中へ番附賣出す三座の賑ひいふもさら也霜月朔日顔見世狂言初日にて晦日夜八ツ時比より大夫元若大夫吉例三番叟終りて人を入替る扱正七ツ時より前狂言脇狂言色子子役大勢の大踊目出度終りて新狂言顔見世始る十二日春狂言世界定也是顔見世の世界定同様なり十二月十日過(十二三日ころ也)顔見世目出度舞納る事也

鳴物合方名目大概の事

鳴物合方の事は夥敷事筆に盡しがたし誂の合方といふは前にも記せし如く役者囃子方相談して賑かなるも静かなるも哀なるもいさましきも大小入(太つみ小つみ入をいふ)しの入(艸笛など入たるをいふ)など役者望次第故極りなし又かぶせるといふ事あり(鳴物一通ある上へ外の拍子入れ打交る事也)かゝるといふ事あり(引込のうたなどの鳴物を花道の出に用るをいふ)なり其外引流しはげしくかすめるなど品々夫々遣ひ道ありあらまし左に記す

- 一天王立 笛 太鼓 大小
- 出御揚障子もの其外幕明等公家の出端など色々
- 一本神樂 笛 太鼓 大小

神職行者などに用ゆ

- 一音楽 笛 ひちりき 太鼓
- 天人など其外いろく
- 一管絃 二上りふえ 太鼓
- 館向大寺など其外いろく
- 一樂 三下りふえ 太鼓
- 上に同じつめ合物語其外色々修羅にも遣ふ
- 一つかけ つみみ大小 ふえ
- 花道より見参くゆるし文などに用ゆ
- 一禪のつとめ 太鼓 木魚
- 禪ばやしともいふたてなどに用ゆ
- 一ながし ふえ 太鼓 大太鼓
- やみなんくにておし出し
- 一とてちり 三味せん 太鼓
- 一名さはぎ茶屋場の幕明出端など
- 一さりば 念佛かね 太鼓 ジャンく
- たてに用ゆる事多し
- 一常念佛 立うたの役也
- 心中事道行などに用ゆ
- 一寝鳥 ふえ 大太鼓

強盗の張本藪罌寶藏など切破りへうとき時

- 一宮神樂 笛 太鼓 テレックく
- 神前などの幕明神事の時用ゆ
- 一岩戸神樂 笛 太鼓
- 對面盆の時又は忍びのものなど
- 一通り神樂 艸笛 大太鼓 小太鼓
- 春計り重に用ゆ大神樂の出端松かざり有て門禮者の出端に用ゆ
- 一早神樂 笛 大太鼓
- 一下り葉 笛 太鼓 大小
- 三味せん入もあり公家の引込其外色々又早下り葉といふもあり
- 一大拍子 大太鼓 大拍子
- 神樂殿などにあり三味せん入もあり
- 一白囃子 大小入
- しなへ打又は角力或は奴三三人水を打幕明などに用ゆ依て一名水打といふ
- 一肥前節 三味せん入 つみみ 太鼓
- 物語鐵砲場などに用ゆ
- 一祝詞 つみみ大小又物着ものぎの合方

幽霊などの出端

- 一唐樂 笙 ひちりき 大太鼓
- 化身ものに遣ふ
- 一山おろし 雪おろし 波の音 風の音 大太鼓
- あれ場化もの、出に用ゆ波風の音は常にもあり
- 一ぬめり 三味せん 太鼓 すりがね
- 道外方など交りおかしきたてなどに用ゆ五人男の出にも用ゆ
- 一篠入相方 三味せん 草ふる
- 切腹書置事あはれなる事に用ゆ
- 一遠寄 大太鼓 どら 貝
- 一萬西念佛 かね 太鼓 三味せん
- 一三保神樂 ふえ 大太鼓
- 對面などに遣ふ事あり
- 一對面三重 中村座 市村座
- 一早三重 うれひ三重 忍ひ三重
- 一行列三重
- 右いづれも人の知る處なり早三重は引込ともいふ
- 一打込 是より二番目はじまり
- 一辻打 かるわざの相方出の鳴物にも遣ふ

- 一 松虫 六部の出端
- 一 うかれ三重 化もの、相方
- 一 はやめ 無間のかねに用ゆ
- 一 あはれ丹前なます坊主
- 一 かけ入 狂女の出など
- 一 和歌 詰に遣ふかたぐ、さらばといふ時
は和歌也
- 一 狐場に遣ふ
- 一 太鼓謡 上使の出工藤左衛門などの出仕共
- 一 外
- 一 とひよ 鳥の音
- 一 片しやざり すべて引込に用る事あり又かたが
たさらばの時太鼓ふえ入
- 一 揚弓の相方 カチリドン
- 一 琴の六段 助六のたてに用ゆるは此六段に限
る近來おはつ岩藤のたてに用ゆ
傾城男達などの出端
- 一 すがき 土手の提灯吉原月夜かな
- 一 さはぎ
- 一 深川さはぎ
- 一 みだれ 太鼓入

- 一 テンツ、
- 一 れんぼ
- 一 雷の音
- 一 鐵砲の音
- 一 蛙の音
- 一 鶯 郭公 雀 蝸 鶏 諸虫音
赤貝を合せる也
- 一 鳥 猫 犬 いづれも笛にてする
- 一 樟腦火 狐火也小道具方にてする
- 一 焼酎火 青くもゆる幽霊の火
- 一 焰硝火 鐵砲大筒又は幽霊の前後に用ゆ
- 一 稽古場は三階の中に三間の板の間あり舞臺と同様に居る向に狂言方正本を扣へ居る上の方囃子の人も此板間兩側常には中役者の居所なり板の間へ
- 一 ちいばいなどの出端
- 一 尺八入 又草ふゑ入
- 一 外座と日覆ひにて大太鼓を打合せ
る又六尺棒を繩にてゆるく結び板
の上をころがす又厚木六角の車臺
付一ツ拵へ大きな角ものを繩に
てつるし右車へ打あてる也
- 一 舞臺のうしろにて板の間を強く打
也又竹鐵砲にてもする

鏡臺を直して置故に中役者を板の間といふ三階には座頭の立役始二枚目或は客座の役者立者分相中役者皆々席を定銘々名札張てあり立もの、分は鬘師中働き二人つゝ遣ふ也中通の分は一所に髪結ありてかつらを付て廻るなり衣装を着る時は座頭より中通までも衣装方の内に衣装付有りて幕毎に衣装を付に行也中二階は皆女形也部屋に仕切ありて衣装を着るも一ト通りの事はかつら師着せるなり但加役の時は衣装付の者着せる

加役とは立役の女形に成女形の立役に成をいふ也

扱鬘師の内に座頭の女形に附しかつら師は寄親といひてその芝居に付て居る事にて惣かつら師の世話役也俗に板人といふ立役の座頭に附居るかつら師迄も皆其者の支配故寄親といふされは座頭の女形其芝居ににかつら師替る也鬘の事左に記

一 百日 熊の皮又は毛にてもするしつちう櫛
拂ひなど付るも有り

一 ゑんで 仁木彈正など又明智光秀等に用ゆ

一 ばつとせい 道外方など用ゆ

- 一 逆髪 長髪也定九郎など
- 一 くりさげ(奴) 二ばちびんつゝ込 一大矢はず
- 一 大百日 一なで 一せは熊百日
- 一 平九郎びん 一なまじめ 一ふきびん
- 一 きりかぶろ 一親王頭 一びろうと百日
- 一 せんだい 一釣髷 一はちまい
- 一 ひしかは 一矢はづ (宗清忠信等に用ゆ)
- 一 出しま(梶原) 一鯨髷 一つかみたて
- 一 車の百日(景清) 一立髪(丹前) 一卷立
- 一 針かねのチリ 一かまひげ (朝比奈)
- 一 平太髷 一糸のたれ 一合せびん
- 一 三軒 一かきあけ 一さうの茶せん
- 一 油茶せん 一ほう茶せん 一まさかり
- 一 ぶつゝり 一せはびん 一やつし
- 一 ひかへ 一ひつ死(二名し、かは大わらは)
- 一 いたづら 一くしはらい 一地藏びん
- 一 おたくら 一かむり下地 一たれ(法眼の類)
- 一 白髪ざんぱつ 一摺はがし 一こうさい
- 一 長髯(意休) 一王子頭 一前髪
- 一 車びん(かち時とも云暫くの時用ゆ)

- 一角力前髪 一下なで
- 一そうづ 一いが栗
- 一坊主 (あさみ、しろみ、赤かね)
- 一白髪 (ごま鹽、白みすつほり)
- 一半かつら 地髪の中へ掛る
- 一かもめづと 一さばき
- 一王子髷 (惣ひげ、かまひげ、あごひげ、せはひげ、三ッ髷)
- 一はんにや頭 一くもびたい
- 一はり打 一やつしはり打 一奴わげ
- 一土佐わげ 一ゆひわげ 一みだれ茶せん
- おやま
- 一下げがみ 一かたはづし 一竹の節すゝめ
- 一勝山 一ぶんきん 一奴島田
- 一針打 一島田くづし 一手がらみ
- 一横兵庫 一せわ丸わげ 一三ツづと
- 一さしつと 一地びたい 一丸わげ
- 一しのふ 一兵庫 一上巻
- 一りうご輪 一卷立 一あいこ
- 一老女

此外影敷事役により種々好あり又仕かけものなど

ありすべてかつらの下を下地といふくはしくは圖を以後篇に記すべし

- くまどりの大概
- 一筋ぐま 一青ぐま 一猿ぐま(朝比奈)
- 一半ぐま (顔の下の方を青くする也かけ清などにあり)
- 一薄肉 一むきみ
- 一ツぼん 一愛染 一不動
- 一龍神 一錦木 一狸々
- 一般若 一化身もの

此外おびたし後篇にゆづりて爰に省く

樂屋惣体の事

樂屋階子の下の向一段高き所を頭取座といふ此座は狂言立作者頭取二枚目作者居る也外のもの登る事ならず但座頭の立役用事あれば登る又大夫元若大夫など樂屋へ來る時は此所へ座頭其時は頭取席をゆづる此座の前へ腰を掛け居るは狂言方筆役の者也三階はしごの上り口に二階中二階へ女中方堅く無用といふ張札あり

案るにひきのある女中其外勇み手合の妻子など稀に三階迄上る事あり跡にて塵をまき清める也

扱頭取座にて役者狂言に出る時大小及物の分残らず改る也座頭の立役などは挨拶計りにて濟す事もあり其以下は皆々改る事なり又惣役者の化粧代日々に三貫五百文づゝ頭取請取て白粉を渡す中二階女形は手前にてする故頭取より渡さず又ぬりおしろいとてはだかになる役は白粉を小道具方より出す外のおしろい青黛は役者の方にてする也紅粉ばかりは頭取より渡す但べにぬりとて赤つらなど多く出る時は紅粉代増減あり仕切場へ用事ある時はびらといふて半紙を細く札紙に切て用向を書付頭取座の押切判をして遣す但樂屋より見物の客に頭取へ頼て此びらを貰ふ事なり

一客一人 頭取 如斯書てやる也

一大道具部屋は舞臺のうしろにあり幕引を頭にして幕毎にかざり付る也大道具掛りの仕切場支配也小道具部屋より狂言の小道具手帳に引合せ幕毎に頭取座へ持參す衣装藏末にくはし稻荷町噺子町は樂屋の兩側にあり稻荷の宮ある方に居る役者をお下の若衆といふ噺子町は鳴物三味せん長唄の人数居る也大概稻荷町十一人噺子町十三人といふ定なれども今

は増減あり稻荷町の頭幕毎に口上に出る立物の後見も大かた此若衆の内にて誰には誰と定りて出る也舞臺の遣ひものとして蛙鳥蛇などの類又は星雲氣なども此若衆出て遣ふ也市村座はむかしより此遣ひものは小道具方にて遣ふ

評に曰市村座は稻荷の宮噺子町にありて稻荷町にはなし是中比芝居類焼の時稻荷町の衆中此宮を持出す事をわすれ噺子町のもの持出したるによりはやし方の請持に成たりしかれども昔より呼なれたる名目故若衆の方をやはりいな町といふ

湯殿は樂屋の入口に有泥入水入くまどり紅ぬりの外無用といふ定書張てありしかれども私に風呂に入る事もある也紅おしろいにてどろくする故泥風呂といふ也風呂番といふもの付居る也銅壺は湯殿の前にあり女形は風呂へは入らぬ故かなたらいにて部屋

部屋へ湯をはこぶ風呂番の役也床山とは下の髪結所也稻荷町の衆髪を結ふ尤出噺子の時はやし町の者にもゆはする也樂屋とは入口也口番とは大勢番のものあり是にも頭小頭あり役者も今は此口より出入す

樂屋番二人又は三人ありいそがしき役也樂屋の炭真木一切の事をする其外役者の小使をする故幕毎に走り歩行く也

穴番舞臺縁の下の掛り也せり出しがんとう(末に委し)切穴さしかねものなどに行く道を掃除しかんてらをともし菰を敷いろく用あり

蠟燭掛り大道具方にて勤る
窓番兩側棧敷の家根の上のまどの明たて也樂屋口番より勤る

惣じて此等の掛りの者は日々何程といふ錢拂を仕切場より請取口々の頭惣人数へ割渡す

焚捨といふは舞臺にて遣ふ鼻紙をんせうたどんたばこ其外日々捨るもの、代也樂屋の頭仕切場より請取

案るに此焚捨は舞臺計の焚捨也全体焚捨といふは芝居一日の入用をいふ也なくて叶はぬ品々舞臺の

焚捨は不及申紅おしろい蠟燭立錢(次に記す)諸掛りの錢拂ひ中食何か小道具方かけ流しもの一切合

せて一日大概金十兩也是さへあがればいか程入のなき芝居にても興行するが大夫元帳元始一統の仕合也金主方へは棧敷土間など振向ておく事故興

行さへすれば日々に金濟しも出来芝居掛りの者も夫相應の立まへになるなりどの様にしても地代其外都て拾兩はかゝる事也扱地代も興行さへすれば遣す事也焚捨の事極秘なれども記す

立錢といふあり座頭の立役女形の座頭此二人より外なし日々に二貫文つゝ仕切場より渡す事はいはゆる

座頭二人の日々焚捨の代なるべし給金の外也然れども役者の高下によりて立錢増減あり日々四貫文づつ取たるは古人海老藏計り也

按るに立錢は今座頭の立役二枚目三枚目あたり也女形も其位迄は出す事也尤大きに増減あり二貫文

程と本文に書たるは誤りなるべし三河屋市紅なども三貫餘四貫位も取たる沙汰あり女形は立錢餘

計と見えたり路考巨撰などは三貫餘四貫近く取たるよしはのかに聞し事あり大体の立役の座頭は二

貫餘三貫そこらなる由二三枚目にて役者により不出事もあり四枚目位にても芝居大きく座頭脇と

もいふべき役者なれば随分立錢出す事也立者一日の小遣書辨當其外化粧代送り迎の入用などにな

る事也立者は大概書辨當十五人前二十人前位也

びたしき事也近所の役者に立錢を遣して後出勤する事とぞ誠に秘すべし

立もの、役者舞臺にて間違能相あれば樂屋中へ蕎麥を振舞ふ事也是は福山にて(芝居の隣をばや也)そば

札として紙の端書なり此札を取寄て銘々に賦る貰ひたるもの勝手よき時其札を遣りてそばを取る也すべて

中食などに表より馳走に蕎麥を出すにも此札を用ゆ尤並そば八錢といふ御膳と二色ある也扱助六の狂言

の時舞臺にて遣ふうんどん箱かつぎの絆天は新に拵へ此蕎麥屋福山より出す事也又樂屋に晝飯といふあり

是は大夫元より焚出しをするむかしは汁と菜と付たるよし今は飯計也中通り以下皆食之芝居を不首尾

にて引込たるをひやめしといふは此いはれ也
一淨瑠璃 大夫 ワキ 三味せん 上調子

右富本連常磐津連此外にもあり是等は中二階の明たる部屋を役の内遣ふ也
一河東節 一中節 半大夫

右の内河東ぶし連などはたのみてかたらする故お客とて料理など甚丁寧なる事のよし也
一義大夫節

淨瑠璃狂言の時遣ふ是をちよぼ語りといふを畧してちよぼといふ也せりふと文句の境へ稽古に赤紙と青紙にて本人印を付る故の名也

一大薩摩 土佐節 外記ぶし
是等は囃子町うた唄ひの内にてする事也

一乗物 響駕
右四つ手駕はいなり町の役也乗物の六尺は表の役當

て看板は衣装方より出す
一犬 猿 狐 狸 馬

右犬猿きつね狸は稻荷町の役馬は大道具番と樂屋番の役也手廻らぬ時は表の役當りも出る也又せり出し

四てんぶん廻しがんどう引道具三階物杯色々皆表の役當也大道具の手廻らぬ時も表の役當より手傳ふ也

せり出しはシャチにてまく四人にて擔ぎ上る是は一入せり出の時也がんどうはたとへば二重舞臺の上迄

急度見えに成此二重舞臺計りうしろの方へひつくりかへると板扉になるか藪たゝみ其外何にもなる面白

き仕かけ也三階物などせり上るには一番上を小さく拵へ段々いれ子にしたる物也ぶん廻しは舞臺を丸く繰廻し裏の方車を深山に仕掛鴨居をすらしして舞臺の廻

りに綱をかけるろにて巻也引道具引臺押出しなどは諸人の知る所なれば略之燈火の事をかんでらといふ是も舞臺先に幕引の役花道は半疊番より勤る也釣上げといふは車或は臺などにて役者を釣上る事也車引の時平など也又振出しといふは梅の木松の木など大柱に仕掛あり是へ入の上る事也忍びものなど登る事あり枝を廻る様に拵へ樂屋の方にて枝より舞臺の方へ振出す故の名也扱拍子木きつかけしらせなどいふ事は幕毎に樂屋にて打をしらせといふ初めて二ツ打は舞臺の道具かざり付出來たるを二階へしらする也二度目のしらせにて幕明に出る役者階子を下りて舞臺と揚幕とへ廻る三度目のしらせは舞臺の出口にて打四度め舞臺にて打此時口上出る口上終て拍子木打と鳴物に掛る是より幕明の拍子木也きつかけといふは御廉の上けおろし道具替りなどに打をいふ又引かへし幕の時續け打に打を繫木と云惣じて拍子木を略して木と計いふ也此木段々打様に習ひあり幕明の鳴物によりて打機皆かはる也幕際も是に同じ其外拍子幕一番目大詰の木打出しの木皆作法ある事にて狂言作者筆役の者の役也木の形通例のごとくにて先

の方始及に落し尤片方も替りたる形也扱呼といふ事あり幕毎に出る立者等の名を幕の内にて呼ふいなり町の役也此呼に這入るを役者は出世とする也此外上使出仕御入今様はじまりなどよふ是皆同じ此幕の内にて呼ぶを渡りが濟だと覺たる人あり誤り也又寄といふは入盛て來る時幕の内にて小太鼓を二ツ打と前がまばらでうしろが込ます太鼓に付てまへえくとよぶ又太鼓ひとくさりしやざりを打也見物の内に宿より用事ありて居所しれざる時頭取へ頼めばいな町書付をやりて誰様急用と呼ぶ也但狂言最中の時は塗板へごふんにてかき舞臺の大柱へかける也新道の茶屋より見物に行屋敷方などは通行させる時頭取へ斷る頭取より樂屋へ申次也茶屋より禮に酒肴を遣す事也立者の役者西の下棧敷うしろの揚幕迄行にはかゝりの留場先を拂ふ扱一番太鼓は縁より打はしめ打出しの太鼓は縁にて打止る也また樂屋にて切幕に打出をシャギリともシャギルともいふ也

樂屋法度書并衣裳藏の事
芝居法度書三階に張てあり左の如し
定

一先年從御公儀様被仰渡候通狂言役者舞臺衣裝は不
及申平生之衣服共前々御定之通絹緇麻布之外御法
度之品一切着用申間敷候事

但寛政元酉年町人男女共衣類分限不相應之品着
不仕髪之飾其外花美之義無之様委細御觸も有之
候に付無忘却急度相守役者共平生萬端不益相止
失墜無之様心掛家業等閑なく出精相勤可申事

一狂言役者居宅堺町萱屋町木挽町之内并隣町は格別
遠方住居いたす間敷事

一女方野郎子供之義は右三町之外他所へ一切罷出不
申遊興之客へ一切罷出出會申間敷旨前々より御定
に付日々在宿改印形取之候間彌堅相守可申事

但在方親類病氣或は其身病氣にて湯治等に致他
國候節は前々日限をいたし當人并座元頭取印形
之證文差出罷越候處近來猥に相成無沙汰致他國
候義も有之由以來等閑無之様其時々前々之通急
度證文差出可申事

一惣而狂言男女申合相果候義作入申間敷旨享保八卯
年御觸書有之候間堅相守其外世上風儀に拘り不宣
義決而狂言取組候儀堅致間敷候事

一狂言打出之義夕七ツ時限り相仕舞可申春に及明り
燈候而は火之元不宜候勿論風烈之節に別而大切相
守可申事

但芝居打出し後棧敷樂屋其外心付重役之もの差
添火之元大切相守可申事
一芝居樂屋其外にて博奕諸勝負一切いたし申間敷旨
嚴敷樂屋表方ともに申付頭取別而心付可申事
前書ヶ條之趣無等閑急度相守可申様可致候以上
寛政九巳年十月 大 夫 元

此外にも役者行跡の掟書又は宮芝居田舎役者等相加
り候時は友吟味にいたし右の者相交申間敷などいふ
事色々ある也事繁ければ洩しぬ
藏衣裳定書

- | | | |
|-------|-------|--------|
| 一直垂 | 大口 | 一ゆかた |
| 一てうけん | 一さしぬき | 一十二ひとへ |
| 一緋の袴 | 一狩衣 | 一十徳 |
| 一法眼袴 | 一素袍 | 一麻上下 |
| 一陣羽織 | 一仕丁 | 一胴丸 |
| 一四てん | 一手甲 | 一すね當 |
| 一股引 | 一合羽 | 一編絆 |

- 一 きやはん
- 一 おいずる
- 一 襟巻
- 一 仕掛物
- 一 しきん
- 一 せうぶかは羽織袴
- 一 水入
- 一 三尺手拭
- 一 ふきかへ
- 一 たちつけ
- 一 軍兵
- 一 衣袈裟
- 一 化身物
- 一 ちはや
- 一 ぱつち
- 一 かるさん
- 一 頭巾
- 一 たすき
- 一 泥入

右之外御法度之衣装一切出不申候 大 夫 元
 右之如く書付衣装藏に張てある也但狂言の模様によりて此外にも藏より出すものありといへども皆此類に準ず又中村座にては合羽馬乗袴を出す市村座にては不出也又女形より若衆を勤立役より女形をする時は前にもいふ如く加役として衣装がつらも皆芝居よりする事也とぞ扱衣装藏といふは樂屋頭取坐の脇三階梯子の向ふにある也役者幕毎に渡す衣装にあり衣装着せの者こゝに居る但頭一人仕立屋一人づゝ附居る也樂屋の事あらまし斯の如し猶洩たるは後編に出すべし將又誤りたる事あらば戯場通の看官よろしく糺したまへかし

本舞臺惣体の事

本舞臺正面破風造りは昔上なき御方へ被召盡御覽に入し時給りたるといふ都て能舞臺のかゝりなりしが中古勝手あしきとて今の通に改む其後引幕等初る元祖羽左衛門より初るといふ去に寄て正面破風の續きに能のはしがり今にのこれり尤破風造りのみてぐらには諸神を勧請して惣役者ともに信心怠る事なし

一 三間の間 本舞臺三間と建る事は昔は二間に四間の間に柱四本を建しといふ破風造御免の後大臣柱と名付此所を鏡の間といふ其次を梅の間といふうしろの板を鏡板といふ爰に松梅を畫をり則能舞臺をかたどる也

一 花道 はしがりともいふ横巾一間餘長さ極りあれども今は略して巾三尺餘長さ定なし古へはしがりのなき比見物の人々ひるきの役者へ思ひの造花をかざりて送るそのために拵たる道筋ゆゑ花道といふ其比は巾狭くして兩方に竹を以て高欄の様なる罅を結ひしとかや

一 引幕 舞臺の上に横にはりがねを渡し引張る也明る時は左の方に絞り置く京大坂の幕は布目を横に縫

合せたるもの也江戸にては布目を豎に縫合せたる也顔見せ春狂言などの時はひるきの連中よりいろく仕出しの進物幕也常には中村座は紺柿白の三色市村座と木挽町は紺柿緑の三色を用ゆ幕引といふものありて勤之

一 附拍子 ツケともカゲともいふ多くは幕引より兼て勤る役者出入立廻りの時拍子木にて板の間をたゞき足拍子に合する也

一 揚幕 切幕ともいふ花道の入口にかゝる花色地に白く座元の定紋を染る也揚幕の役一人あり是は大道具番の支配下也東の揚幕は常にはなし入用の時は東の下棧敷のませを明け出入する是は棧敷番のかゝり也

一 臆病口 本舞臺下座の方をいふ尤上方とは違ふ京大坂は江戸の操座の舞臺とひとしく多くは左右に出入の口あり依之左右をいふ江戸は下座の方を入口といふ

一 大臣柱 見付柱 本舞臺左の方の柱を見付柱といふ右の方を大臣柱といふ此柱常には一番目より四番目迄の小名題をしるせし板をかけ置又かざり付として

紅葉櫻梅などの花を此柱にかざる事あり

一 二重舞臺 本舞臺の上へ又一つ舞臺を拵へる故にかく名付る也此下はぶん廻しのために本舞臺九く列である也

一 舞臺番 留場の役にて一幕に二人程づゝ半疊を敷舞臺の下に居て見物さはがしき時制する役也うしろの方騒かしきは樂屋番制する也

棧敷名目大概の事

東西上棧敷舞臺の方より八間を内格子といふ此内二間は幕の内也茶やの買直段一は二十五匁二は三十匁三より八迄三十五匁也九より六間の間を大夫といふ(八間ともいへり)其次平といふ六間あり大夫の四迄三十五匁大夫の五より平の一迄三十目平の二より六まで廿五匁也下棧敷舞臺の方より八間を内繋籠といふ直段上棧敷と同じ但幕の内一は二十匁二は二十五匁といへり九より六間の間を外繋籠といふ一より四迄三十五匁五六は三十匁其次を新格子といふ東は六迄あり二十五匁也此内揚幕の側をハタといふ直段は同じ入りのあるなしにて直段高下あるべきにや尤棧敷番といふものありて是を割渡す此棧敷番は大夫

元の名代表向の役衣裳改其外公邊の事にも拘る役也
 本土間前土間直段二十五夕也所に寄て高下あり市村
 座にては近來本土間に手摺を付毛氈をかけ三十夕に
 賣也東の方本土間より花道の際迄八側あり舞臺際よ
 り中の間の方へ十三あり十三目の土間を切土間とい
 ふ切落今は土間の七八の末にて十一より十三迄の内
 少し計りの所也昔は舞臺際より中の間の歩行の際迄
 惣して切落也土間番といふものは是を割渡す上棧敷西
 の上に幕際より高場三間あり同所に張出し四間あり
 り西の方花道の脇土間の割残をおくみといふ揚幕の
 少し先にも末のおくみあり花道の西の方本土間とも
 に二側あり舞臺のきは西の方切落したる所を升とい
 ふ舞臺の方を端升といふ次を中升其次を本升と云お
 くみの先を升の三升の四といふ舞臺の東の方切落し
 たる所を松といふ松の一松の二と唱ふ舞臺際土間の
 前に一並に居るを雨落と云中の間は花道より東へ行
 あゆみの側也是等も今は土間あり中の間留場の際に
 高場あり金主の居所也二階向ふ棧敷を引船といふ
 本船中船跡の名あり東を一として十間宛あり羅漢臺
 は舞臺のうしろ高き所也前ははしがりとといふ木挽

町には羅漢臺なし目高見物といふは舞臺のうしろ外
 座の方に押合てゐるをいふ也此外にも通天神樂堂二
 重土間などあり事繁ければ略す

表方惣体の事

抑櫓は芝居表側正面に高く床を儲け座元定紋を染出
 したる幕を打正面は定紋左右は丸の中にきやうげん
 づくしと書也左右の割書に座元の名を記す尤平假名
 也櫓太鼓正月元日霜月朔日には囃子方の内より未明
 に麻上下を着し打之三座とも同じ古例也打様に秘傳
 あるよし櫓は人の知る所なれども芝居隨一の物故爰
 に記す又様々の秘説あれども憚る事多き故もらす櫓
 下板三枚合せて中央には座元の名左右の二枚は立者
 分の女形の名を記す故に女形の座頭を櫓三枚の大立
 者といふ也

一鼠木戸 入口の名也いかなる故に斯名付しやらん
 音より唱へ來れる也見物押合て鼠の如くして入ると
 いひ又不寢見木戸なりともいふ二説とも信じかた
 し此木戸格子の組織中村座堅子市村座菱形河原崎始
 は堅子なりしが享和二戌の冬普請以來菱形也爰に端
 番といふもの有て木戸出入口に居る也一日替に勤

む(末にくはし)仕切場といふは鼠木戸の側札賣場也
 木戸より左の方棧敷出入口より右縁側に簾のかゝり
 たる所をいふ時として切落札賣切の札を出す留場は
 先ツ見物の防ぎ也此若衆の内より立者の役者の附人
 に出るものなり舞臺番端番色々あり尤留場は二階と
 下とにあり

一帳元 芝居萬事引請元しめ大役なり仕方あしけれ
 ば差支て興行成兼る事也委細するにしろす

一奥帳場 奥役ともいふ金主方公邊役者給金大道具
 小道具衣裳方色々掛りあり此手に付働くもの若衆と
 いふて十人計ある也

一仕切場の平 此内にも蠟燭掛り札書勘定役看板書
 其外色々あり

一聲番 半疊賣の内より出る也役者の出端入所作の
 支度の間杯にこゑを掛る半疊火繩賣は揚幕の際に片
 寄居る火繩の數にて見物の入高を量る一名きせると
 いふ

一東の口高場に棧敷掛りの番あり木戸にも頭あり扱
 昔はまねぎといひて幕切シャヤリと俱に木戸中大勢
 立上り同音にアツヤ〜〜とかけ聲扇を開き

隣の芝居の方を招く事ありしが今はたゑて此事なし
 又讀立とて大名題小名題役割を讀聲色を遣ふ言葉く
 せありておかしく面白き事也是は藝者として別に抱置
 く事也晝八つ時比一ト切の狂言幕明よりシャヤリを
 打まで木戸の正面に臺を据へ二人にて讀たてする不
 斷はなく新狂言の當座か跡狂言の前日替り目〜に
 ある事也

一舞臺やらうといふ事あり春狂言計り也舞臺近くへ
 入れといふ事なるよし木戸の側に長き臺をすえて三
 人か五人上り揃の衣装にて長き手拭にて頭を包み二
 重廻して頭の上にてゆはへ扇を開き舞臺〜〜引
 舞臺やらう引〜〜と大聲にてまねぐ也

一呼込 俗にいふひつぱり也町はづれより表になら
 び居て往來人をさそひ見物さする也合羽の羽織の傘
 のお寺のと目印を付る二文〜〜迂りなどいふ隠詞あ
 り又先にいふ表の役當とは此もの、事也乗物六尺大
 道具手傳等に出る也

芝居割符并殺陣太刀打名目の事

都て芝居者へ座元より渡し置く木札あり萬一此札を
 失ひたる時は過料錢五貫文出す也札に押印形あり両

御番所并火方盜賊改御掛へ印鑑差出置芝居者召捕の時此札を證據に出すとぞ札の形は小判形表上の方に座元定紋下に中村と横に認む三座とも同斷裏に印形すえ樂屋口と書て持主の名前を認る也此割符至て大切にする事也さて又殺陣太刀打の事は圖を以てくはしく後篇に出すべしと思ひしが先あらしを爰にしるす

殺陣の名目

- 一千鳥 一大廻り
- 一むなぎば 一腹きば
- 一横ぎば 一ぎば
- 一入鹿腰 一ひとまかへり
- 一ひよつくり 一二ツがへり
- 一ついけがへり 一逆立
- 一杉立 一そくび落し
- 一胸がへり 一手這
- 一猿がへり 一あとがへり
- 一重ねどんく 一飛越
- 一ほくそがへり 一死人がへり
- 一かはむき 一水車

一ツとこがへり 一仕ぬき
あらし斯の如し總して中がへりの事をぎばといふ
是は圖を以てせざればあきらめがたし

大刀打名目

- 一天地 一文七 一やなぎ
- 一切身 一廻り天地

茶屋の大概並方言の事

表大茶屋堺町十九軒葺屋町木挽町七軒小茶屋堺町十五軒葺屋町十七軒あり堺町小茶屋は棧敷本土間取事不成葺屋町にては棧敷をも取也又水茶屋といふもの堺町二十八軒葺屋町十七軒あり土間棧敷とも取事ならず木挽町水茶屋の事は追て記すべし樂屋新道本名岩代町茶屋十六軒ありといふ扱茶屋のかくしことばあらし左に記す

- 一大ぬけ 六十四文の事
- 一小ぬけ 七十二文の事
- 一との字 金二分の事
- 一あたま 銀二十目の事
- 一はねる 打出しの事

南部

- 一水の事鹽梅又は酒へわる時などいふ也
- 一めくら 砂糖の事
- 一行徳 鹽の事
- 一久松 物を小賣にする事
- 一砂利 米の事
- 一里扶持 一分二百文の事
- 一大角 百三十二文
- 一小角 百十六文
- 芝居ものかくし言葉
- 一しやりん玉 身にしてみてる事
- 一のん太郎 見物を入れて錢をなで込にする事をいふ
- 一でんぼう あぶら虫の事又油ともいふ
- 一虎の子 見物を土間へまく事
- 一うちき ぬすみをする事
- 一うにや櫻 物を打捨にする事
- 一おんれう かけ取の事
- 一さやあて さしのある事
- 一はねる 馬鹿の事

とらもり

- 一とらもり 質を置く事
 - 一てつてれツ、しよせん仕様のなき事
 - 一ひつてん 錢のなき事
 - 一いたいき 出来のあしき事
 - 一あて身 物を買て錢をやらす借る事
- 此外種々ありあらしを記す

劇場新話下卷

役者給金渡し方の事附芝居興行金高の事

毎年十月十七日寄初に出席すると極めたる役者へ手附の外に給金の内金を渡す帳元方にて金子出来不出來に寄てむつかしき日也役者給金一ヶ年極はたとへば一ヶ年金三百兩の役者なれば三分一の割にて顔見世に金百兩渡し殘金二百兩は來年五節句渡し一季四十兩と積りたるもの也三百兩の役者顔見世に渡す百兩も三度に渡す先づ手附金三十兩十月十七日寄初に二十兩同晦日五十兩渡す也右の極にて中役者又は囃子方に至る迄同様也寄初當日出席の役者計金子を渡し中役者などは跡より渡す扱又芝居興行金高凡積顔見世より來る十月迄を二百日と見て其時々役者座組による事なれども大概一ヶ年金七千兩位内外の積り大入中入不入を平均して興行の一日金四十兩二百日にて八千兩と定しもの也尤顔見世大入なれば八九十兩宛も上るものにて一ヶ年の内三替り大入あ

れば金主に損は無之然しながら金主仕合不仕合定めがたし芝居にては大金を損する様に心得たる人もあれど是又定りたる事なし大金損毛いたされし御方もあれば又仕口芝居故にもあるまじけれ共抱屋敷十四五ヶ所も出来されし人もあり一體芝居といふものは一ヶ年の出入のつもりは随分勘定引合ものなれども其支配する者又金子の心得と運の善悪によるべきか都而芝居は金主一人か二人にて惣益よくするならば利潤もあるべきが大勢寄合金主多き故利潤分ち兼引合ざる道理也先一年六千兩位の積ならでは不引合なり尤役者給金六千兩の積にして一ヶ年の内新狂言の替り目道具看板藏衣装芝居地代等凡千兩と見積都合金七千兩也此三分一金二千三百三十兩餘を顔見世の拂として殘金四千六百七十兩餘は來年中五節句拂と五ツに割金九百三十四兩餘に成扱一年興行日數凡二百日の積右之通拂ひ切る勘定ながら五月九月の拂は分をかけて拂ふ事役者共も心得たる事故談合の上分を懸て拂ふ也扱又一ヶ年入金右の趣にて日々上り高月々に多少あり顔見世三十日と見切一日上り高金六十兩位三十日々金千八百兩正月十五日

より二月晦日迄一はらひ此日數凡五十日顔見世は同様格別入もある事故一日金四十兩平均して金二千兩五月節句より六月五日六日比迄興行日數三十日一拂ひはせず夫故上り高一日金三十兩と見積金九百兩七月十五日より八月晦日迄日數四十日一日上り高金四十兩位として金千六百兩九月九日より十月十日比迄興行日數三十日一日金三十兩として金九百兩九月の一拂は昔より居なりの役者と外座行の役者との差別ありて居なりの分へは一拂高の六分ぐらゐ外出の分は七分位と高下して拂ふ也右の如く一ヶ年金七千兩にても其年の振合五月九月のわかち有て詰る所は六千兩位の上り高に成也凡仕入金興行の日々上り高を高平して見る時は金七千兩の芝居にて揚り金内場に見て金八千兩餘となる勿論興行日々の入用又は臨時もあれど凡右之通を定式とする也役者も一年金三百兩給金も五月九月の拂に平均する時は正味二百五十兩内にわたる也又三座とも入高少しつゝ遠あるべし中村座は再興後新規普請して間口も廣くせり裏行は三座とも同様葺屋町は其次木挽町は葺屋町よりも狭く素人目にも見ゆる也然し見物の入れ方は

色々手段ある事にて支配人帳元の心得によりて格別に違ふ事也是故に金主方の氣に入たる帳元は茶屋又は芝居ものなどはあしくいふ也
帳元大役なる事附平田初丸の事
帳元といへるは芝居惣支配人にして芝居一式の重役也古來は短才無智無筆下根無算の者にては勤兼しゆる人物を第一に選しに近來は左もなく無筆無算の上芝居向不案内なるものもまゝ見ゆる也一體芝居一式引請萬事心得を以て取計ひ一々座元へ問合すにも不及誠に下賤匹夫上もなき下々の身分なれども外見は芝居一遣皆尊敬して恐れ怖がらるゝ身分也外々より座元へ問合等の事ありとも帳元さへ承知ならば此方へ問合に不及と万事帳元任せと大夫元より威を付る心得なくては芝居の大金は出來ぬ事成に今は支配人の位を大夫元よりくじき帳元を度々引替金子少しも働くものあれば人物に不構其ものを帳元とする故萬端取締あしく芝居もの都て行儀不宜是も種々譯合あるべき事いや芝居不案内無筆無算の帳元などは其下々を立廻るものゝためにはよき事もあるべきか委敷は其人ならねば知りがたし三座とも芝居もの

たる身分の者は帳元に成度と思はぬものはなしされども至て六ヶ敷役にて第一金主の思ひ付あしくては不勤其興行の日々金主の前よろしき様萬事心を用上り高よきやうにせんとする時は茶屋の思はくあしく茶屋の請よろしければ金子の上りあしく雙方能き様に計ふ事至て心配也年々の事ながら來年の座組内内手附金の心掛九月比に至りて座組も出來十二月の世界もすみ無程十月十七日寄初にも成と跡金才覺して漸漸初役者付廿日紋看板大名題總看板も出ればはや晦日に至り翌日は金子才覺限りある日故ことばにも逃がたき心苦にて金子を拵へ金を出させ鷄の聲をも不待して一番太鼓を打込迄のくるしみ金主として十人は十色夫々の氣風に合せての心配いふにいはれず誠に此おもひをして外々の奉公勤などいたすならば一廉よろしき立身出世して老を養ふべきに夫に引替此役を勤めしもの行末よろしきものを見ずされば心あらんものはせまじき事ならんか去ながら夫程くるしき事を知つて是を捨かねよろしからぬ役をするも元より此道好よりおこる事にて古來より此役を勤めて金銀を貯へ退て樂になりしものなし心遣ひ

して子孫へも譲られぬとはよくあしき世渡り興行の日々毎朝未明より茶屋に責られ棧敷土間を割渡す是も依怙ひるきなくして扱仕切場へ詰諸口の上り高に氣を配り又は出入の行儀等も目を付心にあらぬ目に角立て萬事を改め兎角大勢の的に成て悪まる、事大かたならず一體芝居といふものは役者の外給金取者はなし日々出入の渡世人二百四五十人程の内賃錢とるものは幕引髪結衣装着せ小道具方等十四五人也其外は皆無給故見物人の入方の事に付色色譯のある事其役々に預る者あれば詰る所は帳元一人に止るゆる其程々を見計ひ渡世人も相應に家業取續く様に目こぼしもなくてはならず扱又打出しの太鼓につれて諸金主方へ引金の割勘定一日の上り高へ上ヶ役者へも引金とて金を配る事あり金主へも其程程の割にて納方專一とする也此金方納にも新古の差別ありて中々六ヶ敷物にて一日の上り高にては揃兼る故彼是する内に諸拂方の足り不足金主方よりは割金の大小にて是又不足をよき様にいひ譯又或時は見物の喧嘩口論迄何一ッ耳に入らぬ事なく漸々に夜の九ッ時比に至先暫時休息と思ふ内にはや茶屋茶

屋より翌日の棧敷土間の言込にて宿元へ詰かけ歸るを待居る故夫々挨拶して人を拂ひ扱明日の棧敷割にかゝる棧敷上下六十間餘あれどもよろしき場所は二十五六間ならではなき故茶屋は我勝手に客大事とよき場所を争ふ事なれども依怙なく雙方平和に割付る事大入の折などは此割には枕を砕く程の心苦なりさて漸割方も出來少し心を休めんと思ふ所へ無據方または金主役者などより頼の棧敷申來る是をケジャウといふ是には三座とも帳元至て迷惑する事也今迄種々工風して割付たるを又割直す事故六ヶ敷の上又六ヶ敷勘辨盡果筆を投捨いかいせんとおもふ事日也此時穴なしとて朝のうち帳元身を隠す也棧敷帳を割元の役人帳元より請取り割場といふ所にて帳面をひらき誰々は何番と茶屋に請取場所の善惡に依て客へ申譯立難きといふ理窟を聞て割元の者差略して善惡を繰合する彼是押合居る内狂言は三立目の幕明く比迄も見物居付ずして茶屋は客への申譯に戸を締るもあり混乱してもみ合ふ中幕明の拍子木續て聞ゆる鳴物に見物は心も空場所の善惡も夫なりなる事はおかしき習はせ也尤土間も同斷也漸見

物人も居付し時分を見て帳元出かけて仕切場へ詰る也此役を外目より見る時は芝居ものには敬ひかしづかれ金銀つかみ取にもする様に見えて浦山敷もおもふ人あれども中々左様の事にてはなし古來は此役九年十年勤めしものもありしが夫は世上もよく金主も大様座元も帳元へ威光を付る様にせし故也近年座元より帳元の威をけづりかるくする又帳元勤る者も元來匹夫野人故人の敬ふに任せ我を忘れ奢遊興に長じ金主の思ひ付あしきもあり芝居は大勢の寄合家業故癖なきものは一人もなく親の教へし商賣打捨此道に入る事故人氣あしく人をねたみ金主へ手を入人の善惡をいひ又座元へへつらひ昔を今の跡部長坂を習ひて座元金主の心を迷はし帳元の心をあしくさすものもあり是等はみな大夫元の心掛による事也されば近年兎角芝居六ヶ敷度々支配人替り終に芝居も休みかちになりて諸人家業の妨となる事座元より起る也誠に歎しき事ならずや扱近年木挽町森田座の帳元せし平田初丸といひしもの若年の比は心も荒々敷血氣にまかせあらぬ身持にて車五郎と異名せし者なるが風と森田座の木戸番となり少し役者の聲色も

遣ふ故言立といふものを勤めしが一度芝居へ入りし上は惣司たる帳元にならんと心掛しに運よく金主の目に付段々取立られ終には帳元と成て無滞興行打續四五年勤めしが久しく勤る役ならずと思ひ何卒來ル顔見世の座組をして快く跡役へ譲らんと心掛追々役者へ相談して手附金の渡し方首尾能證文取極たる上座元へ申込病身に相成勤兼る故跡役を見定權兵衛とかいへるものへ帳元を譲りし時は九月十三日也則金主を始座元仕切場惣茶屋へを呼集め相應の料理を出し採床の間へ役者給金手附證文を乗せたる三方を直し跡役へ譲りし也其節床のかけ物に軍配團扇を畫がき其上に

又照ると軍配渡す後の月 初 九

扱其身は隠居して身終る比谷中日暮里に石碑を殘せり是近代の帳元とて今に申出す誠に功成名遂て身退くの道に叶なるべし此末かゝる人物もあらんやいつれ帳元は芝居にて隨一の重役至てむつかしき役也

仕切場の事

仕切場とて大勢きらびやかに立出で居る惣體三座とも座元の手代にて給金といふものなく尤興行さへす

れば少々宛の事はあれども中々一通りにては勤まりかぬる者にて外目からは至て宜しき様に見ゆれども内證は六ヶ敷出續き難きもの也數年來勤馴しものは彼是とくらし行なれども新參ものは浮氣半分にて此道に入て見てはじめて驚く計り也素人目からは面白渡世と見るも無理ならず尤此仕切場は手代の中にも段々高下夫々掛り役ありて其役に掛る様になる迄辛抱すれば暮し方渡世にもなるもの也其中にも新參ながら能金主の手引すれば品に寄古參より早く役付ものもあり兎角金の働き方專一故此事出來ざれば出世はならず昔は仕切男とて人品も相應の上物書算用出來るものならねば出さぬ事又浮氣の渡世故物事花々敷仕立しものなるに依て數年勤て年寄りしものは格別新參に年寄は遠慮せしとなり夫に引替今は年寄無筆の差別なく仕切場の風はどこへやら自身番同様の有様此心ならば外の商賣に思ひ付方よろしからんといひし人もありし也扱又仕切場手代の内に當番といふものあり是は帳元の下役にて時々帳元の名代を勤る至てむつかしき役にて芝居のなりゆきあしき時は帳元を病氣にして萬事は取捌ぐ故多分此中

より帳元にもなる也此外に仕切場の中夫々掛り譯あり又當番の役は日々順番に帳元に引添棧敷の取調代金の集め方其外には立者役者を二三人宛も引請給金の取引も此役にていたす是等は色々手段ある事也

芝居口々差別の事

芝居口々と分る事は仕切場木戸留場棧敷表働半疊賣きせる留場樂屋掛りと分りて先仕切場を萬事の改所取締方故重とし其次木戸留場棧敷番表半疊と夫々分る故口々と唱ふるなり往古より芝居は木戸番にて萬事世話せし故帳元の事を木戸番世話人といひけるとなり木戸番の役は毎朝狂言不始まへより木戸口へ詰て一番太鼓三番更より聲をあげ一幕毎にも聲をあげる扱第一番目の大詰はいひ立といふ事を勤る(此譯前にくはし)また木戸番の中より日々順番にて木戸入口へ口番として兩人ツ、出て中の間または一幕見の見物を入るは木戸口に限りたる事にて少し宛の渡世あり勿論木戸の者は一幕見の見物より外入る事成らぬといふにはなく年久しく勤居るものは馴染も多くなる故夫々棧敷土間切落等へ客を入相應渡世ある也何れの口々を勤るものにて馴染の客なくては渡

世は成兼る也又留場は見物のうち酒狂人喧嘩口論等の取鎖役故若手を撰む是も日々賃錢を取といふ事なき故客なくては難取續もの也此口の役より舞臺番に出る(此譯前にしるす)此外顔見世入替り十月十七日寄初の節外座へ濟し役者を其座へ送り届る事留場の役也其節羽織袴を着て尤此送る役者は立者に限る事三座とも同様也扱又立者一人へ留場一人ツ、差添役者樂屋より花道へ出る時棧敷裏の人を除け早替りの時などなくてならぬ事なり外芝居の祝儀不祝儀等之節此口より勤る其役々を割付るものを役寄といふ是小頭の下役終には小頭にもなるべきものども也此外切落し札の上り方切落見物の入方等種々あり昔と違ひ切落は少分の事故留場も昔程は入らぬ道理なるに昔より多きはいかなる事にや此口を勤るものは若手故物事手荒くならざる様興行中禁酒の筈なれども夫も行届かねると見えたり一體芝居出入は昔より同口へ親子兄弟を出さぬ定りにて其外帳外もの宮芝居又は盛り場見世物筵張の芝居等へ出しものは三座ともに吟味する事也此口にも口番といふて日々順番に兩人にて勤る事にて見物人の喧嘩又は無錢の

でんぼうを押留彼是に付疵人等出来の節は此口番の者相手となる也此ものども、定りて賃錢給金といふはなし何様の事をして渡世になるやと疑ふ人もあるべし目に立衣類著かざりふら／＼して居るは何か種々手段あるべき事くはしくもあらはしがたし推て又知るべし扱又棧敷番昔は兩側には十五六人ならではなかりしにいつの比よりか二十四五人に成たり此役は用向多き事にて中にも折節芝居掛の御役人様方御見廻之節は魚相無之様萬事大切にいたし上棧敷に御入の事故此役より大切に心付る也是にも小頭役當といふものありて夫々下知する也日々遠方使祝儀不祝儀の名代又芝居休み中も用事ある故日々小頭方へ詰る事其外寄物はいふに及す何事の寄合等ありても給仕人には此口より出る此ものも馴染の客なれば取續兼年々替りて出續くものすくなし芝居定りといふは棧敷土間ともに一間の貸切百文刻切落し又は土間札詰棧敷札詰等は十六文刻なり乍去大入の時は高下あるべしなれども夫は詰見物に限る棧敷土間は何程大入にても直段上る事ならず右の通繼の刻錢にては渡世なるまじきに年古く勤るものは客も多く其

餘情にて取續事にや表半疊といふ者は興行日々早朝より出て看板を出し打出しには仕舞又夜に入ての遠方使金主方の送り其外夜中の事を勤め又は狂言の時馬牛に成せり出し廻り道具がんだうの手傳ひ狂言前に荷物の持運び等種々勤る是等も小頭役當といふもの有て夫々申付る也此勤方三座少々違へども大概斯のごとし此ものども家業は日々表に立て往來の人をすゝめ引込是を仕切といふ勿論一幕見又は張出し向正面など札錢下直の場所をすゝめ尤切落土間へも入れる事ながら田舎ものなどは格別の札錢を取居所も定めず其人に迷惑さするものもあり是等は仕切場より吟味して急度戒る事の由又半疊方の者は一幕見の半疊錢を取上る役にて是も少分の刻にて中々渡世にはならぬ事ながら見物人を仕切る事もあり其外には色々手段ありて相應に妻子を育み暮し行なり扱又きせるといふは火細賣の事にして是等も小頭役當あり此口の役といふは役者の出這入に聲をかけ淨瑠璃所作事の相の手に其役者をほめる其外道具立等の手傳ひ也渡世には切落見物土間札詰の見物へ火繩を賣る是も定りて少々の刻を取る其外馴染の客等

ありて相應家業にもなる也又込合ふ節には見物を近き所へ割込先より居付し見物に叱られながらも是を渡世にする也さて樂屋を勤るものは前に記せし如く幕引髪結衣装させ小細工方等は日々仕切場より賃錢を取其外は無賃也樂屋口番といふものむかしは年久敷勤たる功者なるを此口番とせしに近年は盛の若もの勤るは時代とて替りし事也尤樂屋定番といふもの兩人是は賃錢取の内にて日々の用事を足し後夜番狂言休中も樂屋の番人也扱衣装方は頭たるもの年久敷勤居て役者へ衣装渡し方色々定めある事前に記せし如く夫々見分る事也且又新狂言本讀の節狂言の筋を聞き役の衣装立者加役の衣装等心得て其役者役者へ掛合取極る事也至て六ヶ敷功者の入る役なりとぞ此外長上下素袍の附方揚幕より出る役者へは揚幕迄持運び其外何一ツ手のかゝらぬ役者なく又引扱の縫方泥入の洗ひ方種々書盡しがたし打出しには衣装を改め數多の品故紛失なき様心付る事也扱小道具方は其幕／＼に入用の品差支なき様心掛鐵砲玉焼耐火など此役の掛なり扱又仕切場に定番あり是は表働の部にて年中定人也又茶番といふものありて仕

切場の小遣用を達す其外に仕切場の用向晝夜とも達するものを中村座にては若衆といひ市村座にては詰番といひ森田座にては送りといふ此ものは帳元仕切場の小遣にて日々賃錢取也仕切場の内に高場表方などいふ役あれども昔と違ひ今は切落し少き故此役は名計り也土間もむかしは帳元にて割付しが今は土間番といふもの有て日々賣方する故此下役のものありて萬事取捌事とはなりぬ金主迎も昔と違ひ芝居も同様日々附添て自身に取引するはいかいはしき事なれども世代につれて是非なき事ども也

樂屋頭取の事

樂屋小高き所に居所を構へて居るを頭取といふ是は三芝居ともに至て大切の役にて大夫元名代をも勤る也興行日々御定外の衣装を着る役者を改め早朝より役所へ詰て萬事を司る役故に大夫元の弟子筋か何れ少し由緒ある古老の役者を頭取とする事にて樂屋一式の定例を心得たるものならでは勤らぬよし興行日々掛り合はいふに不及無用のもの二階三階へ上げず殊更見物の女中などは決して上ざる事にて興行差支なき様萬事を改日々役者へ渡し物紅紙の類を心掛

役者又は下兩側の不行儀を改何事によらず古法を守り其上出語り淨瑠璃の時は其淨瑠璃名題役人替名大夫三味線の口上をいふ也又役者病氣の時は頭取へ人を以て斷り申來る故其段座頭へ達し名代を出す事彼是とむつかしき役儀たるに依て人物を撰み定る事古法也然るに今は段々役柄軽く樂屋不取締に成行事は座元の依怙ひるきにて頭取を年々引替其座頭外座へ行時其頭取をも引連其座の頭取とする故是等はあまじき事なるに座元より夫を差留る事のならぬは大夫元も昔より軽く成しか又帳元たるもの器量なきかの二ツ也

千兩役者の事

役者の給金千兩などいふ事は誠に故ある事にやいつれ段々高下ある事にて座頭の立役女形の立物となれば千兩取と申事も有なれども一體役者といふものは顔を賣る渡世ゆるとらぬ金も取様に人に聞ゆる方よろしき事なるべし尤是には種々口傳あり評に曰座頭の役者立役女形ともに給金段々取増當顔見世より千兩になるといふ時芝居掛りの者を呼て振舞する是を千兩振舞といふ也江戸の繁昌に

合せては千兩役者幾人もあるべき事にこそ扱役者の心持暮し方等の事は元より色々にて定りし事なし大立ものと成るもの座頭などに出世するもの素人より此道へ入りたるものには稀にして多くは立もの、子中立者の子など幼少より舞臺を勤段々生長して大立者座頭にも成る事故十人が九人迄は世間をしらぬ故人の思ひやりなく氣儘氣隨の者多き故下下の者どもこまり果る也是幼少より立もの、子にて人の下に居る事を不知芝居中にては上見ぬ鶯の生立にて立もの座頭ともなる事故我儘にして人中をしらぬものどもある中にも役渡りよろしき立ものありて芝居世話人帳元仕切場にては能き人といふ役者あれは中間にては夫をきらひあしざまにいひなすは全く我身の善惡をしらづして人をあしく思ふ事也さてまた暮し方の事は夫々違ふ事ながら近年は役者の身分を女房任せにしておくもの多し是は損のいかぬ事故勝手よき歟第一女といふものは愚なる生れ付ゆる夫の人に尊敬さるゝに乗じて其身も高ぶり物每さし出口をきゝ男まさりを働き却て夫の顔の立ぬをもしらぬものあり役者立者と成ては金はとる人に

は敬はれ客はあり芝居よりは給金をこすり付て持掛る事なればたとへの如く寶椽て入る時は又悖て出るの金言むべなるかな衣装に大金入相應に人に遣しなとする事ゆる家屋敷を持身を安樂に退し役者多からず然し役者の身分として素人商人の心掛しては年長じて紅白粉を顔にぬる事はならぬ筈なるべし其中にも若き役者は身持あしく酒食を過し舞臺にては脾胃をいためる故に長壽すくなし随分身持を大切にいたし度もの也又役者たるもの家事取締なきも道理ならんか芝居渡世する者棧敷番火繩賣の女房までが髮結に髪を結する程の事故役者は随分くらし方の下手がよろしきか知らず

女形の事附古人役者氣性色々の事

上方はしらす江戸にては女形の上立ものといふは濱村屋大和屋錦屋近江屋鮎江屋など此上こそ女形はなし當時江戸上方ともに上手の女形すくなく江戸にてよきも上方にてあしく上方にてよきも江戸にてはあしきもあり何れ四五年も居馴し上ならでは分りがたし一体女形は上方生立がよろしく立役は江戸生立よしと昔よりいひ習せし也女形は假初にも男らし

き事をせず平生とても其心持にてくらす事なるに菅原の狂言に女形より覺壽の役景清の妻あこやの役にて景清の仕打又或時は平井權八の役を勤る事折々あり是等は心得違とやいふべき大きに損なる役也若評判よろしければ色を捨るに似たり又あしければ座中の疵となりて甚あしく善惡ともに損を捨て持まへの女形の方よろしき也元祖芳澤あやめは若女形の名人三ヶ津に名高く仕置し事色々ありて人のゆるせる名人なりしが年長じて女形は勤らぬとて元服して芳澤權七と改名して立役となりしが至て不評判漸一年勤めしが翌年抱へ人なき位ゆる又々思ひかへして元若女形に成芳澤あやめにて出勤せしに大評判自然と色を含みての仕打昔に見増身終る迄評判替らざりし由さすれば若女形はいつ迄も女形にて体を崩さぬがよし又近年尾上梅幸女形より元服して立役に成りしに評判よろしきは上方にて元服せばいかいあらん土地によりて違ふ事もあるべし立役も持まへがよし敵役は愛敬をとらぬもの實惡はすぎ方よしされば昔より時代狂言は江戸役者世話狂言は上方役者よしと申傳へたり女形は上方よろしきといふ中にも

江戸出生にて二代目瀬川菊之丞稀もの成しに世を早くせり誠に近代に正の若女形なりをしむべし。兎角役者は座組よき芝居へ住込役廻りもよく其役を出かす時は見物の目にも付て出世も早く成也。上方役者も下りの時節肝要也たとへは堺町へ我に類する役者下る時など役廻りあしく江戸風に合ぬ狂言などする時は不評判にて取かへしは六ヶ敷もの也。下り役者すら時節ありし殊に江戸居付の者は座組を可心得事也。近年上方にて名人の聞えありし淺尾爲十郎葺屋町へ下りし時堺町へは四五年も待兼たる中村仲藏下り江戸根生ひいき強き秀鶴の事故上手なれども奥山の評判よろしからず是時節のあしき也。其中に片岡仁左衛門は弟子ながら折よき下り役者にして正月屋の死去せしを歎きの中よろしき評判夫には引替淺尾爲十郎の不評判随分上手にて仕打の味ひよろしけれども時節あしく役廻りもよろしからずして上手を空しく登らせし事也。役者は花と實と揃はらねばならず花はあれども實すくなく實はありても花なく二ツそろひしは稀也。花實揃ひたる役者は年たけても老込事おそく花計りの役者は藝しまりなし。實計りの

役者はさみしく舞臺も早くくずをるゝもの也。扱又狂言に目の利役者は顔に狂言を持故心には猶更也。さて又立ものなど病氣の節中役者より名代をして出来よろしく見物の目に留れば自然と出世の小口也。此類間々あり又都て狂言の仕打は平生の心持につれるものゆる身持大切也。ある時秋狂言の相談に古人澤村訥子方へ古人市川柏筵坂東新水三人寄合暑氣の時分ゆる二階物干へ出て涼み居しに折ふし夕立雲起り雷頻に鳴動す。柏筵は母の雷嫌ひ也とて急き宿へ歸る雷はいよゝゝ鳴響く。故薪水は法花經自我偈をよむ亭主訥子のみ夕立の氣色心の涼しきとて召仕を呼コレコレツツカケを百があつらへて來いと申付しと也。此等は藝道に拘らぬ事ながら心持夫々違ひありて狂言の仕打もおのづから此意味あり扱又古人市村羽左衛門家橘若大夫の時は龜藏とて和事所作事の名人也。しが至て物覚えあしく大夫元の事故樂屋稽古の外私宅へ囃子方淨瑠璃大夫其外呼寄稽古しても覺え兼彼是する内外役者稽古熟し中ざらひ大ざらひにも相手は勿論外々の者も氣の毒におもふ程覺えかね初日を氣遣ひ案じつゝはや初日に至り本舞臺にかゝり淨瑠璃所

作事に成ると稽古の時とは違ふて其間拍子のよき事見物は餘念なく相手の役者大夫囃子方迄きもをけし今に〜申出す也

狂言作者心持の事附津折治兵衛篤實の事

作者といふは至て博學ならずとも諸事讀兼る程の事にては出来ぬ事なる中には唐詩選もちとむつかしきなどいふ輩も見ゆるはいかならん荒々に神儒佛の道をも辨へ軍書なども能覚えざればならぬ事ながら古人作者名人近松門左衛門近代にては津折治兵衛などいひし文才ありて神祇釋教戀無常を第一とし作り置たるをこゝかしこ入替引振などして間に合する事今に多し又文才よりは時の作意形容を重とし昔の作者とは心持大きに相違せり昔は第一に立作者を抱へ其作者相談の上座頭誰女形誰敵役誰々と相定めし也狂言も作者の思ひ付たる儘にて誰へ問合もなく書上る事故名作もあり今は座頭女形の手引にて作者より座頭女形へ何ぞ思召もありやと尋ね其役者當春はカ様の役秋に此役たりし故此顔見世は目の替る様に是らを勤たしなど色々望好をいふ故中り狂言出来る

筈なし夫故近年の狂言三建目より切迄一幕切の狂言の如く筋合分り兼る事多し是作者主役を失ひ大鼓持同様立もの、袖にすがりて仰書にする故也。又中には上方より古代の狂言本を買出し此狂言に中山新九郎と三樹大五郎女形は二代目芳澤あやめケ様の役にてありし故此度は是を誰あれを誰と割振して一廉作をせし顔するものもあり是等は作者にはあらで古本屋に似たり板附に狂言作者と記すは笑ふべき事ならずや斯る作者を高給にて抱古本の狂言に大金を出して芝居する人もあり今の狂言名題などに座頭又は女形の名を祝て書込事輕薄らしく見物への憚りもかへりみず此名題といふは狂言の体を含み又は顯すものゝよし中昔顔見世大名題に木毎の花相生鉢の木と題し梅櫻松を顯はし名作作者の働きと今に申傳ふ我身の上を狂言よりも大切にする事にや座頭の名題をかた取る故歎今の有様にては名題もよくは出来ぬ道理也。狂言作出來上り先座頭又は女形の座頭へ内々讀聞せあしき所彼是差圖を請直し〜しての上にて惣役者へ讀聞せする事故二枚目以下の役者は氣に入らぬ事ありても夫なりに濟す也。されば中役者など役

柄あしく不評判の元となる也兎角餅は餅屋狂言の事は作者に任せて置べき事ぞかし是も根を糺し見れば愚智文盲の作者ども役者にかく癖を付しものと見えたり元祖市川團十郎柏庭座頭たりし頃津折治兵衛といふ立作者ありしが元より交り宜しからず不和にてある顔見世本讀當日先一ト通り讀しに柏庭不承知の様子ゆへ又別本を出し讀たるに彌不承知の顔色治兵衛少しもいろはず三度目に又々別本を出し既に讀んとせし時流石柏庭感じ入誠に名作者かな一通二通り本讀納り兼しに少しも綺はず三通り迄の心掛外人の不及所也此上は作者了簡次第いづれ成とも差圖に任せ早々稽古いたし度よし詔て早速稽古にかゝり其狂言大當りなりよし申傳ふ此比迄は座頭へ相談の上作せしとは見えず扱又淨瑠璃文句は近來にては堀越榮陽不思議に珍文句を書出し常磐津文字大夫の節附もよろしく殊更役者は家橋慶子二代目路考何れも名人三拍子揃ひし故とは申ながら全くは淨瑠璃文句による事堀越の手柄なり近くは櫻田左交などは文句よくつゝたりたり狂言作者も堀越金井など迄は少々古風も残りしにいつとなく變じて作者は役者の

書役と成し事世の流行とはいひながら口惜き次第也

座頭の事附柏庭秀鶴の事

座頭は至て重く取扱ふ事にして樂屋一式總役者の支配役故藝道の功を積て自然と此役に至る也役者はいふに不及芝居一式の者に重んじ敬るゝ身分にて此座頭の心一ツにて芝居六ヶ敷もなり又興行もつゞくも也扱又年功なくして座頭に至るもは江戸市川團十郎一人に限る京大坂共に役者總卷頭也六代目團十郎若年ながら座頭に至りしに惜かな花の盛を無常の風に吹ちらし二十二歳を一期として極樂の芝居へ赴き暫時團十郎の名前中絶せしに又々鍛藏事團十郎と改め當時專藝道出精七代目の相續未頼母しき事ぞかし

案るに市川團十郎事は三ヶ津は不及申遠國在々夷國迄も其名弘まりし事に付ておかしき嘶色々あり其一二を爰に記す二代目丸屋大谷廣治十町並中村助五郎樂魚一對の立者都も鄙もおしなべて助廣と稱し愛られし上手也ある年芝居長休の時を幸ひ十町事心安き小結一兩人誘ひ奥州松嶋一覽せんとて

旅立羽州象潟など一見し彼是見廻る折から一字の社に宮柱太しく立しひろまへにぬかづき旅の疲を休んと神前にイしに片田舎なれども奉納の繪馬夥しく掛並べたる中に一際立派なる繪馬に魚樂十町が河津股野角力の似顔を書たり其側に市川柏庭しばらくの繪馬あり十町煙草吞ながら詠居し折から近郷の童ども二三人打連來り社前にて戯れ遊ぶを十町招き柏庭の繪馬に指さし此役者を知てかと問ひしにお江戸市川團十郎と答ふ又魚樂十町の繪馬を指さし此役者も知てかと尋ねしに子供口を揃へソナバイ〜役者は知らぬと云しかば十町大に感心し今に始めぬ事ながら市川團十郎の名は日本に弘り中々餘の役者の不及事也と舌を巻しと也また先年沖船頭(名は憚ればしるさず)難船にて外國へ漂流し都兒格といふ國へ渡り十餘年を経て乗組廿人の内不思議に兩三人古郷へ歸りしが彼國にて惡魔よけとて佛壇に似たる棚を拵へ家内にて祭る所ありいかなる者を本尊とするやと見たりしに市川團十郎しばらくの繪なりしと彼人々物語たるよしを聞きかゝる外國迄も其名高き事誠に役者

道の氏神ともいふべきは市川家に止りたり

其外座頭ある中にも師匠親の名を繼又は内縁に寄て大立者の名前を譲り請座頭になる事也近來初代中村仲藏は勘三郎秀鶴の弟子にて藝術執行の力を以て中役者より其名の儘にて座頭になりしは當代一人也中役者にて給金一年三十兩も取には餘程心掛ねば出來ぬ事なるに其役者より出世して給金八百兩の座頭に至りし事申々容易の事にあらず扱座頭といふは萬事に行渡り芝居の事も帳元と相談し一日も多く興行する様に心掛當り不當の様子に依て金子調達出來不出來の時は自分の給金は跡へ廻して外役者へ渡させ其上高金の役者へは帳元共々無心をいふて初日をはづさぬ様にするを座頭の心入とする事にてとかく座頭あしき時は興行むづかしきもの也惣じて役者はかりそめにも金銀に拘らぬ様にいたし度もの座頭迄に出世する中は大給金も取たる身分故心あるべき事也たま〜右の如く芝居の爲おもふ座頭あれば却て仲間にてはあしくいひなす族も心に耻べし近代にての座頭は木場の五粒にとゞまる此人存生中は芝居もおだやかにてありし由扱又近年はやゝもすれば座頭

たる立役を排除女形たるもの萬事を差略し存分の振舞かりそめにも女の形を寫す身にて夫とたとへし立役を尻にしき時としては身にも應せぬ役好み景清が妻あこやにて花道へ懸り六法振ての引込打出しに先今日は是切をいふは女形にはあるまじき事也昔は女形にて立役を勤め當りを取しを耻とせし由此外座頭は我弟子は勿論引立遣し度思ふものたりとも依怙ひるきなく作者に任せ置至て勤難き役ならば作者へ頼て其役者行立様に心がけ若手又は見物の請よき役者に役を多く廻し我仕打は狂言のべりくを引請又不當りの時は座頭の役一幕引かへてする事狂言にもよるべし舞臺にても不入の節外役者の不出精を心付べき事なるに當時の座頭は九月前日にはあの方出替りも定る事故我身分重年ならねは心持ありて一ヶ年は惣樂屋を預りたる身分をかへりみず彼是と少しの事を難澁して九月中より病氣と號して引込心あしく其座を別るゝ事何事ぞや定月迄は其座を大切に勤め狂言舞納には口上を述て奇麗に出るを座頭的身の行ひといふべし役者風儀古來とは大に相違せし也

三百
 役者古今流行の事 古人當り狂言の事
 當代の役者は昔の役者より物事器用にて至て上手に見ゆるやうなれども是には色々譯のある事にて昔の役者と今の役者と藝道に違ひは有まじけれども藝を細かにするは今の役者心で藝をするは昔の役者也是故に内外の違ひありなれども當時は人氣もかしこく早く目にとまり氣に入り聲のかゝる様に心懸藝の損得には構はず昔の役者は名人の仕置たる事にて人の眞似をせず一流を心掛和事仕などは年丈ケても拵をすりはがしなどする事なし古人中村少長は年終る迄色事仕の体を崩さず先年堺にて二代目木場の五粒顔見世に本名秩父の庄司次郎重忠假に梶原の郎等あねわの平治にて秀衡の屋形へ上使に來り義經の首請取の平敵にて身替りの首請取花道の中程迄來り衣装もかつらも其儘にて本名重忠と成りし所誠に仕打計にて腹の内が重忠と見ゆる様子中々外人の出來る所にあらず表裡の名人といふ也御詔勸進帳といふ大名題にて殊の外大當りなりし由又古人中村慶子は娘道成寺七變化其外所作事を勤るに舞臺にて見物を後ろにして湯茶を呑し事なしにかにといふに平生

の心掛に依て所作事にかゝりても心の改らぬ故息切もせずといひしとかや又中村秀鶴も舞臺の心掛格別にて狐の狂言を勤むるに終に狐を顯さぬ狂言にても肌には狐の形の縫くるみを着て本体狐の心持にてせし由近代の名人也先年森田座にて安達が原の狂言にて八幡太郎の役に大當りの時は給金四十兩の中役者其翌年市村座にて評判よく九ヶ年目には森田座の座頭と成八百兩取となりしは世の人の知る所なり其後上方へ登りいよく評判よし此秀鶴と中村魚樂計りは人の名を請繼ずして大立者になりし事外に類なしある役者古人訥子へ色事仕は至て六ヶ敷ものなるがいかかしてよからんと尋ねければ道外方の心持よしと答へし由古人嵐雛助和田合戦の狂言に板額にの役に門破りの段を親嵐小六見物して居たりしが打出して後門破りの仕打勢ひ見苦しとて叱りし故翌日心を付て勤めしが小六又いふ様いかい心得しや昨日より却て見にくしとて叱る其夜色々考へて翌日勤しに猶々あしきとて小六大に叱りける故其夜寝もやらす工夫をこらし第四日目に工夫を付門破りを勤て宿へ歸り今日の仕打御心に叶ひしやと尋ねれば小

三百一
 六答て今日の仕打至極よろし定て見物の目にも叶ふべしといひしが果して大評判なりし由仕方を小六は教へず又眠獅も其仕打を問ずして工夫をこらし板額にて門に掛り長刀をかひ込其手にて上著の裾をつま取る様に持添て片手は門を押たる仕打女子の門破り故かくあるべき事誠に藝道よく修行せしものといふべし古名人拍蓮大佛供養の景清法師武者の立長刀をかひ込本舞臺より花道へ懸る時うしろの幕を絞り訥子助高屋重忠の立出て曲者までと聲を掛ると景清本舞臺へすらく立戻りて何がナントといふ仕打の所初日に景清花道へ掛りて重忠聲を掛るかと思ふに音もせずもしや失念せしかと彼是氣をもみ花道も七八分通過あはや揚幕へ近寄ぬるに聲かけぬ故大に氣をいらだち今一足にて揚幕へ入るべき程に成し時うしろより訥子重忠大音にてクセモノマテと聲掛る拍蓮思はず振り返りギククリ思入あり訥子又平家の侍悪七兵衛景清までと云拍蓮其時舞臺へ立戻り重忠に詰掛ナニガナントといひし其勢ひ誠に凄じかりし由今に申傳ふ是訥子の心持にて拍蓮へ藝のはづみを譲りての仕打故拍蓮格別出來よろしかりし

と也兎角上に居ては下の役者の引立ッ様に心掛べきもの也人には不構我のみほめられんと心得るは下手の中なるべし又昔は愁歎の場などにて見物も何となく哀を催せし時は道外方出て何かおかしき事などいひちらし見物の心を引立る事なりしが今は敵役よりおかしみをする故道外方は用なし江戸河東節の所作事は非なくてはならぬ事にてありしにいつとなくすたれて今は常磐津富本の豊後節なくては叶はぬやうに移り替るは芝居時々の流行なり

三芝居系圖の事

三座系傳諸説區々にして一定せず洩れたる事あらば好事人宜敷糺し給へ

中村座

元祖 中村勘三郎

本名三間氏山城國の産也猿若の名人委細初に記す故に爰に略す

二代目 明石勘三郎 元祖勘三郎實子也

父と上京し恐多も明石といふ名を拜領す家相續して大夫元十七ヶ年相勤此時弟子市村竹之丞葺屋町にて芝居相續依之勘三郎より紋所鶴の丸を譲り勘

三郎市村座にて竹之丞引合せの口上を勤し也此紋所憚り有りて竹之丞家の紋橋に改む於今顔見世入替り新役者附櫓臺輪に中村座は舞鶴市村座は鶴の丸を付るは昔の遺風也

三代目 中村勘三郎 明石の子

大夫元五ヶ年

四代目 中村勘三郎

延享より貞享元年迄大夫役後隠居して傳九郎と改號道名人奴丹前並朝比奈の役元祖也今以て朝比奈を勤る役者は鶴の丸を紋所とす是傳九郎替役にて附初めたる例也又中車の紋を付る事は隠居の紋所中村の中の字四ッ合たる形世の中よしと祝して用ひし也朝比奈は和田氏故紋所三ッ引なるに今の世迄も鶴の丸を朝比奈の紋所と思ふ様に成しは全く傳九郎藝のいさほし也

五代目 中村勘三郎 四代目勘三郎子

貞享元年より元祿十四年迄大夫役十八年弟兩人中村仁左衛門同重助と云仁左衛門は狂作言者と成せり出し廻り道具を始めて造る重助は表仕切場其外芝居一体の仕法を定る外座も准之扱勘三郎は代々淨

土宗本所押上大雲寺代々墓あり然るに四代目隠居傳九郎至て日蓮宗信仰にて本所石原妙源寺に石牌を残せり尤隠居家は右重助に譲る依之傳九郎の名前は重助より譲る事なり

六代目 中村勘三郎 俳名冠子 五代目勘三郎子也

七代目 明石勘三郎 俳名雀童 六代目勘三郎子也

此時三座申合芝居破風造土藏造十一ヶ年以前山村長太夫一件に付棧敷一通り相成候處以來下棧敷御免之儀享保九辰年三月廿六日相願同年四月十八日願之通被仰付候也

八代目 中村勘三郎 俳名舞鶴 七代目勘三郎弟也 幼名勝十郎後傳九郎と改

九代目 勘三郎

實は二代目中村七三郎孫也八代目舞鶴賀養子相續の處早世す

十代目 中村勘三郎

九代目勘三郎早世に付縁類より賀養子家相續の處病身に付隠居弟傳九郎へ譲る

十一代目 中村勘三郎 俳名冠子 幼名傳藏後傳九郎

實は二代目市川八百藏一子也養子相續之處近年年度類焼又は狂言不當損毛打續大借出來興行差支寛

政五丑年より休座然處諸金主一同格別之心情を以不借同様用捨して同九巳年九月十二日より再興行殊に新規普請間口十五間の大芝居と成事誠に中興の元祖といふべきもの也

市村座

元祖 村山又三郎

生國和泉國願之上於上堺町始芝居興行中村座より十一ヶ年後也承應元壬辰年没す

二代目 村田九郎左衛門

元祖又三郎歿又三郎死後相續すといへども別家業にて芝居の事に不拘依之明石勘三郎弟子市村羽左衛門並彦作といふ者相座元にて興行此時上方より小唄三味線の藝者下り一切宛の放れ狂言興行又右近源左衛門といふ役者下りねり絹の染浴衣を冠りて女の形を始めて此座に於て相勤又三郎無實子九郎左衛門を聲とはせしが藝道をば瀧井山三郎へ譲る是も無子山川主膳といふ役者を養子として芝居は九郎左衛門名前座元は追々差替興行せしとなり

三代目 市村宇左衛門

明石勘三郎弟子也芝居名前は村田九郎左衛門

四代目 (脱字)

明石勘三郎弟子也寛永慶安の頃御城へ被爲召狂言
盡しを仕鳥目百貫文御時服拜領藝道至て上手殊に
勝れたる美男にして最負強く金主の餘光を以て村
田九郎左衛門養子と成一名の大夫役相勤る故明石
勘三郎より鶴の丸紋所を譲り後憚る事ありて竹之
丞家の紋橋に改む後宇左衛門と改めまた羽左衛門
と書改る

五代目 市村宇左衛門

六代目 市村竹之丞

七代目 市村長三郎

八代目 市村竹之丞

實は茶屋何某の子六代目竹之丞近縁に依て家相續
後羽左衛門と改元祿十六年より大夫役寶曆十二年
五月六日没す

九代目 市村羽左衛門 俳名家橋

八代目羽左衛門子幼名滿藏延享二年より龜藏と改
寶曆十三年より大夫役相勤る和實所作事の名人近
代の達人也其上古人柏庭一世二代矢の根五郎を勤
し時於舞臺矢の根を讓請翌年柏庭爲追善矢の根五

郎を勤大出來也弟市村吉五郎は三代目の坂東彦三
郎也

十代目 市村羽左衛門 俳名龜全

九代目家橋の子幼名七十郎後龜藏

十一代目 市村羽左衛門

元祖よりは是迄年數百七十餘年此羽左衛門芝居休座
再興等の譯世人知る所故爰に略す

森田座

元祖 宇奈木太郎兵衛

萬治三子年願之上始て於木挽町芝居興行小唄文作
の名人役者にはあらず依て坂東又九郎といへる道
外方所作事の名人を萬事相談相手とす實子無之又
九郎弟又七を養子とし大夫役を勤さする是二代目
森田勘彌也又座元をば又九郎へ譲る又九郎も實子
へ名前を譲る故大夫元森田勘彌杯座元坂東又九郎
と兩名にて興行太郎兵衛は本名森田氏宇奈木は藝
名也享保の頃兩名を止勘彌一名と成る

二代目 森田勘彌 座元坂東又九郎

三代目 森田勘彌 座元坂東又九郎

四代目 森田勘彌 座元坂東又九郎 幼名福松

五代目 森田勘彌 座元坂東又九郎 幼名鍋太郎

俳名眞鳥

地所の事に付九ヶ年休座

六代目 森田勘彌 俳名杜元

九ヶ年休座を建立再興幼名金藏といふ病身に付五
代目勘彌娘へ元祖中村重助子小傳次を娶合大夫役
を譲り隱居して又左衛門といふ

七代目 森田勘彌 俳名殘香

三代目澤村長十郎後助高屋高助の弟子瀧中重の井
といふ小傳次と改め六代目勘彌養子と成

八代目 森田勘彌 俳名千蝶

七代目勘彌子幼名勘次郎後太郎兵衛

九代目 森田勘彌 俳名眠舎

八代目千蝶子幼名五次郎後坂東又九郎寛政元酉年
より九ヶ年休座同十年中再興せしが又々當時休
座也元祖より年數百四十餘年也

右江戸芝居往古は四座ありしに享保元丙申年三月生
嶋新五郎一件に付御詮儀の上木挽町山村長太夫儀遠
島被仰付芝居斷絶す依て此時より三座と相定る休座
中は假芝居興行左之通

中村勘三郎休座中は假芝居

市村羽左衛門同

森田勘彌同

都傳内
桐長桐

河原崎權之助

休座中にも芝居三件の御糺事等有之節は三座の者
被召出且書付等も奉差上也尤年頭御禮五節旬御禮相
勤る假芝居のものは此儀に不及事也かゝる芝居繁榮
もまことに治れる御代のしるしなるべしとめで度筆
をといむ

劇場新話下巻終

江戸眞砂六十帖廣本

總目錄

卷之一

- 一元祿金銀吹替之事
- 一石川何某か女房奢之事
- 一奈良屋何某か由來之事

卷之二

- 一谷中感應寺流罪之事
- 一村田半兵衛之事并英一蝶之事
- 一永代橋懸る事
- 一深川炮録島入定之事
- 一本郷谷口何某横死之事
- 一秋田淡路家滅亡之事

卷之三

- 一江戸中犬醫師時花ル事
- 一片山某か事
- 一笹屋某か事
- 一中村何某と云醫師非道之事

- 一阿部家の金盗人の事
- 一伊勢屋何某出來分限之事

卷之四

- 一中島屋何某工面者之事
- 一江市屋何某か事
- 一赤井氏奉行職之事
- 一高島屋何某商内を替る事
- 一兩國橋幾世餅か事
- 一五十嵐屋か賣出しの事
- 一丹波屋立身の事
- 一丹羽遠江守殿非道之事
- 一深川法善寺偽龍燈之事

卷之五

- 一天一を語り種とする事
- 一甲坊主吉原遊ひ之事
- 一都賀屋何某嶋へ行事
- 一銀座奢り露顯之事
- 一本所に非人小屋懸る事
- 一小松屋何某へ捕手之事
- 一山川何某悪黨を召仕事

一美濃屋何某利發にて身を打ッ事

一南部屋何某か一生之事

上之卷 以上

江戸眞砂子六拾條下之卷貳拾七ヶ條 追加四拾六ヶ條合テ七拾三ヶ條目錄

卷之六

- 一 手嶋屋何某出奔の事
- 一 山下何某一書を献する事
- 一 直訴の箱の事
- 一 町御奉行出ル事
- 一 町火消町割の事
- 一 將軍吉宗公小金御猪狩之事
- 一 淺草深井志道軒か事
- 一 本所お梅姥か事
- 一 竹の子姥か事
- 一 瓦姥か事
- 一 高間騒動の事
- 一 深川にて主殺の事
- 一 權兵衛直助と同前に御仕置之事
- 一 丹波屋何某心中の事

- 一 白子屋娘一ッ印籠の事
- 一 竹之丞芝居騒動之事
- 一 築地敵討之事

卷之七

- 一 田浦万隆寺和尚之事
- 一 藤掛殿門破られし事
- 一 日本左衛門といふ盜賊の事
- 一 藍屋何某太夫に馴染し事
- 一 福田屋後家好色の事
- 一 淺草西應道具立の事
- 一 金杉ニ伊豆屋と云酒屋の事
- 一 朝比奈氏騒動の事
- 一 棟梁の子芝居にて難儀の事
- 一 大和屋か小僧ぬけ参りの事
- 一 不忍か池築地の事
- 一 相州小田原大盗人の事
- 一 追落歴々の事

卷之八

- 一 鎌倉屋何某か事
- 一 成ル井何某か事

- 大門通りいせや何某か事
- 鳥井何某か事
- 紀州日蓮宗何書物の事
- 岩田何某身上持の事
- 無間の鐘の仕組違ひの事
- 鳥盗人の事
- 亥年川筋大水の事
- 深川にて喧嘩の事
- 寛延巳年大水の事
- 三拾三間堂建の事
- 三州吉田の橋曲りたる事
- 一文盲成本道の樂調合の事
- 非人髪をきらるゝ事

卷之九

- 一灸を居ぬ身の悲しひ仕合の事
- 一小智の者も命を落す事
- 一胡麻鹽八左衛門が一生の事
- 一武門に欠し知行盗人の件
- 一人に情をかければ報ひ來ると言事
- 一系圖正したりとも一心の事

- 一雷に恐るゝも身の余計内の事
- 一娘を盗まれての上大損の事
- 一紙屋五郎兵衛か盛の事
- 一役者こはいる元祖の事
- 一堺町吹矢町役者評判の事

卷之十

- 一江戸男伊達斷絶の事
- 一水野氏の事
- 一比丘尼盛衰の事
- 一本所夜鷹の起りの事
- 一役者繪馬の由來の事
- 一柳原土手見世出ル事
- 一町々餅養賣有し事
- 一蕎麥切温饅の事
- 一江戸町々に水茶屋出る事
- 一江戸中相對勸化始の事
- 一觀世大夫御免能の事
- 一世につれて人の才智になる事
- 一太坂屋何某店を出す事
- 一男伊達に似たる事

一目あかしと云悪者御停止の事
 一新吉原燈籠人寄せの事

下之卷 以上
 以上圈點之分卅一ヶ條初輯に載たれば略す

江戸眞砂六十帖卷之一

- 元祿金銀吹替之事
- 石川某か女房奢之事
- 奈良屋何某か由來の事

江戸眞砂六十帖卷之二

- 谷中感應寺流罪之事
- 村田何某
- 永代橋掛ル事
- 深川炮祿島入定之事
- 本郷谷口何某横死之事
- 秋田淡路守家滅亡之事

江戸眞砂六十帖卷之三

江戸中犬醫師はやる事

犬醫師として江戸中に兩人有て呼に遣すと羽織袴を着して來りぬねり薬のやう成物をあたへつる也此薬は小豆を饅頭のあんにして下香共を入るよし孕犬は腹をなで、善惡をいふよし今おもへばおかしき事にや芝切通し植木屋五郎兵衛麴町八丁目小島屋太兵衛犬醫師也

片山何某か事

小傳馬町二丁目片山吉兵衛は元は加州生れのよし江戸にて輕き奉公して少し金を溜め自分商内いたしぬ我元祖は三河生れにて通り町二丁目和泉屋と云小間物問屋なり其頃は小間物屋は通り町に三軒ならでは無之よし初て針を上方より多く仕入て下りぬ夫迄はかみがたのみやげ又は上方へ行者に逃へ遣し候よし殊の外拂底の折也吉兵衛我が先祖に商内致し度よし相談す幸成針が下りたり珍らしく屋敷へ賣可申と云吉兵衛悦びてあきなひに出ぬいか程持行とも一屋

敷二屋敷にて一日に利を見る事一貫四五百文程も有て上野花見に誘はるればあたりの辨當割合程先へ持せ遣して少し用事有り跡より追付可申と約束して商内に出しが一年の内に餘程金も多く見へ面白く成しかし針の仕入切れて問屋に薄ければ思案を廻らし直に上方へ登り針屋へ行て仕入をし駄荷にして下り賣仕廻へば上方へ行五六年も過て針見世を出しぬ京六條建立の時則金千兩宗旨ゆる施主に付京都にて膽をつぶし片山吉兵衛登り近々のよし聞て人々見物に出るに夏の頃成れば細美の柿帷子を着して供は一人召連しはや門跡に入ぬ見物の者共定而美々敷やあらんと思ひしに存の外なる躰皆々あきれ果て戻りぬ智ある者は譽にけり其後針を止めて造り酒屋せしに二十年程過万事商内せず金借して屋敷など求めて年八十餘歳にて往生す今の吉兵衛は元祖より五代目なり元祖は堅く武士付合もがりを制す

笹屋何某か事

横山町三丁目南角に間口十間奥行十四五間住居して中庭をして藥王丸と云藥店有し其隣りに笹屋半兵衛とて大原屋有り元來京にてせり賣をして方々持しが

俄に大見世を出して手代五六人置て賑ひぬ七八年過て身上仕廻自殺す此譯は吉原へ行商内して田甫へかかり善七が小屋の前を通りしに糸を買度よし申に付小屋へ同道して大分賣けるがおもしろく節々行て小屋になじみける小屋にむすめ一人有り小家の内に一番能身上の親父也半兵衛は上方にて兎角金で世間もよくなり乞食なりとて金有ば構ひなして娘にたよりて色々はむれける娘もはじめの程はなぶりと思ひしが月も重りてじつに成り夫婦の契約してぐめんおはしれす日數経て親の耳へ入て忍びく通ふべき了簡して娘をすかし出して隠し置て小やへ知らせけり親も獨娘故不便におもひ金を出して元金に遣はし先五百兩請取て横山町へ店を出して追々金を呼入ける凡二千兩餘りも親より送りける女房も腰元其外見世の糸くり女五六人召遣ひて町見物堺町其外遊山に召つれけるかくて半兵衛が因果は見世の女みやといふに手をかけ孕ければ女房殊の外はらをたて其儘小屋へ欠出て歸りぬ親大きに腹をたて金の催促す其使は横山町邊の手代共の見知りの有る豆ぞう淨瑠璃語りし男を遣す手代女共も驚き扱は唯今迄のか

み様は小屋の娘ならん奉公とて夢々しらぬ口おしや
と無断宿へ行歸らざる者も有り直に暇を乞ふも有り
問屋買懸り等はや知れて急に催促す非人は晝夜に限
らず大勢まして催促す最早店も立がたく有物付立分
散に出し手頃程金にして欠落し戸塚の臺にて並木
に首くもり死したるよし其所にて聞しに懷中に紙一
枚もなし大方金子も盗人の爲にとられて一生無益の
きやうがいなり

中村何某といふ醫師の事

本材木町五丁目吉田屋九兵衛と云材木屋有り此店に
中村玄益といふ本道の醫師有りはやりて身上能く家
來も多く遣ひて妾を抱ひしに若黨侍密通し其事顯れ
玄益は殊の外短慮なる者にて伴の妾と若黨を押へて
妾は○○○○○○○○に灸治をすへ若黨は○○○
○○○○○○に灸をすへあつき事甚敷もがき苦し
泣きけぶ聲近所耳を驚かし玄益差圖にて大勢にて
押へければ動く事叶はず苦痛して二人共にはかなく
息たへたり醫にあるまじき大悪なり玄益も驚きて藥
を用ひてもしるしなく無是非銘々が宿へ人を遣し引
渡さんとす妾の宿にて死人を改めて是を見がつてん

せず公邊へ訴へ檢使來りて兩人を改め玄益は即死の
様に申家來の口書とは相違して玄益は牢舎す家來共
三人是も牢舎也段々拷問の上にて家來白狀して玄益
が罪顯わるゝ家主吉田屋は我壁隣にして兩人聲を立
て悲みしを聞のがし立合すせんぎもせざる不届によ
つて牢舎被仰付此吉田屋大分限にて殊の外おどろ
きて金銀を遣ひ諸寺諸社へ代參り彼是三千兩も遣ひ
漸々出牢して悦ぶ玄益は醫道に不似合仕方重々不届
に思召引廻しの上獄門にかゝる灸すへし男は打首兩
人を押へし男は不殘追放と成りぬ

阿部家の金盗人の事

阿部豊州の御屋敷にて大判百枚小判三千兩紛失して
町奉行衆へ御願方々を詮議して爰に年頃三十歳許な
る男吉原へ通ひ爰かしこにて遊び金銀を遣ひける大
判をくれて悦ばせけるまた呉服物を買て大判にては
らひ小傳馬町にてたんすを買是も大判にて代金を
遣しける兎角買物をしてつりに通用金を引替遣ひけ
る山の宿に吉原権九郎といふ目あかしの役人あり眞
木商賣して能登屋權九と云彼が此客を開出して金の
遣ひ方に氣を付て町奉行所へ訴直に召捕れぬ先牢舎

江戸眞砂六十帖卷之四

○中島屋何某工面者の事

○江市屋何某が事

○赤井氏奉行職之事

○高島屋何某商内を替る事

兩國橋幾世餅が事

して拷問にかゝり一々白狀す豊州殿御出入の神田三
河町八百屋の倅の由悪者故親勘當して置たるよし御
出入屋敷故に案内よく知りて御金藏の壁を切ぬき盜
取し旨白狀すいまだ殘金は淺草觀音の裏矢大臣門
の右大貫の元壹間南の方に埋置上に馬の脊を印に置
入用の節は夜更で掘出し候則詮議して金子改不足の
分を御尋の所一々白狀す依て吉原は云に不及堺町
木挽町吳服屋簞笥屋一切出入して買物したる處は呼
出されて御詮議皆々大判を取し者共は手鎖又は預ヶ
になりて思はざる事にて皆々難義しける盗人は引廻
しの上獄門にかゝりけると也

伊勢屋何某出來分限の事

淺草茅町伊勢屋四郎右衛門は元十王堂門前の筆屋也
夫婦して朝暮煙りを立しもの也近所の米屋手代共ひ
けの折は心易くしてかるたよみなどして錢を置肴を
望あつらひ置錢は餘計を遣し彼是として金子貳拾兩
たまり小札有を聞てかしかけ利金を取ぬ米屋の方は
むつかしくおもひたゞ筆屋の方へ引付ける段々金が
金を殖して筆屋を止めて今如斯し今の四郎右衛門は
三代目なり

江戸一番の看板兩國橋の幾世餅小松屋喜兵衛といふ
元は橋本町にて車力頭也上野中堂御普請の時分金を
儲け初て餅見世を出し名代幾世と云は吉原河岸にて
女郎也名を幾世といふとり付の節は彼幾世餅を焼て
賣ぬ段々大きに賣出して子供數多出來て娘に手習
をさせしに皆々ほめけり橋町三丁目女師匠始めて
出來しや名を文仙と云佐々木文山の弟子也依之唐流
を覺へて望む女は唐流を指南して喜兵衛娘の名はお
松といふ手習場にては文錦と云淺草觀音堂の右の方
に三社の詫宣眞行草にて今に有り喜兵衛は無筆に
て禪學を悟りて宇治の黄蘗の弟子也正儀居士と號す
在々所々の禪學つとひ來て喜兵衛と難問をかけ答を

する後には袈裟衣如意拂子等迄持歩行の書物も作り出しぬ禪僧拾人二拾人つゝ逗留して寺の如し今も此節不定す今は三代目也

○五十嵐屋か賣出しの事

○丹波屋立身の事

○丹羽遠江守殿非道之事

○深川法善寺偽龍燈之事

江戸眞砂六十帖卷之五

天一を語り種とする事

天一と云者有將軍吉宗公のおとし胤と云て附添し者は浪人又は禪學も有り宿は品川邊也町人身上能者杯へはやがて御城へ御入被遊候間今の内に御目見いたし可然と申故町人ども是にすゝめられて皆々相應の物持參して御目見仕度よし申上る段をしつらい侍美敷敷兩方に列座して目見す天一といふは年頃廿一二歳のよし成る程け高き生れにて尤に覺ゆ扱町人共今は何の入用彼是と金子をまねく上より御咎めありて不殘御奉行所へ召捕られ牢舎して彼天一が身の上いかい成しやしれず付添ふ者共は不殘死罪なりしと

甲坊主吉原遊びの事

其頃甲坊主と云あり年頃廿七八歳許なる美僧也吉原へ通ひ美々しくして金をよく遣ひける故紋所は十六葉の菊を付る故一説には芝御靈屋の御別當ともいふ又上方門跡ともいふ何方共宿はしれず芝筋より通ふ

ふねの通ひは紀伊國橋の和泉屋と申あまり不思議を立見へがくれに付ても幾度もはづす一切しれず吉原の權九と云ものたらへて出す牢入色々拷問をして

も其出生をいはず言葉平人と違ひて横柄なり諸役人もさして罪もなければ永々牢舎にて善七へ預け溜へ遣す或夜たぬを何かたよりぬけしか彼坊主一圓見へず善七は方々尋ねしが何方へとも行方を知らず

都賀屋何某嶋へ行事

都賀屋善六と云て(苗字は赤間と云)淺草諏訪町河岸の方に住す大間口にて開き門を構へ住居す善六生國は下野栃木の脇大垣村と云所の名主也大ばくち打にて江戸にて年中かせぎをし申の年大水にて猿ヶ股の堤切て萬西本所へ満水其時猿ヶ股の堤普請所の御代官伊奈半左衛門殿承り入札にて都賀屋五千兩の安札に被仰付さて普請仕立格別に略して倉相に出來す甚安札故と世上にて猿ヶ股の普請に牛房を焼て押付ろと人々申あへりしと也凡千兩餘も利分有之夫より諏訪町に普請しいかめしき躰也然る所に江島殿へ取入是は金丸四郎兵衛殿といふ御代官引合す木挽町の棧敷吉原の振廻は都賀やの亭主なり江島殿の悪事顯れ

て善六も牢舎して身體不殘關所に成て伊豆の大島へ遠流せらるゝ江島殿の亂は別紙にあり

銀座奢り露顯の事

銀座年寄内藏之助奢の事露顯して町奉行所より二組與力同心不殘銀座町迄取巻て一人もらさず召捕ぬ此譯は銀の位惡敷成たる上御定より銅の割多くして吹し故其奢り甚敷中にも内藏之助住居美々しく庭の砂利に銀の小玉を敷心臺の物の砂利も同じ夏の蚊屋は紗に金蘭の縁のよし座敷の腰通りは天鷲絨のよし扱吉原へ行て夥しく金をまきちらし後に不殘年寄の分は遠流し下手代は所々御構にて追放也

本所に非人小屋懸る事

未年飢饉町中困窮し野非人多く本所法恩寺の後小梅の原に小家かゝり野非人を入淺黄色の布子一ツ小桶一ツ宛被下置御救ひ被遣候是を江戸中にて小桶衆と云ひしとかや又正徳五年米高直にて兩に四斗より三斗七八升也水油は一升に付八百六十四文也此節裏々端々困窮して野非人多く有し中橋の廣小路に小家棟建て御救ひ有り其節竹之丞が芝居の女形袖崎縫之助谷崎磯之助中川小主水といふ役者も中橋の小屋に

入皆々是を憐みて菓子錢の類持參して遣しけるとぞ

此時米五斗一二升にして薩摩の赤米六斗五升也其頃も世渡り下手也此節小豆がゆを家々にて喰しと也其後境町中村千彌といふ女形紫しぼりに染出して是を千彌染とてはやりぬ

小松屋捕手の事

飯田町坂の上り口右側四五軒目に小松屋と云木藥屋今に有り此小松やが手代生國上州の者のよし番頭と口論をして伴頭を早速に切殺し外に傍輩にも手を負せ二階へ上り梯子を引取籠ル土藏作り故仕方なし町御奉行所へ訴出則捕手の組中大勢かけ付たり一番二番と名乗り梯子を懸て登る所へ胡椒の粉を上より顔へふり懸て切付る捕手の目鼻へ入て眼をくらましければ皆手を負ぬ中に彌惣兵衛と言人勇にして肩先を切り込れながら腕をつかまひて下へ引落し押捕りぬ大手がら成ければ御褒美として銀五枚并御腰物被下置右御腰物上作にて札十五枚の物也といひし

山川何某悪黨を召仕事

山川安左衛門殿と云盜賊奉行有り此節本所にはんに

を見候へば去年五月芝口に火を付しと有り是相違に御座候私僞に無御座候上總に罷在候親共御呼出し被遊候て御吟味被下候様奉願候則請狀持參仕候と差出す召仕牢より出して吟味被遊候處火を付しと申儀會て無御座候へども責申人苦しくば火を付たといへと申候まゝ餘りせつなく火を付たりと申夫より町御奉行より丸山本多二タ分にして儀兵衛并源七を召捕きびしく拷問に逢ふて白狀す依之珠數屋の召仕危き命をひろひて義兵衛源七兩人は千住にてはりつけに行はる又山川も不首尾にて御役被召放しなり

美濃屋利發にて身を沈むる事

葛屋新右衛門とて淺草諏訪町に住居して大構にして御材木の御用を達しぬ乾金吹替の節公儀に大分の御損金有由を聞て美濃屋願出て此度は金吹替の儀私に被仰付御公儀の御足金なしに吹替差上可申候其代りとして日本六十餘州端々山の奥迄たとひ御領は不申及私領にてもかまど敷一ヶ所にて毎月三文ツ、出し候様に御觸流しを奉願上候其徳分を以て速に吹替差上可申よし願ふ御老中方始め諸役人中聞召其大氣成事を驚入ヶ様の儀言上して下モとしてヶ様の事申出

や面の源七鬼の子の儀兵衛といふ者兩人わる者の根本にして目明し役をせしに此兩人が爲に江戸中迷惑しぬ町々身構ひし少しも不都合成者または田舎出のうつかりとしたる者を捕へて牢舎に及ばせ強く拷問して無利に火付に落し杯して月々十人又は十六七人程ツ、仕置者の絶ゆる間なし爰に照ふり町の下角に珠數屋あり今も見へ申候上總者を召遣へしに小網町へ使に遣しけるに山川の役人にとられ間もなき事故云譯も前後してあやしみを受牢舎しぬ段々拷問に逢ふて餘り苦しきまゝ、火付に落ぬ依之日本橋へさらし者に成る此沙汰を珠數屋聞て心元なくおもひ欠出して見るに召遣ひ也則札を見れば盜の爲に火を付し譯書付あり上總より參りたる月と制札の月と相違也不便に存候間直に町御奉行所へ訴出て拙者召仕の者火付と申て日本橋に於てさらしに罷成候御制札とは殊之外相違に御座候に付今一應御吟味被下候様願ひける尤に思召て其召仕の名前被仰遣仕置相待候様に日本橋へ御使立其日は延引して翌日被召出御詮議珠數屋申候は召仕上總者にて私方へ直に親共前度にて約束仕候て漸く此二月圓元より參着仕候御制札

る者なれば難計とて詮議一決して新右衛門を被召出扱其方不屈成願方越度に成し伊豆大島へ遠流なり十二三年にして歸參す其節神田にて明地を拜領して今に野嶋屋敷と云小兵なる男にて才智を譽ぬ歸參の後小梅の錢座を被仰付しが年寄の耳も遠く成て金元の南部やに仕負ける誠に麒麟もおひぬれば口惜き事也

南部屋某一生の事

芝片門前に南部屋八十治と云者有し江戸中沙汰に及ぶ程に名を顯しぬ元は南部八の戸の大工のよし若き頃江戸へ來りて方々を歩行ぬ火消屋敷に入て働きたしをこしらへ町中を歩行又はけんどんやのかつぎもして腕の先腰の廻り肩先きと身に明間もなく入墨有し後は是をかなしみ小袖のゆきを長くして歴々の前にて隠しぬ元金に取付しは入並の如くに成て増上寺の本堂の上に草おひ茂りしを取りに入札をして金を貳百兩の餘儲取し是が南部屋が初ての智慮なり此譯は皆本堂へ足代をして草を取る積り南部やは梯子を懸けて則瓦師を頼みて取足代の違ひ計也南部様の御屋敷へ御用達金をもふけ南部領分より銅出る是を請負て大坂へ廻し賣買す大坂にも店あり南部の金引

込て首尾悪敷成て南部の役人と同道して大坂へ登り勘定せしに彌工面悪敷大坂にて死す一説に自害とも云また逐電ともいふ其跡は散々の体也殊に大無筆にて候よし申あへり

江戸眞砂六十帖卷之六

手島屋何某出奔の事

淺草諏訪町諏訪大明神の北隣木戸際迄住し手島屋定八といふ者元は小普請方の持也何方にて金儲けせしや大手やか成しかけ手代貳拾人計りあり女は十五六人美女を抱へ上下今六十人餘暮して所々の請負をして駕籠にて供夥しくつれて勤めぬ御藏澤手米を請負て五六年せしが澤手米の金高凡七萬兩程手前へ引込て上納もならず上下を着て欠落す依之八ト形を以て御尋なれども一圓出不申入水したる歟

山下何某一書を獻する事

赤坂傳馬町山下幸内と云浪人御上へ世事の沙汰逐一書付て差上る依之御褒美被下置しと也

直訴箱の事

傳奏に箱出る毎月三日宛定まり有り是は万事直訴同前書付を入御取上るとは其人被召出御取上無之は役人中立合火中(此條傳寫の誤りあり)一町く町の木戸際に錠をおろして差紙箱出しぬ今

はなし第一三笠附の點者の事也此近年三笠附にて江戸中の者皆内證困窮す

町奉行出る事

大岡越前守殿町奉行と成り給ふ此人勢州山田御林の奉行たりし時紀伊の國境より大水にて材木流れ來りて宇治橋に懸る依て橋の流るゝを所のもの歎きしに大岡殿指圖にて手柄次第取りて徳分にし候へとの差圖故皆々悦び是を取る依て橋も無事也其後紀州より使來りて此方の材木當所のもの取りて出し不申指圖に依て取り申由如何の譯に候哉と使來り大岡殿の挨拶成程材木の儀は面々に手柄次第に取徳分に致し候様申付候譯は宇治橋におし掛り御橋若流れ行におゐては公邊の御物入也去に依て如斯と使を返し申さる折柄紀州様松坂の御城内に御入此儀御聞甚感し思召され候て將軍に成らせられ候御時町奉行に被仰付段々首尾能くして大名と御成、御威勢ますく今寺社奉行の第一なり

町火消町割の事

江戸度々火難御評議の上大岡殿被仰渡不殘土藏作りになる端々裏店迄瓦かけを置き或は蛸壳も置也依之

火事稀也町火消の事前格は拾人火消の役也越前守殿御思慮にて江戸中端々迄其似合々の堺を立いろは付を以て大まといひ小纏を立て大まといひをば一日一町宛の晝夜の番大火の節は町御奉行直に其場へ乗掛けて町火消に差圖也

將軍吉宗公小金御猪狩之事

小金御猪狩日光山御社參は別に有此年秋九月朔日より二日の大雨所々堤切て淺草山谷田町本所廻満水也其節より川々餘出來て今は専ら殖る是は千住の先き手ヶ沼と云所より流れ出しよし

淺草深井志道軒が事

講釋師志道軒といふ坊主あり元來成滿院護持院などの納所を勤ける飛鳥も落す寺の事故諸大名の附ヶ届にて富貴満々たり彼等が役儀は金を山となしける成滿院文昭院様の御代に成大不首尾にて誰も知る人なく大和へ逃登る其跡今は原と成る志道軒は諸道具贈の金大分持引籠て堺町の藝子を請出して置しが臺所の支配人彼子共と念頃して二人ながら欠落す如何にしたりけん子供は人形廻し男は大鼓をたゝきて町中を乞食す志道軒も五六年過て豊島町願人に落宮地へ

講釋して觀音の靈空か跡をまなび摺子木を持って下掛りをして今はまだひとなる

本所おむめ姥が事

本所吉田町よりお梅姥とて所々を歩行て何方にても見世先を借りて腰を掛け暫く有て急の病氣のよし云て疊の上へ上りて夫よりしやべり出してゆすりかけ色々挨拶しても金を出さぬ内は中々合點せず金を出して佗て返しぬ深川品川兩國邊にておむめ姥と見るとはやく戸を立籠をおろしける大岡様へも度々召とられ牢舎もしけるが流石の大岡様も此姥には御困り被成しよし

竹の子姥が事

新乗物町に家持筆姥といふものあり元和泉町にて比丘尼の宿をして金を溜め堺町勘三郎吹矢町竹之丞兩金元して女ながら仕切場へ出日々の割をする利口者男も中々指も指す事ならぬ程なり立役の者にて此姥へは腰をかくめて尊敬す金借せどいつかな損といふ事なく氣丈者なり淨土宗にて寺々へ寄進して寺々も敬ひ京の知恩院僧正を上客にて幡隨院和尚の同席にて料理をふるまひ毎日く方々より利を得持はこ

ぶ珍らしき姥なり

福井町瓦姥が事

淺草茅町の裏通り福井町と云所に瓦姥と云者あり是は工み事の上手にて所々へ手を掛け金を取りて度々牢舎しても尙止ず今は本所吉田町へ引越しぬ

高間騒動の事

本船町に高間傳兵衛と云米間屋有り元は上總國さぬき邊の百姓なり江戸へ店を出せしは漸く元祿年中也始は小網町一丁目に住居す米高直の時分に買へば上りを得賣れば下り七八年の内に大間屋と成る海船も十艘計り持ぬ世繼なくして其頃のはき間部越前守殿の家老奥村治右衛門が末子七歳なるを養子として幼名を傳藏と云今の傳兵衛なり享保十八丑年此年京の清涼寺の釋迦如來回向院にて開帳惣外堀も川凌此年也その二月米俄に高直に成る江戸中困窮して歎く高間は御勘定細田丹波守殿の差圖を以て御金拜借して入船在々の米を買揚で彌高直也桃町の者共が發氣のよしにて一町切く幟を立て山の手下々町芝筋本所邊下谷淺草殘らず高間が家に至り大勢入込み手に當る物を幸とみぢんにして帳面杯は堀へ投入亂

れ合て夥敷高間の者も不叶家を捨て遊行きぬおもふ儘に打崩して皆々其所へ歸りぬ本船町の町人御番所へ訴出御檢使下り扱召出御證議也誰頭取といふもなく其分に濟ぬ高間は物事内端になり松平大和守殿御用金拾四万兩拜借して埒明す依之今は潰れしも同様なり

深川にて主殺の事

深川万年町冬木屋隣に浪人醫師有り一説には淺野内匠頭殿浪人のよし所の者申ける家來に直助とて上州者一季奉公に住て貯金もありて宜敷腰の物を賣べきよし道具屋へ見せけるを見込て或夜忍びて金子を取出し則刀も取て腰にさし出る所を醫師弊をかけしを抜討に唯一刀に切殺す其足にて駆出し行衛しれず所の者則御番所へ訴へ出書付を出して三年が内知れず再觸有て人相書を以て御尋なり其後桃町三丁目搦米屋に奉公をして米をふみ居しが此廻状を以て笑ひながら隣へ送る鬘も薄かりし顔のほくろも抜て形チを替けりされ共請人の女房見出して御番所へ注進し被召捕しと也

權兵衛直助と同前御仕置に逢ふ事

日本橋貳丁目に經師屋あり元紀州和歌山の町にて御用達ける者なり紀州樺江御城へ被爲入候に付則日本橋へ店を借りて御内證御用達金百兩請取簀笥へ入替けるを召仕權兵衛見て其夜盜て出ル處を經師屋起上り盜人よと呼はれば唯一ト刀に切殺し即時に欠落す此時權兵衛は和歌山にて召抱へし者也經師屋も獨り住にして女房はなし權兵衛に賄申付ぬ扱右權兵衛國へ登りしが最早國にても沙汰有を聞て高野山へ登りしが高野山にも居られず麓へ下りしを見付捕へて江戸へ引右の直助と權兵衛同時の主殺にて同日にさらし品川におゐてはりつけに掛る前代未聞の事共也此見物品川にて込合て怪我人多しとなり

丹波屋何某情死の事

神田白壁町に丹波屋九郎兵衛と云大醉屋あり其頃の亭主は伊勢者のよし吉原二丁目大兵庫屋音羽といふ女郎に馴染て心中しけるが淺手にして兩人ながら存命也御吟味の上兩人共日本橋へ三日さらし後に非人の手下に下されける是兩人此手本の始也丹波屋は品川の松右衛門となる音羽は善七小屋に引別れて行ぬ又情死見事に兩人共に相果れば寺へ遣し不申直に

千住へ捨るなり(是は大岡越前守殿御捌きのよし理風よき仕置なり)

白子屋娘一ッ印籠の事

新材木町稻荷新道の角白子屋庄三郎といふ材木御用聞也身躰宜敷て町内の随一也庄三郎娘二人有り姉は南新堀増川八兵衛方へ嫁す妹はおくまと云て大器量よしにて伊達者也異名を一ッ印籠と云母もうつくしき生れ付也兩人乍ら着かざりて出入しぬ庄三郎は少し氣不足なる方にて女房次第にて置ぬおくまに聲を取大傳馬町川喜田が伴頭金五百兩の持參也勢州生れにして小道にして男も小兵也甚賤しき氣質中々お熊が氣に入方にてはなし然れ共身代廻り口にて金故相談も濟ぬ母も共々いやみに成りて娘と咄合手代に忠七とて小才覺ものにて母やおくまが氣に入終に忠七と密通して母も寄合聲にこまり返すにも早金は出來もせず頭痛のみに暮す爰に葛西より年季に置し小女にお熊いろくの物を取らせて折を見合せ頼みけるは我智殿の寐たる所を忍び入て咽ふへをさして殺せ跡は自害したる躰にもてなし濟すべしかならず人に語る事なく大事にかけよ其替りには其方が望

に任すべしと色々すかしたましける少し恐なる女にて合點しおくまが相圖を待ぬ或夜傳馬町へ行て長嘶に酒を過して歸りしが甚能寐入たる夜八ッ頃おくま小女を起して小刀を研ぬきたるを渡す女かしこへ行無思慮のどをつく手ふるひて自由ならず聲起上りて小女を押へて家内をさはがし最早内證にて濟す公邊成て小女は牢舎し終に不殘白狀して庄三郎は所拂女房は三宅島へ遠流お熊并手代忠七は獄門にかゝる小女ははりつけに掛る

竹之丞芝居騷動の事

市村竹之丞狂言の最中松平左近將監殿駕籠の者前日見物せしに火繩賣と口論して歸る仲ヶ間中に意趣返しの工面を頼しに陸尺仲ヶ間へ觸を廻しける御老中の最上なる故に外の大名の陸尺手の者集りて凡貳百人計芝居表の木戸へ懸り米搗の杵を以て打破り内へ入手取足取して芝居者と見るとたゞき倒し騒ぎ立見物の輩貴賤押亂て外へ出しぬ數多怪我人あり刀脇差懷中羽織はき物類皆々落し逝去る歴々の衆も怪我あれどもあしき場所故沙汰なしなり成程身を持し人見物は遠慮あるべし芝居表やぐら下の看板は四日市に

江戸眞砂六十帖卷之七

田市万隆寺和尚之事

有繪看板は皆打くだく所の者追々月番の御番所へ注進即時に組中欠付漸く三三人召捕左近將監殿駕籠之者申上扱六ヶ敷成て芝居者牢舎有り五十日許芝居は休みける駕籠の者は頭取三人三宅島へ遠島に成る芝居の者牢舎ゆるさる向後芝居にて見物人に對し倉相申間敷と急度申渡され其砌には多葉粉火繩の錢も此方より呉れ次第切落し出入も慇懃にして慮外せず悦びぬ今では又むかしの如し

築地敵討の事

築地飯田町にて敵討あり元淺草寺町板倉家の家中同傍輩親を討立退行衛しれず五ヶ年過て六十六部と成て江戸中修行し築地にて見付出し我は山下宇右衛門也親の敵覺悟せよと聲を掛ケられ餅屋へ逃込しを追懸ケ後げさに切付二打三打疊かけ切倒し留めをさし奉行所芝土器町竹中周防守殿へ出たるよし

淺草觀音の後方に禪宗にて万隆寺とて六郷家の寺也此先住寺は白酒のみにて道樂坊主也豊後節の上手替名はよしと云貳丁目大松屋の松がへと云女郎に馴染機嫌悪かして同町京町丁子屋の銀ざんに逢ふ松がへせき合になつてよしをとらへ手形を書せ坊主の自筆にて手前名は松がへが望で万隆寺と書せけるそれより又方々と遊び金も盡て寺の道具吊の樂器迄賣て洗ひ川にして剩寺も出入してつかひ目も當られぬ躰也六郷殿者御構もなけれど町方旦那打寄て合點せず悲しみて制しけれども一圓止す無是非此上は隠居有て後住に譲り給へと進めれども彼是延引に及ぶ町旦那の一番に小網町三丁目野間屋利兵衛と云鹽問屋成があまりにくらしと思ひけん松がへが事を聞出し松がへに三四度も逢ふて彼よし手形を望費ふて此手形を手本にして寺社の月番へ同旦那五六人催して願出ぬ則万隆寺も呼出されて利兵衛對決す寺の儀を

縦へ旦那たり共構ふべき様なしと返答有けるに利兵衛左候は、是を御覽被遊吟味奉願と松がへが手形を取出し差上御奉行も御覽の上併松がへを召出し實否を糺可申付とて先方隆寺は半舎し又松がへも被召出明白に申上るに依て破戒の罪にきはまりぬ然れ共野間屋おのれ一人が寺にあらず行末心元なし

藤掛殿門破られし事

神田お玉が池の邊藤掛式部殿とて盜賊方御役兩度迄勤られしに餘り嚴敷て江戸中の者難儀せしに御役御免有てひとしく誰觸るともなく町々より駈來りける其人數凡四五百人もあらん藤掛殿を惡口して手頃なる瓦石を投げ打表門を打破り玄關の戸障子も破りけり民部殿下城して宿に居合せ此鉢を見て門より内へ入は切るべしと其支度也誰も投打惡口のみして門より内へは入らず侍どもは恐れて立會す此騒動町より御奉行所へ訴へ出早速組の衆大勢走り付聲を掛けて二三人捕へて終に遠嶋す前代未聞の事なり

日本左衛門と云盜賊の事

濱島庄兵衛異名日本左衛門と云盜賊の近頃遠州見附の宿に住紀州海道七里の宿のよし國々のあふれ者を

あつめかせぎ致させて道中在々所々へ大勢押込財寶を奪ふなり本所石原徳山五兵衛殿盜賊御奉行にて是を聞出し遠州見付へ捕手を遣し手下の者五人捕られし中に坊主どもありて名の二ツ三ツ宛付たる者也頭日本左衛門は行方知れず國中相書を出して御尋の所に半年過て京都諸司代牧野備前守殿へ自身と上下を着して出ぬ夫より江戸へ下り半舎して徳山殿の屋敷へ行ぬ道すがら見物の人多し先達而名の聞へたる囚人ゆへ如斯同類共に引廻し三日さらし品川におゐて獄門に懸る

左衛門事

濱嶋庄兵衛

- 一 せい五尺八寸程
- 一 小袖鯨差に而三尺九寸
- 一 歳廿九才
- 一 見かけ三十一二才に相見也
- 一 月代こく引疵一寸五分程
- 一 鼻筋通り
- 一 眼細き方
- 一 顔おも長なる方
- 一 一より右の方へ帯にかたむき罷在候

一 びん中びん

中少そり元結十ヲ程卷

一 逆去候節者用品

一 こはくびんろうじ小袖

但紋所丸の内に橋

一 下着萌黄細單物

但紋所同斷

一 白郡内じゆばん

一 脇さし長さ二尺五寸

一 鍔金ふくりん金福人模様

一 柄さめしんちう筋かね有

一 弁赤銅無地

一 小柄七子生物彫有之

一切羽鉦金

一 鞆臘色小尻少し銀有

一 鼻紙袋萌黄羅紗

但裏錦切

一 印籠鳥高蒔繪

右之者悪黨仲間に而は日本左衛門と申其身は左様不申候

延享三寅年十月 右寛延奇談に見ゆ

藍屋何某太夫に馴染事

大傳馬町壹丁目横町に藍屋九兵衛とて駄染屋有り身上能家屋敷を持て家來大勢にて染物せしに親の九兵衛と違ひ幼少の頃より花車にして諸藝に達し殊に美男也家業を賤しと思ひ遊びを専らとす三浦の高尾に深く馴染て通ひぬ外の客は高尾が客は駄染屋なりと笑ひける商賣も倒れて詮方なくして高尾去ル屋敷の聞番を頼て采女が原の町家にて茶屋を出して繁昌し賑ふ大勢聞番の振廻家として居たり其後は如何仕たりけん本所三ツ目に夫婦つまらぬ體に見へしと也

福田屋後家好色の事

淺草諏訪町に代々有徳なる福田屋七兵衛とて佐竹の屋敷へ出入して手代大勢暮す先ン七兵衛は若くして病氣す家督七兵衛が弟繼ぬ七兵衛が後家いまだ年二拾三歳にして歌俳諧琴三味線茶湯手跡不殘覺へ殊に美女也伊達者にて好色を第一とする後家也我儘に堺町へ行野郎を買ひ金銀を遣ひける故番頭はじめと

して一家打寄觀音地中へ隠居させ有り來りの道具を取揃へ送りぬ是を能き事にして數多の役者を呼て振廻しはぐゆへに入れまじと女一人小坊主を召連れ堺町邊の女湯へ通ふ後に大谷廣治が方へ行て居るよし手代聞付けて廣治方へ行は十町留主を遣ひて逢ず其翌日朝参りて十町に逢ふて段々申せば兎角私方へと呼申にては御座なく候あなた御出被成ひたすら歸るまじきと御申達て申せば生害もしれずと申手代も立腹して公邊へ願ひ出廣治右之挨拶の通り申上ければ今七兵衛跡式に構ひなく久離を切たる計にて事相濟ぬ

淺草西應道具立の事

淺草の景地古跡にして森々たり今辨天山と云方廻り林にて大木茂りて暗々たり元文中に賣僧に西應と云坊主傳法院の氣に入りて町として繁昌の地故高直に賣金子出來て其上後に森有るをうち圍み六郷家の屋敷を二重にして後山と號す吉原へ頼み女郎一人より三四本又全盛女郎に二拾本或は三拾本程づゝ寄進に櫻を植させ是を千本櫻と號す祇園田樂水茶屋同前田甫を見晴しに小屋懸けに座敷を構ひ見世物芝居

取交て賑ひける此上ヶ金一ヶ年に五百兩也手前は念佛堂を建立し堂内に常住茶を入參詣の人に振廻水茶屋同前の振廻也究竟の場所ゆへ念佛堂も苦もなく出來し餘る金子出來して法外の事有しよし其身は逐電して影も見へず寔に觀音妙智力に繼しや傳法院も不首尾にて住職召上られて今は上野殿代なり

金杉に伊豆屋と云酒屋の事

下谷金杉一丁目伊豆屋と云酒屋紙類賣買して家屋敷數多持て有り漸々二拾五六年以後の分限者也又吉原五拾間道に伊勢屋半兵衛とて酒屋賣買して是も家屋敷數多あり有徳に暮し元來少しの肴賣にて本所向水市左衛門と伊豆屋并肴屋半兵衛三笠の點者をしていつやいせやは向水の手代をして越谷幸手河邊領の點者をして金を溜め向水は其後公儀へ被召捕八丈島へ遠島に成伊豆屋伊勢屋は安泰にて何も一二万兩の分限なり

朝比奈氏騒動の事

寛延四年八月小川町朝比奈百助病死して子息万之助の百助を入湯の砌り家老常右衛門殺害し百助妻并乳母にも手を負せけり万之助妻の兄植村千橋居合後よ

り抱留しに拔身を取直し植村千橋の喉をるり元迄つきつらぬき千橋痛手故即死植村跡目立申爲め本家より三浦殿様へも相談の上病氣と申養子を本多にて百助子息を願ふ朝比奈家よりは植村千橋病死と申上相違したる故大亂に成る本家植村土佐守殿三浦肥後守殿水野本多ともに分預ケと成しが有徳院様御他界間もなき事故御免にて植村三浦朝比奈本多水野家滅亡門葉の大名四拾間の餘遠慮委細朝比奈實記にあ

棟梁の子芝居にて難儀の事

本町伊豆藏の大工棟梁の子冬病氣にて漸々肥立十八歳に成弟子一人召連狂言市村羽左衛門芝居にて見物しけるに折節狂言當りにて込合けるに小綱町船頭のあばれ者大勢切落しへ入込無躰に女共武子杯にもかまはず押入りぬ餘りさはがしき故に芝居の働の者共船頭を出しけるに船頭共腹立まされに大工棟梁の子病人を足にて踏しが病み上り故目を廻しける早速大工の弟子船頭を捕へ放さず船頭仲ヶ間大勢もぎ放さんとさまぐしけれ共命限りに手を放さず夫故天窓も其外所々疵付ぬ芝居の者共立合其船頭を繩巻に

して弟子より芝居へ預けける掛番所に成て檢使下り大工弟子并芝居の者共口書を取られ能勢肥後守殿へ罷出る肥後守殿殊之外大工弟子御褒美にて職人に珍敷仕方の由被仰船頭は則牢舎す

大和屋が小僧ぬけ参りの事

淺草御藏米大和屋與兵衛と云米屋の惣領娘は六間堀冬木三右衛門表徳懃と云もの、妻となる次男家督を取り大久保主水の娘を嫁とす歳二拾八歳にして病死す讓り請て先與兵衛後家あり日蓮宗にて田甫長圓寺旦那也内に小僧あり伊勢へ被参りせしを後家立腹して引戻し手をしばり皮籠の内へ入食事もあたへず置しなり翌日小僧出歩行を後家見付て誰かゆるし皮籠をあけしとありける餘の者の目には見えす不思議におもひて皮籠を明しに臥居たり起せどもおきず能々見ればいつの間にか死して手足もひへて有り驚きさは醫師を呼見せけるに最早脈もたえける長旅の草臥肝を潰し相果ける歎不便の事也宿へ人を遣はし病死せしと申弔料として相應に請人へ金を遣はせしよし宿は徳付何事もなく弔ひけり後に小僧平生の姿にて茶の間杯へ出歩行是を見し者は驚きけり

後には夜に至り大きな油燈程の火の玉出座敷を廻る大和屋へ見物多くして讀賣板行に起し大神宮御利生と呼はり廻りしが如何いたしてや風説も止みける先は家の不吉成るべし

不忍か池築地の事

下谷忍はずが池西の方奥行十二三間程宛築出して辨天堂の後の無縁坂の方へ橋をかけ其橋五曲りにして危き橋なり築出しは町家を建て女を置茶屋多して賑はひぬ寶曆二年夏日照して池水かはく夫故に大き成る鯉鮒泥龜皆死す中にも長六尺位の鯉數多死すくさき事甚敷築立し町屋へ雨降の節は水上るを難儀に思ひ水落しの下石垣をつきたる故そくはく落て池の上平砂のごとしとなり宮様の御聽に達し急に町家を崩し取候様に被仰付町家の者共盆前に家藏を打崩し思ひくりに引移りけり目もあてられぬ事ぞかし山にも御側坊主此取次して山師馴合し三人は不殘仕くじりける曾て宮様には御存なきよし神罰ならんか其後落書多出けるとぞ

相州小田原大盗人の事

相州小田原の町に大盗人を捕へて牢舎し江戸表へ御

注進有盗人は尾州九右衛門といふて日本左衛門同前の盗人也手下五六拾人ありて東海道は申に不及在々所々へ押込盗人せしに三州岡崎にて九右衛門召捕られ牢舎せしに或夜ぬけ出ぬまた濱松の牢に入しが又抜出たり兎角忍びの手上手にて中々人並の者にあらず小田原にて運つきて捕られ牢舎せし折節將軍家の御他界の砌ゆへ仕置も延引の處に九右衛門番人をすかし永々各様御世話に預り忝存候併し最期の名殘に念佛唱申度候御免と申成程其分は苦しからぬまゝ勝手次第と申九右衛門高聲に念佛を申しかも念佛上手にて番人も退屈には有り思はず同音にともく念佛申ける番人も徒然故豆煎など持參して茶を呑ける九右衛門無心して豆煎を給るふりして殘し隠して貯はへ茶を二ツ下されと望む番人茶を遣しけるを取落したるふりして茶碗をみぢんにし其かけを二ツ三ツ隠して置ぬ扱御仕置に罷成可申身にて申上るも如何に思召の程も氣の毒に候へどもあまり蚊多く難儀仕候何卒紙帳一帳御願被下かしと申番人も目付へ右の譯申則紙帳を一張釣せけり此紙帳のかけより茶碗のかけを竹のわれへならべて牢の格子の下を引け

る高聲の念佛に合て引程に氣の付く者一人もなし安すくと引切りいつか抜けけり番人どもの念佛にもたへ物靜なればうかひ見るに見へず驚きさはぎけり小田原は江戸へ飛脚を立又九右衛門へ追手をかけ彼は大さわざ大方ならず江戸屋敷には出羽守殿遠慮し九右衛門を追掛けるに足柄の手に前百姓川除ヶ普請の最中怪敷男通りし故百姓共見付て九右衛門を捕へたり永々牢舎し足すゝみかねあたまは袖に包みて着せし單物は袖なしなり裾に豆煎を包みしとなりあたまは長髪ゆへつゝみ豆煎は道すがらの糧に貯へし由又々嚴敷牢舎させ番人多く油斷なく守りて九月中旬川の端に獄門に掛りしなり天命は遁れ難し

追落の歴々の事

本所屋敷町石原に椎木屋敷と云あり此少し南の方にて夏の夕涼に本所にて高千五百石の隠居供の侍四五人中間二人召連出しに夜の四ッ過時侍七八人出隠居をとらへはぎ取侍共は拔身におどされ残りなく何方へか逃行ぬ隠居は丸裸にて着添も取られ漸々と辻番所へ走り込辻番人隠居の姓名を承りて其屋敷へ知ら

す御沙汰に及びて本所の悪者召捕られ皆々輕き御家人衆中也向見す市左衛門は右之者其の宿のよし

江戸眞砂六十帖卷之八

鎌倉屋何某が事

八軒町鎌倉屋市右衛門と云米間屋有り和泉の國めし唐金屋の支配人來りて米間屋の中にて肩をならぶる者なく手を大勢にして長者也表徳玉金といふて俳諧しまた繪を好て狩野安信の弟子にして今玉金の筆金になる牧溪の鶏の横物一幅有りしに仙臺様御望故差上る或時俳諧人打寄て春の頃平日一種の振廻を好みける成程此一座不殘招くべし御左右次第御入來相待候と約束して四五日過て廻狀を遣し俳諧人其日參會立志を始メ二拾六人百韻をして膳出しける何も一種にて差身鉢一尺餘にして平日切目中打五寸程に切り一切宛出しぬ大平日故一切にて皆々あぐみける扱扱能揃被成候よし申せば玉金自慢にて皆々臺所へ御出御覽有べしと案内して臺所を見ればひらめの頭尾山の如く積置ける大平日中一切宛取て客へ出しける大き成馳走段々商賣不拍子になりて初めて分散二万八千兩かりしに唐金屋了簡して相立貳度目三万

二千兩分散身上ひしとなる淺草聖天町川端へ引越しぬ

成井何某が事

伊勢町成井善三郎今五代目也家屋敷數多持武士かたぎにて表に少しの米仲買店有り近年仕廻ぬ今成井兄弟遊び好きなれども生得しはき人にて善三郎町人として馬を稽古し武士の如し弟は連歌師と成て兄善三郎上總屋の和國といふ女郎年明故迎へて妾とし我身は上野へ取入て宮様の御家來と成て代々住宅貸屋とし下谷廣小路横町にひらき門にて兩腰さし常々馬にて歩行ぬ身上は少しおとろへけるよし

大門通り花町伊勢屋何某が事

大門通り花町伊勢屋佐次兵衛と云釘銅物商賣して暮しぬ二代目佐次兵衛幼少より手習學問を好二十七八歳の頃より浮氣に成て初てより三浦屋の高尾を約束して一二年逢ふ大きに金遣ひせし故一家伴頭打寄山伏井戸の武士地を借りて夫婦隠居させ店は番頭持なり立志が門人となつて立舞と表徳して俳諧も器量ある故秀で後に落髮して水國とていみじき宗匠なりしが三十三歳にて病死す店は娘に聲を取て今にあ

樋口何某相撲好の事

小舟町二丁目中程に樋口善兵衛と云米屋あり女房は大兵庫屋の梅がへ也しが善兵衛錢座を請負申小梅にて吹せける内に相撲取人計抱て土俵がりを拵へ彼所へ毎日寄り相撲を取り女房梅がるが好故見物多く毎日料理夥しく梅がるは衣裳金入の火打紙子まはは縫入伊達を好し故相撲より女房を見物の者多し錢座を仕廻借金多くして小舟町の家も居宅も人の物となり夫婦は本所へ引込て後は梅がるも破れし布子を着せしを知る人皆見て笑ひしと也寔に夢のごとし

鳥井何某が事

小網町鳥井九兵衛といふ者尾張の船問屋にて手代多くして長者の如し三代の九兵衛年二拾七八歳の頃病氣付療治油斷なく養生せしに聊しるしもなし爰に伊勢屋町裏に三上道隆といふ針醫有り九兵衛病氣を見此病症は煎藥にもしるし有まじ針にて朝夕十二度宛打養生せば三ヶ年の内に本復すべし併し三ヶ年間醫者も針打まじ當人も退屈せん九兵衛聞て快氣をせば何年にも養生仕るべし道隆被申しは針醫師が有

るまじ縦令私針立にても他の療治場打捨て我が身も引越て貴様と一所に寐伏して針打事は以て仕がたし家内も大勢なりと申九兵衛聞て少しも御苦勞被成まじ家内の衆御宿の賄は此方より可申付外々へ御斷被仰達御引越被成候而御療治下さるべしと約束し道隆九兵衛方に居て三年の中藥を止め針ばかりにて本復しければ九兵衛悦んで禮として瀬戸物町九軒口の屋敷八百兩に求めて道隆の居宅とし普請して凡千兩程かゝりしよし三上は俄に家持と成る惜むべし道隆其翌年五拾六歳にて病死す其子有しがしれす

紀州日蓮衆何書物の事

紀州大納言様御作にて日蓮宗難題書物二卷出來して題號控日蓮と有見るに殊の外違ひ日蓮宗迷惑の書物也元來紀州御代々日蓮宗御信仰にて池上本門寺の境内に御名塔も有よし此度本門寺住持七字のまんだらを書て差上しに夜な〜光明して屋敷奥方の信心甚敷所々にいかゞしたりけん偽成よし聞へ本門寺不首尾となる是は紙の内より小き蝶の如く成蟲出るしみると申よし是を墨の内へ入する其墨にて書と夜な夜な光出るよし又經師の繪具の内にもあるよし何れ

此二色の内にて出したる由委細白狀して本門寺石塔も引今門徒宗にて赤坂にあり依之日蓮宗邪法のよし書願し世上に露顯す

岩田何某身上持の事

本八丁堀裏通り龜島に岩田屋七郎兵衛とて酒屋有り生國伊勢の者にて松平越中守殿勢州桑名の城主の節足輕を勤め江戸詰いたしぬ越中守殿家中野村増右衛門が悪事に付越後の高田へ所替被仰付此譯は桑名焼蛤と云讀本有り三ヶ津の狂言にしくみよし右の七郎兵衛江戸屋敷に相勤小才覺者にて押へ役を勤折々御供して大手先へ行其節酒賣の仕方見習ひ屋敷を暇を取町人と成て龜島裏借屋に住居し新川新堀酒間屋を廻りて酒のしたみ酒を賣出して大手へ持行て賣買して茶碗酒二文宛安く賣弘ける酒はよし段々賣出して餘計を持出して賣切り仕合よく女房を持つて妻十人並故酒問屋の手代と密通しけるある時七郎兵衛早く歸り是を見付て捕へひしめきける手代悲しみて作けるは我等をゆるし給ひ候は、宜しき事傳受いたし申べし惡酒を直様傳受申べしと申故に丁簡をして傳受を受け惡酒を直すべしと大惡酒を買直し

見るによろしく成是にて金を儲て今は拾丁四方に並なき大酒屋にて人も大分抱へまた屋敷へも賣出し大分限者と成平生右の成上りし者故諸事油斷なし此事常々手柄咄しに致すよし尤の身上なり

無間の鐘の仕組違ひの事

一色何某表徳島哦と云深川材木問屋の隨一なり去に依て深川仙臺河岸に一色町とて有り段々商賣も相止め不勝手に成て江戸町松葉屋瀬川に逢ひて袖留迄し遊し金なくして銅小判にして貳百兩貳包質に入六拾兩かりて袖留の間に合せ段々返金も成がたく質に取て置し人催促しければ兎や角云て埒明す御番に成て封を切見るに何れも銅也一色は牢舎して廿日餘りにて出牢し所預けに成るかさりやも呼出し吟味の上傍屋申は無間の鐘の狂言に入用のよしにて拵へ遣し申たる言譯にて相濟一色は江戸十里四方追放にて貸手は損になりたるよし眞の無間の鐘つきて金が涌と云傳へしがかやうなる種にて金も出来申べし是は貸し人愚成もの也金の目と銅の目とはかるく百兩の包は銅小判にして百六十枚なりさすれば包大にして取まじ又百兩の包の程にしては目が輕し

是貸手の不調法なり

鳥盗人の事

有徳院様御時下總國より鳥を取江戸にて賣見付られて牢舎す此儀上聞に達しける難有も大御所様御意被遊候は鳥を持參り候者は江戸より何程の道法に歸る哉の御尋なり貳拾四里のよし言上す左候へば觸出しは拾四里四方是は江戸の勝手不知前々の通り心得違ひに賣し物と覺ゆ然らば鳥盗人也鳥請合の者と相對致させ可然と被仰付畏て大岡越前守殿鳥屋を召出され田舎より鳥屋へ出し候得者鳥一羽百文に賣町方直段は二百文にも賣べし一羽にて百文の違ひの利徳見ゆ然る上は鳥の數程百錢宛鳥屋へ差遣すべし鳥屋も百文宛取候へ夫だけの利分也双方相濟可申と田舎者も過料を出して罪をゆるされけり寔に名君の御錠なり

亥年川筋大水の事

寛保亥年九月朔日大雨にて神田川大河通り本所大水にて兩國橋落る本所筋町家葛西領千住邊難義申計なし新大橋は無別條通路あり此節は町御奉行石河土佐守殿新大橋の際に小屋を懸け相詰申され助け船を新

掘鐵炮洲邊へ被仰付船一艘に大勢乗本所へ行人々々を助乗す川端廣小路に俄に小屋を懸け是に差置町々へ申付大握り飯を拵へ本所へ船に入與ふ火事場のはぎの如し御船手よりも助船數多出す此節町奉行石河土佐守殿御差圖によりて本所の者共濁水に及ばず御上に御物入もなく石河殿御働御感に入て御褒美頂戴水落て後本所通一人に玄米にて五升宛の御施行被下置或は裏の鉢坊主も五升宛申請玄米にて飯にいたし候哉と問しに徳利へ入細き丸木の末にてつき候へば白米になるよし語る何者の才覺にてや萬事工夫して見るべし此節江戸中越後や始め名有商人有徳人目印に小幡を立て船に握り飯を乗せ配る角田川三圍り邊は淺草並木山屋始め出す

深川にて喧嘩の事

能勢何某千石同連の衆中千貳百石八百石右三人連れにて宮古路敷馬所々遊女屋殊更深川はゆすりて只遊びを悦びぬ八幡にて如何の譯にや所の者棒にて能勢氏を打殺しぬ場所惡敷故屋敷へ歸りて病死に云立る實母町人に打殺されしを無念に思ひて番所へ訴る依て西久保町人大勢牢舎し并敷馬凌川牢舎能勢氏の

家老も牢舎して右三家追放數馬は牢舎し凌川は追放能勢家老打首此ひゞき深川へかゝりて藝者子供四拾人餘呼出され四五拾人捕へて吉原へ被下此節大きに吉原徳を得る深川茶屋中は所拂追放過料六貫文宛出す賣女いづる地は五ヶ年の内に上納家主五人組過料の上百日手鎖能勢何某は武運に盡しにや町人の手にて打殺され高知を領して世の沙汰に及び此類の武士多し先祖の耻と云べし慎むべし

寛永巳年大水の事

寛永己巳年八月大雨降神田川大水小石川龍慶橋より上みの橋三つとんと橋小石川御門の橋計無別條昌平橋筋遠橋泉橋新シ橋淺草見付の橋柳橋何れも落筋遠御門橋花房町はたご町の邊にて人多く濁死す

三拾三間堂建事

深川三拾三間堂古來は淺草門跡北の方清水寺の向に有元祿年中に深川へ引て元文中に大風にて破却す夫より廻りの門跡もなくして草村となりしが能勢肥後守殿如何思召にや門前の茶屋をはじめ堂建立せしに出來を急ぎし故江戸中酒油醬油の明樽を願ひ油酒の明樽一ツ三文醬油樽を一文宛差出し堂建立を願

ひ則此寄錢を以て建立寶曆二申年四月堂入佛供養し門前は茶屋建つゞく則長六尺の手水鉢能勢肥前の寄進なり

三州吉田の橋曲りたる事

三州吉田の橋寶曆二申年御修復被仰付御手傳松平備後守殿御勘御定吟味方井澤彌惣兵衛殿被仰付元來御作事方にて仕來りしを始て勘定方にて修復せし也申の年秋の末より橋中にて九間曲りたるよし依て往來相止み船渡しと成る曲りは作事より直す翌酉年二月井澤彌惣兵衛殿御役被召上大不首尾曲淵も不首尾なり是者私欲有て御上へ聞へしが酉の年三月より御勘定奉行松平帶刀殿被仰付江市屋飯田町遠州屋佐久間屋丸屋木田屋闕所也

○文盲成本道の樂調合の事

○非人髮を切らるゝ事

江戸眞砂六十帖卷之九

○灸を居ぬ身の悲しい仕合の事

○小智の者も命を落す事

○胡麻鹽八左衛門か一生の事

○武門に欠し知行盗人の事

○人に情をかければ報ひ來る事

○系圖正したりとも一心の事

○雷に恐るゝも身の餘計の内の事

○娘を盗まれての上大損の事

○紙屋五郎兵衛か盛の事

○役者こわいらの元根の事

○堺町吹矢町役者評判の事

江戸眞砂六十帖卷之十

江戸男達斷絶の事

延寶年中の治世元和年中大阪落城以後靜謐にして日本始て天下泰平也誠に神君の御加恩也然れ共武士町人長命の者勇氣の咄し父祖骨肉を請し者共其強氣の形氣失せずして弓を張腕をなで氣あらゝくして是を後に男伊達と云出立目立冬は厚く綿を入著物一ツ着しゆき短く丈も膝を過す大小は地を引する程長くし柄は白にて卷利方能を望み先白柄組とて御簾本衆に水野十郎左衛門池田勘兵衛近藤登阿部四郎五郎其外大勢也又下谷御徒町に大小の神祇組あり淺草筋は幡隨院長兵衛浮世戸平石町には唐犬組三左衛門頭にして先祖宮部又四郎名主役を勤めて唐犬組也銀子町に生れし働與兵衛雷雲八大竹矢之助堀江町小船町牛五郎横車半兵衛芝に大佛四郎兵衛八丁堀に勘五兵衛本村木町の夢の市郎兵衛堺町にはんしやう五左衛門横山町に釣鐘彌左衛門大門通りに梅の與四兵衛其外所々大勢一組に六七人又は十五六人も有り町

人も其頃は紗綾縮緬を着し脇差だけ貳尺より長くして落しざし餘り所々喧嘩多く千石以下の御旗本へ被仰付制すべきよし役目則馬上にて供廻り多し跡に棒を持せける今の辻番役の事也伊達仲間にて是を棒ふりと申けるよし紺屋町の男伊達此棒ふりをむごいめに合せしよし夫より金魚組と名付し也其頃中山勘ヶ由殿とて強勢の人を撰で盜賊奉行に被仰付町男伊達をきびしく捕へて殺されける牛五郎は殊更意趣有て屋敷にて首を刎られけり首飛んで氣味よしと呼はりけるよし勘ヶ由殿にも大勢を殺せども牛五郎性根の恐しきものと仰けるよしまた下りの巾着切り蠅のごとく有りしを一人もなく中山殿絶し被申候よし子供迄も勘ヶ由殿といふもおぢるしよし男伊達も相止みて靜に成る婚禮の水あびせも同御停止に成りて町人の腰の物はたけ一尺八寸迄紗綾縮緬着用停止此勘ヶ由殿は凡三万人餘殺し被申しよし病氣前は屋敷に色色の化物出て勘ヶ由殿狂氣して死去のよし屋敷は小川町の由近所屋敷迄迷惑により本所へ屋敷替有り今津輕屋敷の隣家なり

水野氏の事

扱々久々にて御意得申候御物語りも御座候哉と申を彌市物語とは是よと抜打に五郎兵衛を左より袈裟に打放し押へて首を取り引提て門の外へ欠出す家來驚きあれといふ内に二三町過行ぬ一家ども打寄て御城へ申遣す彌市は直に水野屋敷へ欠込座敷へ通り皆々未咄し最中に右の五郎兵衛が首を提げ出す坐中の人々水野を始め是は男也と譽興じて各々私宅へ歸りける扱五郎兵衛娘のなげき大方ならず段々上聞に達しければ彌市を尋出し申すべき由頭へ被仰付猥なく尋しに行方知れず此上はとて彌市が人相書をして國々浦々迄さがしけるに年月を経ても見へず再三の人相廻りけれ共見へず或時屋形船の内に彌市の様の者見へしと注進故涼船吟味有虎一と云ふ舟にて召捕る彌市早四十年過し故少々心ゆるみて涼みに出でぬ天運の程を淺ましき也同船せし侍何もとらへて牢舎す拷問せしが屋敷を申さずしかし水野がおもだかの紋付除の紋と違ひ格別大きにして十郎左衛門殿着用とは推量もする彌市は科の品を顯はさずしてはりつけに掛る水野家も彌市をかまくまひし譯なく身持不行跡の儀に依て板倉家へ御預ヶ切腹被仰付知

水野十郎左衛門白柄組の長本高祿千五百石給はりし強勢の溢者にて小身の御家人にても男を立し武士は朝夕出入す爰に御先手同心に山田彌市と云者あり牛込に同じ同心に小川五郎兵衛と云者有り娘一人持しが器量百人に勝れける彌市見て達て望けるに親五郎兵衛も彌市が強勢を恐れて成程我等承知いたし候へども女共一家へも兼て奉公の世話を頼置候一通り通達いたし御返事可仕との挨拶にて彌市をかへしける其跡にて一家打寄て兎角六ヶ敷と御城へ御奉公に出し候が宜敷とて御年寄に縁を求めて部屋子のやうに遣しける彌市もさのみ達て望みもせず月日を送りける半年程過て殿有院様の御目に留りて御部屋と成る親五郎兵衛も千石餘被下置然る處に去る夜寄合四方山の席にて小河五郎兵衛は仕合者也能娘をもち被召出彌市を聲にとらば元の五郎兵衛成べしと云水野聞て夫は日外の咄しに彌市申されし娘か然らば彌市は身が屋敷へ向後出入は無用と苦かゝ敷申彌市不興して其坐を立直に小川五郎兵衛宅に行き玄關へ上り侍取次に小山田彌市御見廻申少し御意得度筋御座候御對面可仕と申入る五郎兵衛何心なく立出て

行被召上屋敷も御取上ぐ是は彌市に掛り御詮儀有ど歴々の御旗本衆多く難儀を思召て水野殿迄にて仕舞ぬ屋形船は此節大川に橋なきゆへ大船にして虎一はたけ貳拾六間あり船頭十八人乗り此砌屋形船御停止也其後小家形となる又座敷船江戸中百艘と限る事は寶永年中江島殿一件の砌に定る右五郎兵衛娘は名をおでんと申て徳松君御母也後は三ノ丸様とて八十歳餘にて御逝去ある代々御大切に被遊候殊更御慈悲深く御上の思召も宜敷也大御所様一しほ御いたはり

○比丘尼の盛衰の事

本所夜鷹の起りの事

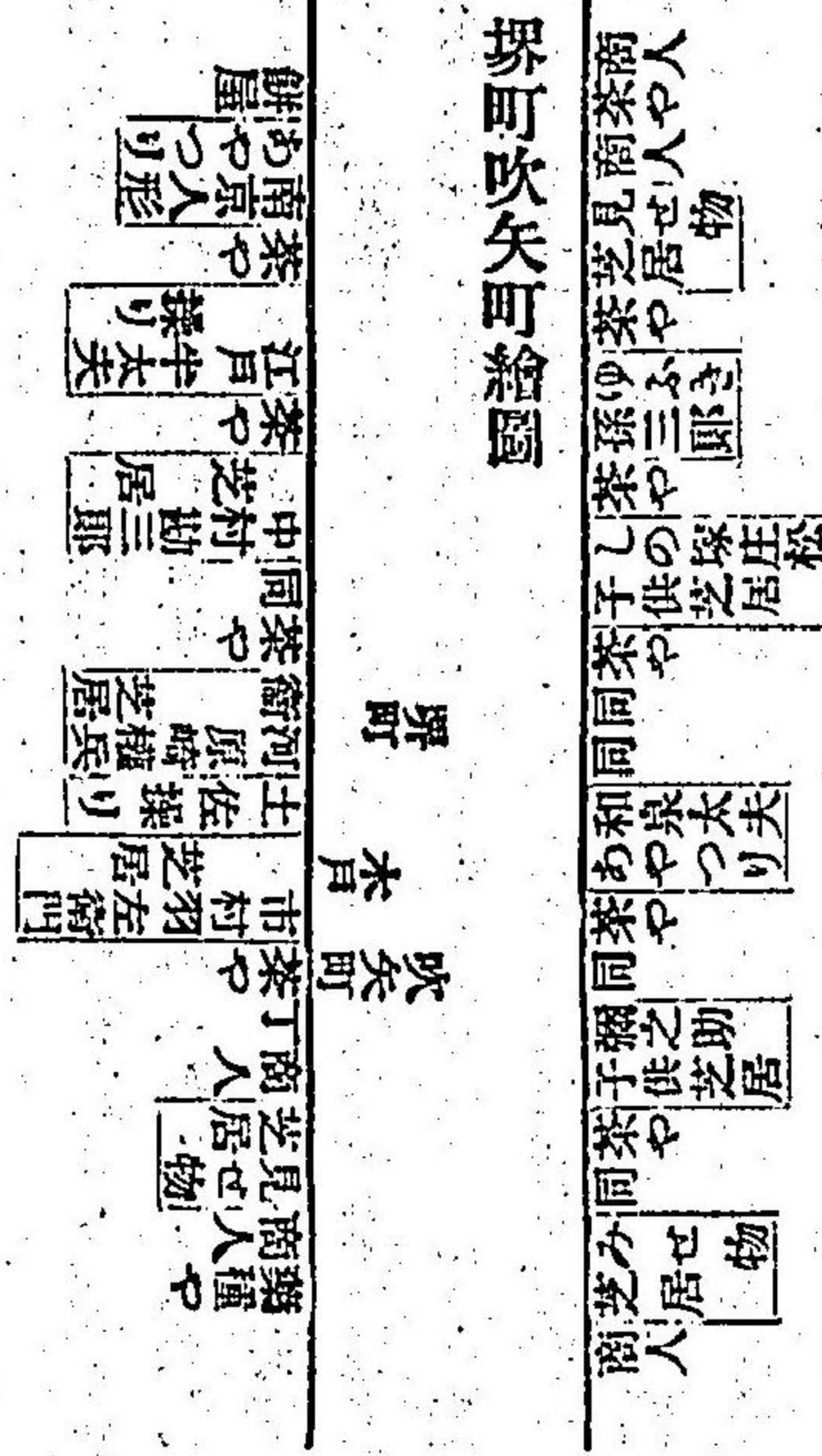
元祿年中寅ノ年九月六日敷寄屋橋より出火し大風雨にて千住迄焼る跡へ小屋懸し折節本所より夜々女あるきて小屋にとまる世の能き時節にて若者共徒然の慰に錢を惜まずあそび買ける後家立續きて柳原の土手の辻番々へ出る我幼少の頃皆々評判し夕部も袖を引留るよし誰かれと咄し珍ら敷事と見物に行ぬ後は段々町の後先の番を頼みて客をしける女も多く成て喧嘩等出来て番や其所の家持中より相止ける今は

みちくしなりて下賤になりし

役者繪馬の由來の事

元祿年中勘三郎座にて親團十郎荒岡に成て切に鐘馗大臣と成て大當り其鐘馗を西之内四ツに切て板行し

堺町吹矢町繪圖



柳原土手見世出る事

元文中町御奉行能勢肥後守殿番所にて筋違橋の方より和泉橋迄土手見世御免あり又二年過て淺草見世

町々餅煮賣有し事

江戸繁花の地にして品川より千住板橋迄家續四里なり日本は扱置唐土にもなし唐の道法にして貳拾四里

蕎麥切温鈍の事

昔は蕎麥切申遣し候へば皆々桶に入て差越し候よし小傳馬町二丁目原の半兵衛と云勝負師有り集りて博

江戸町々に水茶屋始る事

淺草觀音芝神明其外宮地寺々には古來より有來る享保十八丑年嵯峨釋迦如來回向院にて開帳兩國橋の川

江戸相對勸化始の事

元祿十六年南都東大寺堂建立修復御願申上る所々町中勸化し自建立被仰付依之町御奉行より先達而御觸

觀世太夫御免能の事

昔の咄しも當にならず觀世太夫古來御免の能有りし時は諸大名中棧敷へ御出御見物被成候よし御見物の

札五夕宛にて入る見物薄し棧敷は大名衆へ割付しが御一人も御見物なし下棧敷江戸町人先年の通り割付し也出金番所へ願ひ其年の暮に皆々相渡す如期世間一同して見物評判悪しく大きに不首尾也

世につれて人の才智に成る事

三人寄れば文珠の智恵うまさ物は人数なしと云往古万物高直にして飢饉の節は人多く死す今思へば第一智恵なくして米味噌毎日入用買求るに米百文より内にては賣もせず買にも行れず味噌も同じ事也百文が買て味噌鹽麴はなくこまり果けるとなりケ様に不自由故人々難儀しける今は人の氣が商人の氣も買手も工面よし百文にては米味噌鹽麴を買また残して油附木を買日々を暮す依て迷惑せず第一ケ様成せちがらき事仕出すは能場にはあらし橋本町願人有り町家端端乞食などある町より出る冬瓜の切賣肴の切賣自由なり近年初鯉賣に來るに相長屋へ欠歩行きて片身買て賞統しける後にまた調法出來べし上方風に葬禮の損料かし出しなり裏店の者も丸をこしらへ家内の者に大小用させ五せん六せんと賣て大屋の鼻を明すべし

大坂屋何某店を出す事

橋町三丁目東側中程大木藥屋有大坂屋平六と云元祿中に店出す始は橋町三丁目の店借り色々の貧賤の者にて見世物芝居者又は巾着切多く借りて住居し大坂屋本町より引込て小見世を出しけるが辻賣の商人が買て手廻し能丸藥散藥を求めける次第に繁昌して親方の大坂屋市郎兵衛より格別能商ひあり在々所々迄賣出すよし

男伊達に似たる事

元祿年中に神田に竿竹十兵衛白山傳兵衛是等は小普請方の鳶の者の頭也石町に徳之雷次兵衛奴彌兵衛田所町に鼻の八テ藥師前に腕の傳六御藏前に大額八郎兵衛砂利場に春日屋六右衛門馬道に万藏清兵衛生豆腐の六駒形の平三辨慶橋に若の市左衛門別て着物も其常々の風躰にしてかざらず只抓合を喧嘩に牢舎は苦にせず尻強く勝を取人に恐れらるゝを本として欲もなく我のみつよくと思ひ其後に二才の氣生組出來し中に追落し巾着切の類有て皆々捕へられて御仕置なり惣て氣生組は利を以て負ぬ自然と相止み靜成平生商人諸職も安躰にて難有御代となる

目あかしといふ悪者御停止の事

前代は目明しと云て牢に入て岡引と云悪者町々の博奕を打者あれば子分行てゆすりを仕かけ金銀を取首代の奉公に科人を出し所々を騒し難儀を懸る殊の外夥し爪の仁助とて神田に住て江戸中所々に子分を持つてゆすり専らにして暮しぬ歴々も及ばす後悪事相知れて御仕置に成る夫より一切目明し御停止となる

新吉原燈籠人寄の事

元文三年秋七月吉原に始て中の丁兩側燈籠となる殊の外賑ひとなり早三ヶの津へ聞へ夥敷誠に繁花の地也又欲深くして寛延二年の春二月初午後より中の丁兩側あびやまに家々の思ひ付の庭がまへして梅桃櫻の花かざりを見せ千本櫻とす是はさのみ不趣向なり

天下泰平國土あんをん万々歳さかへの御代ぞめてた

江戸眞砂六十帖廣本卷十終

當世武野俗談序

八方有徳の君と謠四海の民無爲の化を樂み戸さしを
わすれし御代の御はしめより萬天和の事までの荒増
の事は燈のもとに武藏野の廣くもの語を記せしは御
書所預り木村先生の武野燭談我は今日頃日おかし男
面白き女現にめでたくまし〜て武野俗談と號けら
し

寶曆七丁丑孟陬日 武江記録者 馬文耕

當世武野俗談

目次

- 大口屋治兵衛
- 押上大雲寺順譽和尚
- 勝間龍水
- 鞘町東伊
- 松葉屋瀬川
- 大巴屋の娘とら
- 深川藝子米蝶
- 南樓京屋都
- 音羽町おしげ
- 根津鳥お岩
- 源道およし
- 桑名が女房悟の名言
- 不角千翁妻妙閑
- 菱屋おりつ
- 新塲九郎兵衛
- 鐘撞娘ろくろ首

- 竹の子ばゝあ
- 池の九霞
- 藤植胡弓名人
- 山彦鳥羽三絃
- ゲホッ
- 淨林釜瀬戸助藤四郎焼
- 快全圍碁
- 中將基
- 七國將基
- 篠崎三哲
- 平澤左内
- 淺草橋塲總泉寺柳吞和尚
- 要傳寺
- 今弘法新高野山
- 御藏前叔母
- 大口八兵衛
- 河七庭華
- 御聖人庄助
- 冬瓜仁右衛門
- 風鈴五郎七

- 夜發一とせ
- 觀音境内お陸
- ちり塚お松
- 踊子お縁おんおてる
- 車婆々
- 霧島薩摩琉球婆々

當世武野俗談

馬文耕著

大口屋治兵衛

享保の頃より寶曆の今日迄世間に其名のとりまわ
 たる淺草御藏前に曉雨といふものあり凡渡世するも
 の此人を知らざるはなし俗名大口屋治兵衛とて札差
 仲々間米屋なり其生質大丈夫にして弱を引立無法に
 強きをふせぎ禮義を不亂公庭を敬ひ不義の事には聊
 かいはらず是こそ誠に男建と云つべし若き頃より新
 吉原へ入込理窟甚能し元文の頃吉原五丁町にて名折
 の悪ル者あり穢多町より來る穢多の久米八と云者方
 量さかんの穢多を大勢召連毎夜吉原へぞめき
 あるき尤衣類美を盡して或時は黒羽二重の小袖羽を
 り金拵の一腰ぼつこゝ女郎屋へ行亭主も知らぬふり
 して客にする所も在しとなり此者金を多くまきちら
 し箕輪三谷砂利場田町の地廻りを手に付て素人共も
 久米八を親分と呼けり中の町を一ぱるに成てあ
 るき色々の悪口し繁昌の女郎に毒口をき客の邪魔

となりてくるわの者迷惑するといへども渠に悪く當
 る時はさまぐの意趣をかへす故にさはらず人々よ
 けて通ければつけ上りして何共不届の事多く難儀
 千萬たり身を持し客は猶々渠に不構或夜彼の曉雨は
 中の町葛屋と云に女郎共と酒呑遊女多く集り遊宴し
 居たりける其前を伴の久米八大勢の手下を召連ぞめ
 き通りける曉雨是こそ久米八なめりにくきしよてい
 にてこそと曉雨は大聲にて何やら甚臭ふなりたり是
 は臭しと鼻をつまみければ前を通り懸りし久米
 八立どまり是愛な人某が此所を通りしに臭いと申
 さるは我等が臭ふ御座るか顔色をかへて立どま
 りねだり懸る故一座の者共是は例の久米八六ヶ敷か
 らんとかたづをのんで居たりけり曉雨はあざ笑ひい
 かにも臭ひから臭いと申たりしかもたの句ひ
 にてなし人間の句ひでない癩病か穢多の句ひがする
 と云ければ久米八すいさんなりと脇指に手を掛る所
 を曉雨ははいたる下駄庭にありしを片手に持右の
 手にて久米八を引寄ておのれ日ごろすいさんなりと
 思ひしが時節なかりし故免し置たり今日百年目覺悟
 致せと取て引ふせ木履を持つつけ打に散々に打すへ

たり久米八大方なりと云ながら夫にまさつたる大口
 屋治兵衛したかに打たをし残るやつばら散々に追
 ひちらしければ此勢にや恐れけん蜘蛛の子を散して
 逃行けり久米八を引起しおのれ打殺すやつなれども
 穢多を殺して詮なし一命を助てくれる立歸れ再び大
 門より内へ來る事なかれ重ては此曉雨が只一打に打
 殺してと語りければ流石の悪る者なれどもはう
 逃て行ければ五丁町のものども上下こそつて悦び皆
 皆曉雨が犬勇を感じける扱其夜茶屋共曉雨に申ける
 は定めて久米八うたれただまつて居まじ必土手に待伏
 して御歸り可有の節心元なく候得ば宵の内水道尻よ
 り密に御歸り可被成こと専要ならんと申ければ曉雨
 打笑ひ渠を恐れて水道尻から逃歸り後日に曉雨が男
 が立べきや又渠等如き者百千あればとて某が片手を
 延すと皆粉にはたく事とて更に合點せざりけりす
 にその夜も緩々と遊び夜七時に曉雨立歸らんとて女
 郎屋を出んとする時人々押留メ久米八若も待居たら
 ん夜明けて歸り給へと云曉雨答へてさればこそ久
 米八待伏せすらん夫を恐れ夜明けて歸りしと人にい
 はれん事を思ふ故に夜深に歸るなり留る事なかれ爰

が男を立てると云物なりとて終に夜深に唯一人送らん
 と云へ共無理に押留て唯一人しりもはしよらず長裾
 の小袖ふくめんの頭巾ふところ手して大門を出衣紋
 坂を上り土手を常より靜かに通り大聲にてめりやす
 をうたひ戻ることふてきなればたして堤の半分頃に
 穢多ども多く艸隠れして久米八も待伏せして居た
 りけり是を見て曉雨獨言に大聲にてあら不思議や此
 土手に何やらくさい句ひがする千住小塚原の人焼句
 ひでもなしア、是はまさしく穢多の句ひなり扱は久
 米八が宵の仕返しに此土手に待伏せしたると覺へた
 りやさしき事かないざ早く出よふみころしてやらん
 と高下駄懷手にて更に尻まくらんともする景色もな
 く穢多ども多待伏するといへども此勇氣に恐怖て一
 人も出合者もなく却て小サくなりてかくれ居たる社
 心地よき曉雨が有様すさまじかりきことどもなり此
 事を人々聞傳へ誠に曉雨が英雄なりと世間にて是を
 流布して人々賞くわんせり是等の事ばかりにてもな
 く度々勇を振ひし事多かりき平常曉雨申けるは凡
 世上の男伊達杯も尻へ手をかけはしよりをして赤は
 だかを人に見せるは男伊達のよはき内なり縦令ば姉

川が黒船廣治助五郎が男伊達も尻へ手を懸る故下手なり柏蓮がそのむかし荒五郎茂兵衛雁金文七など假初にも尻へ手を付す緩りとした形りで悪る者をぶちのめす上巻助六杯の狂言今の三升が如き仕うち等はこそ大丈夫と云つべしぎやう牡丹の黒羽二重一ツ印籠の帯夫を上品の男伊達といふなり十町魚樂が藝は穢多の久米八なり我等が仕うちは柏蓮三升なり(いまの團十郎)今年六十に餘るゆへ當春曉翁と名を改めて曉雨と云ふ名を伊勢屋宗三郎(四郎右衛門事)と云札差へ譲り此宗三郎は男を立るやうなる者にてもなく未微弱なり岩松と云て美しき若衆なり宗三郎を曉雨と云なり黒小袖に大黒天を紋に付るなり

押上大雲寺順譽和尚

本所押上村大雲寺順譽和尚とて活僧あり彼寺へ瀬川菊之丞を葬る圓學院即譽源阿是空居士(路考)寛延己巳九月三日と墓に有住持大に敬ひ大旦那の如く朝暮香花して諸侯大夫の廟所より大切にしけるこそおかしけれ其石塔は角石なりしが巳九月より毎日知る人も知らぬ人も門前を通る貴賤男女此墓へ入り來て路考が墓所の石塔をなで廻し涙を流して有し世は色香

をかざりて世の中をなびかし歌舞の名人なりしが今は野外のこけむしりと成て哀を思はぬ人はなし仍角石たりし石塔も人々寄て終に丸石と成りたりとぞ是和尙の心底大き成山師とこそしられけり

勝間龍水

新和泉町に家主役をして手習指南して筆名は勝間龍水とて御府内に名高き者あり市川三升も渠が門弟なり此龍水今に存生なり大にかわり者なり金銀をむさぼる心更になく極て貧窮なり和泉町の大長屋とて裏表かけて店數百軒餘りあり其雪隠の掃除を萬西砂村の百姓桑右衛門と云者毎年こやし代として金八兩づゝ古金の節前の大屋の代より出しける由相續て右の金子出す然るに龍水の時に至て龍水申けるは何ぞふんどの代金を以て身上の爲とせんや金に不及とて曾てこれをとらず砂村の桑右衛門に金取らずに掃除をさせこやしをぐれで遣しけるこそ替り者なり手習稽古の子ども餘多有之二階下の紙屑夥しければ紙屑買を呼び其母妻是を賣らんとすれば大にしかり屑にて捨るものを錢にして夫にて汁の實一ツにても調へては身上のたしに紙屑をすると云ものなり是より

いやしき事不可有夫よりは紙屑を其儘汁の實にして喰ふべしなどいふて買人に錢とらずに遣けり身上不宜あくまで不勝手なり其心清貧成事甚賢なり或時母女房寺詣りに行留守なり折節四月の頃にて初鯉賣來鯉を呼調へ喰んと直段をす一貫文に調へしに錢一文もなし日頃母親信心者にて持佛堂清にかざり三具足光りかやきける彼道具を不殘持出し難波町の仕廻ものやへ賣て鯉を調へ其近所の俳諧の宗匠平砂湖十貫明などを招き大に舞うたひして樂けり母親歸て大に驚きなげくといへども曾て何とも思はずして笑ひ争はず居たり希有の男なり當寶曆六年杉の森稻荷の幟を頼れけれども不書仍て龍水伴に頼れば書せけり名を書とき何と可書と龍水に聞ければ今世間にて親分の名を請繼て付る事はやるなり釣鐘の子に半鐘又半鐘の子を風鈴と云しなりされば龍の子は蛇なり龍水か伴なれば蛇水と書べしとて杉の森稻荷の今年の筆名は蛇水と書けるこそおかしけれ此沙汰御城下の語り草となりけり

鞘町東伊

鞘町に住居する東國屋伊兵衛是又世上に知らぬ者な

し安針町水鳥屋第一なり今は其身隠居して世上を樂みあるき終日芝居新吉原等へ入込たり夜は品川町瀬戸物町邊夜講釋へかゝらず出で樂みけり鳥問屋は息源八と云者是を勤公儀御鷹の御用をも勤けり此東伊は世上廣く今世こそつて通りもの芝居者藝者の類に此人を敬はぬはなし若き時は器量自慢して所々をあるきて喧嘩口論し更に鬼のやうなる者どもにも一度もおぐれを取となりばくち場に身をなげ入夫より段々出世しけり東ばりとして一二三へ計張を東張といふなり此者水鳥もち鳥細の事に付牢合せし事有然ども間もなく出牢いたし但牢舎の内安針町の鷹戸をささす御鷹の御用相勤けり此頃御側衆御出頭澁谷和泉守殿と云人甚懇意なり(但此子細は澁谷氏妾をもらひ女房とす男子一人澁谷の落胤今東里は此男にして本郷にて菓子屋となるまし屋長門)此東伊先年大御所様御代菓鷹御用に付日光山の山奥へ入り樵夫さへ不入山にして殊に魔所なり天狗の住居なり必入給ふ事無用なりと所のものどもいへども更に東伊合點せず件の山奥へ入たりつき參百姓大に恐れ魔所ゆへ麓へ歸り給へといへども聞入らず東伊は其夜件の奥山に

て夜を明す人々は皆籠へ歸り東國や二人其所に夜を明しけり翌朝皆々噂し申けるは夕べ定て天狗の爲に引かされたらんとさ、やき件の奥山へこはく大連にて入見れば東伊は大なる岩角に枕して能寐入居たり皆々怪異の思ひをなして東伊が大丈夫を感じ昨夜何ぞ怪しき事はそふらばずや東伊聞てよく寝入て更に知らずと申ければ人々舌をふるいて勇氣を感じける其後日光御普請始松平兵部大輔殿御手傳の節御用惣請取東國屋致し日光へ参りければ東伊殿こそ先年慶所へ入て夜中其所に唯一人居られし奇妙の人なり此人に天狗のまじないの守を貰はんとて當地のものども守を願ひければ東伊は天狗の守りとして小菊の鼻紙を小さく切て印形の裏判を押し遣しけるを百姓共大きに悦び家々に張りけり東伊が天狗除の守札今以日光邊に多く有こそおかしけれ至極活氣にして江戸中にて知らぬものなし當正月新材木町より出火し堺町葺屋町芝居ども焼失の節も直に芝居近邊を見廻市川柏庭瀬川仙魚兩人を手前の宅へ連來り先江戸にて極印三ヶ津の名人共兩人は焼出され我等方へ來れりとて人々に語り大に自慢してけり寔に活達

の者なり子夜講釋の席へ参りしに東伊も毎度來りしが或時東伊が云肥前島原切支丹一揆の節西海道の諸侯不殘御進發御名代兩度にて扱々御骨を折られたり今時分あの様成事あらば町人の請負にて打潰すならば物入少くて相濟此東伊杯ならば安札を可入ものなりと申一座の者ども一笑せり天晴名高き今の世の仁じやと呼なし器量者なり

新吉原松葉屋瀬川

新吉原江戸町松葉や半右衛門抱瀬川といふ傾城は十ヶ年以來は五丁町に並ぶ方なき全盛なり其人となり異なり夫遊女うかれ女といへども往昔を尋見れば此里にも寛文の頃には小紫は能和歌の道に達し不斷敷島の道を探ね風雅にして心やさしく世上こそつて偏に石山寺の觀世音にて源氏六十帖編集したる紫式部にも似たりとて其名を小紫と號しとなり名高き雅女たり江戸の小紫が花起證文葉守の神かけての艶なる文章など美濃支考が和漢文藻にのせればこゝにあらはさず又島原の吉野は初め浮船と名乗しを或春廓櫻の花盛を見て島原籠中の吟とて

こゝにさへさそな吉野は花さかり

と云名句有しゆへこれより世に吉野と呼ばれる又正徳の頃とかや江戸町茗荷屋の奥州が提灯の文字貞清美婦胎と云五文字の裏に假名にててれんいつはりなしと書て中の町へ持せ道中せしとなり其後享保の頃萬字屋九重が浮世の末に隅田川の三十一字に奉行大岡忠相の猛き心を和らげしと要秘録に先達してし出したり是等皆々廓の花紅葉と其時々のさかり成べま今は皆散果し又來春も咲花の絶すして今松葉屋の瀬川と云器量甚勝て此里隨一の美人王昭君西施も面を耻通小町も顔を覆ふ姿なり其生れ下總國小見川のかろき民の娘たり幼少にて松葉屋半右衛門抱て教ける自然と女の道たる事を不學して是を知妓女の一ト通り三味せん淨瑠璃は勿論茶の湯はいかゝ碁雙六ありとあらゆる藝不思議に習ひて鞠なども上手なり鼓笛諷舞も能其上能書にて俗氣をはなれ廣澤鳥石が流義文微明が墨跡に眼をさらし唐詩選を取廻し歴々の儒者の門弟にも爪をくはへさせ繪も上手にて京下り秋平(大雅堂)が弟子と成て書工にくはしく俳諧は乾什米仲が引付に入ることくく人の知る所なり其上易道に委しく心を用ひ平澤左内が弟子と成て卜筮

を學びけり平生おのれが座敷には著を紫の服紗に包算木を蒔繪の小箱に入て置傍輩女郎の願ひ事或は待人客の往來首尾の善惡毎日く是を占て樂とするなりふしぎの女なり去年寶曆五の春江戸町二丁目子屋抱雛鶴と云名高き遊女田所町山崎斗仙根引して廓を出名殘に中の町にて近附になりしゆへ瀬川の方より雛鶴へ餞別を送り其文例之通廣澤流にて唐紙の信夫摺の半切に

さゝりて處此里の火宅をけふしははなれられて涼しき都へ御根引の花めづらしき御新枕御浦山敷事はものかは殊に殿は木そもじ様は土一陰陽を起し陽は養にして御一生やしなふと云字の卦萬人を養育し萬人にかしづかるゝと頼母敷もめで度御中とちよつとうらなるるゝ穴賢

てう

雛さま御もとへ まつ瀬より

此文去年の夏の頃人の見せしに依て是を覺へて今此艸稿に寫て是を悦ぶ人々のために爰にしるす此瀬川右の通なれば客を庵末にせず家内の傍輩女郎をよくいましめ金銀衣服寢道具新造出し座敷開等に聊不義

の心なきやうにいましめて心をつかひけり此前方より宮古路豊後ふしといふ淨瑠璃世上にはやり此里猶以の事なりしに此瀬川急度いましめて家内の女郎に此淨瑠璃を語らせずとも禿若イ者迄に松葉屋に豊後ふしをうなるもの一人もなし尤いやしき文段あればなり夫とも三味の場なれば淨瑠璃をかたらずといふ事はなけれども新造禿は江戸ふし河東半太夫の艶なる文句の淨瑠璃を習ひ覺させて客のもてなしとす依之人柄あしき客は松葉屋の二階へは足をも入る事叶はずされば傾城遊女は此家にて隠し言葉相辭又はふてう言葉などとて色々昔より客の聞しらぬ事を女郎どしは云さゝやき外へは何といふことやらわからざるやうにすることは傾城に限らず諸藝諸商人にても言葉づかひ符帳有之外の人はをしらす先傾城より出たり松葉屋にては聊いやしきふてうの言葉遣はずして此瀬川が作にて松葉屋のふてう言葉は源氏六十帖といふ風雅のものなり今も最中不替其通りなり其一ツ二ツを左にしるす

は、きいとは 問夫と云ふてうなりありとは 見えて逢ぬ君かなといふ心は やりてと云事心の火をたふたふた かりけしたりの思ふといふ心

蓬生とは たばこの事
 夕顔とは うらにくる客の事 ほんのく見ゆる花の夕顔といふ心
 雲かくれとは きた客の事
 から衣とは きのじやの事
 蓬生とは 錢の事

是等の事夥しけれども子もいまだ多く覺えず誠におかしき事どもなり扱又瀬川がみさほを爰に記す一とせ揚屋町鳥羽屋正三申の町にてひそかに瀬川に言けるは常磐津文字太夫と云ふ淨瑠璃語り瀬川に逢度よし年頃心を通じけるあはれ一夜御逢被下候様にと願ひ申候私に取持くれよと頼申候間申入候情のほどかきくとき色々に申ければ瀬川答ていかにも執心と候得ば餘儀もなく候へども藝者淨瑠璃語りなどへは勤の身にて枕はかばさぬ習ひ子細は外の客へ障り申候されども其許達て御申候間ひそかに可被遣候逢可申候と申ける故正三悦で文字太夫に右の趣申ければ文字太夫は満足して綺羅をかざり茶屋船宿たいこまざりに松葉屋へ客と成り行ければ頼て瀬川も出て座につき盃などして其後瀬川文字太夫に淨瑠璃を望けり日頃豊後ふしを嫌ひし瀬川何とも心得ずと思ふ

人々もありけり文字太夫は嬉しく聲はりあげ瀬川が氣に入らんと思ひ精を出して語ければ瀬川禿に申付目録金子千疋臺にのせ文字太夫が前に置せ今宵は御太儀に候なり天晴面白く覺え候是は謝禮にて候酒にでもまわり御歸り候へといひすて二階より下へ瀬川は静におりけるとなり文字太夫藝者として瀬川に逢んと色々不屈成事を申掛並々の徒なる傾城と思ひおなどりし故其心をこらしめ廓の女郎ども淨瑠璃語などにて徒をしてうわ氣成る者どもの教にもとかくいたせし瀬川がみさほ連れ成事にてあれは廓の最上なりしが去年寶曆五の年の暮江市屋宗助請出て廓を根引す實は去大守の御家老根引なれども表向は江市屋なり夫故去年十二月江市屋が女房まで来て廓を連立出て藥研堀村松町浮き普請小屋裏に借座敷して今におりけり

大巴屋の娘どらと仇名す

つれづれに艸に椽僧正と有極めて腹あしき人なり大なる椽家の前に有故人呼て椽僧正と云夫故木をきらせければ又切く僧正と云腹たちまた掘らせければ掘池ノ僧正と仇名取しは是非もなし爰に新吉原大巴

屋といふに娘一人年頃に成て尤相應成生れ付なり然るに此五年以前京町大文字屋市兵衛とて其形見苦敷頭の形かほちやに似たりとて爰に大文字屋のかぼちやとひよつと廓中をぞめき地廻り悪口云しが廓中の時花となり來客殊に是を聞て唄ひ段々と江戸中の口にかゝりはやりうたと成るこそおかしけれ夫ゆへ大文字屋此名題にて一しきり殊の外繁昌しけるこそ幸のことなれ扱また大巴屋の娘おつやといふは全く徒成娘にてもなし尤行義も能人柄等まで残る所なかりしが地廻りの若者一人大巴屋の娘に心を通じ數通玉章を以て口説ければ地廻り風情の者などは返事にも不及打捨置けるを此者憤り若者ども云合何とぞして戀の意趣をはらさんと不斷夜に入ると大巴屋の前に來大巴屋のどら娘と唄ひあるきければ一犬虚を吼ると萬犬實を傳ふは大文字屋の如くに唄ひて世間へも流布し大巴屋の娘仇名とりしこと甚めいわく千萬たるべし誠に不祥の至なり大巴屋おつや如此云たてられて耻かしと思ひけん瀬川へも身を沈めんと思ひしが父母のかなしみを考て其事もなく月日を重て誠を盡せしが天道是を助てすでに貞清を知る人

有て今はめでたく京町二丁目山介方へ婚姻して榮けると云

深川藝子米蝶

深川の呼出藝子の遊び北州にひとしく山猫と云も此類屬なり人往て是を呼ば則來る常に何國に有と云ふをしらず北國の如くたて引の法もあり其志薄し遠國他國の人歸帆する時船を出して送る花里通商考と云書にあらはせり其中におてうと云妓女甚顔よし三味線術はかひなしといへども座敷の取廻し盃の所体他の女に異なりとて晝夜萬客來て争ひて更に寸の隙なし其お蝶を人々米蝶と呼なりされば龜也が百花鳥續百花鳥の外に遊廓のたはれ百化鳥も洲崎の米蝶と人は是をたはれけるなり米蝶と云譯は米やのお蝶と云にてなし此おてうが母親二人の娘を持亭主に早く別れやもめにて深川伊勢崎町と云所にかすかに暮しけり姉娘は宮古路敷馬太夫が弟子と成りて女太夫同前に采女が原切通しなどへ淨瑠璃三味線にて人々より一錢二錢を乞ふて其日細き烟を立て居ける内同廣小路にて北濱東之助といふもの有今も兩國廣かうじにて請身をして見勢ものとし米俵樽など持し男なり渠と

夫婦に成りにけり是藻に住虫の我からといふ淺ましき身なり北濱東之助女房の妹をお蝶と云なりかれらが母親比丘尼と成て毎朝く鉢ひらきしておてうを育あげ深川へ身を賣たる故自然と名代となり鉢米にて養ひ育てたりしとて鉢米のおてうと云しを夫ともいはれず米蝶くと呼ばれて全盛此地にて並ぶ者なし仍て親并姉御東之助(本名郡治)深川伊勢崎町にて今は相應に凌ぎ深川けいどうとてさわがしかりし節は親元伊勢崎町へ來て滞留して居たり此節深川淨心寺にて身延山開帳の節はおてうが母親手水を買けりおてう折節深川やかましく親元へ歸り居ければ其手水所へ度々出居たりけるに群集の貴賤此所に立休らひ歸らん事を忘れ美景に見とれて居たりされば其生れかくの如く賤しけれ其氏より育とやらにて子供の時より綾羅錦繡の上に深川の茶屋にて育じ故其志甚だ活氣にて假初にもさもしき事なく金銀衣服をさらさら大切に思はず誠に大氣にて松の位とも云つべし或時此米蝶并辨天おかん木綿やおきりなどいふ名題者三人連立て八幡町を靜にあゆみける時仲町小鳥やの前にて三人の藝子たゝすみ小鳥を見て居たり往來

の人々も大勢立どまり是を見る時に鳥やの亭主さも美しき鳥籠に入たる鳥を出し君達へ御覽に入るべし此鳥籠はかたじけなくも銀の箱にて去やんごとなき御方より預りの籠なり中の鳥は朝鮮渡りの鳥ひまどりあたひ金三十兩なりと少し自慢にて見せけり人を見とれて居たる時此米蝶はつと走り寄誠に見事に美敷鳥なりされども此鳥のためには此いみじき籠の中より廣野をこひ敷思ふべし此鳥此やうにかたち美敷生れずばかゝる牢中のくるしみは有まじきぞかし價三十兩は塵芥のごとし小鳥の命は萬金より重し其代金は米てうが拂可申とて頓て鳥を取て大空へ飛せければ雲井はるかに飛さりけり鳥やを初め見物して居たりし人々其大氣に肝を消しけり終に其代金米蝶が拂ひけるとなり誠に希有の者と人々此沙汰世上に廣かりしとなり

南樓京屋都

南樓は品川宿此處海道にして冬は暖に夏は涼敷東の方望洋數百里總房の二州に對す西に御殿山あり絶景の地なりけり水行芝沙溜御濱といへる難所有陸を行高繩八ツ山をへて至る品川の人物北州に類して多く

は結び髪にして眉毛甚げんなり人と交る事安して馴染はやし淨瑠璃を語り唄うたふといへども曾て三味線に合す常に海上になれて能客の揖を取りけり爰に當所京屋の抱の女に都と云ふは其やさかたいふ計なく生れ付顔よく京屋といふ家名に愛て都と名乗を以其器量と思ひ計べしされば江府の遊人誰か此都を知らざる人あらんや然るに都座敷の勤酒事何かに付て一つとしてぬけぬ無之といへども床に入て高軒をかかこと夥し何れの客に逢ふときも軒かいてさばがしきこといふ計なし是れ以外の外のおしきくせなりと云傳へしされば都は都の女郎とて名題なり然るに江戸大夫河東と其中むつまじく末の松山波こさじと誰しらぬ者もなくばつと浮名も立田山紅葉はしても秋風は吹ぬ中成けり爰に近き比出たる百馬鹿と云書に

河東の火きへて程なく野馬鹿

といふ馬鹿の其一つは此京屋の都が事とかや此都勤のうち坊主客をきらひて一人も逢ず醫師にても其通りなり人々是を答て勤として客を嫌ふは如何といへどもきらひなりとて逢ず能其心を聞ば昔より南樓

へは三縁山長榮山等の所化多く来て金銀を費し其身終に還俗のやつこと成者多し其佛の種をたつといふものなり更でだに女は五障の罪深し浮川竹のためしすくなき地獄の使とも申べし恐敷とて終に坊主に不逢といふ一風有て心に惻憐を持ちし人といひつべし

品川土屋 蛤 杓子 魚類

音羽町石見屋おしけ

音羽町といふ所は中頃人倫なし近年又繁榮す北に護國寺といふ伽藍有雜司ヶ谷と云名所有西南に目白といふ景地あり又川水川上を猪の頭と云流有て東都に至る此所の人倫大半品川に同じもの靜なり初て人にまみゆる時にきせるを取て遙に下に坐す國法と見へたり此音羽町の茶屋石見屋と云有其女房おしげと云は元こゝにて勤めせし女なり器量もよく平生物靜かにして多く物云すやさしくおとなしき生れなり此故石見屋の寶とす然るに見かけと違て大力持なり夫を知るものなし尤力を終に人にみせたることなし此頃その大力を知ることあり音羽町のうちに角力取年寄音羽山峯右衛門といふ者あり渠が方に若手の角力取

大勢来て居たりしか或時角力取ども三四人連立近所を白晝にぞめき廻りける折節七丁目蓮光寺といふ日蓮宗の寺にて萬卷陀羅尼修行有參詣の男女夥し其所へ件の角力取ども參て若き女などへつきかゝり人の邪魔して我が樂とするたはけもの世上にまた多し然るに彼おしげも參詣しけるに小女ひとり供につれて蓮光寺の客殿縁側通に居ければ角力取一人來て彼女房の尻をなでけるに知らぬふりして居たる故猶じやうだんをいたしける所を頼ておしげ其手をとる膝の下におしかい力を出しておさへければ大ばんじやくの如く巖石を以ておしにかけらるゝとも是にはいかで増るべき大の角力取其腕をひしける計骨はくだけてみぢんに成かと思はれ見る内に彼男色眞青になり額に冷汗を流し泪ぐみ物をもいはず顔をしがめて苦しがるおしげは顔も替らずふところより水晶の長房の珠數を取出し三寶祖師を拜み自我偈題目を唱へて少もさわがず居たりけるを側より題目講中の麻上下着たる人々來て達て詫けるゆへおしげはゆるしてけり角力取は危き命を助け逃ける是より音羽町のおしげとて遊客の知らざるはなかりけり

音羽町の土産 風車 蕎麥 燒餅

根津の鳥お岩

根津と云所は其地卑うして南の方に開けて悉山なり西は叡山有櫻山多くして春は嵯峨芳野にまさる地なり麓に蓮池有不忍の池といふ同廻り二三町中に鳥有て天女を鎮す夏の頃蓮開く時は恰かも蓮溪の如く又根津の社有門前に茶屋有各山水を構ふ爰の人柄音羽に類す人家至てふるし淨瑠璃小唄はかまはず此根津の遊女に川島屋のお岩と云有是を鳥岩と云其いはれ此女小袖のもやうすべての道具に悉く鳥を付たり塗枕にまで鳥を繪がせり夏冬の衣裳寝道具にも皆鳥を付るなり何として鳥を付ると謂を聞けるに此女が親甚かるき者にて今日のいなみもつきはて據なきに付二人の親の爲に此根津へ身を賣られたりされども更に親を恨る心なく此お岩が平生申けるは人倫として親を思はぬは有べからず鳥と云鳥は反哺の孝として親を養ひ返すとかや然ば人間の子として親を養はずんば有べからずと勤の中も兩親を大切に於て客を大事によく勤を丁寧にして金銀不時に得る時は己が爲にせず兩親をみつぎけるされば反哺の孝

を忘れまじきとて鳥を何にもかにも付たり夫故鳥お岩といふ名をば取けり

根津の土産 芋田樂 湯豆腐

道源およし

本所入江町鐘つき堂の際に道源小僧吉五郎と云者有此者元は道具屋源七と云し者なり故に道源小僧といはれたり渠は俗に云通り者にて本所邊にて誰しらぬ者もなく入江町は安遊女みせ有人毎に此場所は三田堂前入江町鐘つき堂とて其道のやくざ場の如くいへども繁昌にしたがひ今は格別路次數も裏表新道かけて四十一路次女の數千三百人餘入江町に有殊に其中にも甲州や路次などいふは遊女の勤晝夜金二分ツツなり吉原の座敷持のあたひに異ならず其衣裳道具女の器量等甲州やの全盛に並ぶかたなく元日より大晦日迄隙日とては更になし此町内の口利にて道源吉五郎或は喧嘩手負等有之節は道源罷出て罎を明ける故所にて是を敬ふ事限りなし公邊事杯有之時は已罷出町内の首代となりて公庭にうづくまる男なりかるが故に夜見勢の女郎一人に行燈一ツ火をとぼしさへすると女郎口錢一人前より鳥目四文ツ、吉五郎

方へ取らせけり千三百餘人より四文ツ、を取ける事毎夜にして莫大なり吉田町かねつき堂入江町長倉町新道夥敷夜發の數有猪の堀と云所に船まんぢうとて多くあり是等をかけて千三百餘人有事なりされば吉五郎大金持となりけるを去る頃其惡逆現はれ公邊へとられ品川にて獄門に行はれけり其女房およしと云女誠に鬼の女房に鬼じんとやらにて夫吉五郎が首を取來て葬らんと夜中密に唯一人鈴が森さして赴けり狂言人形淨瑠璃にはかとり姫は夫兼道が首を奪ひ取妻のおたつは雁金の五つつれたる獄門首を清川と争ひしと千前軒が心を盡せし眞鳥雁金の淨瑠璃のまにも能似たり扱およしは品川へ行て夜中に獄門の木にさらされし夫吉五郎が首を番人の乞食へ談金子を出しもらひ取風呂敷に包唯一人本所まで立歸ける心のうち男にも増て大丈夫成女ぞかし扱其後右の首を以本所本佛寺と云へ葬りおよし願ひにて金子を多くおさめ道源が弔は衆伊を夥敷集め大名諸侯の御葬送の如く樂器をしらべて樂弔にせしとさりとは過たる禮なりと人々是をいひあへり扱此およしは是より女の身にして道源吉五郎が跡を繼て町内のふせ

ぎ役となりて今専ら本所にて其名高し役者平兵衛か道源およしかと所の者はに屈伏しけり年三十四五にして器量も相應成りよし町へ通ひ佐野川巨仙へ心を通はすと沙汰しけり

桑名屋嵐孝が女房悟の名言

大傳馬町三丁目桑名屋彌助が女房は此前の中近江屋半太夫なり今の與惣右衛門も嵐孝といひ親嵐孝甥にて實子にてはなし親は名題の大氣男なり世上に知らぬ者なし今は嵐孝が女房も其後近世の中近江屋善右衛門抱の半太夫と云しなり此親嵐孝が妻の半太夫今妙源とて尼になりて淺草境内うばが池の際に住居して女ながらも風月を樂みて俳諧茶の湯花などをたしなみ表徳を離然と呼けりされば享保十九甲寅年大傳馬町藥種店桑名屋が妻と成り大勢の男女を召仕て其心やさしく情深し天晴貞清なりと假初にも是をぞしらす信心深くして本所押上村春慶寺と云に普賢菩薩あり是を甚信心しけり傳馬町より日々と參詣す今淺草に有彼普賢へ日參をするなり此以前勤せし時は君傾城なれば普賢を信仰しけるなるべしさればむかし性空上人誠の普賢菩薩を拜み奉りたしと有ければ

播州室の津に至り遊女の歌舞をするを見るべしと告げ給ふ普賢白象に乗姿を顯しませ給ふ時性空上人今暫くと象の尾をつかまへ給へば其尾扱て上人の手にとまると云傳へたり性空上人は一條院の御宇寛弘四年三月十八日八十歳にて遷化し給ふとなり今其白象の尾書寫山圓教寺にありかゝる故に半太夫妙源が信心も是等の事考へてなるべし不斷半太夫が云けるはかゝる浮勤の中にも必法の種を蒔べき事ぞかし拾遺集釋教の部の歌に

津の國の難波の事か法ならぬ

あそひたはふれよとてこそしれ

かくの如き言の葉を聞はいでくたのもしくこそ候へと云しなり歴々風雅の人々爪をくはへる事計なり既に一とせ人々集りて達摩九年面壁の坐禪の咄を致しけるを此半太夫聞て達摩九年の面壁は何程の事か有べきすべて女郎の身の上は四季折ごとに見世へ出で晝夜面壁同前たり達摩は九年我には苦界十年なり達摩のうは手なりと笑ひし此事畫工英一蝶が筆に半身の達摩の顔を傾城に書初て世上にてはやり團扇たばこ入柱がくしまでに人々女郎達摩を用ひけり半身

達摩傾城の畫の讀に

そもさんかこなさんか

九年母のすゝより出たるあまみかな 柏庭

又

九年何苦界十年花の春 同

不角千翁妻妙閑(不角は古今獨歩の宗匠)

不角千翁と云しは俳諧の達人なり彼禁庭にても堂上の人々に發句を望まれて

頼政の拾ひのこりの稚もかな

と申候ひしと前編の書に出たり此千翁が女房は至て發明にして風雅の道は團女秋色にも越たりある冬の夜雪いと白ふ降りければ近邊の雅人來り千翁をさそひ雪見に出んと有し時不角も同じく同道し出んとする時獨の小野郎を供につれて出んとはやく支度いたせらちあかぬなど千翁野郎をしかりければ其女房不角に向ひ何れも風雅の面々はさこそ雪の面白かるべき此奴僕何の面白き事有ていさむべきや一とせ安藤冠里公のあれも人の子なりといふ初雪の句もあり陶淵明が薪水の勞を助り是も又人の子なりとの仁心の辭を思ひ賜へ手前の子ならば供には連賜ふまじと云

ければ不角いかにも其方が仁心感じ入たり則其一言發句になりたり

我子なら供には連じ夜の雪

是は我が誤りたりとて閉口してけるなり今女房尼に成て妙閑といふなり不角前の妻は不角存生のうちに死しとかや其節不角

五月雨や何やら足らぬ家の内

右は前の女房死し時の句なりこの妙閑は今に存生なり

菱屋おりつかるた名譽

兩國橋向本所一ツ目近所茶屋町寄合茶屋にて菱屋小左衛門と云もの有かれが父は常憲院様御代御出頭たりし柳澤松平甲斐守殿氣に入定紋花菱の小袖上下をゆるされ其家の名も菱屋と名乗けり今の菱屋小左衛門が女房おりつと云は名高き女なり爪の仁助と云通り者の娘なり兩國橋幾世餅の女房も仁助娘にて菱屋のかゝが妹なりされば此りつ女の身にて幼少よりかるたを好き上手にて所々方々へよみ打にあるきけるが近年いよゝかるた高下共に時花歴々の分限者たち又は浅草邊寺町の和尚住持智識長老御聖人迄此

わざを第一にてかるたの上手と呼べば猿江の専念寺と云寺の住持よみ好き妙を得たり又砂村の百姓縫右衛門は専念寺に馬きりの劣り有と云兩替町會津屋五兵衛は夫より海馬だけ強しなど其内にて申あへり彼菱屋おりつは是等の輩に勝負更に乙なき上手たり尤黒札をまきちらしたる時一まいうち出すと其人の手跡に八枚何々といふ事鏡にかけて見るよりもあきらけし或人おりつに向ひ其元かるた上手と申候得ども凡かるたは繪付次第にて下手も上手も入まじきかたとへ上手にても馬が十にもなるまじといひければおりつ答ていやゝ左様にあらず繪のあしきを取たる時こそ上手の入る所なりあながち手前の勝つ事を思はず役のなきあがりの安き方へ打込やうに致をもつてよみ打の上手と申べしおのれせひ勝んとするは下手なりされば兼好が書し圍碁といふものゝ上手の曰勝んと思ふ事なかれ負まじと思ふてかこむべしと云しとなりまけまいと思ふは勝んと思ふ同じ心の様なれ共其事甚意味有名人の詞なり又二が三には打れまじ十が馬には打れまじと御申候へ共必ず打れるなり下手は海馬を二にも三にも打せ上手は海馬はあ

ざに打釋迦は十のかはりに打す釋迦の場にて打事なりたとへば二三打て次へ四とやる其四なくて返るかへざれば馬を打てきりとやる四の替りに馬をはなすは馬を四にも打なり爰を以て上手は自由に其繪をこなす事自然ふしぎの妙有と答けるとなり今此おりつはかるた打の輩しらざるはなし

新場九郎兵衛

新場の肴店に九郎兵衛と云通り者有商賣は肴屋にて今迎も名高きものなり女房は吉原大黒屋の右近といふ遊女なり夫を請出て十三四年以前より女房に致けり吉原より連來る日は四月十二日成しを市川海老藏九郎兵衛を祝して

夜鯉やことに樂師の引合せ 柏庭

とせしとかや此九郎兵衛は以前吉原へ通ひける時中の町の近江屋と云茶屋に腰を懸て女郎交りに十人計酒呑遊び居たりける時大門の方よりいそがしそふに生鬮くと呼來る此商人は新場の八と云其日過の輕き者なりさしこの半てん著て随分見苦しき體なり九郎兵衛茶屋より見て八よゝと呼けり鬮賣立留て是は九郎兵衛様かと云ければ一ツ呑て行とて盃をさす

いはし賣は荷をおろして盃をいたゝかんと云茶屋亭主女郎も此體を見てあなどりて夫へ腰をかけられよとてあがり給へといはす九郎兵衛八よゝ縁側の角へ腰懸けすと爰へと呼けれども縁側に腰懸て居たり其時九郎兵衛亭主へ吸物一ツ出しくれよと云付九郎兵衛そつといわし賣のふところへ小判一兩入て夫を亭主へ花に打てと耳へ口を寄しれざるやうに申ければ鬮賣持たる盃を亭主へさしけり亭主は其盃をいわし賣へ戻す時に鬮賣亭主へ押へたり是はと云時いわし賣の件の小判一兩盃臺の上へ置けり亭主はじめ有合人々興をさます計なりされ共亭主は押いたゞきふところへおさめけり夫よりいはし賣は荷を肩へかけて二丁目の方へなまいわしなまいわしと急ぎ行けり跡にて九郎兵衛は亭主に向ひおらが町内の者は皆あの通りのいき方者成と大きに自慢しけるとなり何かに付て我が味方の者を能立るとかやかやゝる人の第一とする事なり諸事萬事に付てかゝる心底の者なりとかや夫ゆへ人々是を用ひて親分とするなり是に名高き者を爰に記す

田町砂利場

じやうぎら

金右衛門

三田同朋町 上見の鷲 長左衛門

高砂町 遠州屋 小四郎 人形芝居座元なり

神田鍋町 大工 次郎右衛門

本所龜戸 錢頭 甚左衛門 小梅座頭なり

此分はめい／＼名高き者なれともさしたる事なきゆへ略之

本石町鐘撞の娘轆轤首

世に不祥の名を取る事古今ためし有つれ／＼艸にも粟のみ喰て穀の類を喰ざる娘有と書り今本石町の鐘撞の娘生レ甚美敷され共幼少の時分より世間にて云けるは此娘はろくろ首なりと誰いふ共なく申出したり十一十二の頃より子ども連立て手習に通ひける是もと至極きれいに色白くしてぬき衣紋に著なしあるきし故首筋長きやうに見へたり金吹町手習指南馬場條助方へ通ひけり名はおつよと云けり嫁入頃にて成人のいふ所凡鐘撞といふ者は至て罪深き者にて自然と人の恨を請るなり仍て其女轆轤首たりいか程も金付べし杯いへども貰んと云人なしと江戸中に取沙汰

するといへども其證なし皆是空事なり以前入智を取しに二人寝の新枕過て夜更人静まりておつよが寝姿うるはしく智は目を覺し見とれて燈火をかき立たりしにおつよが首自然とぬけ出で六尺屏風の上へ其首上りけると云ふらして貰はんと云人もなく成しが時節有て去年戌四月神田白壁町山口丈庵と云醫師活氣者にてろくろ首にても苦からず貰ふべしとて婦妻とす随分おつよ女業かけたる事なく夫婦中むつまじく當三月一子をもふけたり轆轤首も時節有て平愈するものか但醫師丈庵がヒ先の宜する所か今は目出度いもせの枝葉榮へて居たりけり

竹の子婆々

是は江戸御府内は申に不及犬打童も能知る所三ヶ津にて誰しらぬ者もなき乗物町の竹の子婆々として不思議に名高き者あり其初はしらす中年の頃中村十助(勘三郎芝居仕切場役なり故一と云て是も名高者なり)方にて焼食やらまかないやらの婆々となりて十助方にて漸一ヶ年に一兩二分程の給金を取て居たり或時此婆々、淺草の御堂へ寺参りすると杖を突獨り行ける折節向より大なる町人の葬禮と見えて麻

上下着たる町人大勢出家交り跡のりもの夥敷掛棺の上へかけたる白無垢いかゞしたりけん風に吹飛來て中村十助は、があたまの上へかゝりける其儘右の白無垢を奪取て右棺の先へ廻り施主の面々へ向ひ以ての外ねだり懸りける故僧俗ともに途中にて色々詫げれども棺をとめて殊の外にわたり廻りうごかさねば外間旁施主は分限者の何某なれば漸々内證にて卒度袂へ金子十五兩入れれば是にて得心して其通りにして歸といへども右の白無垢は返さず持て返りけり夫より此婆々中村方を暇を取其頃漸和泉町に比丘尼の宿多く有てはやる時分たり金子五兩程かけて比丘尼宿をいたしける無慈悲成故爰にて少々金子を延しけり或時材木町より馴染の客有此いわたやへ來(いわたやばい)が家名なり)比丘尼 おぎんと云に枕を並て寐たりしに夜着の中にて頓死しけり此客の懷中に小判二十兩有けるをば、押隠して我慾とせり扱其客は材木町にて有徳の者成けるが親類共外聞を思ひて内證にて引取るゆへ婆々が仕合とこそなりたり夫より此金子にて芝居藝子舞臺子影馬杯を少々抱へ境町勘三郎座へ借し金など初は少許にて十助世話にて

出しけるが段々金が金を生して後は夥敷事となれり為澤町古着店の賣居などを何軒といふことなく買調へ手代を居へて古手商をさせて色々事にて金をもふける事神變ともいひつべし(印は皆竹の子婆々)がみせなりとかや此者を竹の子と異名せしことは抱の影馬に八代太と云子共有しをせつかんして終に打殺ける其子の親元へは竹の子を喰せけるに夫にあてられて食傷して死しとて表向内證ともに何事なく濟せしゆへ世こそぞつてかれが異名を竹の子と云近年殊の外富貴と成芝居へ大金を出して中村慶子杯は子分にして威を振ひけるが去年六月病死しけり増上寺下源院に葬り圓成院頼阿信女と號しける竹の子が娘おすみ乗物町に紺の商ひして打讀き今芝居の金元して負ぬ氣の女にて當正月十四日境町焼失しければ未だ夜の明ぬうちに勘三郎座普請場の職を染ぬきにさせ數十本立て普請は十五日晝より初けり猶々二代の竹の子尤親竹の子も及ぬとて半夏婆々と人々是を呼あへり

名畫池の九霞

當時江戸のみに限らず三ヶ津にて繪師の名人といふ

は池の秋平畫名は九霞と申者なり元京都の出生なり丹波屋鯉長は英一蝶が弟子なり此九霞畫に妙を得て今五本の指を以てゑがくよし戊辰十月江戸へ來り諸侯大夫御歴々御聞及び賜ひて大名の御座敷へ罷出あなたこなたにて席畫仕候未三十四五歳の者なりしるべに聞ば京都の綿屋のよし子供の節より商賣には一切構はずわたりや庄兵衛と申せし者の由また大坂にもわたりや武兵衛と云は義太夫節の好にてわたり商賣に構はず終に義太夫の上手に成て綿武と人に呼れ今は綿太夫とて名題の者なり此わたり庄は繪の名人と成けるなりと

藤植胡弓名人

當時江戸麴町五丁目住宅胡弓の名人なり並々のとは違ひて四筋の糸を懸けて是を引ならす其音色格別にして能梁の塵も飛し魚鼈禽獸の心を一につにする云傳へけり此藤植は堀田相州殊の外氣に入不斷膝元へ候す依之人々藤植に付て堀田へも取入妙計を廻しけるとなり

山彦鳥羽が三絃

山彦源四郎は江戸節三絃の元祖なり尤名人にして山

彦と云は三味線の名なり源四郎は十寸見を名乗る渠が家に山彦と名付し三味線有し故名字と號松平出羽守殿渠が術を悉く稱し給ふ事有其言葉を以てかれが家の面目とす又鳥羽屋三右衛門は唄三味線曲彈き名人なり有馬玄蕃頭より東武線太夫と云名を貰ひ今其通りに名のる是また渠が家の本意なり

區 區

新和泉町平四郎と云は木履の名人と云樫木齒足駄あらん限りはぬけるといふ事なし印にひしを打なり至て其履こゝろ能しとかや此平四郎げほうにてはなし此前の平四郎も尤げほうにてはなし凡下り坂を足駄にて歩く事甚難難成に渠が木履は履心よくして下り坂の難もなく誠に區區の下り坂は自由成ものなりと云譬への諺をとりていふなり

淨林釜瀬戸助藤四郎燒

淨林釜の極め所は當北八町堀北島に罷在大西國定といふ者なり藤四郎燒は淺草聖天町高原藤四郎と云者ちやわん水さしを燒なり瀬戸助燒は數寄屋河岸瀬戸助燒なり

快全圍碁

當時圍碁の名人は遠國波濤を越て爰に遊行する内に備中の國より源五郎と云者來る此男は五十年以來の名人なり年毎に江戸へ出て能人の知る所なり彼源五郎が息男なりとて前髪立の三松といふ小伴を一兩年以前より連來る是又碁打の生來ともいふべし器用不思議の上手なり茲に江戸常住して圍碁の名人と云は増上寺塔中所化全快(若僧なり)是今の世の碁に妙を得たる人なり今年若なれば此上後年は日本にて此僧の上を越す碁は有べからすと云不思議の上手出來るものぞかし

中將碁

今江戸中にて中將碁の上手にて其名高く御旗本衆并福祐の町人皆其門弟となりて會合する其先生は西丸御書院番大澤又左衛門と云人なり濱町に住宅なり六十計の老人なり其生レ付少し魯鈍なりされ共名人なり

七國將碁

晋の七國將碁として近年朝鮮國より將軍家へ獻じたり晋の七雄將取合駒組にて其盤大さ三間四方なり駒數多く是をさすに七人にてさすなり將碁腰を懸て杖の

やう成る竹を以てさす故七國將碁と名付たり大納言様殊の外御好き遊ばし又田安右衛門督様最初に是を學び給ひ田安にて御書院番戸田内藏助妹おくら殿と申女中上手にさしならひ此人に續し者は一人もなしされば西九家治公も田安へ被仰遣右のおくら殿御借りよせ被遊て此女中に七國將碁御稽古被遊候なり其性により上手に成る事妙なり

篠崎三哲名醫の名を得

日本橋篠崎三哲は小兒の名醫なり近年雜長持に其人となく餘所ながら書あらはせり入山形に假名のタの字は下手のタの字かと書て釣好きにて帯千人の時に逢けるこそ幸なれみよは釜をこくら迄度々釣に出らるゝよし先第一醫師に似ぬ大朝寢にて早朝より小供を呼集め晝下り迄腰懸に寒氣暑氣の差別もなく是ぞ大概達者成者も此腰懸に屈してよいかげんの病人と成べし夫より錢湯に入朝飯を晝時分に喰ひ其後番付に合て呼入脈を伺ふ何を見るやら計がたし此段雜長持に記せり扱三哲はいか成病人にも紅花散の一方のみなり此外をもる事なし全く加減もなく紅花散をもちしに餘人のもる紅花散に何處か違か竈の富貴と

なるべき時節到來にやヤレきわたは奇妙じやと萬人
こぞつて今に年を重てはやる事なり段々繁昌に付て
少々外間を思ひけるにや少し紅花散に加減を改られ
けるは此頃の事なり

平澤左内

平澤左内と云ト者あり其以前は柳原和泉殿橋向新道
通りにかすかなるくらして辻などへ出て手の筋を
見かたぐ其日細き煙りを立たるが享保元文の頃よ
り不計はやり出して今占の一流平澤流と云は片腹い
たきいやきな奴なり扱々文盲千萬の匹夫なり店替宿
替をする事一ヶ月に二三度ヅ、なり白銀町をも居た
ゝまれず龜井戸をも立テられて此頃は兩國橋米澤町
是も引越と其まゝもやゝ有久しからずして變宅疑
ひなし爰を以知るべし其人となり宜からざることの
みみぢんも何とも知らず却て人を人とも思はぬゆへ
人々是を憎みて或時ははんかの輩も來て問答するに
悉く打負あたり隣へ外間悪く居たゝまれずして逃廻
りけり江戸中に四五ヶ所も會所を拵置一六は木挽町
五丁目木屋與七二七は鞆町の不動院三八は淺草山本
宮内隣などゝ人の家を借りて門弟と稱して何も知ら

ぬ鐵火打を見るやう成下郎をあつめ算木めど木取散
し素人などおどして金銀をむさぼる媒とし表の障子
這入口に知る人の外前後被仰込無き方へは不意に御
出被成候得ば對面不致候とは餘り弱き逃言葉を書て
若も知る人有て難問せん事を恐れての事なり軍書講
師神田杏林と云者白銀町へ推參して論議して大きに
左内を云込ける後は右の通に張札を出して人こはが
りけるとなり或時去る歴々衆へ招かれ左内へ其御方
のゝたもふは此箱の中へ入たるもの有占て見給へと
有ければ左内占て申けるは箱の内にも有とも正敷生類
なり何の役にも立物にてなし國土のつひへ取るに足
らぬものなりと子細らしく申けり其御方大に感じ笑
せ給ひ是はよく當りたり何の役にもたらぬ取に足ら
ざる馬鹿者名を書て入置きたり是見られよと箱を明
給へば紙に平澤左内と書て入給ふ是は一生平澤左内
が占の大あたりなり

淺草橋場總泉寺柳香和尚頓話

禪林碩學の今の世に知る處總泉寺柳香和尚其手に勤
る所の所化の教戒等に至てよし然る所に所化共寄合
て學問にうみつかれ或時何やら生香を調打喰ひ骨を

椽の下へ隠し置けるをある人を見付て檀方のうち
より密に彼の和尚へ申けるは御寺の所化衆肴を給べ
申され候と相見へ其骨を椽の下へ隠し捨しを人に見
付られ給ふ由其沙汰甚宜しからず急度御糺明なされ
候て所化衆を御叱り可然とにがゝ敷申ければ扱々
にくき奴共哉肴を喰ならば何ぞ檀那の目に懸るやう
にして喰ふと云やう成不調法の働が有ものかなす
に我などは人の目に懸りし事は更になし毎日喰へど
も其逃隠上手なればどの客人にも更に知られじと見
えたり先骨を残すと云やうな兪末成る事が有るべき
か我等などは鮮魚の骨を残せし事なし重ては又骨を
も残さずかみくだきて跡を人目にかゝらぬ様にした
さるべし在家にては精進日といふ事をして肴を喰ぬ
日が有れども寺にてはそのやうなる窮屈なし愚痴な
る檀那の目にかゝるとやかましき程に以來をよく慎
み候へと所化衆へ申渡されければ折節内意を利口そ
うにいたせし檀那大に膽を潰しその坐を立て歸りけ
りまことに活氣の僧頓話いたされけるこそおかしけ
れ

要傳寺

當世武野俗談

増上寺の塔中の所化に墨海和尚と云は當時談義勸化
の名高き人なり大坂の了海坊真長が日蓮禁談義坏云
は日蓮の法花經なり大に破さんと色々誹謗の言葉の
み多し彼了海坊は法義の節は高坐の上へ日蓮なりと
て人形を上引下し是めがゝと悪口しさんぐに打
擲し我慢の惡僧なり故に命終る節は其骸六疊敷一ぱ
いに頭は八ツに腫れたりとかや陀羅尼品の頭破作
七分如何梨樹枝の經文的中たるべしと見る如く高坐
にて日蓮を悪口し其談義といふは經文釋書はみぢん
も説す尤知るまじ只地口秀句畢竟衣を著したる豆藏
と謂べし世の人彼にたぶらかさるゝはいか成る惡縁
成事ぞやされば墨海日蓮をそしる言葉に日蓮はせん
たくの家より出たり自死の鹿皮をはぎ衣とすと身無
抄の書に日蓮自筆にて書れたり然れば日蓮は穢多の
子なりせんたくとは穢多の事を申なりゆへに鹿の皮
をはぎて衣とすると書たるは穢多に極れり夫にふと
い奴は廣宣流布と長房を提て長點の髭題目曼陀羅と
は何事日蓮と云せんたくの子ゆへまんだらを書た
が髭をぬいてやらう此墨海は尾張の名古屋生れなり
毛ぬき缺のきつい切れものと毎座右の通惡口し誹謗

し經文の如くならば其人命終入阿鼻獄たるべし此節
耐にまし酒鹽とて日蓮宗中村檀所の鐵城と云所化其
返答談義とて墨海の談義の近所の日蓮宗の寺へ出で
說法して釋經の本文天台の三大部妙樂の注釋學文の
底をたゞ返破するに依てこんかの流るゝ如く鐵城
申給ふは墨海の惡僧日蓮が毘をぬかんとはきつい世
話な奴名古屋の切ものならば日蓮が毘を五百年來ぬ
かれぬは其方の祖師法然は藤井元彦と俗名を付還俗
し配流の身となれば我等が祖師法然元彦が額をたば
こ庖丁のやうにぬいてやれと同敷あふ鶴返しに談義
して毎坐墨海を云詰し故墨海坊に鐵城と鯨に鯨と世
上にて云ける故大に鐵城を恨み増上寺にて呪咀調伏
の法を行ひ衆僧を集て鐵城を祈けるとなり其邪術一
旦のしるし有て鐵城は亂心して說法成がたき時日蓮
宗萬山の所化法華經を以て祈禱して鐵城本心となり
今は倫根村安穩寺の住僧と成る墨海も三縁山の一文
字なりければ互に其争ひも差止けりいま天台沙門秀
天と云邪僧あり其身不身持にしてあちこちと談義に
やとはれあるき辯舌にまかせ多くの人の氣を取る事
なり依之秀天を頼し寺は大きに勸化に徳付けるゆへ

に四十八夜何の回向彼修行と云は一七日が中金銀何
程と直段を極めて雇ひ談義説ける事なり此秀天は町
坊主にて本所中の郷荒井町と云所に大屋次兵衛と云
豆腐屋の店を借宅し居るなり則女房を以て妻の名は
お品と云女子一人おくめとて十一歳男子松次郎九歳
誠に願人坊主談義坊主とて此類多しされば學文は微
塵もなし若此書を見て口惜しく思は馬文耕を尋ね
來るべし能教化してくれん彼邪僧高坐の上にて平生
説處は地口秀句のみ又は軍書のはし熊谷が先陣問答
などざりとは不便なる器量なり彼ものが心は日蓮は
妙法蓮華經を弘むは妙は女に少しといふ字義女に少
しほうれんげきやうとはいいやなやつなり前は佐次兵
衛後は權兵衛とは何の事なるぞや子持のかゝさま
違何程乳が出ぬとて雜司ヶ谷の鬼子母神米を借て粥
にしてまいる事は入らぬ天竺の山姥で候と大鼓をた
たひて題目を申はあれこそ地獄の鹿島踊なりと地口
の惡口を嬉しがり聞人いかんぞ心不仁不義ならん
されば此秀天には日蓮宗坂下の要傳寺と云西檀所化
正道の説法にて打伏して秀天が廻る先へは此要傳寺
向て破する事なり今専ら江戸中の氣を寄る所なれば

爰にかれが傳をのせたり

今弘法新高野山の事

三四年以來何方より風來せしや今弘法と名乗不屈成
賣僧の來れり京都知積院より出でたるといへども其
證據なし然るに山師の云なす所は加持祈禱不思議な
りと申傳へ昔の弘法大師遷化せられて今弘法とは云
ふらして御府内にて男女群集させて金銀を貪り取る
事夥多しかりき其不義に付惡き思の者幾千萬人とい
ふ數を知らず此事終に公庭へ聞へ先御府内を御追放
あり今江戸の住居仕間敷旨以御書付鳥居伊賀守殿被
仰渡且寺院殊に眞言宗觸頭たる彌勒寺へ急度被仰渡
ける然ども此頃又々密にはいかいする由也其上彼賣
僧にたばかられけるにや近比中野の里鳴子村の近邊
眞言宗の餘喜院に彼盜賊の徒集り新敷いさき山を
築て新高野山と名付て鴨立澤の眞似をして大たはけ
僧俗金銀を出し弘法の開基紀州の高野山の寫をしつ
らひ蛇柳女人堂御廟の橋のこしらへかけ忘ても汲や
は能々文盲なる大馬鹿のしはざ也新高野山の麓の名
も新禿の宿紙屋の里所の口利百姓を玉屋與次とまで
名乗らせけるは何とした空氣の寄合かなとあはれ千

御藏前叔母

萬なる人心なりされば去子四月中江戸中を引廻し品
川におひて獄門に行れし今高頼と云者あり渠は尤在
在を今かうぼうと申信者山伏を同道して百姓農人を
たばかり施物金銀を掠取萬一思ふ程錢を出さる時
は信者山伏口を揃て此弘法様の御望に背時は其邪見
の人心を和らげざんために御罰を當て給ふ古へ弘
法大師御通りの節も邪見の門にイたまひ其人の心を
和らげんとて百姓の女房に鍋の中の芋を所望し給ふ
に猶も邪見の女にて興へざりければ忽其いもをまじ
ないて百姓の一畑を石芋になされしとなり爰の人々
も左様なる邪見の心にては弘法様の御心に背きいか
やうなる事の出來せんも計がたし御用心被成候へと
底氣味惡う云廻し人々の心をいやがらせ金銀をねだ
り取ゆすり同前の事相あらはれて忽に召捕れ公儀御
吟味相濟今弘法と申僞在々所々にてかたり取し其罪
相極て獄門に行れしなり眼前其事を見聞しながらも
新高野山など急度こしらへしは誠に其徒獄門がな
つかしき人ならん

天いかなれば諸人に勝れて愚なるを生じ給ふと濟説

因縁のする所なり爰に御藏前におぼあとして御城下に
て萬人の知る所不思議なる愚成者享保の中頃より淺
草邊兩國橋邊りを毎日徘徊して前髪も見苦敷顔か
たち或は砂にまびれ溝堀へ入て泥にかたちを引ま
ひ通る馬の跡足を玩ひて大さにはねられて恐さわざ
杯する事甚おかし小兒婦人を見て隠莖を出て一笑さ
せて歩行し誠に苦とも云べき所なしされども亂心と
いふにあらず此者の事を誰いふともなしに藏前おぼ
あと呼けり此愚鈍の者の親は相應より能き身上の人
なり淺草新堀にて居酒屋麥うどんを商ひ和泉屋何某
とかや一子にかゝる愚なるを持たる不幸なり此いわ
れを尋ぬるに此和泉屋の女房が妹一人有けるが彼い
づみやに懸りて居たりしを亭主人しれず其妹と密通
し終に彼妹懐胎したり其女房我が妹たりといへども
亭主と密通の段を疾妬して心底に大にいかり妹を色
色打擲し其後密に子おろし薬を吞せければ其薬毒に
あたりて妹は死けり腹の子は七月に及とかや扱々情
なき事のみ多かりき時に女房は年來和泉屋に嫁すと
いへども懐妊の事もなかりしに妹死せし月より身こ
もりて扱々月満て出生せし處男子にて秘藏して養

育するといへどもおろかにして二歳の暮迄も父母の
顔を見知らずまして父ともいふ事は更になし傳へ聞
はんどくとやらんもかくと思ひてうたてけれ是より
兩親色々神に祈佛に申て祈念しけるに三四歳の頃ま
でも東西を分たず然るに五歳の春初て物を申出せし
處母親を見ておぼあと呼けり是よりおぼあくと云
ならひ年重りても母親のことをおぼあくと申より
外のことはいはず爰におゐて世上にて藏前おぼあ
申ならはしけり此事和泉屋夫婦は大にかなしみうれ
ふさればこそ因果歴然の理にて懐妊の妹を情なくも
殺せし處の報ひにて其腹の子又來て女房の腹に出生
せしと見えたり妹の子なれば甥なり母とはいはずし
ておぼあと申事おそろしき事ぞかし愚に生れ來りて
其因縁をしめしけるこそと夫よりいづみや夫婦は深
く佛道に入て染衣の姿となりけるこそあじきなき事
どもなり是藏前のおぼあはしるといへども其子細を
知る人なし依之書記す

大口八兵衛

淺草御藏前に札差米屋大口屋八兵衛といふ馬鹿者有
至て奢り強く商賣の大事を忘れて新吉原の傾城境町

の野郎舞臺子に身代を委ね己が職を忘れ酒宴遊興に
管番日行事來りても是を忘却し替替御藏口をも今日
をいつと知らぬ日の盡しどるはと人に指をさゝるゝ
をもかへり見ぬこそあさましけれ新吉原大かつさや
總角と云傾城を我物にして金銀を誇らし奢を極め
遊びけるが今年歌舞妓狂言中村座にて市川三升が總
角助六と云ふに成て人々の心に入繁昌しけるに其狂
言はあげまきと云ふ女郎に助六と云ふ間夫ある事仕
組にてむかしより柏蘆家の狂言なり扱今年淺草藏前
よりも助六の狂言に色々積物等致し新吉原の惣女郎
よりも三升かたへ蛇の目からかさ五葉牡丹とみま
すとの紋付たるを山の如く數百本送れば藏前の者共
は若紫のちりめんの頬冠り鉢巻を何程と云數も限ら
ず三升方へ送りける其品々は毎日々々狂言の節圖に
て見物に出しけるさもげうゝ敷事なり大口八兵衛
と云ふ剛夫の部に入て其傳記明らかなりさてまた
此八兵衛は今度藏前より三升方へつみ物等する節我
等は總角といふ女郎の客なり其總角に間夫たる所の
助六と云ふになる三升へ積物はいやなり助六が仇が
たき成總角を金出して揚詰にする意休と云ふ役は澤

村龜音なり我は意休が最負せんとして澤村宗十郎方へ
小袖羽織を對に拵へ遣し地紫に鳩の八の字を白糸に
て縫にさせ仕著に遣しけり此狂言中は澤村宗十郎大
口屋にまぬかれまじければ此部に入ぬ此事よくゝ
人の知りし所なり今専ら上總屋の總角にはな毛を算
られて居とかや

河七庭華

芝口土橋に銅瓦の軒高く富貴成る藥種屋河内屋七右
衛門と云もの有能世上にて知る子細は庭華大盡と云
て悪所ぐるひし吉原にても境町にても其内證を知る
ゆへに大盡とそやし上けり京町二丁目中近江屋の二
のまちと云遊女に馴染頼て根引にすると約束して二
百兩手附にして身請の契約近江屋善右衛門かたへ右
二兩相わたしける故中近江屋二の町を見世を引か
せ近日幸橋御門外河七庭華方へ嫁入のこしを入るゝ
とさめきけるに急に身受の事變改したり此段いか
なる譯ぞと聞ば其手代ども急度止し由夫はさること
にもいたせ里通ひをする外聞を思ふ身上向の者には
餘りたはけの仕方なりと其中近江屋へ手代参りて身
請の手附として庭華渡せし金子二百兩返しくれよと

申候由善右衛門方にて此手代大きになぶり廻しては
じをさらさせ二の町身請の約束の日より外の客をせ
ず揚請にして置し處身請の變改さへ男に似合ぬ大た
はけものなるに手附金返せとは古今なき大馬鹿者か
など五丁町中に男女は云ふにおよばず御城下の笑ひ
艸となり河内屋七右衛門は日本橋よりあなたへ出る
と三歳になる童もあれこそ芝口の大たはけ傾城買の
身請盗人と唾はきせぬ者なかりけり今以右の如く諸
人の笑ひ艸となりけりされば二の町は是非なく二度
見世へ出る事も耻かしく思ひ至極幽なるかたへ直に
片付けり遊女傾城の心にも耻は知るぞかし然るに七
右衛門耻を知らざるは人の皮を被りし畜生と専ら云
あへり

御聖人庄助

新大坂町竈河岸に江村庄助と云者有渠を御聖人と異
名して今専ら人に知られたる其有様其根元は市村羽
左衛門芝居にて樂屋の働き下郎役を勤る役者どもの
入込居風呂の水を汲み近邊諸用などの使に走り廻り
頭を上る事更にならず人中の屑といふべき身なり渠
が弟は藤田平藏とて羽左衛門弟子に成て詰役者なり

是又役にたえずにてありしに江村庄助が妹平藏が姉
は風とした仕合にて讚州丸龜の城主京極殿のきつい
氣に入にて妾の兄弟とて屋敷へ招かれ色々引出物給
り其後平藏役者を止て浪人となれど京極殿より合
力扶持を被下江村平藏と改唯今濱町に借宅し結構に
普請して住居する也さてまた庄助も右妾の陰にて俄
に富貴の身となり今は竈河岸に普請して悉く家藏を
こしらへきのふ迄樂やにて奴僕なりしが今日は大福
長者と成て羽左衛門芝居にて難儀の節は金をかし狂
言金元をしけり此上は芝居役者も今日より主君の如
く尊敬して皆々庄助が門前につくばいけりされば
樂屋にて水汲かたぐはたらきたるものきのふ迄は
松島町にて裏家の少の所を借人間の住居する体には
なく庄助母親一人其弟妹等何を喰ふやら衣服も親子
四人の中に一ツ有やなしやと何にたとへんかたもな
く難儀なりし母親は比丘尼にて毎日人のおぼそに立
て一錢を乞ひ二鉢の米を得て歸り食事として飢を助
りて暮しけり彼鉢と同宿して居とて芝居のものども
彼が事を新發知庄助と仇名しけるが如此立身しける
故是新發知俄に御聖人になられたりとて芝居にかゝ

るものども是より聖人庄助とぞ異名して呼ける今は
大分限者と成ぬ庄助は日蓮宗にて大信者にて彼國へ
祖師の開帳として入らせ給ふ時はいつとも江村庄
助本願主の札をはらざることはなし近年深川淨心寺
にて身延山開帳の節も金五十兩の札江村庄助と張せ
たり如此早くも富貴に成ものかな

冬瓜仁右衛門

本所吉田町に御小性組御番衆兼松又四郎と申御旗本
衆の地を借りて立派に普請をして住居し大勢家來召
住子分方多く有て其土地は云ふに不及吉原境町すべ
て慰所にて悉く人に用ひられ名を得たる所の仁右衛
門といふもの有かれが異名を冬瓜と呼其根元は此者
本所邊旗本屋敷の中間奉公して居たりしが瘡毒を煩
ひ中年より骨折奉公不成して本所三ツ目通輕き御
家人衆の寄合辻番の番人に入りけり此もの辻番より又
又出て少々瘡毒本復して商をしけるに西瓜のたち賣
より思ひ付て冬瓜のたち賣一文づゝ裏店住居かる
き人々の一朝の汁の實と成程づゝ賣ける此たち賣大
にはやりわすか成事なれども是に利を得て少々元手
つきけり茲を以て今とても冬瓜仁右衛門と呼ばれて

其名高きこと甚し其後此もの博奕の場へ出て段々利
を得大に出世し此十六年以前より本所三ツ目通り島
本十郎といふ御直參の屋敷地をかり土場といふを立
長半博奕をして己棟梁となりて借元とやらんをい
たし大に富貴となり古へ辻番の有様は夢にもなく吉
原芝居に入込大盡の體なりけり此五六年以前松平帶
刀殿盜賊奉行の節いかゞ差口や有けん途中にて仁右
衛門帶刀殿與力同心の手にとらはれ其節宿を尋給へ
共仁右衛門答て拙者なきみしと申て世を渡る事を商
賣に致すものなり然ば極りたる宿と申ては無御座
候とて更に宿所をいはず地主兼松又四郎を圍での事
なるよし後人々是を譽けり夫故又四郎何の障もなか
りし仁右衛門は其節牢舎いたしけるを渠が子分のも
のとして何を家業とするやら知れざる者皆なぐさみ師
とやらん數百人奉行所へ願ひ仁右衛門出牢被仰付候
様にと色々詫ける故帶刀殿後に仁右衛門を牢より
出され無宿なれば預所なしとて本所回向院非人小屋
庄八へ預け給ふ爰におゐて仁右衛門徒弟の者ども集
り彼非人小屋へ色々珍敷物を持はこひ見舞として日
夜其結構目を驚かす計なり扱其後間もなく御免を蒙

り今随分と繁昌して其道の者に親方と尊敬せらる此男至て文盲にして一文不通なれ共大勢の悪者の頭を押へる身なれば自然と道理に當る取捌も有こそ殊勝なり今は談義説法又は夜講釋杯の席へ出ておのれの學文するぞせめて尤の事なりおかしき事の有けるは子分の者喧嘩して打れて歸りし時仁右衛門云けるは堪忍して歸るこそ人の道といふものなり我等も少講釋でも間に漢楚軍談聞は大望有とて越後の韓信は股をくぐりしとなりと申て諫言しける上杉越後の謙信と淮陰の韓信と一つにしたる文盲の異言を聞て腹をかへぬ

風鈴五郎七

堺町勘三郎木戸頭に風鈴五郎七と云者有能き男振なり渠芝居にて大きき者なり去年も春中勘三郎芝居木戸半疊のもの一人打殺されし時も牢舎せしが皆芝居の爲に此五郎七身命を惜まず申譯を立けり其形を申さば色白く丈高く額大にぬきあげ顔ふとつて丸顔にて能男なり髪を小本多にひしき鬘を中折にして立派成裝束して鶴の丸の紋を附諸人に秀で見ゆるなり此もの、親方は半鐘權七とて名高きものなり權七の親

方は釣鐘彌左衛門なりつりがねが子たれば半鐘權七半鐘權七が子なれば風鈴五郎七と名乗なり木戸にてせわをやき一日わめきければ這入口にてくはらゝく鳴るといふ心を以て風鈴と云も可ならん歟

夜發一と勢

夜發を夜鷹とて江戸にて稱する有街賣女色と法花經の普門品に説れたるは惣嫁の類なるべし凡鯨ヶ橋本所淺草堂前此三ヶ所より出て色を賣此徒凡人別四千に及ぶと云其道の物語りなり其中に本所より出る夜發の中に一際勝れて器量よろしくおしゆんと云女有毎夜柳原土手のはづれ筋違橋の際髪結床の裏へ出て能人此女を知る處なりさればおかしき咄有去年の暮大晦日の夜其客の數てうと三百六十餘人有りしとなりされば三百六十日は一年の日數なり又大どしの夜は一とせのおはりなりはやるとて其親方一とせのおしゆんと名乗らせけり今専らはやる女なり

お陸

淺草觀音地内ごふく茶屋に湊屋おろくとて名題の女有されば京都祇園の茶や女の梶といふは名高く殊に歌に妙を得て一生に讀歌數をつくせり梶の葉と云て

彼女が讀ける歌の集有一年仙洞崩御の節御いたみとて讀で差上たり其歌に

およひなき雲の上なるあはれさを

雨か下とてぬるゝそてかな

とかくの如く茶やの女さへ歌を詠す今時の茶や女とは大に異なり此みなどやお陸はむすび髪なり結び髪の上此真似をして江戸中女の結ぶ事になりけり今淺草に山々有事なり

ちりづかお松

芝三田町長左衛門路次にはきだめおまつと云名題の安女郎有輕き人々のほんのうの芥をすて置といふ心にてはきだめの異名を附たり掃溜の際にちいさき部屋有といふ事にてはなしされば三田の阿波徳島の家の中に三浦榮次郎と云食祿二百石計領して歴々たり此松に馴染大金を出して袖留などをさせし節は新吉原の新造出せし同前にて全く蒸籠の山を築て全盛いふ計なし此三浦は甚風雅の人にてはいかいの上手なり掃溜のおまつといへば兼好法師のつれづれにちいさき猪も臥猪の床といへばやさしき事もありちりづかお松と唱へんといはれしとなり其故は見苦か

らぬものはちり塚のちり文車のふみとあればなりたどひいやしき女郎なりともなんぞ戀路に隔てあらんや只今のみやさしくば夜發夜鷹とて松の位に増るべしされば掃溜女郎の中には大夫職なりと云心にて松の位の松をとりて名としけるなり然ば場末にても夫々の心有る事を知るべし是等の細かなる穴を通しみると馬文耕が心を盡せし處を見る人おかしく思召らんされば三田などにてはやり唄地廻りの諷を聞けば五十ぞうと下さげて呼びやるなほんば五十ぞうでも心言葉は諸國諸大名のお姫さんよりたうとふござると諷ふを以て知るべし心のみさはは貞節美婦胎の五文字を能たもつならば秘君と稱すべしいざなぎのきの字いざなみのみの字を合て君といふとかや皆君傾城も偽りに誠有あながち金銀の高下を論せんや

踊子ももんおてるお縁

元文の頃は江戸中おどり子と云女有て立花町難波町村松町を第一として所々に有素人の娘へ三味せん淨瑠璃を教へ込歴々の慰として所々に有留守居寄合の茶屋杯へ遣し藝者のやうにして其母と稱して附添出

入しけり其内元文のはじめ三五七組のゑもん千藏組のおてる大助組のおゑんとて至極名題の器量者有かれは髪かしら第一として結構なる櫛かうがいを用ひ多くは銀のかんざし杯にて粧ひけり扱三人の踊子暑氣の節は管笠かぶりては髪を損さすとて三人對に日傘を青紙にて張らせ用ひたり尤立派にして其柄を黒ぬりにして風流成紋を附たり是は唐土の大王傘蓋として青き薄ものにて傘を張らせさしかけさすと云通俗漢書のもの語を聞はつり是始てさしけるなり是世上一統に男子まで青紙のかさをさすこそおかしけれ今に醫師などは是を止す一とせ馬場讀岐守欽命を蒙りて青紙日傘を公儀より御法度に被仰出けり是を忘却しけるやらん今又是をさす人多くあり女は若しからざる歎

車婆々

下谷三崎町に車婆々と云者有此ば、は高利の金子を借して人をせぶりゆすり同前の事にて世の中を渡るばいなり夫死して元は耻しからの家より出たり夫は下谷和泉殿橋通りの御徒士三枝傳藏組にて七十俵五人扶持取の竹内伊左衛門と云御奉公人なりき竹内病

死の後伴郡次郎家督せし處に身持不行跡の儀有之公儀より御暇被下浪人せしなり然ども浪人せし節に厄介養育金家代金等百五十兩程被下けり其金子にて町家を借り夫婦母渡世しけるがいつの頃よりか根津の女郎屋又は淺草茶屋どもへかし又は芝居廣小路見世物へ相應に一兩二兩づゝ借し高利を取り一兩に付一ヶ月十二匁づゝの利足にかし其節彼利分を先へ引取り口入禮金外に三匁づゝ都合十五匁引一兩の所へ三分手取り三十日切若延引すると證文を書替延金利足の元に結んで大金の高にして其證文の趣向二三枚有之のつ引させぬ悪る證文家崩させ家財を取上げむごいと云事は更に知らず此郡次郎は、飽まで心強くかすつけの所を毎日催促にあるきて風雨の差別なく此ば、青茶の布子に上田縞紺の帯しめてしんちうの矢立を腰にさし根津の方より淺草並木三島門前紅横町堀田原門邊脇馬道田町の邊より、と借し金取立にあきけりいかに成る鬼のやう成る者も動せぬ悪意地者なり此婆々を見るとぞつとすると云最初は此郡次郎は、一人にてわめきけるが同氣相求るとやらん同町にまた澁紙ば、有けり或時此ば、谷

の感應寺の無盡に當り其金を以此郡次郎は、と云合せ同様に茶屋へ借して近年は二人連立て同じやうなるば、どもわめきあるきけり三途川姥が分身したるかとうたがひけり此者、車錢を借と云事か但兩人兩輪の車のごとしと云事かぐるりゝと風雨の日も能く廻るとの事にてか人々車婆々と呼けり然に澁紙ば、はいまだ最中所々方々へ金かしてあるくなり今少々も金持し人は婆々を頼廻し貫故に手廣くかしあるき境町遊樂屋新道茅町新町木挽町天神明神等の影馬茶屋等へ金子を借す借所一兩かしては一日の利足二百文づゝ明日迄はまたざるを掟とす此けしからぬ高利の金も有ものかな此やうな金子は大かた勝負事する者の借るなり其高利をしりて借る者幾人も有は不思議の事なり此金を烏金といふ一日の内に返さずして一夜延引するを泊り烏と云夫は四百文利足取る事なり是を烏といふ子細は境町ふきや町の茶屋芝居の者は人々に仇名と能付て呼事なりされば公儀御徒士衆の事を此邊にて隠し言葉に烏といふ黒ちりめんの羽織を著て大勢横雲のたな引頃御番往來とてさかひ町を通るを見て朝鳥と云最う來るなといふ

霧島薩摩琉球婆々

事なり此ば、が金子は元竹内御徒士にて有しゆへなり今は外に借し人も多くされども烏金と云二三年以來は郡次郎は、澁紙屋ば、連立ありき車婆々と云て呼けるが此頃一人に成りければ片輪車と人々たはむれけりとぞ此頃茅町茶屋の女房どもは彼ば、が事を高田ば、と呼し故いかにと聞ば片輪車は神原の紋なり越後の高田の城主となり給ふゆへとぞ

本所入江町に花屋伊兵衛と云は奉公人きも入なり其女房は取揚ば、となりて所々を歩行けるが不圖して仕合に松浦肥前守殿隱居の妾の子を取あげて一夜檢校の身の上になりけるそれ迄は中々見苦敷殖生の小屋のいふせきに暮し夫は奉公人の世話やきといへどもはかゝ敷事もなく見世には草花を賣又は朝夕草木をかつぎ賣歩行ける見世には霧島二三本置て商ひしける故に近所にて此ば、を霧島ば、といふ隨分其日をやうゝ過す者の女房産する時にせう事なむに此婆々を頼むなり然るに松浦肥前守殿下屋敷中の郷にて隱居の妾産に望む時に兼々約束の横山町薩摩ば、病氣にてさじかゝり間に合ざる時急になり近所の

相應のば、もさし合し故役人無是非此ば、を招きけり俄に假衣裳して取揚しが一夜の内に富貴の身となりぬされば其七夜の祝儀の節彼屋敷へあがりしに居問へば、を招きて盃を給りわらひ其序に日比御心安ければ市川柏蔭まじり合けり隠居此婆々が事を御申笑ひ給ふ故柏蔭ば、さまの名は何と申候ぞといへば霧嶋ば、と申候と云是めづらしき名なりさつまば、の急代に霧嶋ば、とはおもしろき事なり夫霧嶋は正保年中に大阪へ薩摩より來り明曆の頃申のとしやらに武州染井花屋伊兵衛方へ來ると云しかればこなたは薩摩ば、なりとたはむれけるとなり柏蔭此節

運は天にふる雨たれか顔見せん

と隠居の子を祝しけるは此折とかや此ば、は夫より段々出世して大名旗本へ出入して甚繁昌しけるが中の郷秋葉の別當と申合變生男子と云祈禱を申出秋葉より御符を出し此ば、取揚たる子の左の手の内へ御符を握らせて秋葉の御符を出生の子腹内より知るといひふらし世上をたぶらかしたる其悪工ばつとして誰有て此ば、を頼む者なし後に殊の外困窮に及長命にして今に息災なれども朝夕の凌ぎにも大にこまり

此頃はやしき町の奉公人肝煎して春三月頃は女奉公人を十人十五人程づゝ連て此ば、先へ立てからく口をたゝゐてあるく人々是を知らぬものなし薩摩ば、にもあらず琉球ば、なりとおのれが口から云出して専ら琉球く、となへとかく霧嶋のゑんははなれず柏蔭に名を附て貰ひしば、は我計なりとて今でも是を自慢する事なりおかしきこと共なり

當世武野俗談終

燕石十種第四輯序

一期の愛なくして終身の樂ありとは山谷が詩にして天の下こそたのしかるらしとは仲算が歌になむ會々毛々人毎に一樂あり其樂に雅俗の差は有れど娛む情は一つにしておつれば同じ谷川の水を樂み山を樂は智者と仁者の樂なるべく肱枕を樂と云ひ流に枕して樂まんと云しは聖と賢との逸なるべし晝夜學問をもあそびをももろともにせしは源氏と頭中將が殆みにて互に臭骸を抱きて驚むは男女の姪樂にして泣て娛む間夫の牀二人蹠蹠の三人齊く蹠然と笑ひ上戸の酒を般み下戸はもちいの喚犬追馬鏡に向て觀粧ふお宿さかりは劇場見物に霄から虞み夜あけを怡む出番の小僧起て働く浮世の馬鹿と下衆は寝らくを怡て賣つたる妻を買つて娛む毛唐人にも利口者あれば私夫に黄白を出して己が媽を貰つて愉む鼻の下にはん人にも鈍痴氣ありされば聖語に樂んで姪せずと戒られしは斯等にも架れる歟あるは花に樂ては美景に因て也と託ち月にたのしみては寐てあかすらん人さへぞう

きとつふやくやまとにからにいにしへいまに詩を賦し歌を吟じ各意を遣て意氣は意機だけに虞み空氣は虚戯だけにたのしむしなく、枚へ舉るに違あらず粵に活東子といふ樂人あり予と同職全癖相共に彷彿の漢字にして嚮書の忙閑雅にも逸み俗にも樂み別て稗史小説を般む餘典珍書若干を輻め自他の娛に爲んと每輯十卷を一帙とし目て燕石十種といふ三輯も既に成り四輯に迄て一言を請るは予が戯文に、愉、を知ればなり則速に肯て例の、熙ながら序を書く、文久紀元辛酉の三月上潁四日市場の小店に於て活計の際なき間に聿を把る

江戸陶々逸民法齋 悟一戲題 花の屋三世 櫻井蛙麿

藻屑物語 はしかき

藻屑物語ハ淺草寺ノアナタ今戸ナル慶養寺ノ什物也
シカレドモ其作者ヲ知ラズ沾涼ガ江戸砂子卷ニ慶養
寺ノ條下ニ當時ハ淺草西福寺ノ邊ニアリシトキ伊丹
右京(年十六)舟川采女(年十八)兩人討果シタル事有
藻屑物語トイフモノコノ事ヲ記シテ當寺ニアリトイ
ヘリ彼慶養寺禪林ハ予ガ外祖青岳潭龍(俗吉尾門左
衛門本姓渡邊氏始ノ名文介細川采女正ガ臣也寛延三
年二月二十五日没ス)ノ墳墓アレバカチテソノ事ハ
聞ナガラ未親リニハ見ザリケリ又西鶴ガ男色大鑑
(貞享四年ノ印本全部八冊)ニモ伊丹舟川兩少年ガ狂
死ノ顛末ヲ載セタリ願フニ件ノ右京采女ガ事當時人
口ニ膾炙セシナラムコノ頃迄ハ戰國ノ餘風ナホウセ
ズシテ人オノノ勇敢ナリコトヲモテ女色ヲスルシ
トシテ男色ヲ歡ベルナルベシ男色ノ人道ニ害アル女
色ヨリ甚シコレヲ異朝ニ考ルバ微子瑕鄧通等賢陳子
高ガ如キ一世ノ富貴大臣ニ勝レルモミナ凶ヲモテ終
ラザルハナシ蓋男色ハ人慾ノ變也其自然ノ情ニアラ
ザルヲモテ天コレヲ妬ミ神コレヲ罰スルモノ歎シカ

レドモンノ起ル事既ニ久シ野史ニイフ周穆慈童ヲ寵
スルノ説アリ戰國ニハ衛ノ靈公彌子瑕ヲ寵シテ列國
ノ諸侯ニ侮ラレ漢ノ時文帝鄧通ヲ愛シテ銅山コレガ
爲ニ空シ晋ニ至テマス(盛ナリ史ニ又イフ威寧太
康ノ後男寵大ニ興ル女色ヨリ甚シ士大夫コレヲ尙ザ
ルハナシ海内倣倣テ夫婦離絶シ動モスレバ憤怒ヲ生
ズトイヘリ我邦ニハ男色空海ニ權興トストイフ俗説
アリシカレドモ考据ナシ近世天正以降男寵最熾ナ
リ上ニ朱門ヨリ下ニ白屋マデヲノコレニ感溺シ命
ヲコレガ爲ニ捨テ悔ザルモノ有聖代靖治コ、ニ二百
餘年文道大ニ開ケテ男色ヤウヤク衰フ夫婦ノ恩モ其
至レルニ及テ聖人トイヘドモ知ラザル所アリ況ヤ男
色ヲヤ明ノ周文襄姑蘇ニ在シ日男子ニシテ子ヲ生メ
リト報ルモノアリ公答ズ但諸門子ヲ目シテイヘラズ
汝ガ輩コレヲ慎メ近來男色女ヨリ甚シ其必至ノ勢也
トイヘリトゾ五雜俎ニ見エタル宜ナリ李卓吾嘗テ雞
姦即チ男色ヲ謗テ木犀花ノ歎有近日我邦ノ男色ヤ
ヤ衰タルハ泰平ノ餘澤ナリ戰世陣列ノトキハ女ニ耽
ルニ違アラズ是ヲ以テ男寵興ル今ニ藻屑物語ヲ看
テ戲ニコレヲ批評スルニ其事石點頭卷ノ十四ニ載セ

タル潘文子王仲先ガ事ニヨク似タリ且徐ニ其顛末ヲ
思フニ右京ヲ殺スモノハ采女也亦采女ヲ殺スモノハ
左馬助ニシテ主膳ヲ殺スモノハ松齋也其禍胎全ク公
ノ男寵ヨリ起レリシカレバコノ五人各罪アリ夫信義
ヲ朋友ニ篤クシテ忠孝ヲ君父ニ薄クスルモノハ情慾
ノ迷ヒ也件ノ五人ハ聖人ノ大道ヲ知ラズ迷ヒ究ツテ
マス(愚ナリ義理ニ暗キ故ニ必至ノ勢ヒ自ラ禁ジ
得ズ忽地禍ヲ醸シテ死ニ至テ悟ラズ是當時ノ人情ナ
リ今ノ人ハ然ラズ昌平ノ民羈縻ニシテ勞ニ堪ズトイ
ヘドモ亦餘力アリテ學ブモノ少カラズ是故ニ義理ニ
通ズルヲ以テ誤ヲ大ニセズ文道開ケテ淫邪ノ路閉ツ
是自然ノ理也但浮屠ノミ今ナホ男寵ノ營アリ怪ムベ
シ夫淫ヲ貪リ慾ヲ放ニスルニ至テ女色男色異ナル
事ナシ龍蛇ハ螃蟹ノ穴ニ入ラズ虎豹ハ狐狸ノ野ニ游
バズ男寵ヲモテ女色ニ換ルモノハ龍蛇ニシテ螃蟹ノ
穴ニ遊ブガゴトシ俗客ダモナホコレヲ誠ムシカルヲ
浮屠氏ヲ予コレガタメニ嘆息シテ此書ニ蛇足ヲ添
ルモノナリ

文化六年己巳正月晦日書于飯台隱居

瀧澤 解圍

藻屑物語

花は盛り色あるを以て自らその枝をうしなふされば
 今の御代の御後見として殊に時めき給ふ櫻川侍従の
 御もとに頃日みやづかへ侍る童に伊丹右京といへる
 ありけりその様いやしからず心すなほにしてもの
 あはれをしり春は東叡山の花に心をうつし散なん後
 の事をおもひ秋は隅田川の月にかこち歌は貫之忠岑
 が心にもかなふ扱詩は杜子美李白が跡を慕ひ其外の
 事學すして覺ければ拾遺の寵にて林家へ御頼み宣王
 の道を聞しめ給ふに顔淵が心にもかなひ亦武の道は
 子路が勇をふくみければ見る人さく人うらやまざる
 ものなしかの光源氏の君また在原中將など名のみに
 とくしくいひ傳へしやんごとなき人々もこの右京
 に立ならびてはまはゆき程にもあらむやさればうち
 むかふ人ごとと思ひを富士や淺間の煙にたとふ袖の
 みなとに唐土舟の露とばかり戀慕ふ人のみ多ければ
 上よりも此道かたぐいましめ關守さびしく居給へ
 ば葛城の高間の雲に心をなやまし跡いひ出んふしも

なく右京既に十六歳の春風静けき夕つがた南おもて
 の格子あけさせ脇息を設け花のさかりなだらかに打
 ながめたるよそほひいとろうたけいはんにものなし
 斯て又おなじ流を汲でしる舟川采女といへるものあ
 りけるが是も十といふて又八つ許りもあまり侍らむ
 かその様うるはしく只人ならぬおのこなりけるが彼
 右京が脇息によれる有さまをひと目見るより心まど
 ひ夢ともなく現ともなくさし寄いかに花に御覽じと
 れてめづらかなる詠歌もよませ給ふやといひかくれ
 ば右京うちゑみてさればとよ心はたくみにして言葉
 は艶にもとづかぬこそくちなしの園に入侍りしこ
 ちなれといひし是ぞ思ひの媒となりぬ斯てひたすら
 心にうかび思ひ忘るゝひまもなく病ならぬ床にうち
 臥夜もすがら思ひあかし晝は葎やり戸も立こめぬば
 玉のよるやしづけく一しほ其俤の眼にさへぎりうつ
 りかはれる月日だにわきまへず小夜の中山なかく
 にいつしか人を思ひそめ海士の荊藻もみだるらんと
 ぞ見えにける友たる人もいろゝに心を慰れど日に
 まし物ぐるしうよはり行まゝ人々うち騒ぎ今はかく
 ては置れまじと醫師よ薬よと手をこまぬぎいかは

せんと評しける折から右京わかき人々といざなはれ
 来て病はいかゞふらふぞ樂よくゝものしていた
 はり給へ斯うち籠りてばかり居給は心氣一しほむ
 すばれ侍らん幸ひ御庭の櫻咲も残らず見所多き頃な
 れば來てもみよかし心をなぐさめ給へと我からなや
 めるとは露しらす友どちの信ぞ頼もしき采女も忝し
 どいらへし心のうち千々におもへども色外に顯るゝ
 とて言葉のはしく目づかひにも右京の男色にも
 こそあれとは見えにけるかゝる人々多き中に志賀左
 馬助といふ者采女と淺からずいひかはせしが急度目
 をつけ人々かへりし後なやめる枕に近く摺よりて申
 けるは御身の惱しきいかにも何と分がたしこゝろに
 かゝりし事あらば我につゝみ給ふまじ今訪ひし人々
 の中に忍ぶの浦のあま人も見るめもいとあじきなき
 顔つきこそありしさのみ執着も罪深しなどさまざ
 まに尋とひけれどもあらぬたはむれ事也何とて左様
 のうつくなき事や侍らんかゝる惱はおさなき時より
 ありしなどいひ紛らし事もなき風情こそ猶覺束なく
 借其後折にふれ事により度々尋問けれ其後は物を
 もえいはすうちふしぬさればこそ日々惱み侍事^{武藏カ}上野

國神奈川の邊に住給ふ父母聞給ひて胸をこがし心を
 空になして人の物いふ事も耳にとまらず急ぎ博士を
 請じ侍るに秘文を唱へ申ていはく御心易かるべしこ
 の御惱にて玉の緒の絶なん程の事は夢々有べからず
 いかさま是はものゝけいきりやうのなやますと見え
 侍るまゝ貴き聖をもとめ加持せられよと申ける其頃
 天下に秀し上野の天海大僧正淺草には中尊權僧正
 を頼み二夜三日の護摩を修し侍る母はまたその國の
 大社へ安穩の祈願をなしける國つかさの君は
 初瀬谷へはるゝ歩行にてもしたまひけるも誠に
 わりなき事にぞ侍る左馬助もいと心うき事におもひ
 さまゝの祈念如才もなかりける中にも池上の祖師
 目黒不動こそ誓ひいちじるく世にありがたきよし則
 こゝにて黒藏院を頼みて二七日の護摩をぞまた修し
 けるに功德時をうつさず戀の奴のはげしきも少しは
 怠れりと見えければ唯打臥居けるがけふもむなし
 暮かゝるを遠寺の鐘の聲告ていと哀も増りけるあ
 すもやあらばなどよみし昔を思ひ出で
 人しらぬ思ひにけふもくれ竹の
 うきふし起て誰にかたらん

夜もすがら春の雨のいとしいめやかに降ければ
つれづれと降くらしたる夜の雨に

忍び餘れる涙とそしる

かたはらなる香爐を引よせひとり炷奇南もまた思お
れる人になぞらへていと戀しさもまして

なぞらへる思ひもくるしひとり炷

匂ひよいか身に留るらん

門外に聲なまめかしういつの夜もく涙であかすと
唄ふもいとあはれにて

いつの夜も涙なからと開袖も

いかて増らんわかおもひには

今宵もはや戌の刻にもなりぬれば人をとがむる犬の
聲にもと忍べる人もあるや又はおのがものをひの
なく音にもやと羨しく心の儘にのら猫のとむかしの
人のいひしも今はた思ひ出られ軒ちかく明日ふれ
ふれと蛙の聲もいと物寂しく聞居たるに松にかよへ
るしらべにはあらで小鼓の音のいとしいめやかに聞ゆ
るはもしその人の手すさびにや

手にならすあはれしらへをえてし哉

戀の亂れのつかね緒にせん

こゝろ細くも斯つらねたふ紙に書とめ又ある時は
はかなくも彼の人の名を句の上に置てよみつゞり空
しくひとり寐の枕にちり積りて今は千束にもなりぬ
かゝる歎に書侍りし短冊を左馬助取出しさればこそ
ひとり言いふて或夜人しづまりて後訪ひ來りて采女
とたいふたりさしむかひし物をもいはずうち恨
たる様子にて扱飛鳥川の淵瀬さだめざるは人の心と
はいひながらかくまで我を隔給ふとは露しらす仇に
契りし事のくやしきよ今までいかばかりあかし様々
にいひたはむれ侍りし事今はよも忘れはし給はじ此
忍びあまれる歌の心はいかにといへば世にもたゆげ
なる頭をあげよしや戀するにもせよ又物思ひにもせ
よ唯世の中のあじきな身をつらさ誠におもひあま
れるまゝ斯はよみしを戀すると思ふもげにや無理な
らず夫はともあれかくもあれと誠しやかにいひさし
て亦打臥ぬる枕をおさへてさもあれ此折句はいかに
も世にもすけなしとさし置て哀れいひがひなく見え
給ふもの哉昔より此道にはいかなる女御公達にも心
がけしためし多しきましてや是はおなじうでなに朝夕
うち交りものいひかはし給ふにさても輪廻深き人の

心哉二人の親達へも苦をかけかく物を思はせ給ふ
事孝の一字にはづれたり我聞く身體髪膚を父母に
うけて毀傷せざるを孝とこそ承りしにあらうたての
人の心やとさもあらゝかに罵りけりその時少し起直
りこゝろ亂れし黒髪を御身にしあればこそ斯度々に
とりあげて思ひの色を尋ねたまふげにや平の兼盛
が忍ぶれどの歌こそ思ひあたれり今は罪ふかくあま
りに忍びはつきにもあらず右京を思ひそめしより
魂は空に登り足はその踏所を覺えずいつとなく斯物
思ひの床にふし沈み侍る事我ながら淺ましやいか
さま狐狸のたぶらかしかく物を思はするにやと思ふ
も又くちをしされば御身の言葉の通りおなじ臺の事
なれば玉垂のひまもとむる身の便りにつきてはのめ
かし聞ゆれば目付のもの眼をいらゝげ事がな笛吹
んと扣へたりいかに忍ぶとも終には顯れぬべしさす
れば彼人にも科をおふせるに似たりさればいとおし
み深く身も亡んといふ事偽にあらずたとへば軍亂の
折から敵みかた引くんでさしちがひ冥途黄泉の旅
に趣き修羅の奴となる事これ武勇をばむ本意なれ
ば今治平の世にいかにか我身のやるかたかなしき

とて宿意なきを見すこゝ淵に沈むる事あるまじ夫と
ても其家の掟を背き君臣の道に違んや我はかく翌日
をもしらぬうき命千々の社の神も照覽あれ露よりも
ろき我命さらしといふにはあらざれどもしや君
の御耳に入身は八つざきに成とて心も涼しさは達
磨一休にもおとるまじければ飛彈工匠が打黒繩の只
一筋に思ひ初にし人のあしからん事もやと夫のみを
こそおもひなやみぬるにさりとははしたなき人
のいさめやなど言葉に花をさかせつ富妻那の辨に
て演ければ左馬助いとしらけたる有りさまなり漸あ
りて偕もたぐひまれなる心中哉中々思なるわれ
しきの及所にあらず去ながら御身この儘むなしく成
給ふとも世の中の習ひなれば好事門を出ず悪事千里
を走の諺いかで人のいはざらんやさすれば若き人々
は哀れやかれは戀風にあたら命をいひ甲斐なくも
しなひ侍るよなど世のくちさみもくちをしく御身
今死して浮名を東の空に汚しいきてありなばありと
あらゆる嘲りをうけ面を更料のつきに見せきこえ
ぬも何故なればひとへにそなたの犬の尾を喰かへす
輪廻の深き故なり物毎にあまくだしくしき心をつ

くるも却て愚痴の至れる所なりたいやみの夜にある
くごとく行先しらすにそとほのめかしきかせんとい
ふて立出るをしばしと押しとめいや左様の程々しき
事や待るといふとも耳にもとめず左馬助は立かへり
ぬ斯て跡には言問かはす人もなく春のあら田にあら
ねどもうちかへし／＼思ひつゞけて聞もる月を
惜からぬ命よあたになからへて

又思ふ人に逢むと夢みけるに妻戸を風の音づれける
にてうれしき夢も見はてすなりにければ

花にたも散をりをこそさそふらめ

見はてぬ夢を破る春風

又東隣に琴かきならしあひは近くて消ばといひて千
賀の鹽竈浦さびしなど唄ふを聞くもいと哀れにひと
しき人もありける事よといと戀しさも増りひとり
ごとといふて居けるにはや丑みつにもなりけるに左馬
助又も来り何となく宵のあらましに胸うち騒ぎ心な
らず又来り扱もいかなりし縁にや今宵かの人御身惱
給ふ由尋ね氣分はいかに侍るぞ御前にて貞觀政要
の興行にて暇なく勤侍る又よく心得てなどいひし言

ならぬ空柱のさそはれ来るに心ときめく計なるに傍
の琴引寄て春鶯囀を爪音たかくしらべ終りて後花の
もとへ立よりて

朝露はそのまゝ結ふ花のうへに

心とむへき春風もなし

と朗に見わたしたる有さま又たくひなくぞおぼゆる
いかなる響敵も心寒まさるまじきやく人の心を惱
ませしもことほりなるかな媒も覺えず立やすらひけ
るが折からかたへに人もなしと過る手に彼消息を袖
の中に投入ければかの人もそこかしこを立まどひ木
立のしげみへ入けるがふみ見ん逆の事なりしや漸あ
りて媒を招きいなせ事をばいひ侍らで我にし惱める
人ならば早く出仕し給ひ世の人口を顧み給へといひ
すて、入ければ媒はいそぎ立かへりありし事どもつ
とくにかたりいかさま彼も深く人目を忍ぶと見え
たりさあらば彦星の逢瀬にもおもひなぞへて待給へ
まづ／＼いそぎ出勤し給へといひければ采女世にも
うれしげにて一方ならぬ仰いかでいなみ侍らんやと
て湯あみ梳りて出勤しければおなじ友たる人々めづ
らしげにうちかたらひ此度はからず命を助り給ひし

葉を流れに掉傳し船人の心地して語りければ常なら
ぬたはむれ事やといふて少しよるこべる躰なればま
た御前へとて歸りける采女は少し夜の明たる心地に
て今までははかなき鳥の跡ばかりにて人の奥を見よ
など、頻りに此左馬助にそゝのかされて忍びまた愛
染川の淵にこゝちたゆみてよしや此まゝ戀しぬとも
世のはかなきに申出てなき跡までも人にしらせじな
ど年頃心にかか念じ侍れども御志のせつなる事黙
止がたく有がたければ本ノ、ひとりのうちるみ
紅葉重ねの薄葉のとり手もくゆるばかりなる心のう
ちを書こめてそのおくに

引とめし心の關も陸奥の

しのふにあまる袖の露かな

と詠じ置しを媒なりける人持行其後は心のいとまな
く人目をうかひかなたごなたと立さまよへど一と
日二た日と袂の中におさめてためらひけれどあはれ
よき隙もなく空しくしみの住家とならんとかの人に
惱めるものよりも心ぐるしくぞありける折から右京
南の表のはし近くへ出て何となく花にうそぶき咲も
揃はず散もはじめぬ氣色に詠め入たる朝げの風にも

事の目出度さよといとむつまじげなるにもさら心
はなぐさまで只かなたごなたに立さまよひて

けふかくとしらせ初にしはかりにて

逢瀬をわかぬみをいかにせん

と空しく光陰を過しけるにも在原の中將のおしめど
も春のかぎりはなど詠し昔も今さら身にぞしらられ
る時しも暮春將軍家櫻川の侍従のもとにならせらる
べき旨仰出され卯月上浣ならせ給ふ御規式萬事に目
をおどろかす御粧ひなり先供奉の人々には土井大炊
頭井伊掃部頭酒井讚岐守同備前守松平伊豆守阿部豊
後守同對馬守朽木民部少輔中根壹岐守齋藤攝津守小
堀越中守太田備中守三浦志摩守久世大和守酒井和泉
守齋藤佐渡守柳生但馬守井上外記小堀遠江守佐久間
將監永井信濃守稻葉美濃守安藤右京進小幡孫市立花
立齋嶋田幽之民部卿法印道春式部卿法印龍慶春日御
局上野天海大僧正淺草中尊權僧正筑波金地院高野山
無量院東海寺澤庵和尚御茶道長井宗傳御同朋福阿彌
御船手衆向井將監小濱民部少輔堀久太郎龍の口に夥
敷萬艘の龍頭鶴首の御船を浮べて待奉る所に將軍家
御快よげに打のらせられ水主に唄をうたはせ漕漕ら

ねたるその氣色誠に人界の事とは見えす佛生國かと
今さら目をおどろかす計なり惣じてけふの供奉の人
數凡八百餘人とぞ聞えける頓而御船よりあがらせ給
へば主の侍從御迎に罷出有がたく今日ならせ給ふ事
寔に家の面目外聞實儀冥加に餘る仕合と足を空にし
てかしづき奉りけるに程なく御前へ召させられ御土
器を下され殊にたぐひまれなる名器柴舟肩衝の御茶
入及び義光の御刀また日輪と申くろの御馬に濃紅の
厚網かけて舍人八人にて牽せられしをぞ賜りける實
や身にあまりてぞ見えにける扱その後猶御機嫌うる
はしく空ははまだ寒きにや卯月の初に越路へ越く鷹
を御覽じてふたつの題をぞ遊しける

歸鷹

行通ふ越路の旅や春秋を

あはれなりけり鷹のひと聲

鷹來

おきあへし霞の空も秋風に

ふきこそわたれ鷹の一つら

斯ぞめでたく遊ばしければその外御前に侍ふける大
橋立慶齋藤攝津守たれかれもつかふまつりけるや、
あつて御庭へ出させ給ひ柳生但馬守加藤勘助を召せ

られ御馬上の撓うち遊ばし御小性水野右京同内記三
好沙之助大草主膳内田權九郎板倉捨三郎保々兵九郎
一色松千代等われおとらじと入亂れ馬上の達人御相
手相濟その後四座の太夫どもを召せられ御能はじま
り二三番の鈴の音誠に君萬歳とぞ祝し奉りぬその後
觀世太夫花がたみを舞質袖にもうつされず采女右京
の顔を世にうらめしげに見やりければ限りなく哀れ
なるかたに心ひかれてその暮がたに紅に日の出かき
たる扇のつまいと焦したるに返しとおほへて

忍ぶ草忍ふにあまる露ならば

いさ頼みてん人の言の葉

此後よりは人目をつゝむといひながら下より通ふ道
ありて阿武隈川の水清て深き心をしりしられたへぬ
契りとなりぬれば今ははや枝をつらね羽を重んと後
の世かけてふかくも深くいひかはしけるさればかゝ
る中に世にもうたてしき事こそ出來侍りける其故い
かにといふに近き頃召出されし細野主膳といふ者あ
り彼も賤しからぬ弓とりの子にて唯武勇をことゝし
やゝもすれば人を掠め事もなきに太刀の柄を捻りけ
ればむつまじく出會する人もななくとまれけるにひ

と日や、暮かゝる夕げしきに若き人々庭におり立興
じける中に右京も立まじりけるに十目の見る所思ひ
をかけぬ人もなく見ぬ昔の業平柏木の好色人もいか
で此右京にはまさらじなどつぶやきあへるにうたて
しくも彼主膳は右京が美麗に人目も耻すや、暫く見
とれて居たりしが人していふべきにもあらずと打む
かふ毎度に深山の奥の空蟬のかしましくもなきみ笑
ひみさまと口説けれど年頃玉の緒も絶なん許
に思ひ沈ぬる人にさへ心の外にいらへもせざりしに
今またかゝるあらくれ武士の思ひもよらぬ横合かな
といふにいはれぬ身のつらさ心ひとつを焦しけるか
くて我武門に生れうしろめたくも約を變ずる事やあ
るべきと心にふかく落し付何のいらへもせざりける
されば似たるを友とする世のならひ彼はいかゞいふ
てか頼みけん御側の茶道の節木松齋といへるを頼み
度々色よき返事を承りたしと間がな透がな口説けれ
ば左京色を變じ夫武士は義を守り弓を彎勇を専らと
す法師は頭を剃袈裟をかけ經をよみ名號を唱へ人を
用ふをこそ専らとするに出家に似たる身分として家
業の茶をば挽ずして似合ぬ法師のとりもちをいたす

こそ不快なれ鶉のまねをする鳥溺死する世の諺此後
かやうのうつゝなき事はいさゝかいひ出し侍るなさ
あらば露の命も風まつよりも危かるべしと唯一言に
やり込れば松齋もいひしらけ面目もなき風情にてい
かに左は宣ふともよもや只にては思ひとゞまるまじ
ものをなどいひすてゝこそかへりけれ斯て松齋は我
家に歸りけるがけふ云出せし事も心の上にならべ立
是非をつらゝわかも見るにいづれ外にたのめる人
ありとこそ覺侍るまゝとて自分にはこの戀かなふ
まじと或夕部主膳が宿所へ推參し四方山のはなし終
り借とや御身を捨てせ御頼のすじ彼方へひたすら厚
く口説けれど露ばかりも雨の萩のたはゆる氣色は
梨子の花のあだにちり剥口ぎたなき返事にあひしこ
そ口おしければたゞ此上はひたすら思ひ捨給ふかさ
なくば腰にもおしたまふ及にて事を分給へなどほの
めかしけるこそうたてけれいとゞさへかしらのなき
男なれば焼杭には燃つきやすくよしゝ此恨遠く日
をば過すべからずとて夫より右京をたばかり討て捨
んとこそははかりけれ心の程を淺ましき此事ふかく
しのぶとすれど色外に顯れいつとなく右京が耳にい

りもはや遁れぬ所也この旨采女にしらせ侍らずば後のうらみも深かるべし又あからさまにいはんもさすが武士のいひがひなきは残念也とやせんかくやせまじと心ひとつを定めかねいやとよ我故幾年月の心づくし今更いはんにもなし中々沙汰するに及ぶまじ既に戦場に出で先をかくるに等し今宵主膳を討て腹をきらんに何の子細あらんと義を金銭に思ひ定めし心の程ぞたのもしき頃は寛永十七年辰の四月十七日の夜なりけるが折しも其夜侍従のもとに諸侯方一兩輩夜ばなしに招き給ひいとしめやかに物語し給ひ夜もいたうふけぬれば宿直の人々も眠りがちになり後には覺えず終に手枕の假寐の夢いかなる事や見るらん右京情思へらく主膳を討とめん事今宵にしくはなしといつの間にか名香ふかく炷しめ袴のそば高く取あげ目釘をしめし鏝もとくつろげしのびやかにすすみより燈かげに透し見てあれば主膳はさすがに寐もやらず屏風によりそひ花もみぢ書かきたる扇を抜てさしうつむきて見居たる所を聲をかけてうつ程に兼て覺悟の手の内何かはもつてたまるべき肩より乳の下まで切込けるが主膳もさすがしれものにて左の

手にて抜合せ拂ひけれ共疊かけて討程に今は勇氣衰へ踏込足もたよくとくちおしくも出しぬかれぬといふ聲の下より倒れかゝるをとつて押へ思ふまゝにとめをさし朱に染たる太刀とり直し彼口さがなき松齋めをもばらしてくれんと窺ふ所に右や左の宿直の面々此太刀音に目をさましすはや大事ぞ出来たると周章ふためくひと風人に所々の燈一度に消一時の闇となりけるは建久四年のその昔富士の裾野の御狩の夜敵を討し騒動もげにもかくやとしられけりかゝりし所に織田の何某建部四郎ともし火照し欠來り右京を抱とめ居たる處へ櫻川殿をはじめ賓客の方々も立出給ふに血は洋々としてみぢを散しく龍田川唐紅とぞ成にけるかくて植松主殿を召て事の起りたづねさせ給ふに右京おそれ入て頭を下げ此上はとかふ言上可仕様も御座なく候得共主膳近き頃我に心をかけ様々無理非道を申かけ候得どもつや／＼いらへをだにせて打過侍るをにくしつれなしとてひたすら我をたばかりやみ討にしてけふ翌の内他國へいなんと道の程の用意いたせしよしを聞侍りし故今は是までと只一筋に存詰御前間近く殿中の狼藉其上賓客の御入

と申時節をも辨へず非法のはたらき上を恐れざる所中々申あげんに言葉も御座なく殊に二葉の頃より御側近く召使はれ御憐の下に人がましくも相成候得者御馬先にて死を輕んじ侍らんとおもひしにかゝるありさま中々本意の道とはかつて思ひ侍らず候得共此上御憐愍には切腹仰付られ下され候様御前よろしく御執成願ひ奉候といへば主殿聞て委細承知いたし候扱媒はなく候やかやふの事にも心のこし給ふまじといひければされば此主膳は近き頃召出され誰かあからさまに頼れんやと今まで一太刀にと憤をはげませし松齋を圍ひける心のうち情深くも又やさしくもあり主殿かくて御前へ出て始終の事ども詳に言上仕ければ直に主殿へ御預けさせ給ふと仰出され右京をいざなひ歸りいとねんごろにいたはりける扱又主膳が父は小笠原家の臣細野民部とて心たけきものにてしかも重く召仕れしが此度のあらまし聞とひとしく齒がみをなし色を變じいかに天下の權をとつて威を四海にふるひ給ふとも人を殺せしものを助置法やあるわれ攝州大坂表にてふたつなき命をかるくせしも全く名利名聞ばかりにもあらず子孫の榮を見ん爲にこ

そ今はながらへ何の頼もしき事の候べき主膳が討れし屋敷へ踏込腹かき切て死なんにしかじと怒れる目に涙をうかべて居たりけるかゝる所に天樹院殿の御局刑部卿の御子に初は東福寺の首座たりしが還俗して内藤正兵衛重信といふて今御旗本に在けるが急ぎ馬に鞭打て櫻川殿の御館へ推参ししか／＼のよしほのかに承りけるがいかなれば右京を御宥免あつて切腹は仰付られずや御家の掟を守りしと唯一筋にきこしめし給ふも如何なり亦はらからの者ども迄やはかその儘にてはよも置じ且は天下の御後見として片手うちの様に貴も賤も眉をひそめ侍らんされば唐の賢王御寵愛の童御裾を越しとてさへ掟なれば南陽縣へ遣し給ふいはんやこれは御側近く人をあやめ上を恐れざる働き中々沙汰にも及ばぬ事にて候と和漢のふる事を引て申ければ一々理に伏し給ひさらば明日腹切せよと仰出されしかば討れし子の親々も少し憤りを止その夜のあくるを遅しと待兼ける此内藤某櫻川殿へ推参せし故を聞けば主膳が母は天樹院殿のことなふ御不便がらせ給ひけるが主膳が討れし由を聞とひとしくかちはだしにて参りわが子を殺せしその